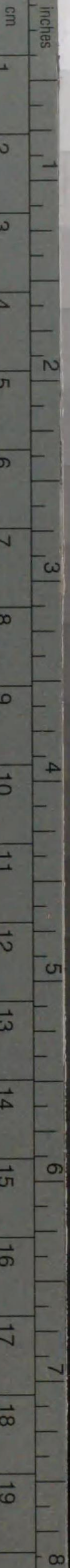


# Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



# Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



615  
1

〇 複写

別書誌  
合2冊



6.9.22



TKIN-47

615-1



\*1200501535738\*

615-1

# 東洋史講座

昭和六年二月一日發行

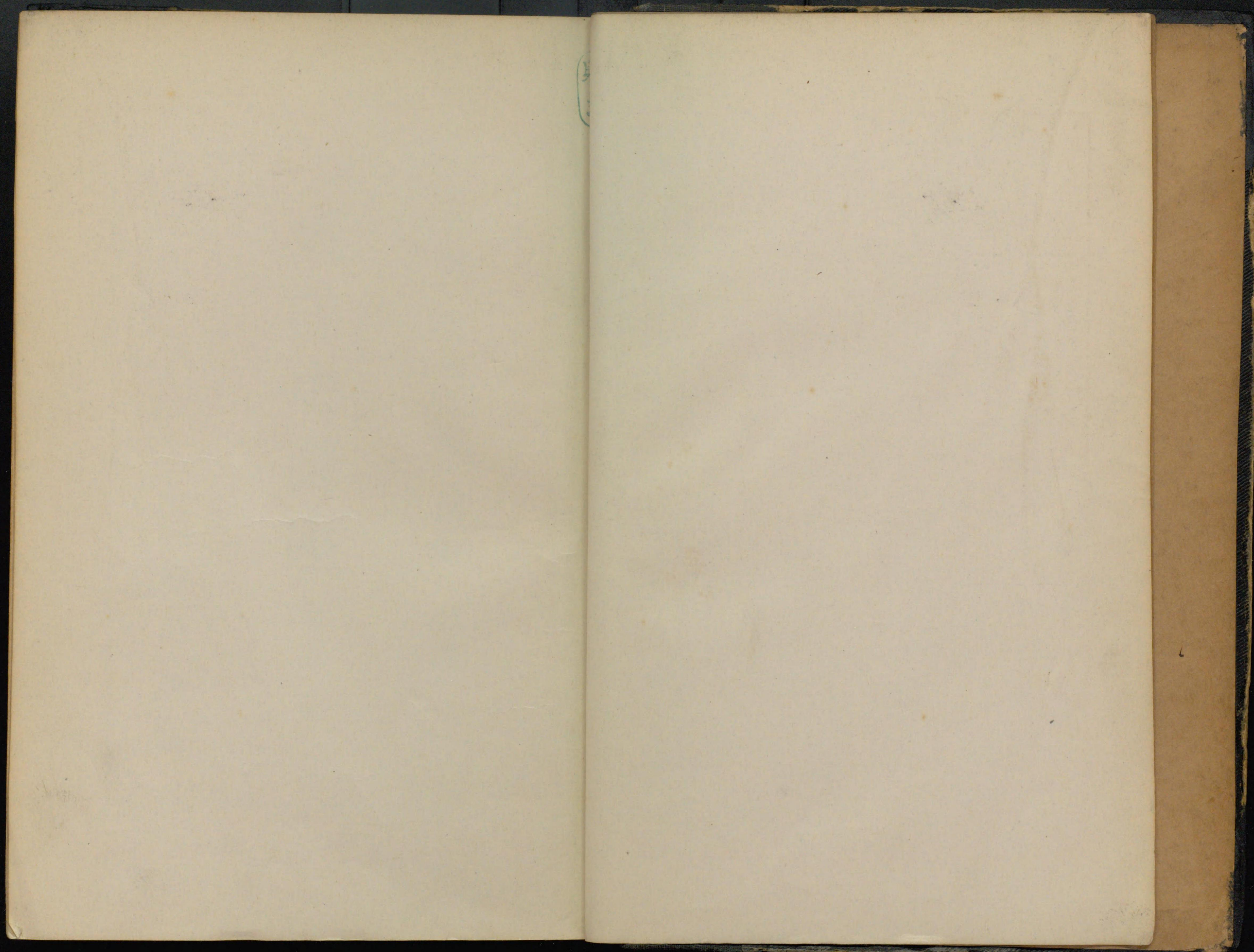
## 第拾卷

朝鮮の美術工藝  
關野貞著

東京  
麴町  
雄山閣版



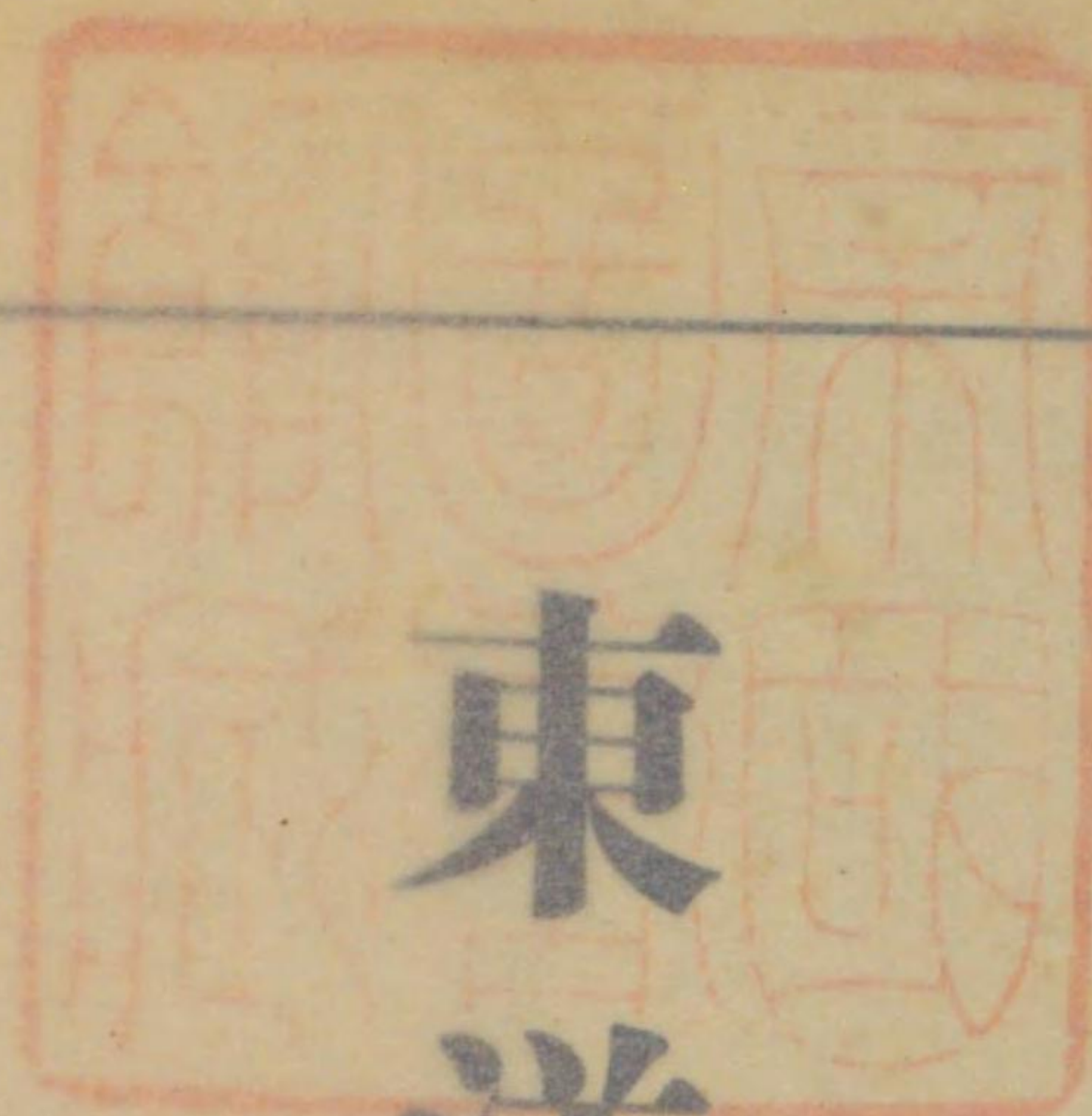






朝鮮の美術工藝 關野貞著

東洋史講座 第拾卷



東京 雄山閣版



朝鮮の美術工藝 關野貞著

東洋史講座 第拾卷



東京 雄山閣版



朝鮮の美術工藝 目次

第一章 總論

- 一 地勢……………三
- 二 氣候……………四
- 三 地質……………五
- 四 慣習氣質……………六

第二章 樂浪郡時代

- 一 樂浪郡治址……………一〇
- 二 帶方郡治址……………一二
- 三 樂浪郡時代の古墳……………一三
- 四 瓦……………二一
- 五 樂浪郡時代結論……………二一

第三章 高句麗

- 一 國內城地方の遺蹟……………二四

目次



二 平壤地方の遺蹟……………二八

三 江西龍岡地方の古墳……………三一

四 繪畫……………三八

五 工藝……………四〇

六 磚及瓦……………四一

第四章 百濟……………四二

一 陵墓……………四五

二 扶餘五重石塔……………四九

三 彫刻……………五〇

四 磚……………五二

五 瓦……………五三

六 陶器……………五五

第五章 古新羅及伽倻時代……………五五

一 慶州の墳墓……………五七

二 殉葬品……………六一

三 工藝品の性質……………六七

四 建造物……………六八

五 繪畫……………七〇

六 彫刻……………七一

七 瓦……………七三

第六章 新羅統一時代……………七三

一 宮殿及び苑池……………七四

二 佛寺……………七五

三 塔婆……………七八

四 石窟……………八六

五 浮屠……………八八

六 石碑……………九〇

七 陵墓……………九三

八 彫刻……………一〇二

九 工藝……………一一〇

石工……………一一一

金工……………一一三



博.....一六

瓦.....一七

陶器.....一九

第七章 高麗時代.....二〇

一 都城.....二一

二 王宮.....二二

三 佛寺建築.....二四

四 石塔婆.....三二

五 浮屠.....四四

六 石碑.....四九

七 經幢.....五五

八 陵墓.....五七

九 彫刻.....六三

一〇 繪畫.....六九

一一 工藝.....七三

石工.....七三

金工.....七八

瓦.....九〇

陶器.....九二

第八章 朝鮮時代.....九八

一 建築.....一〇〇

城郭.....一〇一

宮闕.....一〇八

客舍.....一〇七

史庫.....一九

廟祀.....二〇

書院.....二五

佛寺.....二六

石塔婆.....三五

浮屠.....三八

石碑.....三九

陵墓.....四二



二 彫刻	二四五
三 繪畫	二五〇
四 工藝	二七九
金工	二七九
瓦工	二八二
陶工	二八三
木工	二八八
竹工	二八八
石工	二八八
漆工	二八八
華角工	二八九
染織工	二八九

目次終

# 朝鮮の美術工藝

工學博士 關野貞 著

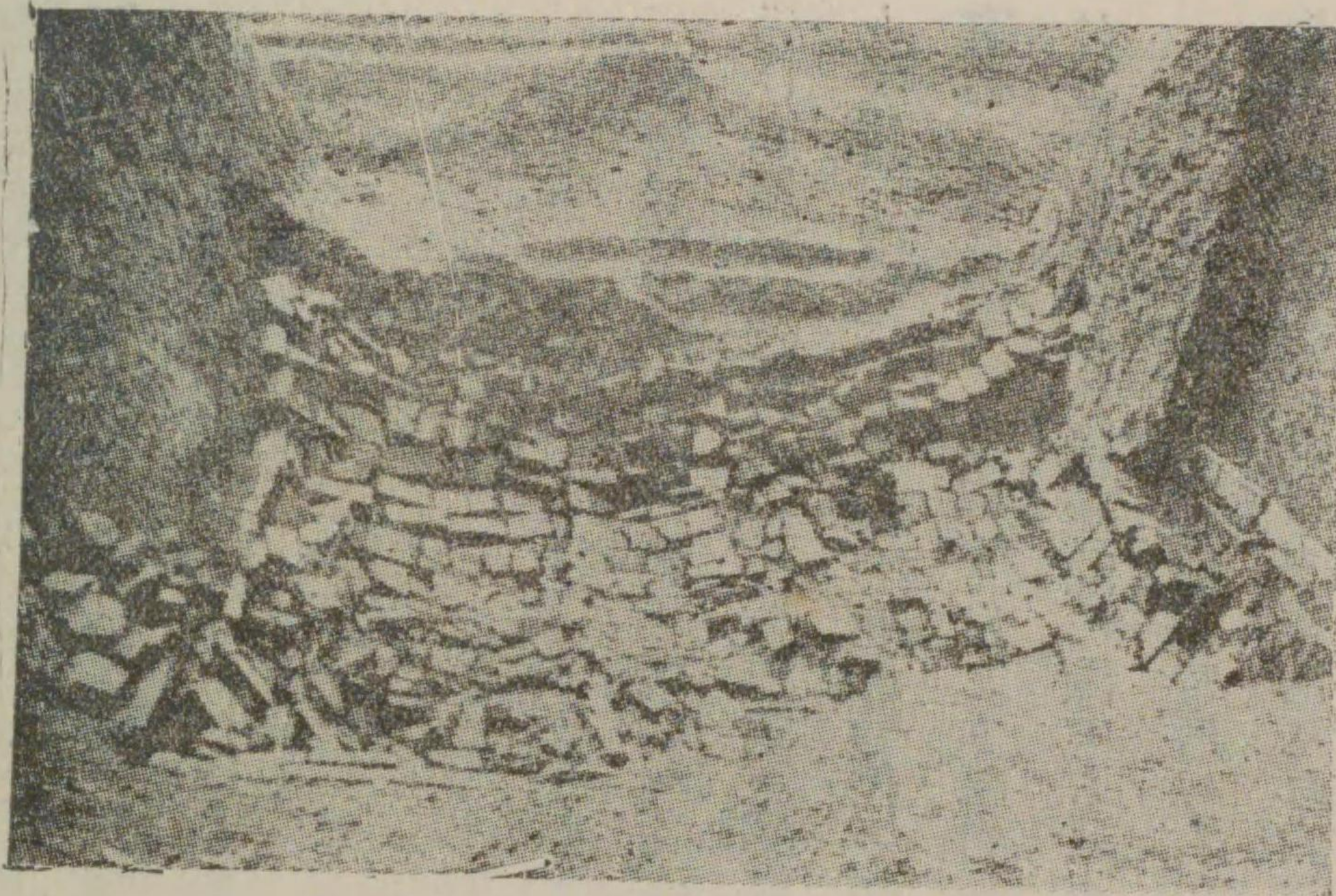
## 一、總論

朝鮮は樂浪郡時代に於て既に早く漢民族の發達せる文化を輸入し三國時代には南北朝時代の影響を受け新羅統一時代には唐の様式を攝取して其美術工藝は發達の頂點に達した而るに高麗時代の後半より次第に衰頹の兆を萌し朝鮮時代の初期には猶觀るべき固有の藝術を有したりしも後期には政治上の弊害と國民趣味の缺乏とにより纖弱疎拙の者となり加ふるに古物愛護の精神に乏しく古來建設し來つた有形の文物次第に消滅に瀕するに至つた。

然るに日韓合併後朝鮮總督府は古蹟調査の機關を設け當局者が銳意搜索の結果古代文化の紀念たる貴重なる遺蹟遺物漸く世に露はれ古代に於ける藝術の發達の決して侮るべからざるものあるを明かにした此等は石塔塔塔石佛石碑等の如く其材料が埴若くは石であつた爲め自然的に保存されたもの又は

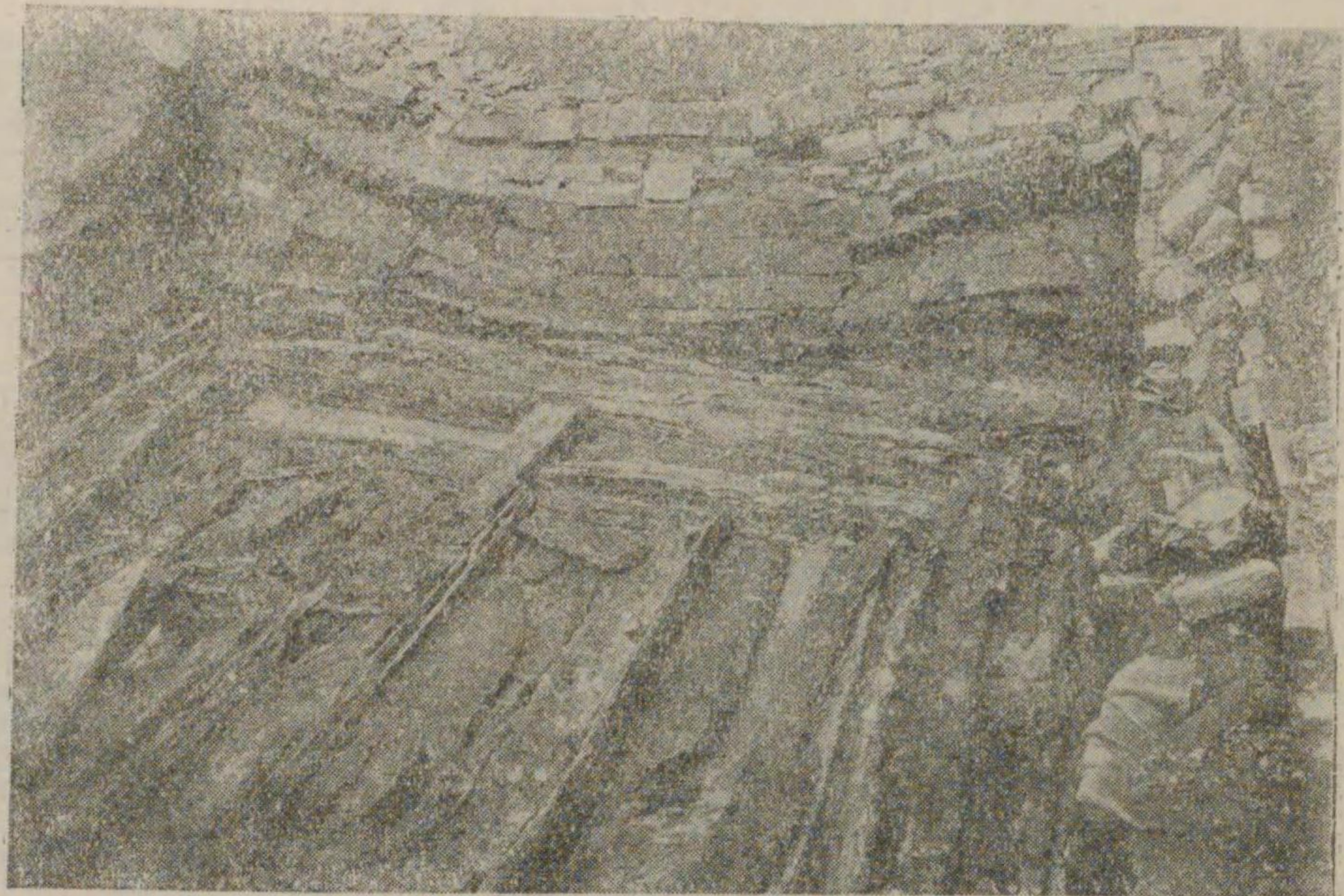


銅佛鐵佛銅香爐銅鐘の如き傳世的のもの古瓦古磚の如く都城址佛寺址等より發見されしもの等である



第一圖 大同江第六號墳塼發掘光景

特に近年各地方の古墳發掘調査の結果其内部より多くの貴重なる工藝品を發見し或は東洋最古の繪畫と稱すべき壁畫があらはれた又木造の建築や彫刻も高麗末より遺存せることが明かとなり繪畫と朝鮮内地のみならず却て日本内地に相當に保存されてゐることも分かり特に李朝の藝術品は近年各方面の搜索により遺物が割合に豊富に保存されてゐることが確かまつて來た吾人は此等の遺蹟遺物により其量に於て多からざるも猶昔時文化の性質を考へ併せて支那及び日本との關係をも知ることが出来るやうになつた又稀れには日本にも支那にも既に消滅せしものを發見し以て兩者の缺漏を補ふことも出来る様になつた余は此等古來藝術の變遷を説くに先だち國民藝術の發達に最も深き關係を有せる朝鮮の風土氣候及び國民の慣習氣質等を考へて見たいと思ふ。



第二圖 大同江第六號墳木棺出土の狀

地勢 朝鮮は亞細亞大陸の東端に斗出せる半島にして白頭山の幹線東海岸に近く縦走せるを以て地勢西南に緩にして黃海に臨める處は割合に大なる河川廣き平野を有し土壤肥沃にして人口稠密且海岸線の出入多く良港灣に富み支那日本との交通も便なりしより文化早く開け古來歷史上重要な活劇は皆此地方に演せられた然るに東日本海に臨める處は土地狹隘にして又港灣に乏しく人口も隨て稀薄に文化も後れ勝であつた。

朝鮮は北は滿洲に接し西は黃海を距て、山東省に對せるを以て海陸共に支那との交通早く開け常に其文化を輸入して發達を續けたが一面には屢其侵掠を被り常に之に服屬するの已むなきに至つた又上代に於ては支那より輸入せし文化を更に日本に輸出して其發達を助成したが一方には多少日本の感化を受け又時々攻撃せられしこと





第三圖 大同江第一號墳外景

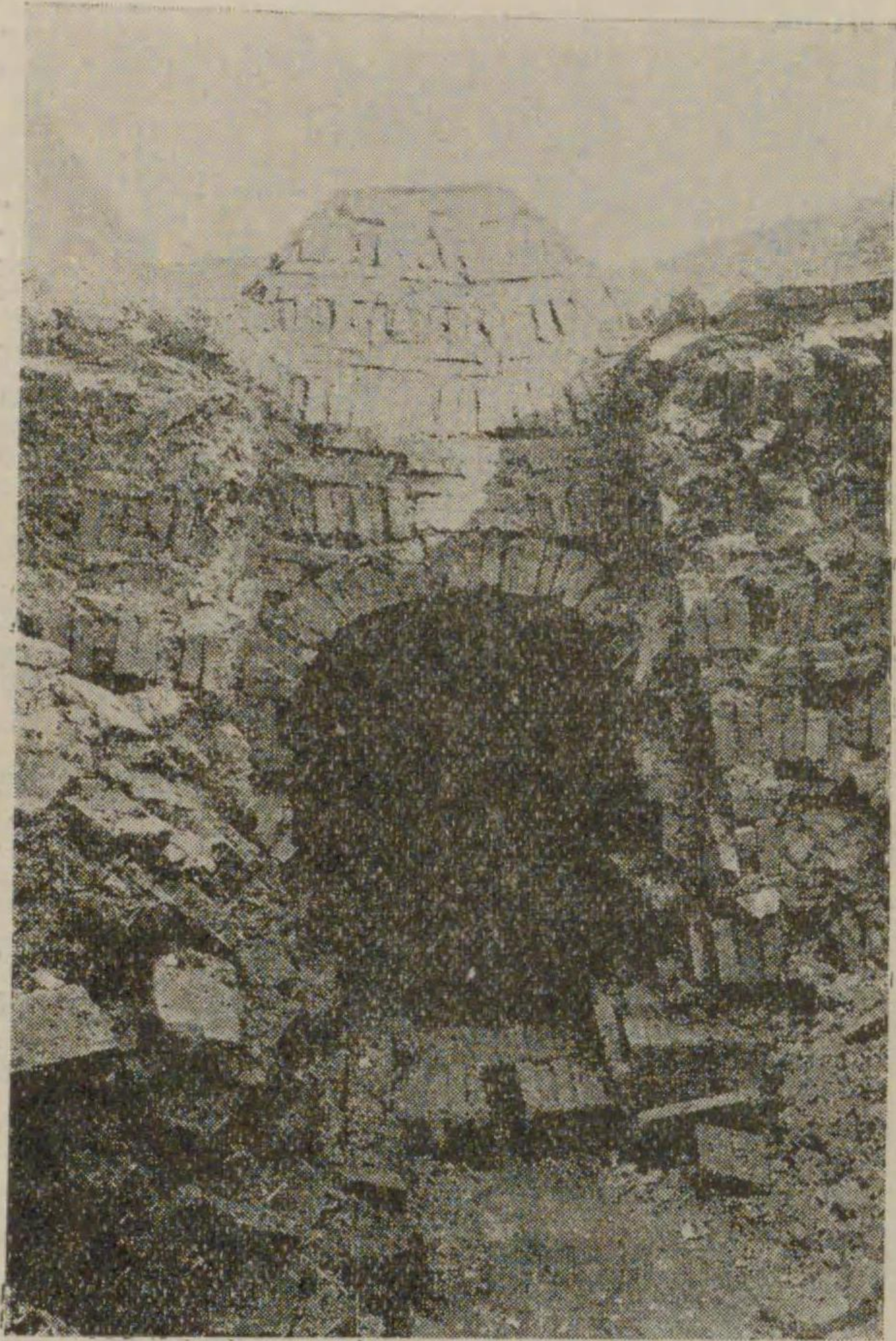
もあつた畢竟國家としては土地も狭く人民も少く支那や日本に對抗して完全なる獨立國を形成することは困難であつたから自ら事大主義退嬰主義を取るの已むなきに至り國民の元氣も自ら消磨するに至つたのである。

白頭山の幹線より分岐したる大小の山脈半島内を縦横に盤回してゐるから大川廣野に乏しく到る處地勢局促規模狭小であるこれが國民の氣質に影響を及ぼし兎角雄大剛健の氣象に乏しく其作り出せる藝術も輪廓狹隘手法纖弱の弊を免るゝことが出来なかつた。

氣候 半島は南北に長いから南方は割合に暖に北方は甚しく寒いが大體に就て言へば夏の暑さよりも冬の寒さの方が凌ぎ難い隨て住宅には必ず温突を設け保温のため成べく室を狭くし天井を低くし窓戸を小さくする其結果家屋は小規模且低矮の者となり室内の設備裝飾も貧弱となつた其作成せる藝術の雄大の資質を缺くは已むを得ないことである。

ないことである。

又半島は空氣乾燥して雨量少く植物の生育に不利益である其上亂伐の結果到る處地皮剝離して山骨露はれ甚しきに至つては一望唯楮兀の山砂礫の川を見るのみの處もある其荒寥たる乾燥無味の光景は國民の趣味を枯渴せしめし一の原因となつてゐる。



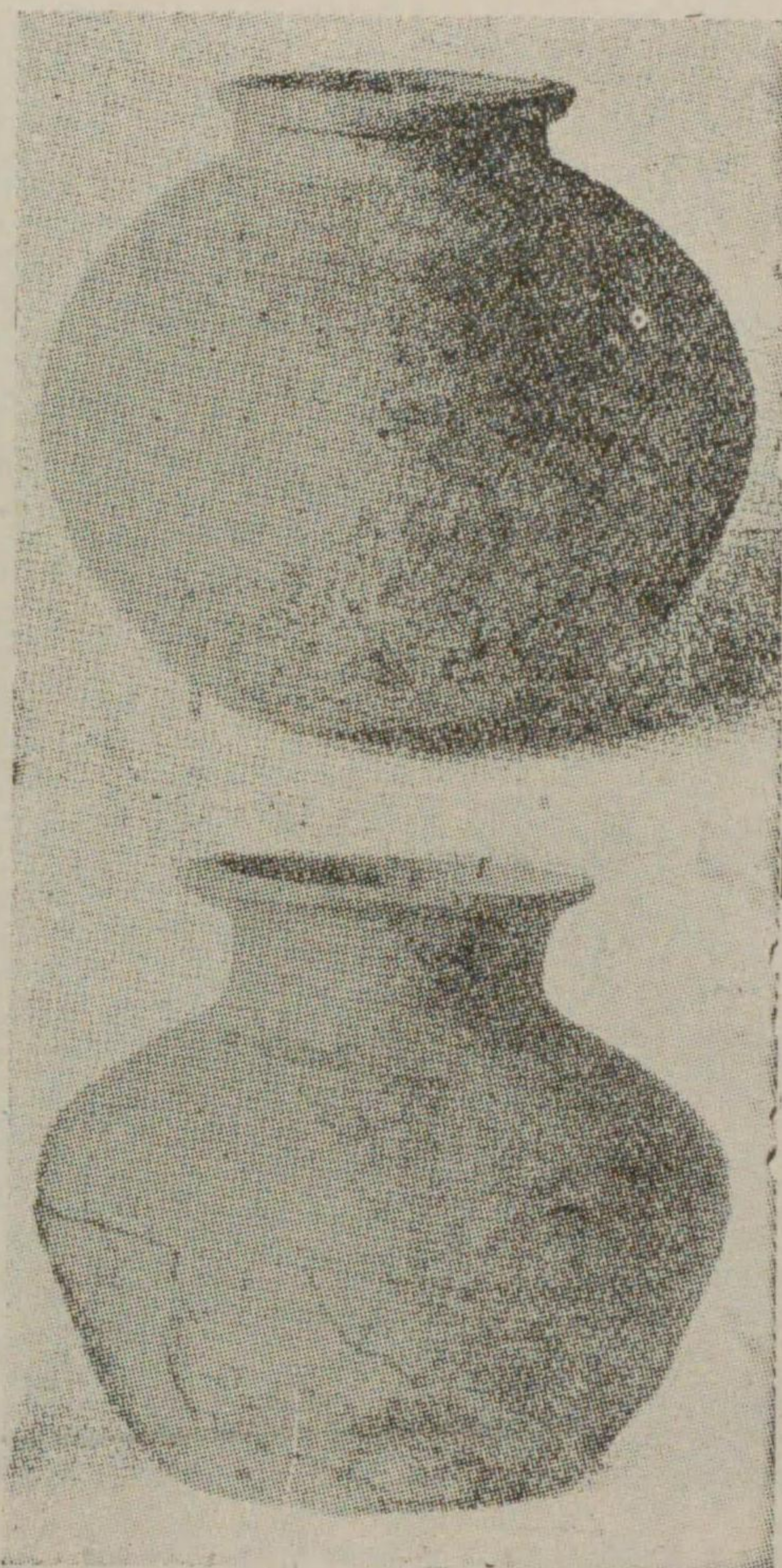
第四圖 大同江第一號墳前室入口塞光景

建築を起すことが困難であつた朝鮮家屋の矮小となつたのも無理は無いしかし石材は豊富で割合に良材を産出するから石塔石碑石浮屠石佛等早くより作り出され割合に多く今日に遺存され古代藝術研究



の好資料となつてゐる。

又支那より磚や瓦の製法が傳へられ墳墓の玄室や五重七重の塔婆か磚を以て築かれた者もあり又磚や瓦の面に美なる彫刻や文様があらはされたものもある。



第五圖

第六圖

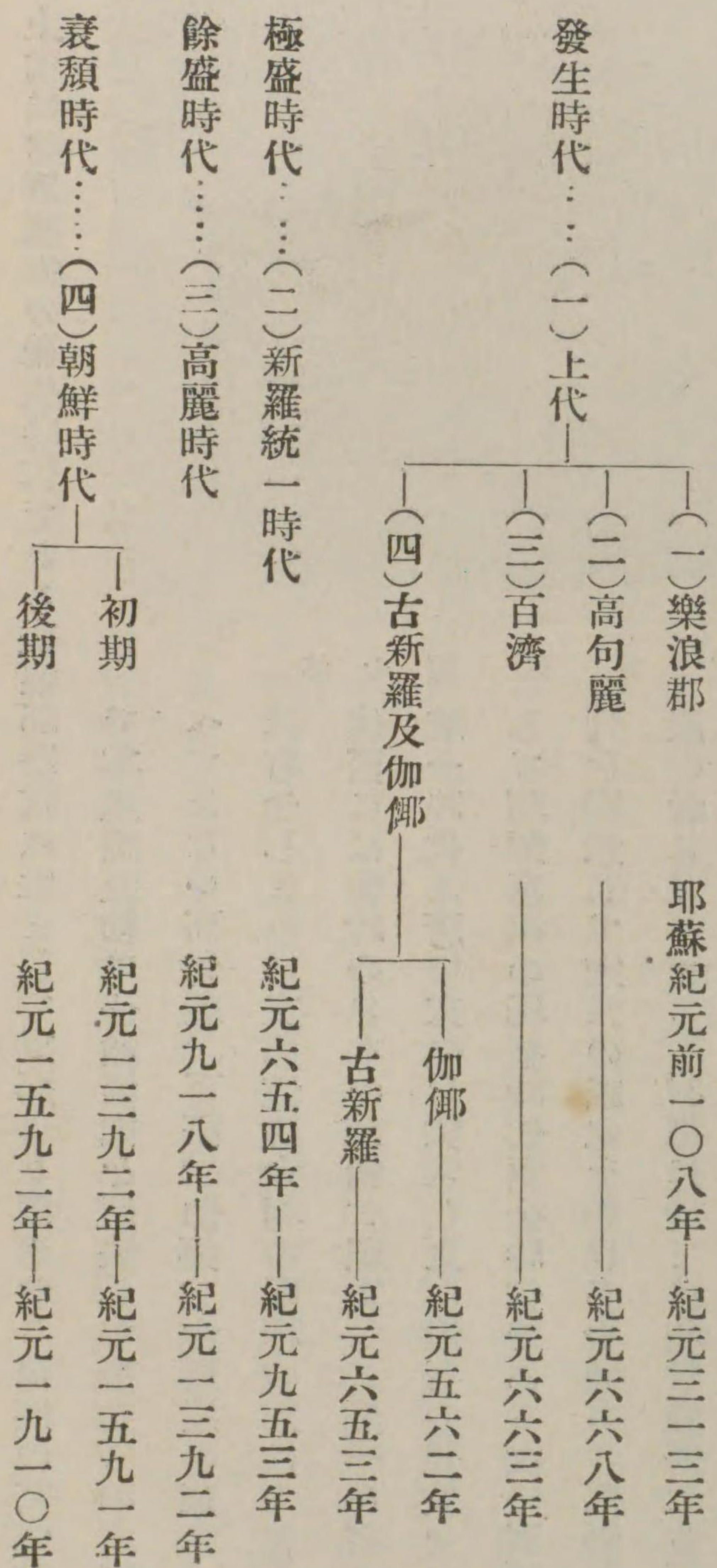
半島は火山地帯にも地震地帯にも入らず古來破壊的大地震と稱すべき者は殆ど無かつた爲めに家屋の構造は粗雑に陥り洗練の美を缺き易い而も危険なる權衡を壺有する石塔博塔の如き建造物が無事に今日に遺ることの出來たのは僥倖と謂はねばならぬ。

慣習氣質 朝鮮人は日本と同じく昔か

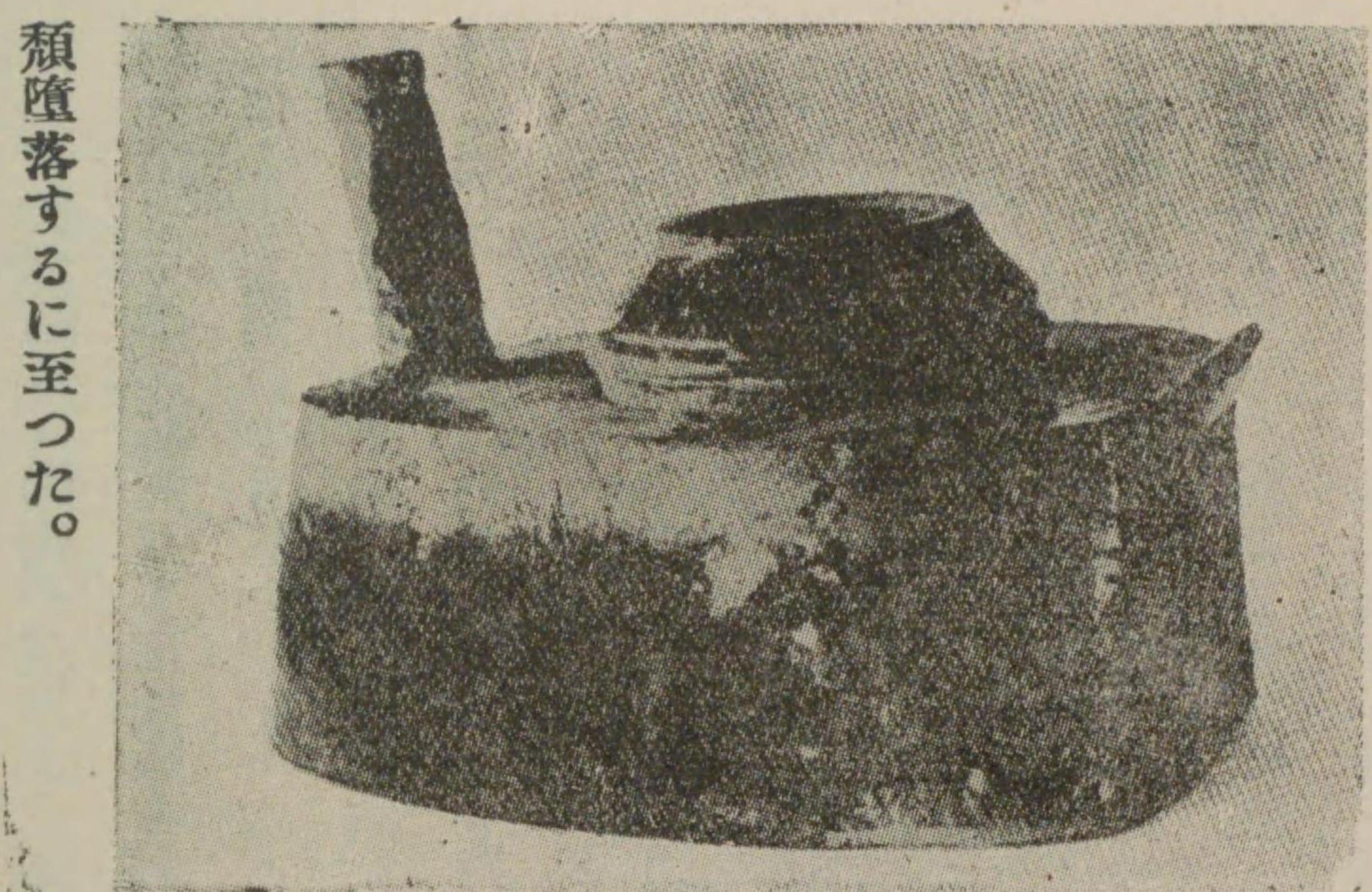
ら坐禮の國であつたから家屋の如き支那と頗る相違せる平面を有し保温の法と相待ちて自ら狭小低矮の者となり他の藝術品も之に相應して小規模の者となつた地形風土慣習の上より國民の氣質が兎角雄大を缺き偏狭に陥り易き上古來大國の間に介在し常に事大主義を事としたから自ら自主獨立の精神に

乏しく其藝術にも獨創の精采なく始終支那藝術の摸倣に甘んじ文學に於ても國民的文學を持つてゐないと同じく美術に於ても同様の非難を免かれぬ而も其間に於て各時代を通して多少固有の色彩を發揮したことが無いでもない。

右の外國家の組織社會の狀態宗教の性質等につきても大に考究を要すべきであるが是等は各時代の條に譲り左に藝術史の組織上最も適當と認むべき時代の分類を示すこととする。



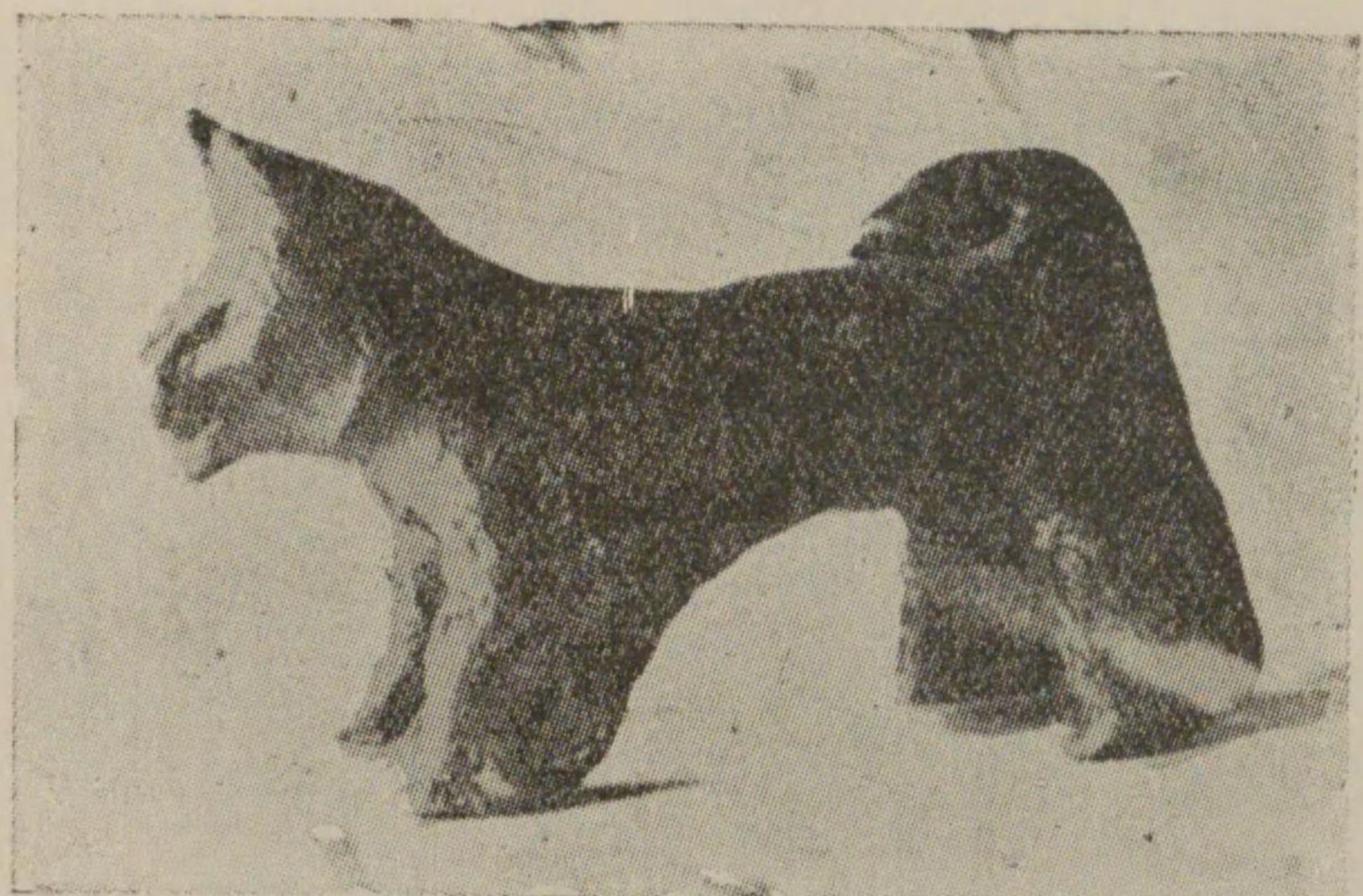




類墮落するに至つた。

上代は朝鮮藝術の發生時代である樂浪郡時代である樂浪郡時代は主として支那より渡來せる民族の文化を示せるもので其遺蹟遺物は全然漢式を反映して少しも朝鮮固有の者を交へてゐない高句麗、百濟、伽倻、古新羅の藝術は此等民族の固有せしものに支那漢魏六朝の影響の加はつたものである又他面には當時の日本の藝術と親密なる關係を有つてゐる新羅統一時代は唐の文化を輸入し更に固有の發展をなせしものにして朝鮮藝術の極盛時代黄金時代である次の高麗時代は前時代を繼承して宋元の感化を受け多少固有の色彩を發揮して新羅の者に及ばざるも初期に於ては相當優秀なる藝術品を出した、即ち餘盛時代と稱するが至當であらう朝鮮時代は初期に於ては高麗時代を承け相當に優秀な者を出したが後期に入り壬辰の瘡痍猶癒えざる間に黨争の弊極度に達し國民は藝術美の別天地に逍遙するの餘裕もなく其趣味は乾燥し其藝術は衰

## 二、樂浪郡時代



せぬ右の内樂浪郡のみは長く漢民族の勢力範圍として遺つたが他は間もなく漢の羈絆を脱することゝ

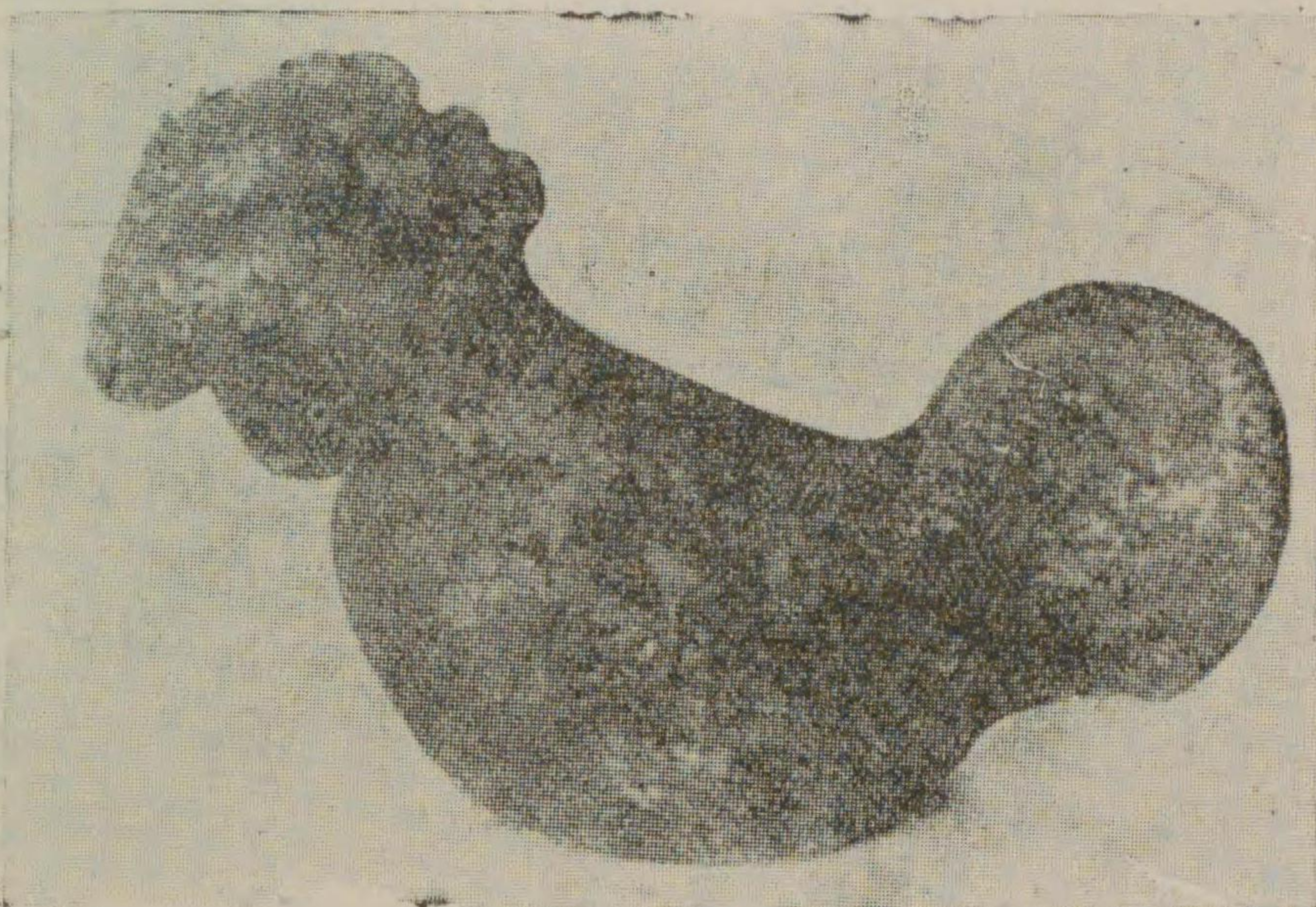
朝鮮の歴史によれば今を距ること四千餘年前檀君太白山に天降つて朝鮮國王の始祖となつた又周の武王が箕子を朝鮮に封じ箕子は平壤に來つて箕子朝鮮朝を建てたといつてゐるが是等は一の傳説に過ぎぬ實際朝鮮の歴史が始めて明確な輪廓を畫き出したのは漢の武帝が耶蘇紀元前百八十年に朝鮮を征服して樂浪、臨屯、玄菟、真番の四郡を置いた時からである當時朝鮮の南半には馬韓、弁韓、靺婁、辰韓があり北半には朝鮮、穢貊、沃沮等の諸民族がゐた武帝は此瓦北半を平げて朝鮮の地に樂浪郡（大體今の京畿黃海平安南北道）を置き穢貊の地に臨屯郡（大體今の江原道及び咸鏡南道の一部）を置き沃沮の地に玄菟郡（今の咸鏡南北道）を置いた真番郡の位置は學者間或は滿洲の地となし或は南鮮地方となし何れとも確定



なつた又樂浪郡は後漢末になつて公孫康の領有する所となり彼は樂浪郡の南を割いて帶方郡（大體今

の京畿黃海二道）を置いた此二郡は三國時代には魏の版圖に歸し西晋の建興元年（耶蘇紀元三百十三年）終に高句麗の爲めに滅ぼされたされば漢の武帝が置郡より此に至るまで凡そ四百二十一年間此兩郡は大體に於て漢民族の勢力範圍に在つて其間支那より太守を置きて之を統轄し續々移住し來れる漢民族は其發達せる文化を輸入して半島の一角に文物燦然たる小支那を現出し其影響を周圍の諸民族に及ぼしたのである。

第九圖 彩色瓦 雜



する者たることを知つた大正二年總督府の囑託により平壤附近調査の際一行中の今西谷井兩文學士が

樂浪郡治の遺址と思はるゝ者を平壤より約一里大同江下流の對岸なる大同江面にて發見され其後動かすべからざる證據が次第に顯はれ遂に此地點が郡治の址と確定したのである。

此地點は大同江の南岸にあつて小高き丘陵をなし今土城と稱し東西約六町半南北約五町半の處を土築の城壁を以て圍んでる此土城内から多數の瓦片破片が發見されたが皆漢時代の様式を有つてゐ

た特に瓦當に「樂浪禮官」「大晋元康」と陽刻したので發見され又後漢の「興平」の年號銘を有する者も現はれ其上「樂浪太守章」「朝鮮令印」「朝鮮右尉」

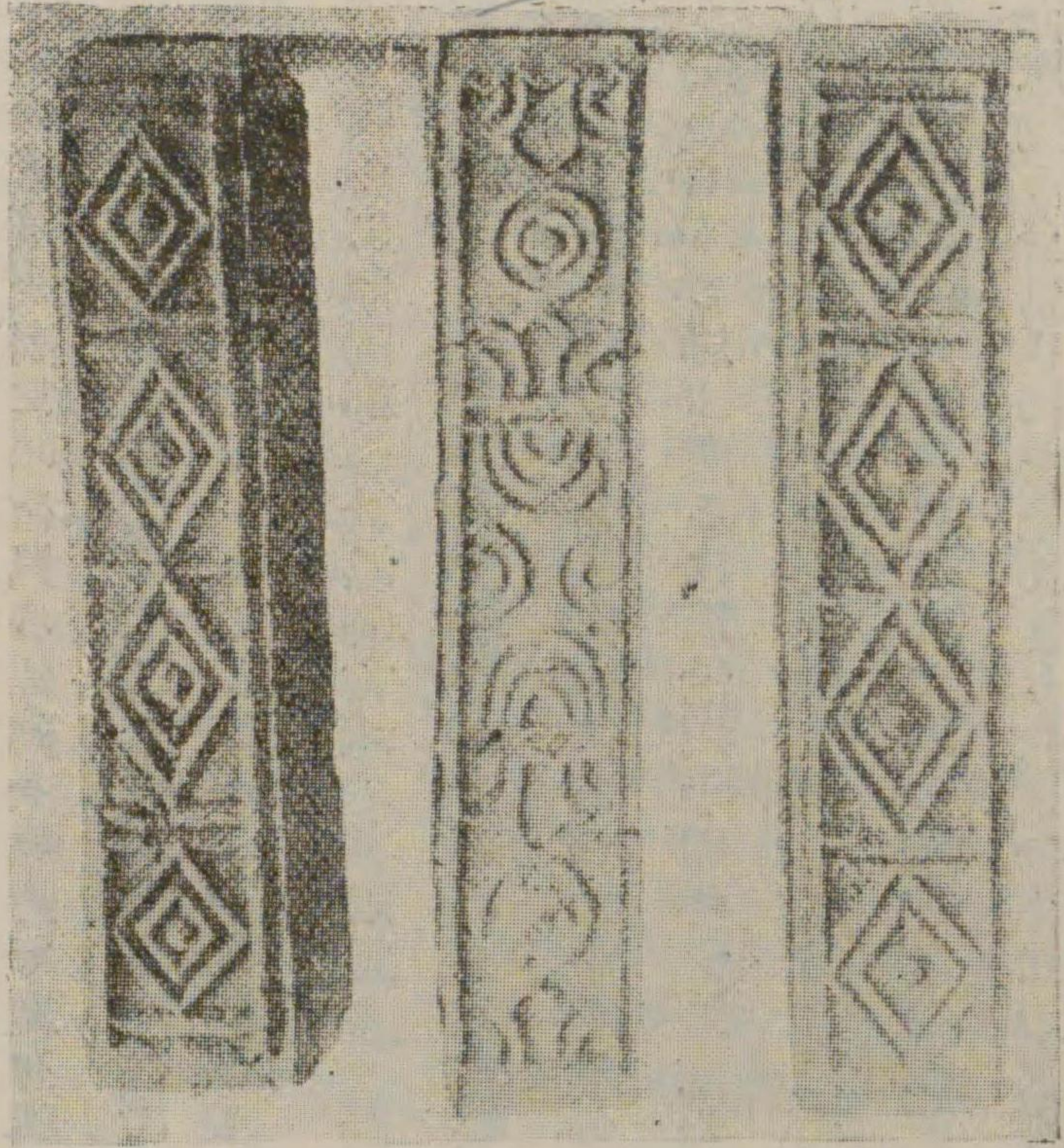
「謂郡長印」「粘蟬長印」「長岑長印」「増地長印」と書いた封泥が出土したので此土城が明かに樂浪郡治並びに朝鮮縣治址である事が明確に證據立てられ

た當にそれのみならず此土城を中心として其附近に千餘の古墳が散在しそれが悉く樂浪時代の者である事が分かつたからいよゝ此地點が樂浪郡治址である事が學界に承認さるゝ事となつたのである。

第二十圖

第十一圖

第十圖





此土城内よりは右の外多数の銅鏃、錢貨、帶鉤及び其鑄范各種の珠玉類、銅印、陶器の破片などが發見され錢には半兩五銖、大泉五十、小泉直一などがある何れも武帝以後漢時代に行はれた者である又半兩の錢范が出たのを見ると此土城内で錢を鑄たことがあつたことも分かる。

樂浪郡の下に前漢時代には二十五縣後漢時代には十八縣あつたから當時の遺蹟は調査の歩を進むるに随ひ次第に各方面にあらはれた現に平壤附近、順川、平原、安洲、江東地方に當時の遺蹟遺物が發見せられ特に龍岡郡の於乙洞古城が其附近より發見された粘蟬碑により粘蟬縣治の地であることが明かとなり其近くに當時の古墳もあるがあまり重要なものではない。

**帶方郡治址** 帶方郡治は何處にあつたか從來の學者は多く漢江の流域に之を比定してゐる余も多分そうであらうと思ふ然るに明治四十四年十月意外にも黃海道鳳山郡なる沙里院驛附近に於て其遺址と思はるゝ者を發見した今唐土城と稱して方二三町の處猶土築の城壁の遺跡を存し其内部から多数の漢式の磚や瓦の破片が發見された磚の殘片には後漢の光和五年や西晋の泰始七年の年號銘があり又貨泉や五銖錢も發見された是れより先き余等は沙里驛の東北七八町鐵道線路に近く一古墳を發掘して其中から「使君帶方太守張撫夷磚」の銘ある磚を發見したから此墓は帶方太守の墓であり隨て唐土城は帶方郡治址であると推定さるゝ様になつた又此唐土城を中心として其附近に多くの古墳があり其形式遺物

は全く樂浪郡の者と同様である從來漢江の流域と考へられた帶方郡治址が意外にもかゝる地點に於て發見せられたのは恐くは當時舊馬韓の地に勃興したる百濟の壓迫の爲め三國末か西晋の始めに郡治を之に移したものであらう。而して帶方郡治は始めより此地方にあつたといふ説が次第に考慮せらるゝ様になつて來た。

**樂浪郡時代の古墳** 樂浪郡治址（大同郡大同江面土城）を中心として其附近に千餘の古墳が累々として散在してゐる又帶方郡治址（鳳山郡唐土城）と思はるゝ地點を中心として其周圍にも數十百の古墳がある是等の古墳は皆同形式を有し其内部より發見せられし遺物は全く同一であるから一括して此處に概説することとする。

**古墳の外形** 樂浪時代の古墳の外形は何れも大小の墳壟をなし長年月の間に土民の耒鋤にかゝつて變形されてゐるが其最も明かに當初の形を想像することの出来るものには方臺形の者が多い既記帶方太守張撫夷墓が其一例である元來支那周漢時代の墳墓は多く方臺形をなしてゐる樂浪時代の古墳が方臺形をなしてゐるのは漢民族固有の形式に外ならぬ。

**玄室の構造** 此墳壟の内部には必ず玄室即ち棺を藏むる所の室がある此玄室の壁や天井を木材を以て造つたものと磚を以て築いたものがある前者を木槨といひ後者を磚槨といふ。

**木槨** 木槨には四壁天井並びに床を厚板を以て造つた箱式の者がある龍岡郡海雲面粘蟬縣治址の東



南に當れる古墳はそれであつた此種の者は極めて小なる玄室にのみ用ひらる更に大なる玄室にありては六七寸角の栗材を校倉様に重ねて四方の壁を造り床及び天井亦同様の木材を並べて構成される、大正三年余等大同江面に於て發掘せし十基の古墳中二號墳三號墳六號墳は之れに屬する。

**木槨埋藏の方法** 前記海雲面の箱式木槨は地盤を掘りて之を埋め其周圍を掘上げたる土にて再填塞し其上に土饅頭を築いてゐる然るに大同江面梧野洞なる漢城鑛業會社電力部發電所敷地より大正二年發見せられたる木槨は校倉式にして其周圍は厚く粘土を以て包み雨水の浸透を防いでゐた又大同江面九號墳は木槨の底部も四周も丸石を以て包み丸石と木槨との間に木炭を填充して木槨の腐朽を豫防してゐた又大同江面二號墳三號墳六號墳は木槨の四周床及天井を磚にて包み更に粘土を以て圍み然る後封土をしてゐた。

**磚槨** 磚槨とは玄室の壁を磚を以て築造したものである此玄室の外に前室を有する者もあり又前室の傍に側室を有するものがある大同江面四號墳七號墳十號墳は各一室を有し五號墳八號墳及び帶方太守張撫夷墓は何れも二室を有してゐた木槨の場合には縦壙式であるが磚槨の場合には横壙式で其前面に亦磚築の羨道を有してゐる。

**磚槨の構造** 磚槨には四壁を磚を以て築き其上に木材を並へて天井とせる者と四壁より磚を以て天井を穹窿狀に巧みに作つたものさある大同江面五號墳八號墳は前者に屬し一號墳帶方太守張撫夷墓は後者に屬し一般に此種の者普通にして且割合に大規模な者が多い床は布敷若くは網代敷に磚を二枚通り敷重ねてゐる羨道より玄室への入口又室と室との通路の上部は必ず半圓拱となつてゐる樂浪郡時代に既に磚を用ひて拱や穹窿を作つたのであるから當時築造術の進歩驚くべきものがある。

**玄室の内部** 玄室の内部には木棺を安置してゐる一棺の場合と二棺並置の場合とある二棺は夫婦合葬の墓である棺は厚き板を以て構成し内外共に黒漆を以て塗つた者と内部を特に朱漆塗としたものとある。又外部に錢を並べて塗り込み或は簡単な彩色を施したのもある棺の内部には死者の着けた服飾品が發見され外部には種々の明器が埋藏されてあつた特に大同江面九號墳よりは銅器、陶器、漆器、武器、馬具、服飾品に至るまで其埋藏の豊富實に驚嘆に價する者があつた。

**埋藏品** 周漢時代特に後漢時代には厚葬の風大に行はれ貴重な明器を多數に埋藏した樂浪時代の古墳は余等の發掘を試みしもの僅かに十數に過ぎぬがそれでも多種多様の工藝品が發見され特に昨年土民の盜掘によりて出土せし者無數にして當時の文化の性質を徴し藝術發達の真相を研究することができた余等の先年調査せし大同江面九號墳より居攝三年在銘の漆器二個出土したが其後年代銘のある漆器銅器が追々發見され樂浪時代遺物の年代の輪廓も次第に明かになつて來た。



今此等出土の遺物を其種類により分類すれば

- (一) 銅器——博山爐・鏡・甗・匱・壺・携奩・鼎・尊・鍾・洗・車軸頭・獸鎮・鏡・銅印
- (二) 陶器——甗・壺・案・竈・甗・甗及及び陶製・井幹・狗・豕・雞等の土偶
- (三) 漆器——案・盤・杯・函等
- (四) 武器——刀・劍・戈・戟・矛・斧・弩機・箭・刀子等
- (五) 馬具——轡・銅面・革帶金具等
- (六) 布帛——麻布・絹類
- (七) 金屬服飾品——指輪・釧・帶鉤・櫛其他飾金具
- (八) 玉石器——璧・瑤・瑱・鼻塞・玉豕・玉印・磨盤・及び種々佩飾玉類
- (九) 錢——明刀・半兩・五銖・貨泉・大錢五十・小錢直一・厭勝錢・蟻鼻錢・等

銅器 銅器は何れも形態完好手法精美獸首又は禽獸の文様を飾り又往々鍍金を施してある平壤の對岸にて大正十二年出土せし銅鍾には前漢永光三年孝文廟云々の刻銘あり朝鮮に於ける最古の金文の一たるのみならず是によりて樂浪郡にも孝文廟の在りし事が明かとなつた又九號墳より出でし博山爐の如きは下に承盤内に龜形を作り其上に鳳凰を立て其頭を以て爐を支承し爐の蓋は博山を象るなど實に

珍らしき手法で技工も亦優れてある獸鎮は山岳様の周圍に雄渾なる虎形を透彫にし銅印には鼻鈕のあるものも龜鈕のあるものもあり又母子印もある又文字には陰刻も陽刻もある特に鏡は前漢乃至西晉時代の様式より成り最も精妍雄麗の手法を示してある今日までに發見せられし者無慮百數十面其種類は内行花文鏡にして長宜子孫、位至三公、宜君仕官等の銘字を有する者内行花文日月鏡、四乳星文鏡、八鳳鏡、四鳳鏡、四乳四禽鏡、四乳八禽鏡、TLV鏡、龍虎鏡、蟠龍鏡、四乳神獸鏡、四乳四仙搗藥鏡其他四乳六乳八乳にして神人禽獸等をあらはせる者及び半圓方格神獸鏡等である。

陶器 陶器には厚手と薄手の二種類があつて厚手の者は其質厚くして砂を混じ灰白色を呈してある薄手の者は其質薄く緻密にして灰黒色である其種類は大なる甗もあれば小なる壺もあり長方形又は圓形の瓦案もあり瓦竈、瓦甗、瓦甗、瓦釜、瓦杯、瓦狗、瓦雞、瓦豚などもあり七枝瓦鏡や井幹の模形などもある此等の中には綠釉黃褐釉を施した者もあれば彩色を以て表面に文様を描いたものもある要するに既に樂浪時代に於て各種の素焼のみならず釉藥の盛に用ひられたのは特筆に價する。

漆器 漆器の發達は更に驚嘆すべきものがある支那の記録には漆器が既に漢時代に行はれたことが載せてあるが遺物は濱田博士が嘗て滿洲にて發見せられた外公表されたものはない然るに近年平壤に於て樂浪時代古墳の内部より精美な漆器が發見せられ既に年代銘を有する者も數種出土して其製作の



時代も正確となり漆器發達の真相が稍明かとなつて來た大正五年余等の發掘せし九號墳より出土せし金釦(鍍金の覆輪)果槃及び他の漆槃には共に前漢の居攝三年(耶蘇紀元八年)の刻銘があつた何れも中央圏内に三熊文を配し周縁帶にも裏側にも雲氣文を描いてゐる又昨年十月平壤府の囑託により藤田亮策小場恒吉小泉顯夫三氏の一行が發掘された古墳より前漢の始元二年(耶蘇紀元前八五年)の金耳杯永始元年(耶蘇紀元前一六年)の金釦飯槃及び元始三年(耶蘇紀元三年)の金耳杯などが發見され又平壤北村忠次氏所藏の漆槃にも王莽の始建國元年(耶蘇紀元八年)の刻銘がある此等は何れも技工といひ文様といひ驚くべき發達を示してゐる。

是まで出土した漆器は案・盤・杯・函などで木製の者と乾漆製苧布を漆にて幾返も貼りし者の者があり塗り方は黒漆と朱漆とが普通で其の上に或者は彩漆を以て人物禽獸雲氣等の文様を最も流暢に達者に描いてゐる又或者は黒漆の上に細密な文様を毛彫にしてゐるものもある盤は淺き者も深き者もあり大小皆口縁に金釦を施し杯には必ず鍍金の耳が一對づついてゐる案は長方形又は圓形で文様を描いた上に盛に裝飾金具を打付け又鍍金の熊形の脚又は馬脚様の脚を施してゐる者もある函には大小方圓色々あるが或者は蓋の中心に金銅の四葉飾を置き其中心及每葉ごとにハート形の扁平なる白瑠璃玉を箆め其裏面に動物を描き上より透いて見ゆる様にし其他の間地に繊麗なる文様を或は描き或は毛彫にして

ゐる要するに樂浪時代の漆器は其木部苧布部は早く腐朽し去りたれども漆の部分は割合によく保存せられ其上に施されたる文様も完全に明かに遺つてゐて其形といひ其技工といひ其文様といひ精巧妍麗驚くべく今日の進歩を以てしても猶及ばざる所がある。

**武器** 武器には銅劍・銅矛・鐵の刀劍・戈・戟・斧及弩機・銅鏃・鐵鏃・刀子などが發見された大同江面九號墳から出た劍は極めて見事な者で劍室は漆を塗り柄は絹紐を以て巻き柄の上下端には玉製の裝飾が施され劍室には瓏と稱する玉製彫刻の飾りある者が取附けられてゐた此瓏は革帶に繋ぐ爲めのものである刀には柄頭に環が附いてゐるのが多い其他戟にも矛にもそれ〴〵裝飾金具が施され特に九號墳から發見せられた刀子には精巧な純金製の裝飾金具がついてゐた。

**馬具** 馬具には美なる裝飾を施せる轡や馬面と思はるゝものが發見され又革紐に多くの楕圓形金銅飾鉞が打付けられてあつた。

**布帛** 漢時代には既に綾羅錦繡の如き技術は大に發達してゐた古墳内から或は銅器鐵器に鍍付いたり或は漆器の地や刀劍の室に巻かれ又は粘土に混じて腐朽のまゝ其の形迹が見えたりしてゐたそれは細巧な絹もあれば麻布もある。

**服飾品** 金屬の服飾品には銀製指環、銀製釧があり又帶鉤もある大同江面第九號墳から發見された



帶鉸具は純金製にて其面に七頭の母子龍を金縷細工フィリグレイにてあらはせるは精巧驚くべく遙かに希臘羅馬の影響を思はしめる其他双龍を透彫にせる櫛金具や諸種の裝飾金具があつた。

**玉石類** 漢時代には死者を葬るに其口に殫形をなせる瑤を含ませしめ鼻孔、耳孔を八角の小杆にて塞ぎ眼を薄き楕圓狀の玉にて蔽ひしが九號墳の棺内死者の頭部に當れる所から此等を發見した又碧玉製の壁が背に當れる處より出土した此壁は兩面に蟠虬文粟文を浮彫りにした見事な者であつた此外同墳の棺内から玉製の豕及び龜鈕の玉印が發見せられ棺外から水晶、瑪瑙、琥珀、瑠璃製の狗兒、羊等の飾玉が出土した。

**磚** 磚は墳墓の玄室を築造する爲めに用ひられしことは既に前に説いたが當時住宅官衙の牆壁に盛んに應用されたことは樂浪郡治の遺址たる土城内から多數の磚片が發見されたことでも分かる磚は灰黑色にして其質あまり堅くなく其大さ今日吾人が普通用ふる者よりは稍大にして其見ゆる所の面に裝飾として種々の文様や文字を浮彫りにしてゐる其文様は直線文もあれば曲線文もある菱文、波文、斜格文、S字文、半圓文等最も多く又魚文、錢文などを附けてゐるものもある文字には「興平□□」「光和五年」「秦始十年」「大康元年」などの年號銘があり又死者營墓者の名をあらはせるもの「大吉」「壽考」などの吉祥語を録せるものもある。

**瓦** 瓦は主として樂浪郡治址から發見さるゝ土城内は耕地となつてゐるが畑の土よりは瓦片の多き所もある位である瓦當は巴瓦に限られ其文様は多種多様なれども要するに周縁高くして中央に半球様若くは稍扁平なる饅頭形があり是れを中心として四方に一筋二筋若くは三筋の線を出だし以て瓦當面を四區に分ち各區内に蕨手文様(最も普通)及び其變形並びに文字を容れてゐる文字銘の中最も注意すべきは前に説いた如く「樂浪禮官」「大晉元康」の二種で其出土せし處が樂浪郡治址たるべき有力なる資料となつた此外漢晉風の吉祥語を容れたもので「萬歲」「千秋萬歲」「富貴」等の文字が篆書にて陽刻されてゐるものもある。

**樂浪時代結論** 樂浪時代の建築は古墳の外全く形迹を見ることが出來ぬ彫刻も繪畫も同様である而も幸に古墳内から發見された遺物によりて當時の工藝の一斑を知ることが出来る其銅器といひ漆器といひ陶器といひ瓦磚といひ其他諸般の工藝品といひ形に於ても意匠に於ても技工に於ても頗る優れたもので樂浪郡時代の藝術が殆ど豫想外の發達をしてゐたことが分かるそして此等の藝術が全く支那本國の者と全然同一の者である思ふに漢民族の來住以前朝鮮民族は多少固有の藝術を有つてゐたであらう而も極めて低級の者であつたから新たに輸入された優秀な藝術の爲めに忽ち屏息消滅したのであらう今日まで發見された遺物は皆純然たる漢式のもので毫も從來土民の手法と思はるゝ者を混じて居ら



ぬ此等遺物は恐らくは移住し來れる漢民族の手に成つたものであらう併し中には土着民族に關するものがあるかも知れぬ假令土着民族の者であつても彼等の固有した藝術は早く消滅して新來の支那文化に同化してしまつたに相違ない余等の調査した古墳は僅かに十數に過ぎぬがそれでも割合に豊富な遺物を發見して樂浪時代の文化の性質の一斑を知り今日支那に於て研究することの出來なかつた漢晉時代の古墳の構造明器の配置の方法を知り併せて當時藝術品の性質を明かにすることが出來た若し他日平壤を中心として散在せる千餘の古墳を組織的に調査したならば更に驚くべき遺物を發見し當時文化の研究上一大光明を齎すであらう茲に最も遺憾に勝へざるは昨年土民が竊かに無慮數十の古墳を破壊して其内藏品を盗み出し好事者に鬻いだことである是れが爲め學界を驚かすに足るべき如何に多くの事實が研究もされずに暗から暗に葬られたであらう切に當局者の嚴密なる監督を望まねばならぬ。

### 三、高句麗

高句麗は扶餘族の分派にして漢の武帝朝鮮征服の頃には既に鴨綠江流域に居住した様である朝鮮の歴史によれば始め沸流江(富爾江か)の流域卒扶餘に都したが琉璃王の時國內城に移り山上王の時丸都城に移つた燕の慕容皝の爲めに擊破せらるゝに及び再び國內城に還り都した其後廣開土王の時國威最も振ひ版圖を四方に開拓して朝鮮の北半を平らげ新羅を助けて始めて日本軍と接觸するに至つた其子長壽王の十五年(耶蘇紀元四二七年)都を平壤に遷し平原王の二十八年(耶蘇紀元五八六年)長安城を築きて此に居り寶藏王の二十七年(耶蘇紀元六六八年)唐新羅連合軍の爲めに覆滅する所となつた。

高句麗の舊都國內城及び丸都城の位置に就きては古來異說多く歸着する所を知らざりしが先年余は今の滿洲輯安縣治の在る所を以て國內城となすの説を發表し又其西方約十四五里なる楡樹林子を以て丸都城に比定したりしが前者は既に學界の承認を経たれども後者に就きてはまだ決定するに至らぬ次に平壤長安城の位置に就きても從來の史家は今の平壤を以て古の平壤の處となし今の平壤の東北約四里大城山麓なる安鶴宮址を以て長安城の遺址となせども余の考にては之に反して長壽王の始めて遷りし平壤の宮地は之を大城山下に求むべく今の平壤は即ち後の長安城であらうと思ふ尤も此長安城は當時舊都の名を其まゝ平壤とも稱してゐたのである。

高句麗の文化は其始の漢魏西晉の影響を受け特に小獸林王の時佛教の輸入以來次第に南北朝時代の文化の感化を受け急速に發展をなせしも其覆滅以後千二百餘年當時の遺物としては都城址陵墓の外殆ど悉く烏有に歸した而も都城址より當時の工藝を見るべき古瓦片が豊富に發見せられ陵墓の内部より



奇巧なる玄室優秀なる壁畫が發見された唯惜べむきは高句麗滅亡の時其陵墓は悉く唐兵の發く所となり其明器の類は彼等の爲めに持ち去られたれば殆ど當時の工藝品を發見することができぬことである。

國內城地方の遺蹟

國內城地方は數百年間高句麗の首都として政治文化の中心であつた其地は廣からざれども鴨綠江流域中最も廣き平野である其中央少く西に偏して今輯安縣治がある此縣治の周圍は石築の城壁を以て圍まれてゐる余は此縣治のある所即ち昔時の王宮址であると思ふ此縣城の西に洞溝河が流れて鴨綠江に注いでゐる河の上流約三十町山城子に山城があるこれは恐らくは史上に所謂尉那巖城であらう此輯安の平野の北を限れる山の中腹から麓にかけて無慮一萬の古墳が散點してゐる又洞溝河の兩岸から山城子にも多數の古墳群があり更に輯安平野の西南に接してゐる麻線溝の平野にも幾百千の古墳がある此の如く無數の古墳が存在せる所より見れば高句麗の文化は如何に長年月の間此平野に榮えてゐたかを想像することができる。

古墳の種別

輯安平野及其附近にある古墳は大體に於て石塚と土塚の二類に分けることができる。

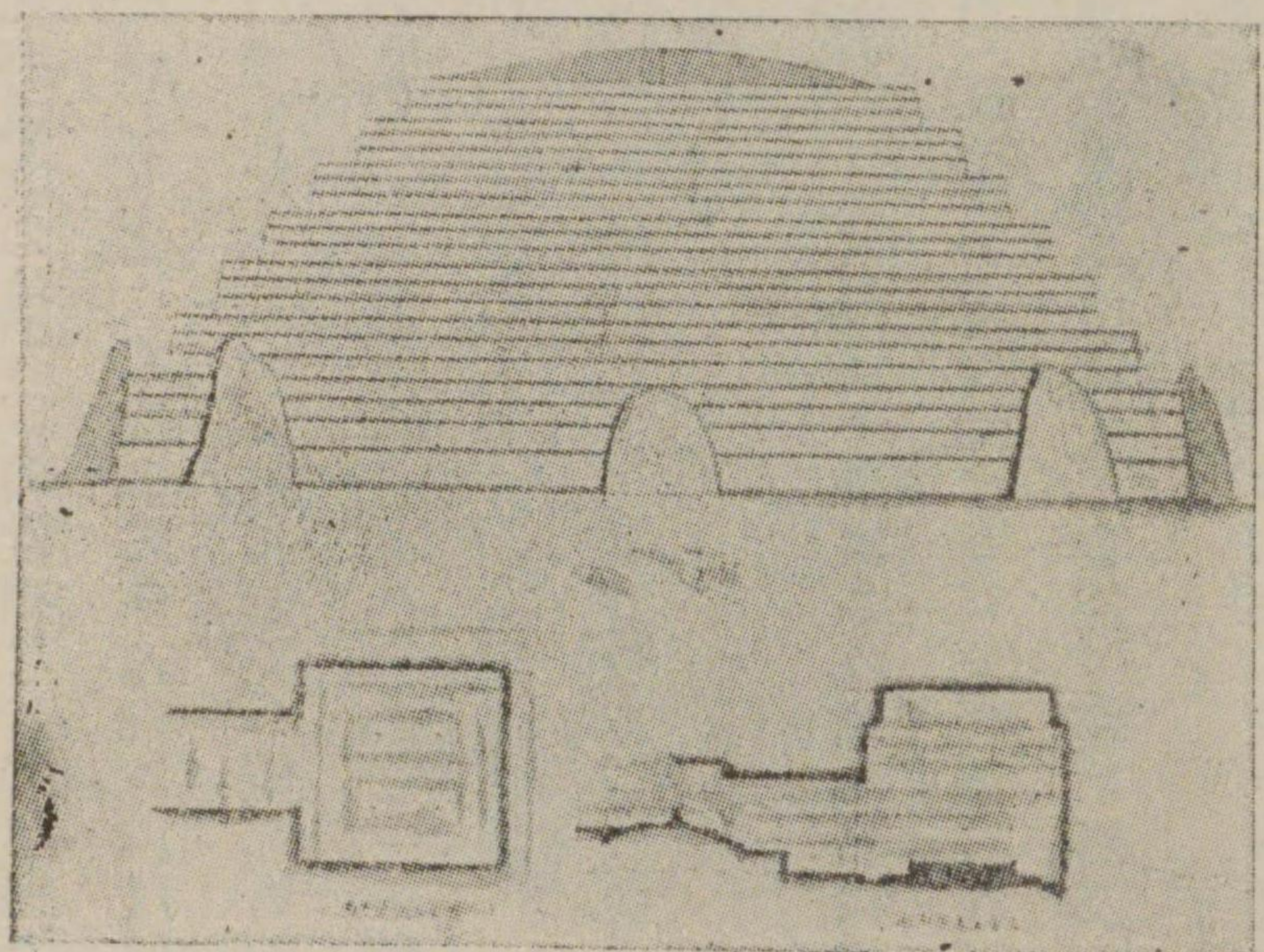
石塚 は大石を以て段狀に築造せる方臺にして其規模は壯大なる者もあれども亦極めて矮小なるものもある殆ど全部は崩潰して唯石堆を遺せるに過ぎぬ其中稍完全に保存された者は唯一の所謂將軍墳

あるのみである幸に此墳の儼存によりて吾人は當時の石塚の構造様式を知ることができるのである。

將軍墳

即廣開土王陵にして輯安の東北約五十町土口子山の中腹に築造せられ山下に有名なる廣開

第三十圖



將軍墳(廣開土王墓)實測圖

土王碑(好太王碑)が立つてゐる此墓は花崗石の大材を以て七層の方壇を築き層々其大さと高さを減して安定の外觀を得せしめ頂部にはコンクリートにて土饅頭を作つてゐたのである初層基邊の廣さ方百尺全高今四十尺初層の四面に各三個の巨石を倚せかけて固めとしてゐる羨道の入口は後世破壊され今第五層に開口してゐる玄室は廣さ方三間高さ亦約三間四壁皆巨大なる石材を以て構成し上部に持送石を出だし其上に一枚の大石材を載せて天井としてゐる當初は壁より天井にかけて石灰を塗つてあつたのであるが悉く剝落してゐる玄室内には木棺の座石と思はるゝ者二個相並んでゐる副葬品は何物も發見されなかつたが余等調査の際外部各層の壇上から多數の巴瓦や平瓦の破片を採集した恐らくは當初雨水の侵透



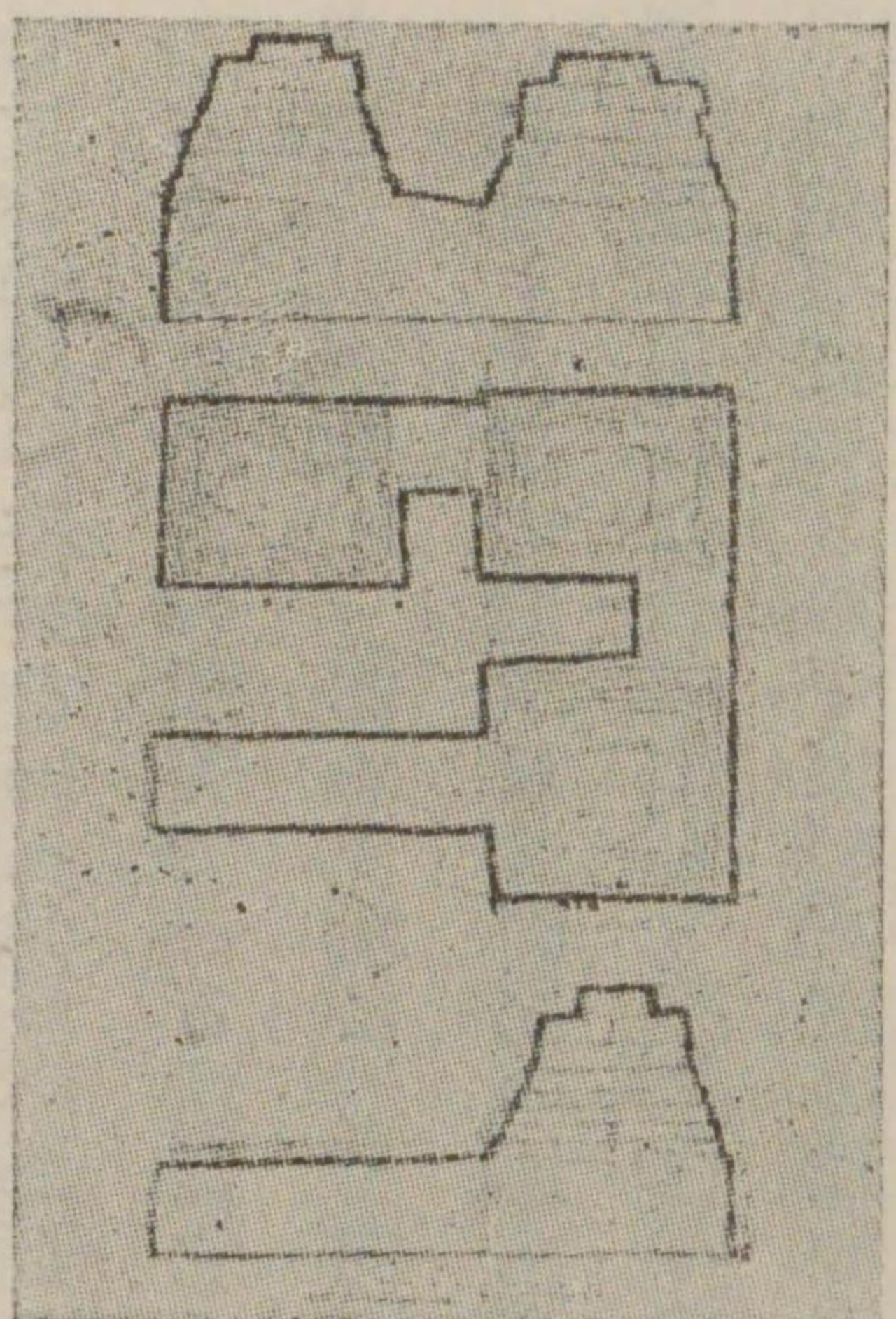
を防がんが爲め瓦を以て壇上を葺いたのであらう。

此將軍墳の他石塚の重要な者を擧ぐれば前記廣開土王碑の西南に太王陵があり麻線溝の平野に千秋塚があり共に基邊の大方約二百尺將軍墳に比すれば規模一層壯大であるが各層の壇石を失ひて一  
大石堆をなしてゐる共に何王の陵なるやを知らざれども石堆中より巴瓦平瓦の破片多く發見せられ又  
前者より「願太王陵安如山固如岳」の銘字を有する磚文があらはれたから假りに太王陵と名づけ後者  
より「千秋萬歲永固」「保固乾坤相畢」の銘ある磚が出したから千秋塚と名づけたのである此外多  
少層壇の形迹を見るべき者や内部玄室の構造を見るべきものもあつたがこれらは省略することゝす  
る。

土塚 は外形多く破壊され稀れには大規模の者もあるが多くは矮小である其中輯安平野の北に聳え  
てゐる楡山の麓平地に並び立てる二塚三塚と稱する者は最も壯大である又其西北にある三室塚、散ら  
し蓮華塚及び山城子なる龍甲塚は何れも玄室内に壁畫を有してゐた就中三室塚は其最も代表的なもの  
である。

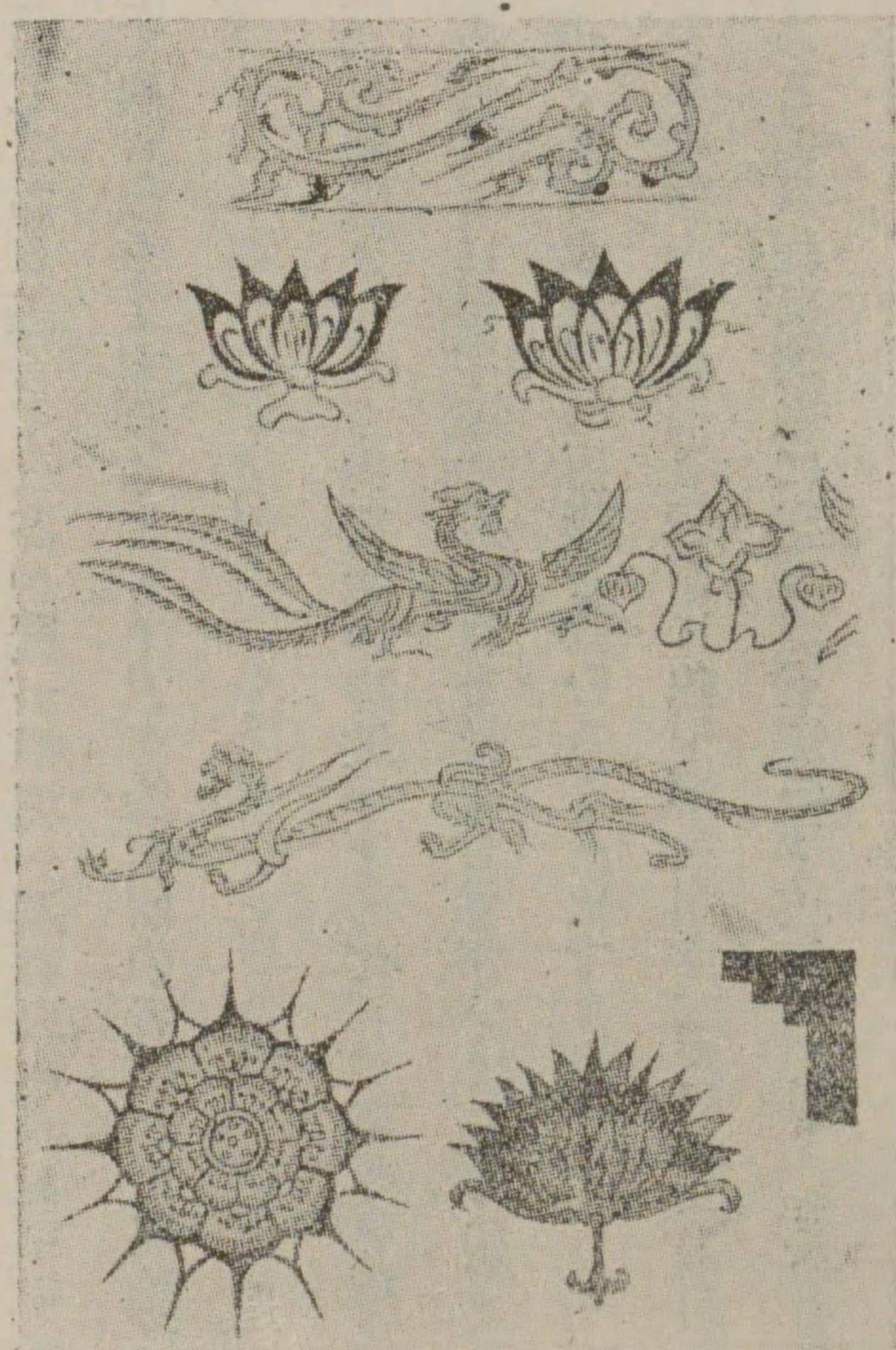
三室塚 三室塚は割合に小なる土塚で内部は矩の手で配置されたる三室より成り各室間に通路を有  
し第一室の正面に長き羨道がある第一室は方約九尺其周壁は野石を以て築き壁の上部より五層の持送  
を次第に出だし其上に四隅に三角形の持送石を重ね再び平らに三角形の持送石を上げて天井の面積を  
狭くし最後に大なる中心石を以て頂を覆ひ以て巧みに天井を構成してゐる第二室第三室は稍狭くして  
同様の天井を有し何れも壁より天井を通じて厚く漆喰を塗り其上に文様や繪畫を施してゐる第一室

第十四圖



輯安三室塚内部實測圖

第五十圖 第六十圖



三 輯安三室塚玄室持送り文様

四 輯安散らし蓮華塚玄室文様

の壁には樓閣や甲冑を着けた人物や腕押しをしてゐる者などを描き第一の持送りには蒼龍白虎朱雀玄



武の四神圖を第二の持送りには蓮華を第三の持送りには怪雲文を寫して裝飾としてゐる第二室第三室も大抵之れと同様であるが剝落して不明の處が多い壁面の繪は古拙なれども持送りに施せる雲文四神圖は漢式の餘影を見るべく北魏以前の特質を示してゐる恐らくは高句麗が平壤へ遷都以前の者なるべく東晉時代の様式を傳へたものであらう果して然らば今より少くとも千五百餘年前の者にして東洋に於ける現存最古の壁畫である(印度を除きて)。

**散らし蓮華塚** 亦小土墳にして内部は前室及び後室より成り内彎狀の持送りを出だして天井を巧みに構成し玄室の四壁には滿開の蓮花文を天井の持送りには半開の蓮花文を散らして描いてゐる此等の文様は手法奇古勁健にして亦東晉時代に屬すべく毫も北魏式の影響を認むることはできぬ。

山城子にある龜甲塚の玄室の壁の隅には柱及び組物の形を描き壁面に龜甲形を作り其内に各半開の蓮花文を入れてゐるが其様式は前者と同様である美人塚は其東に在りて玄室の持送りに當時の風俗を見るべき古拙な婦人像を描いてあつた。

**平壤地方の遺蹟** 長壽王が國內城から都を遷した平壤は今の平壤にあらずして既記の如く平壤の東北約四里にある大城山の附近にあつたものであらう大城山上には割合に大規模な石築の城壁が猶ほ明かに遺り高句麗時代の古瓦片が其の内外から發見さるゝ是れは萬一の際據守せんが爲め設けられた山城である此山城の南麓に安鶴宮址と稱するものがある方七八町の處を土築の城壁を以て圍んでゐる其内部から比較的末期の古瓦片が多く發見された余は最初此處を假りに王宮址に指定したが其内部より出づる古瓦片はあまり古い方でないのみならず地勢にも多少無理の點があつた昨冬平壤へ旅行せしとき大城山の西南酒巖の附近に城壁を發見し其内部より比較的古い古瓦片を多數に蒐集した此處には高麗時代と認むべき礎石も往々散點してゐる上大城山城との關係に於ても又其地が大同江に臨みて良好な舟着場である點より判斷して此處が恐らくは當時の王宮址であらうといふ結論に達した若し此説に誤りなしとせば安鶴宮址は多分別宮の在つた處であらう。

**古墳** 此大城山麓安鶴宮の左右に千餘の古墳群在し又東方約一里許低き連山の南麓にも百數十の古墳が處々に散在してゐる此等の古墳は大部分土塚にして稀れに石塚を混じてゐる石塚は輯安平野の者と同形式で大抵破壊され石堆をなしてゐる稀れには層壇の一部殘存してゐるものもある併し將軍塚の如き大規模の者は全く當ら見ぬ土塚の中重要な者を擧ぐれば

(一) 魯山里鎧馬塚(大同郡柴足面)

(二) 土浦里大塚(同郡同面)

(三) 湖南里四神塚(同郡同面)



魯山里鎧馬塚 は玄室の四壁に古拙な四神圖を描き持送りに鹵薄圖日月象圖漢式の餘影を見るべき蟠虬様文を寫してゐる土浦里大塚は玄室内より灰色素焼に彩色を以て蓮花文を描いた陶器の破片及び色澤美はしき黄緑釉の陶器の破片を發見した其蓮花文は北魏以前の特質を示し其釉藥を施せる陶器は樂浪の餘流を汲んだものであらう湖南里四神塚の玄室の壁天井は白大理石を以て築造し四壁には彩色を以て奇古なる四神圖を爲つてゐた其様式より判すれば約千五百年前の者と思はるゝ。

次に最も奇巧なる玄室を有せるは順川郡北倉面松溪洞なる八角天井塚である内部は玄室及び前室より成り前面に羨道がある玄室は平面方形にして其天井は方形より八角形に八角形より方形に移り往く所層々變化の妙を極め奇想天外より落つるの趣きがある玄室の後壁には主人夫妻の像を描き三面の壁には龜甲形の内に半開の蓮花を容れ天井には雙人首蛇、鳳凰、鹿等の畫を見し又蟠虬文雲文蓮花文を隨處に配して頂部には處々に星形を描いてゐる前室は長方形にして是れ亦變化に富める天井を構成してゐる亦壁畫を有せしが如くなれども多くは剝落して明かでない。

平安北道雲山郡新東面龍湖洞に大なる石塚がある俗に衛滿に關係ある者と稱すれども純然たる高句麗式石塚である今崩頽したれども猶將軍塚式石壇三層を存してゐる此墓の石堆中から先年鐵製焜爐金銅透彫の鳳凰様板四枚及び金銅透彫金具の破片、土器の殘片などが發見されたかく高句麗時代の工藝

品の發見されたのは量に於て少きも猶當時の様式を徴すべき貴重の標本である多分千四百年前の者であらう。

江西龍岡地方の古墳

平壤の南江西龍岡地方には特に重要な古墳が多く存在してゐる此等は皆其内部に壁畫を有せるもののみである今之を列擧すれば

- (一) 梅山里四神塚(龍岡郡大代面)
- (二) 花上里龕神塚(同 郡新寧面)
- (三) 同 星塚(同 郡同 面)
- (四) 安城洞大塚(同 郡池雲面)
- (五) 安城洞雙楹塚(同 郡同 面)
- (六) 肝城里蓮花塚(江西郡普林面)
- (七) 遇賢里三墓(同 郡江西面)

右の中安城洞雙楹塚及び遇賢里三墓は最も代表的の者なれば稍之を詳説し他は簡略に従ふこととする。

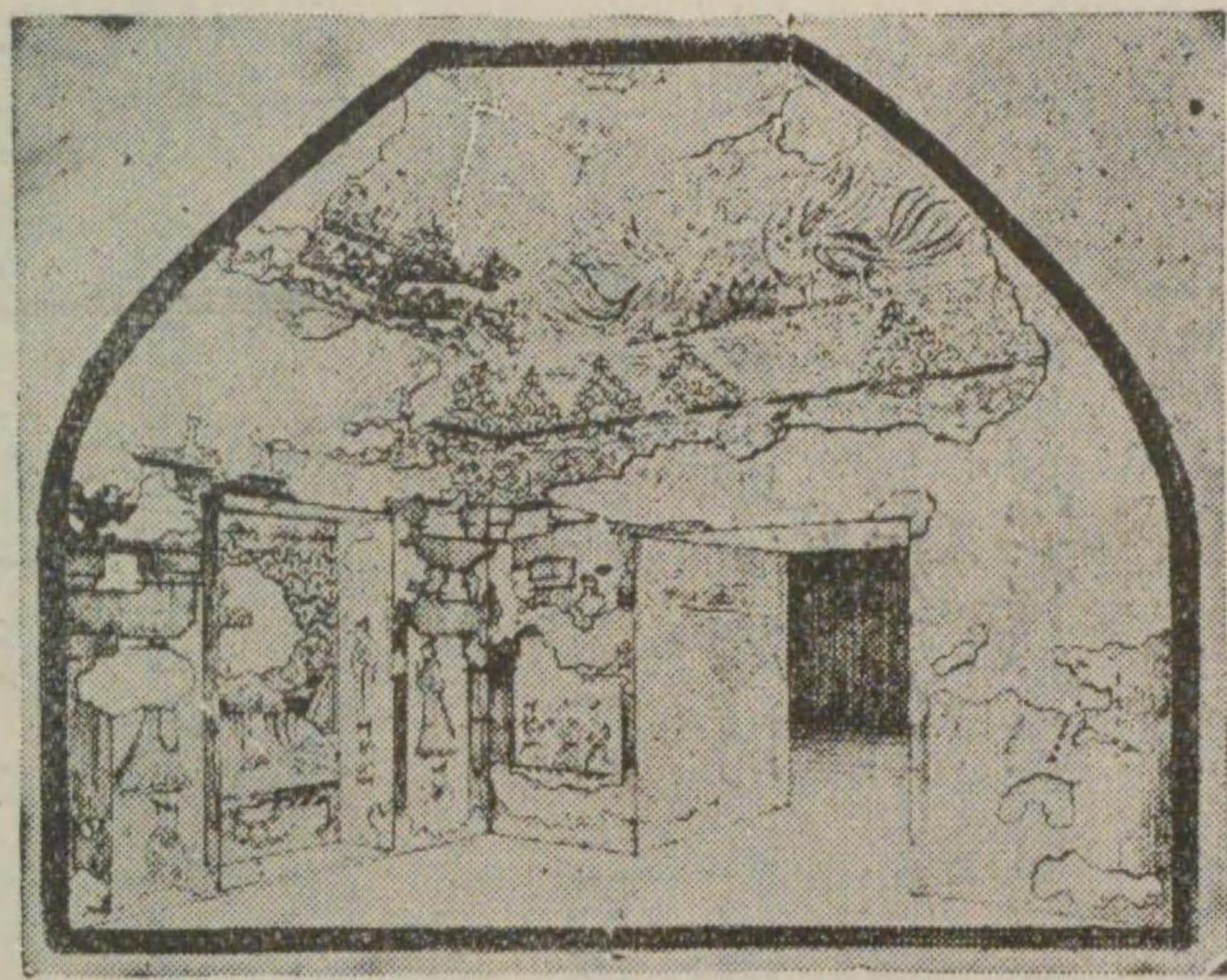
梅山里四神塚

は玄室方形にして壁天井は漆喰を塗り後面の壁には主人及び妻妾と思はるゝ者馬を



牽ける人物並びに玄武の圖を書き東壁には蒼龍及び騎馬人物を西壁には白虎及び狩獵圖を南壁には朱雀即ち雙鳳をあらはし又天井下の持送りには一種の雲文及び唐草文様を寫してゐる是等の人物及び四神其他の文様は手法頗る古拙にして且頗る稚氣を帶ぶ今日までに平壤を中心として發見されたる古墳

の壁畫中最古の者で約千五百年前の者であらう。



第七十圖

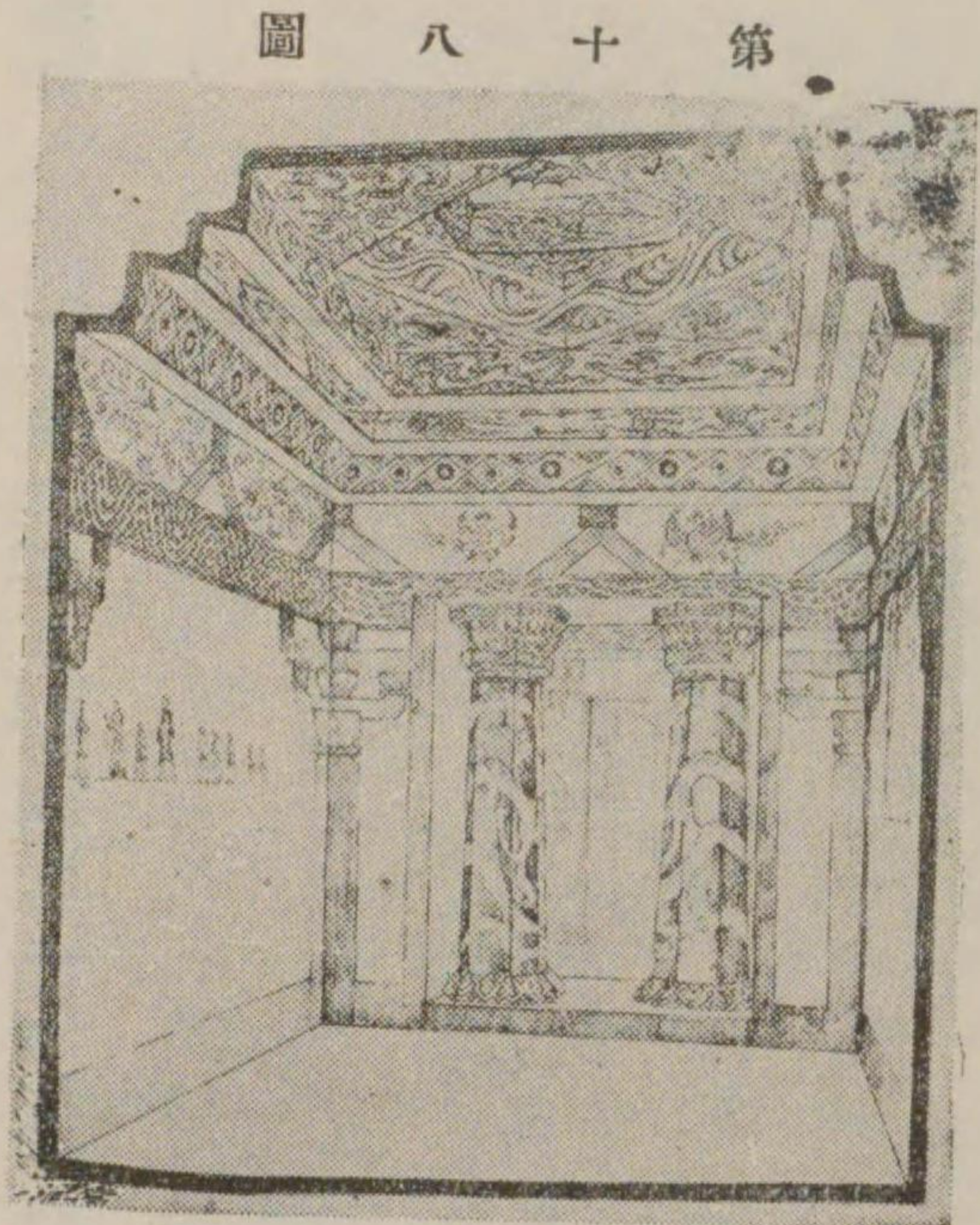
龍神塚前室見取圖

である約千四五百年前の者であらう安城洞大塚は前後兩室を有せる大規模の古墳であるが其壁畫は大抵剝落し唯前室の壁に宮殿樓閣の圖を描ける者稍々辨すべく其他壁面に柱梁斗拱墓股等をあらはせる

もの當時木造建築の參考とするに足れる外何等觀るべきものは遺つてゐない肝城里蓮花塚亦前後兩室より成れども剝落甚しく唯前室の天井に描かれたる後魏以前の形式を有せる蓮花文割合に鮮明に遺つてゐるのみで壁龕内に神像を描けるものは大半剝落してゐる。

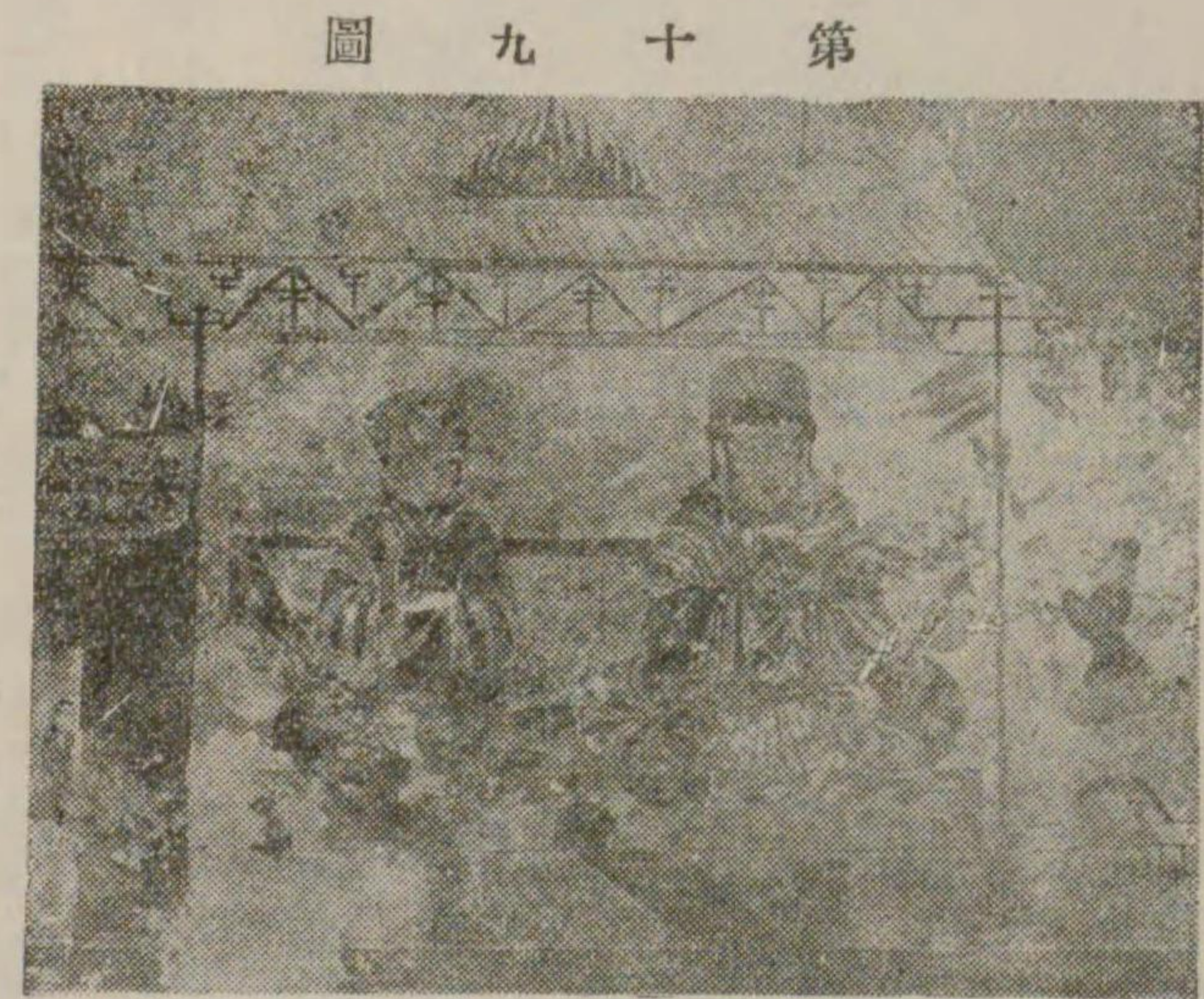
雙楹塚

内部は玄室及前室より成り其前に長き羨道を有してゐる玄室前室共に高句麗特有の隅平の



第八十圖

雙楹塚玄室内部見取圖



第九十圖

雙楹塚玄室後壁主夫人妻圖

三角形持送りを利用せる天井を有し兩室の中間通路の左右に八角形の柱が立つてゐる。此柱の柱頭と柱脚には蓮花様の飾りを柱身には蟠龍を彩繪してゐる玄室は

四隅に柱斗拱を描き梁墓股をあらはし小壁には雙鳳瓶花を作り後壁には頂に鳳凰を載せたる帳房内に



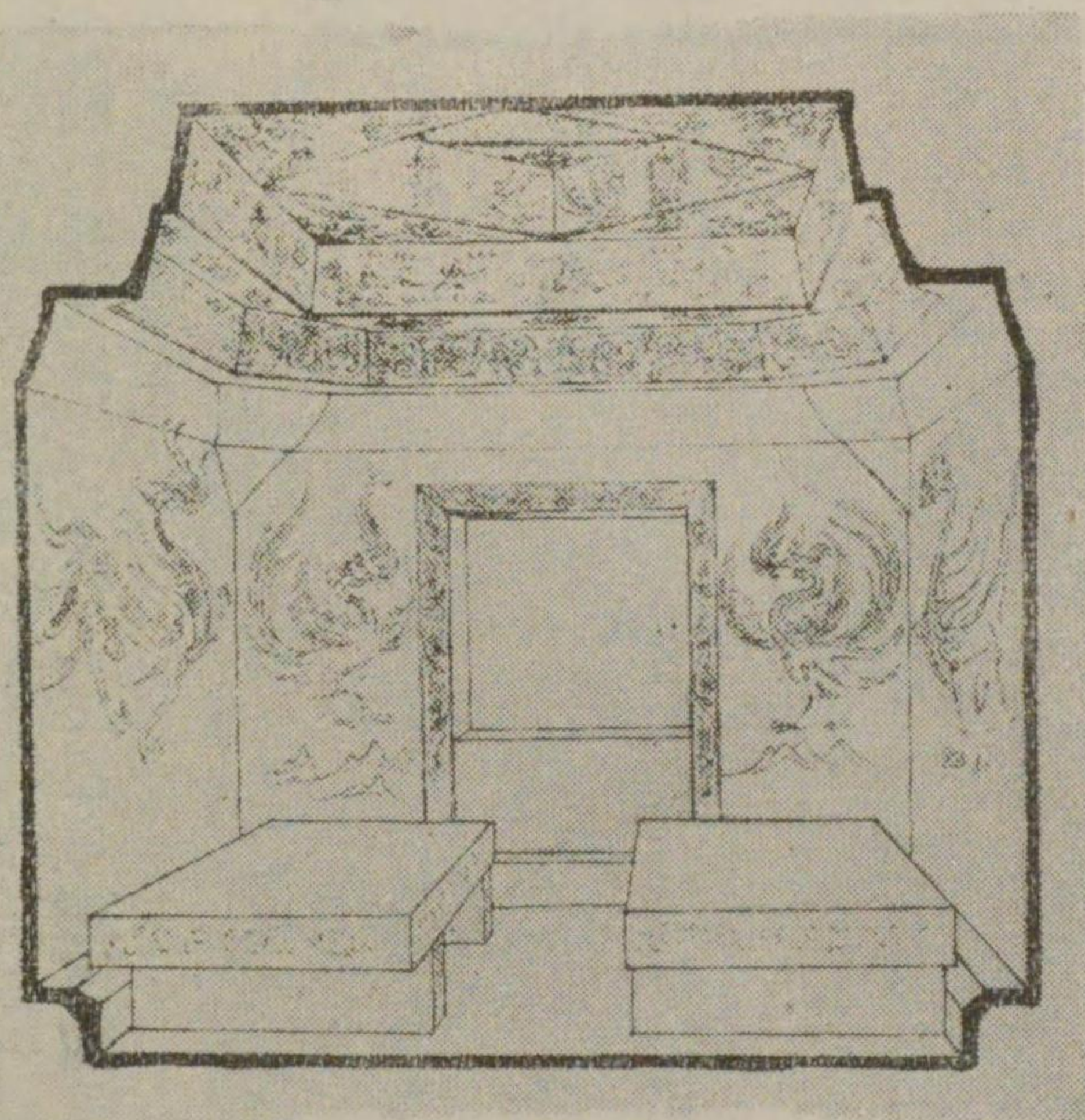
宮殿様を寫し其中に主人夫妻各床上に坐し僕婢左右に侍するの狀をあらはし左方に玄武を圖してゐる又東方の壁には僧侶子女等列をなして主人夫妻に向ふの狀を畫き西方の壁には天蓋様の下に何物かを描けるが如くなれども剝落辨じ難い天井は周圍の持送に菱文、星雲文、雲鳳文、唐草文等を尤も奇抜

第二十圖



双檀塚美道壁畫婦人圖

第二十一圖



圖取見部内室玄墓大里賢遇

なる手法を以てあらはし中頂に蓮華其四圍の隅及び平の三角形持送面には日月象雲文等を描いてゐる前室の天井の構造裝飾は大要之れに同じく東西壁に最も雄渾なる蒼龍白虎圖を作

り南面入口の左右には侍者を入口の兩側には神茶齋疊を圖し更に長き美道の兩側壁には十數の男女の人物及び牛車、騎馬の人物又甲冑を着け鎧馬に乗れる者等を寫してゐる手法巧麗にして當時の風俗の真相を遺憾なくあらはしてゐる要するに此墓は内部に一對の珍らしき柱を有せると裝飾の頗る雄奇にして其寫せる人物の寫實的なることは最も注意すべき事項にして其年代は千四百年前を下らざるべく猶北魏式の形迹を發見することができぬ。

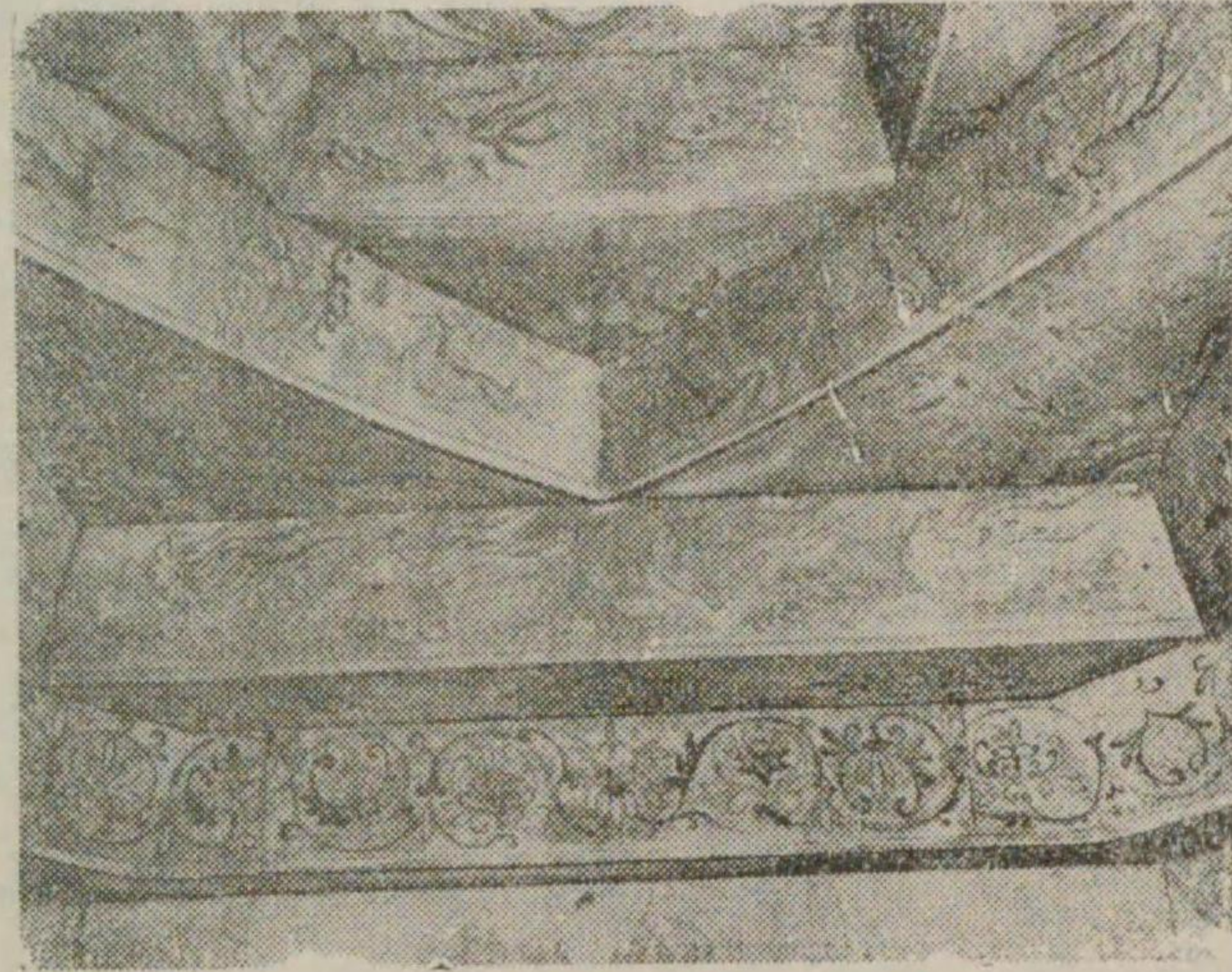
遇賢里三墓 江西の西約一里平野の中に三墓の大なる墳壟が鼎立してゐる大墓は其南に位して最も大に中墓は其西北にありて之に亞ぎ小墓其東北にありて最も小である此大墓中墓の玄室内より先年最も秀麗なる壁畫が發見された。

大墓は徑約百七十尺高約二十九尺の一大墳で内に方形の玄室がある其四壁は白色良好なる花崗石の大材を以て築き其上に他に比類なき奇巧なる天井を構成してゐる高句麗の他の古墳に在りては玄室の壁天井は何れも野石を以て築き其上に漆喰を塗りたれども此墓の壁天井は唯石面を丁寧に鑿突せるのみにして其上に直ちに壁畫や天井の文様を描きしを以て殆ど剝落せず傳彩猶鮮明に遺つてゐる玄室は方形にして南面入口の左右には相對せる鳳凰即ち朱雀をあらはし東壁には蒼龍西壁には白虎北壁には玄武の象を彩繪してゐる其遒勁の筆致雄渾の氣象人をして當時繪畫の發達の異常なるに驚かしむるものがある天井を構成せる持送石や隅及平の三角持送石には忍冬文や天人や神仙や山岳飛雲等を寫し或は麟鳳蓮花其他怪異の動物をあらはし頂上を中心石には丸龍を描いてゐる此等の壁畫や裝飾が窄き入



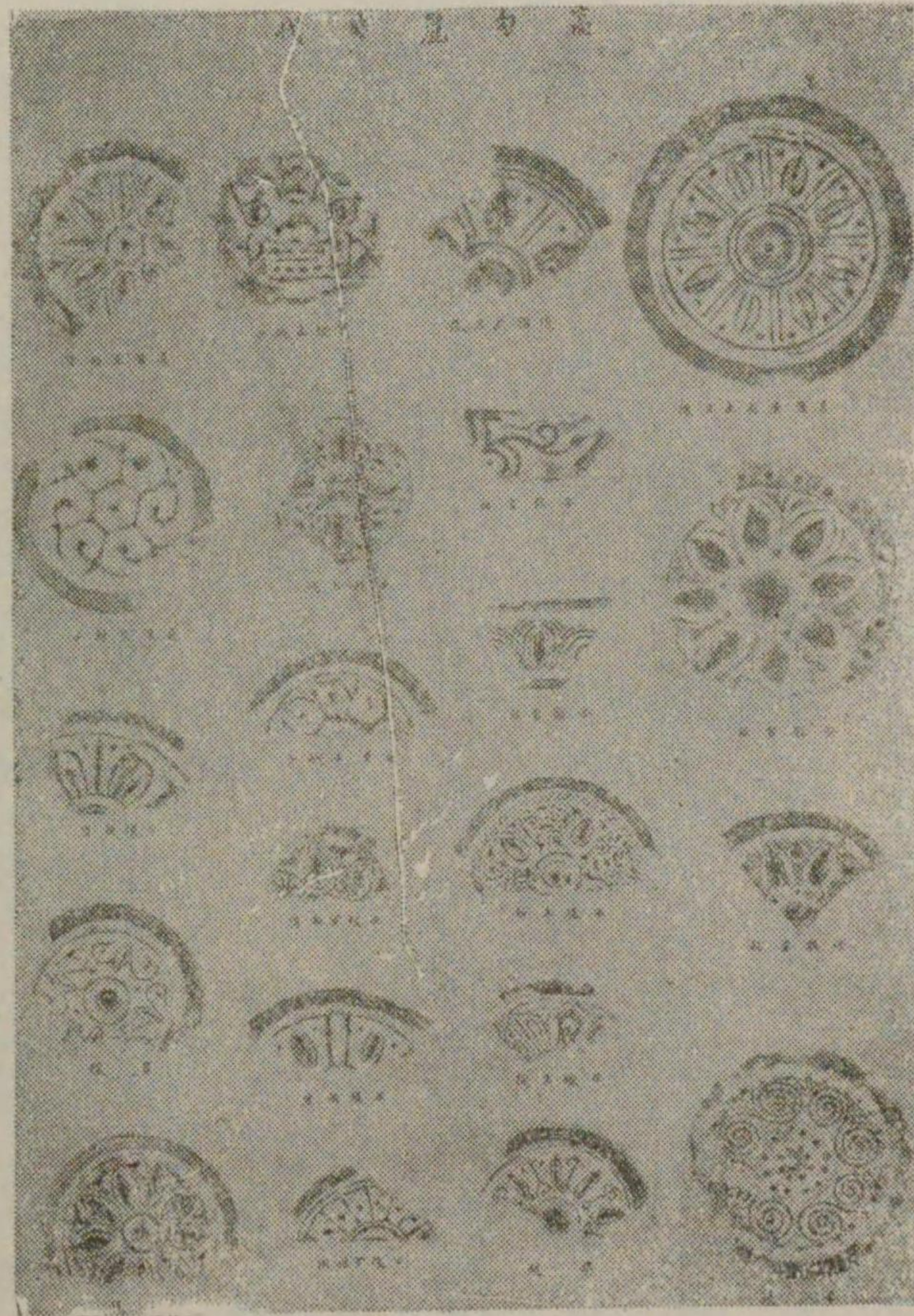
口より流れ來れる弱き光線によりて照され夢の如く浮び出されたる光景は神韻縹緲として幽婉の極みである此等の壁畫や裝飾文様は純然たる北魏式にして我飛鳥時代の者と最も親密なる關係を有してゐ

圖 二 十 二 第



井天室玄墓大里賢遇 ○一

圖 三 十 二 第



様文當瓦代時麗勾高 一一

る其の年代は約千三百五十年前に當り或は平原王などの陵にあらずやとも思はる玄室の内部には二個の石床相並び其上に國王及び王妃の棺が置かれてあつた様である惜しいことには此墳も高句麗滅亡の際他の墳と同様唐兵の發く所となり内藏品を悉く盗み去りたれば内部より何物をも發見せず唯忍冬文

を描ける漆の殘片の遺存せるのみであつた。

中墓は徑約百五十尺高さ約廿六尺の圓墳で内部の玄室は四壁共に各一枚の花崗石の大材より成り其上に二層の持送を作り中央方形に残されたる部分を一大石を以て覆ひ以て天井を構成してゐる是れ亦花崗石の面に直ちに彩繪を施せるものにして四壁に四神圖を作ること大墓の如く第一第二の持送には忍冬文様天井中心石には中央に蓮花東西に日月象南北に各双鳳四隅に蓮花忍冬文を描いてゐる其裝飾割合に簡單なれども四神圖忍冬文等の技工手法は大墓に譲らず亦雄渾偉麗の氣象を發揮してゐる。

前に説き來りし所を概括すれば高句麗の陵墓は石塚と土塚の兩種あつて石塚は數層の石壇より成り土塚は圓墳又は方基圓墳の形式を持つてゐる此石塚は魏志に石を積みて封を爲すといへるに相當し高句麗特有の形式である余は支那に於てかゝる、古墳のあることを知らぬ石塚と土塚は其内部に玄室を有し其前に羨道を設けてゐる室の構造は單に四壁と天井石とより成れる極めて簡單な者もあれば數層の持送隅及び平の三角持送を有せる者もある又順川八角天井塚の如く奇巧を極めた者もある此等の形式は朝鮮にては全く高句麗の古墳にのみ限られてゐるが支那北魏の石窟天井には往々此種隅平の三角持送を應用せるものもあるから或は其起原を支那に求むべきものであるかも知れぬ又其内部に作れる壁畫及び裝飾は北魏以前即ち東晉時代まで溯るべく特に其人物畫はよく當時の風俗を寫してゐる吾人



は此等によりて支那に於て既に亡びたる北魏以前の藝術の様式を知ることを得るのみならず遇賢里の三墓に於て最も發達せる北魏式の繪畫裝飾を見飛鳥時代の者との關係を知ることを得るのである。

繪畫 高句麗時代には少くも佛教の輸入と共に南北朝式の佛像彫刻は異常の進歩を見たに相違ないが實例は一つも遺つてゐない唯當時の繪畫は近年古墳内部の調査の進行に伴ひ國內城地方に於ても平壤地方に於ても追々發見せられ中には北魏式の特質を具へたものもあればそれ以前に溯るべきものもある支那に於て既に絶滅したものを朝鮮に於て保存し以て現存東洋最古の代表的繪畫となつてゐる。

支那の繪畫は周漢以來既に相當の發達をしたが六朝時代に入りて急速の進歩を見た、東晉の顧愷之、劉宋の陸探微、南齊の謝赫、梁の長僧繇等は其最も卓越せる者人物龍虎佛像山水草木往く所として可ならざるなきの妙境に達した而も當時の繪畫の現存せる者は實に希れである東晉末の顧愷之筆と稱する女史箴圖(大英博物館藏)は確かに當時の様式を示せる者なれども或は六朝末か唐初の模本でなからうか又顧愷之筆と稱する洛神圖は當時の倣を存するも宋頃の摸寫であらう雲岡龍門等の石窟には當時の多數の佛菩薩の彫刻を保存すれども繪畫は一も遺つてゐない唯甘肅省燉煌の千佛崖に北魏式と認むべき壁畫や裝飾が割合に無事に保存されてゐるのみである然るに近年高句麗古墳より發見せられたる壁畫は千三四百年前より千五百年前まで溯るべく中には燉煌の千佛崖の者よりも一層年代に於て

古くして東晉時代の餘影を見るべき者もある。

此等壁畫の正確の年代は不明であるが其様式より判すれば通溝三室塚の樓閣人物四神等の圖は恐らくは高句麗が平壤へ遷都以前の者なるべく傳顧愷之筆女史箴圖の原圖と大抵年代を同ふしてゐることは他に明確な證據がある。果して然らば少くも今より約千五百年前支那東晉末頃に相當するものであらう梅山里四神塚、湖南里四神塚などの壁畫も大抵これに近い年代の者である此等は無論支那の影響を受けたものに相違ないが猶古拙生硬の域を脱しない然るに眞池洞双楹塚の四神圖人物畫に至りては或は豪宕の風神を寫し或は纖麗の筆致を以て當時の風俗を遺憾なく描き出せるなど其進歩實に異常である特に人物の騎れる馬や車に駕せる牛など頗る寫實の妙を得てゐる此墓の裝飾に用ひられたる諸種の文様は毫も北魏式の痕迹を示さないから此壁畫は其影響以前少くも千四百餘年前の者でなくてはならぬ。

更に遇賢里の大墓中墓の壁畫は北魏式を其儘あらはせるものであることは他の裝飾文様が北魏式の直寫であることを見てもわかる兩墓共に其玄室の四壁に描かれたる四神圖は規模の雄大なる構圖の勁拔なる太細なき線條を自由に驅使して水の流るゝが如く炎の揚がるが如く首尾照應一絲紊れず以て雄渾豪宕なる氣象を發揮してゐる其畫風を見るに全く寫實を超越して作者の理想とせる所を専ら線條の



運用と色彩の照應により寫し出ださんとせる一の構圖である南齊の謝赫の畫論に繪畫の六法を論じて氣韻生動を第一に擧げ骨法用筆を第二に擧げてゐる當時の繪畫は寫實よりも寫意を重んずるの程度に達してゐたことはこれでも分かる此遇賢里の大墓中墓の壁畫が寫實を離れて神韻縹緲たる情趣をあらはさんことを企てよく之れに成功せるは此六朝畫風の感化に出たものに違ひない此壁畫の外玄室内の天井持送りに飛天や神仙や龍鳳麒麟などが描かれてゐるが何れも純然たる北魏式である其年代は恐くは約千三百五十年前で今日までに發見せられた高句麗壁畫の最新の者であるがそれでも法隆寺の壁畫に先だつこと約百年である。

**工藝** 高句麗時代の古墳の構造裝飾が既記の如く異常なる發達をなせしことより推せば其工藝も亦之に劣らざる進歩をなせしことは明白である元來高句麗は厚葬の風大に盛んにして魏志に「金銀財幣盡於送死」と記してあるほどである玄室内に多數の寶器が收藏されてあつたことは國內城平壤地方の當時の古墳が高句麗滅亡の際悉く發掘されて一の完き者の無いことを見ても明かである余等各地に於て高句麗時代の古墳を調査したが殆ど遺物のあつた例が無い唯前に記せるが如く土浦里大塚から灰色素燒の陶器の破片と黄綠釉陶器の破片が發見せられ又雲山龍湖洞の石塚から鐵製焜爐や透彫鳳凰形金銅板などが發見せられたに過ぎぬ何れも昔時幸ひに盜厄を免かれた者である此等僅少の遺物より見る

も高句麗時代の陶器の表面に彩繪を施せること釉藥を施せること等は當時進歩の状態を語るものにして恐らくは樂浪の遺制と見るべきであらう鐵製の焜爐は鑄鐵術の發達を知るべく金銅鳳凰板亦六朝式の俣を存してゐる。

**埴及瓦** 高句麗時代の工藝品は遺物極めて稀れであるが埴特に瓦の殘片は割合に豊富に發見された樂浪時代には玄室を築くに埴を以てしたが高句麗は決して埴を用ひることなく常に石材を以て構築した而も輯安太王陵及び千秋塚より文字銘ある埴を發見した此等は樂浪の者に比すれば著く薄く且小である恐らくは石塚の各層の壇上を葺く爲め巴瓦及び平瓦と共に用ひられたものであらう。

**瓦** は國內城附近より出づる者も平壤附近に於て發見せらるゝ者も大要同一の様式を有してゐる而も其間自ら新古の區別がある國內城地方にては王宮址（輯安縣治）山城子及輯安縣治の東方並びに將軍墳太王陵千秋塚等の堆石中より多く發見せらる又平壤地方にては今の平壤城の内外大同江の對岸大城山城酒巖安鶴宮址等より夥しく出土した巴瓦の文様には蓮花文、忍冬文、獸面文、唐草文、輻線文、重圈文等の數種あつて蓮花文にも北魏前と認むべきもの其以後の特質を示せるもの等種々の意匠より成れる者あり又漢瓦の遺制を認むべき者もある其他蓮瓣様と忍冬文を交互に置いた者も蓮瓣様と獸面文を交互に置いた者もある輯安太王陵千秋塚將軍墳より出でし者最も雄健の風を帶び安鶴宮址より出



でし者には一種の草花文を陽刻せる唐草瓦がある要するに高句麗の瓦には其質赤色なる者と灰色なる者とあり特に赤色の者寧ろ普通なるは他に多く見ざる所である又瓦當の文様は意匠自由にして多趣多様手法堅實剛健新羅百濟より發見せられし者と大に性質を異にしてゐる多少北魏式の形迹を見るべきも大體に於て東晉時代の影響により高句麗固有の發展を見たものと考ふることが穩當であらう平瓦の表面は多く布目をあらはし裏面には方格文、斜格文、羽狀文、網代文等の幾何學的な文様又は忍冬文、孔雀羽様文等を陽刻してゐる。

#### 四、百濟

百濟は朝鮮の文獻によれば西紀前十八年溫祚王始めて國を建てたといふことになつてゐるが此紀年はあまり古きに失してゐる何故なれば此頃は漢の樂浪郡は猶盛んであり又朝鮮地方には馬韓弁韓辰韓といふ所謂三韓が割據してゐたからである此馬韓の地に百漢の興つたのは西紀三四世紀の頃である始め漢城(今の廣州附近)に都したが蓋鹵王の朝高句麗のため攻略され文周王の元年(劉宋元徽三年、我雄略一九年、西紀四七五年)熊川即ち今の忠清南道公州に都を遷した其後聖王の十六年(梁大同四年、我宣化三年、西紀五三八年)更に都を泗泚即ち今の忠清南道扶餘に遷り義慈王の二十年(唐顯慶五年、我濟

明六年、西紀六六六年)唐の爲め攻め滅ばされた當時我國より王子豊璋を送りて王となし回復を圖つたが結局失敗に終つた。

百濟は建國の始め北は帶方に接して彼より漢民族の文化を受け又常に南支那と海路往來してゐたから新羅任那に比すれば割合に早く制度文物の整頓を見た辰斯王の時宮宅を修め池を穿ち山を造り奇禽異卉を養つたことや蓋鹵王の時壯麗なる樓閣臺榭を宮中に起したことなど當時早く建築術の著き發達を想像せしめる文周王の移り都した熊川は北より西の方錦江に臨みて固めとなし更に萬一の虞に備へんがため北方公山の險に據りて城を構へた東城王の二十年熊津橋を設け二十二年宮東に臨流閣を起し更に池を穿ち奇禽を養つた聖王の築いた扶餘の都城は一層制度の發達を見先づ東北より西南に彎流せる錦江を以て自然の塹壕となし他方には山谷の地勢を利用して半月狀に城壁を築きて兩端錦江に達せしめ以て市街地を包圍せるは蓋し支那の制度に倣ひしものにして朝鮮に於ては最初の試みである又其東北江に臨める扶蘇山上には山城を築いて萬一の變に備へた實に規模宏壯にして要害堅固なる朝鮮に於ての大都城であつた武王の時池を宮南に穿ち水を引くこと二十餘里四岸植うるに楊柳を以てし水中に島嶼を築きて方丈仙山に擬した又義慈王の時更に望海亭を王宮の南に立てた此等の史實は歷代都城宮闕の經營に奢麗を盡せしことを想像せしめる。



特に枕流王の時東晉より始めて佛教の輸入ありしより次第に上下の崇信を得聖王の十五年（梁大同七年、我欽明二年、西紀五四一年）即ち泗泚遷都後三年使を梁に遣はし涅槃等經義及び工匠畫師を請ひ來らしめた其前後百濟は南朝なる梁陳と海路往來盛んであつたが高句麗が中間に介在せる爲め北朝なる北魏東魏北齊との交通は割合に疎遠であつた支那にありては當時南北朝共に同性質の藝術を有つてゐたが而も民族的地方的に彼此相違する所も亦少くはなかつたやうである高句麗が地勢上北魏系の文化の影響を受けたるに反し百濟は主として梁陳式の藝術の感化を被つたことは自然であらう百濟の様式を踏襲せる我法隆寺堂塔や玉蟲厨子にある所謂雲形肘木が支那の北朝系の遺蹟遺物に發見せられざるは或は南朝系に屬せるがためであるかも知れぬ唯南朝系の者は遺物甚だ稀れにして實物的に之を證明することができぬのが遺憾である。

聖王は梁より工匠畫師を聘し其形式によりて新都の宮殿や佛寺を興した引續き法王武王は王興寺を創建したが其寺水に臨みて彩飾壯麗であつたといはれてゐる新羅善德王十二年（百濟義慈王三年唐貞觀一七年我皇極二年、西紀六四三年）有名なる皇龍寺の九層塔を建てしとき百濟の建築家は小匠二百人と共に其招聘に應せしを見て當時百濟の建築術の發達の異常なるものありしを知ることが出来る他の藝術の進歩も之れによつて想像されてゐるであらう。

當代の遺物は極めて少きも陵墓石塔小銅佛瓦磚の類猶往々存するものありよりて以て當時藝術の一斑を推すことができる。

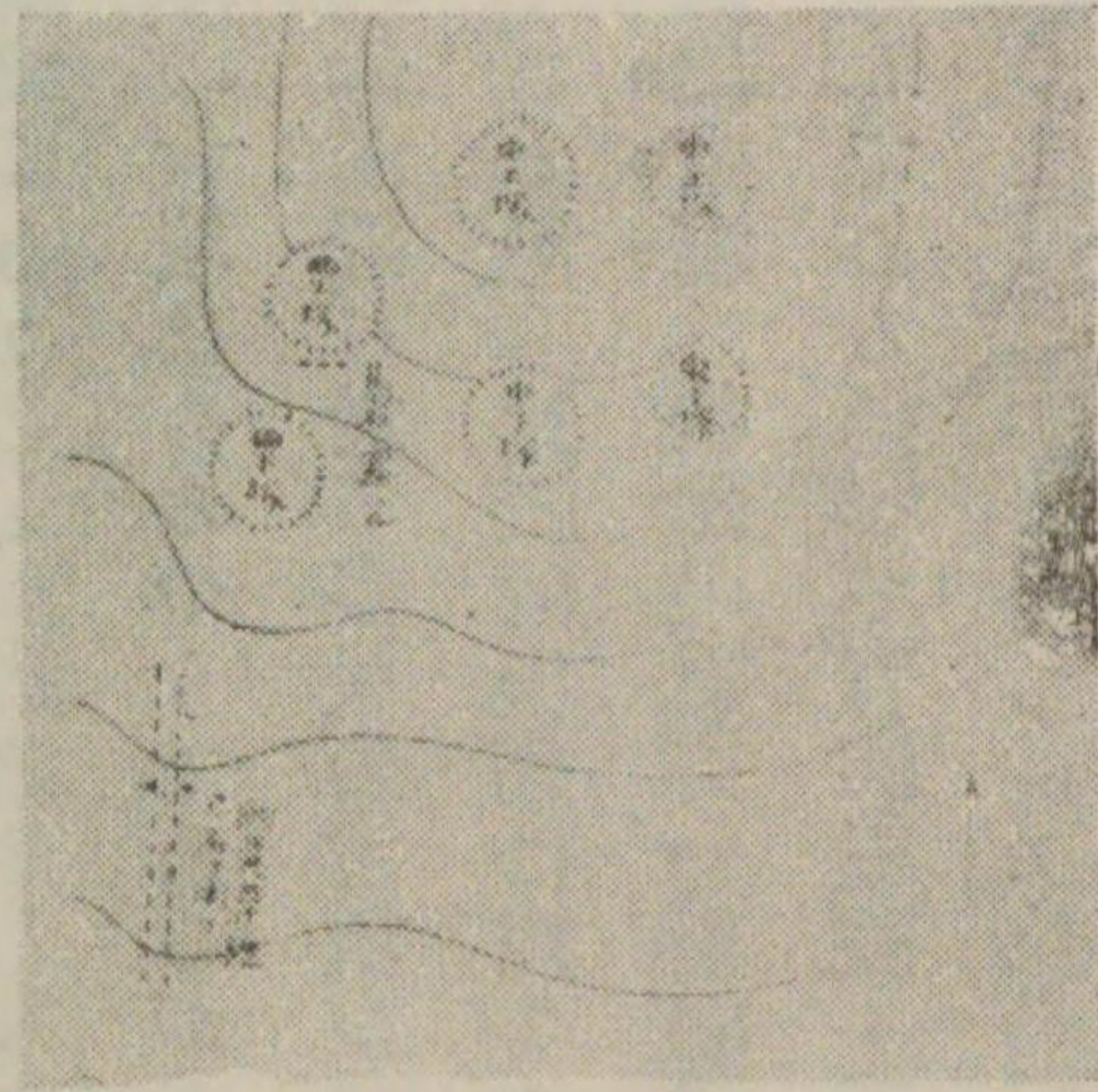
**陵墓** 初期の陵墓と認むべきものは京畿道廣州郡中坐面石村に大小數十基遺存してゐるこれは百濟の猶漢城にありしとき築造せしものであるがあまり重要なものはない又第二の都城たりし公州地方にも多少の古墳はあるやうであるがまだ組織的の調査を経てゐないから其性質はよく分からぬ唯第三の都城扶餘附近に於て多數の古墳が發見され其中には極めて重要なる者もある此等は何れも聖王遷都後の者であるから比較的後期に屬する。

**陵山里古墳** 扶餘の東方一里弱陵山里の丘陵上に東西に三列南北各二基つゝ總て六基の古墳が一群をなしてゐる傳へて百濟王陵と稱してゐる先年總督府にて此等の古墳を發掘調査した其中東端下方の墳（假りに東下塚と名く）の玄室内より壁畫を發見した玄室は長方形にして前後に長く四壁天井皆花崗石若くは大理石の大材を以て築き其面を水磨きにして南方入口の上には朱雀即ち双鳳を東壁には蒼龍西壁には白虎北壁には玄武を描いてあつた而も今白虎の頭部を髣髴する事を得る外殆ど剝落して辨じ難い唯天井に蓮花飛雲をあらはせる者のみ鮮明に遺つてゐる此玄室の裝飾は無論支那の影響に出でしものにして蓮花飛雲の文様はよく南北朝式を發揮してゐる玄室の前面入口は石を立て、閉塞し細長



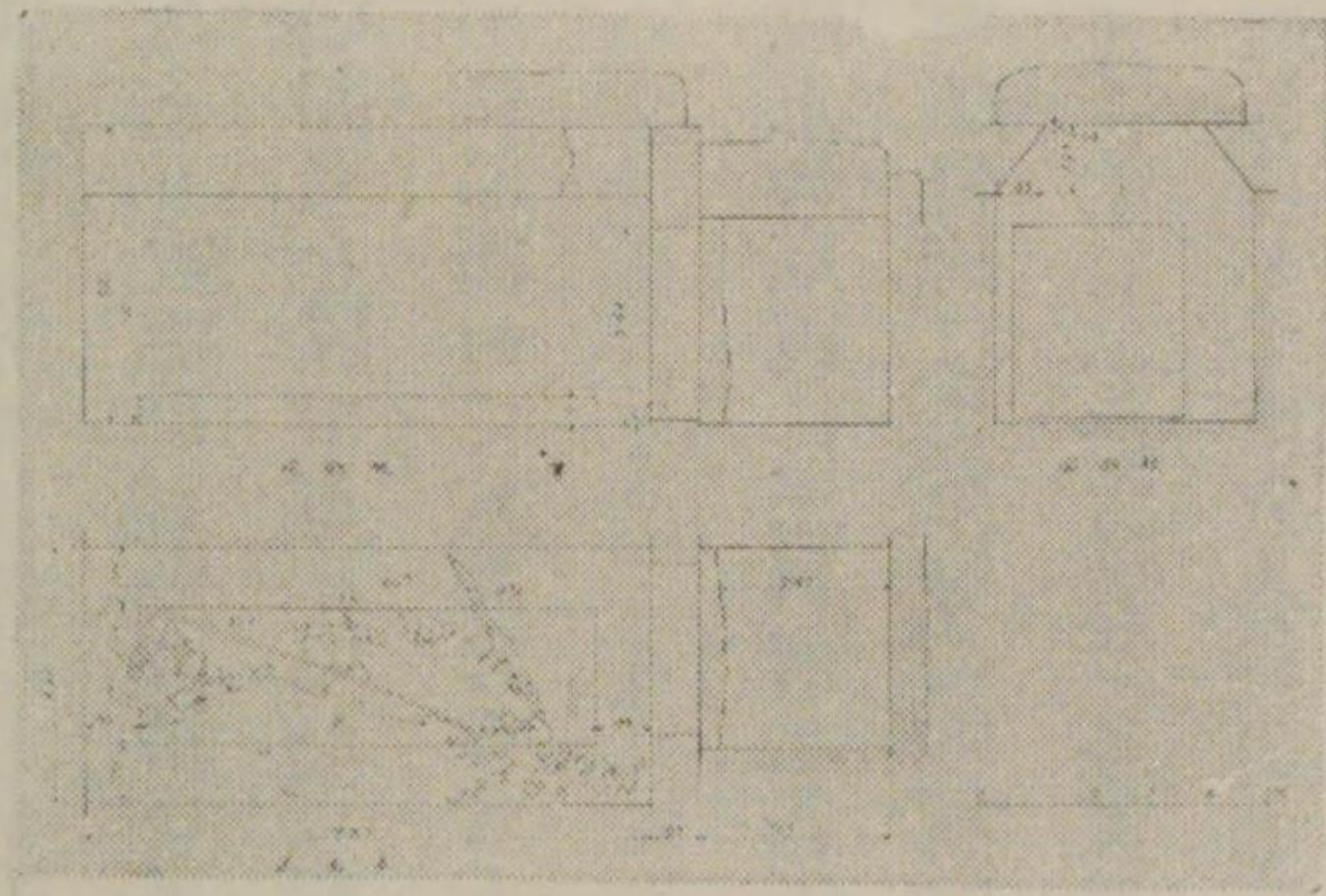
き羨道の入口も亦石を重ねて塞いであつた玄室の内部は一段高く石床を設け其上に棺を安んせしものなれども百濟滅亡の際唐兵の爲めに發掘せられ明器の類は悉く盗み去られたれば玄室内から殆ど何物も發見されなかつた。

圖四十二第



郡墳古陵王里山陵

圖五十二第



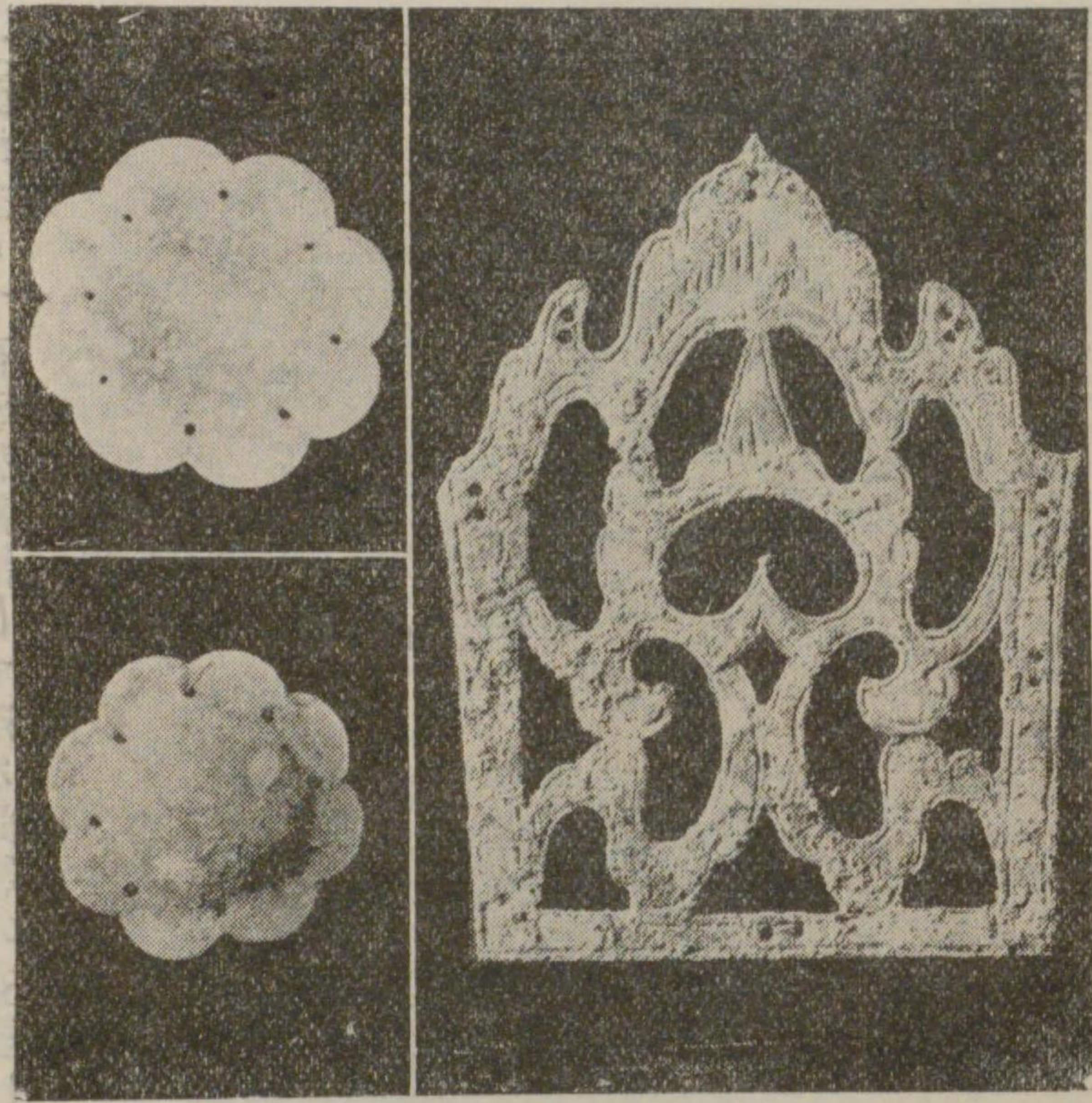
塚上中里山陵

次に重要なるは中列上方の墳即ち中上塚である。玄室は長方形にして長さ九尺八寸七分、廣さ四尺四寸八分、前面東に偏して羨道を設け、入口は石を立てて塞いであつた。左右及び後の三面の壁は滑澤鏡の如く水磨きをなせる花崗

石の大材を以て築き、左右壁の上には斜に持送石を出だし、以て花崗石の大なる天井石を承けてゐる。玄室内には高さ五寸の一枚石の石床を設け、其上に棺を安んじてゐたのである。が昔時唐兵の爲めに發かれし

際破壊されて其破片は石床上に横はつてゐた。そして屍體の頭部に當れる處より寶冠の飾金具と思はる

圖六十二第



具金飾土出塚上中里山陵

者と八花形の小金具數個を發見した。又木棺の裝飾に用ひられた鍍金の飾鉾もあちらこちらに散亂してゐた。此寶冠の飾金具は漢式雲氣文より脱化し來れる者を透彫にしたので、其様式は我法隆寺の玉蟲厨子や飛鳥時代の佛像に施されてある飾金具の透彫文様と一致してゐた。幸に此一片の金具の遺存により百濟時代と我飛鳥時代との間に親密なる藝術的關係のあつたことが明かにされた。

前者の下にある中下塚は其玄室の長方形なるは前兩者に同じきも四壁は大小の切石を以て築き、左右の壁の上部は次第に内方に傾きて筒形穹窿狀をなし、其面に漆喰を塗つてあつた。玄室の前面には長き羨道があつて、玄室への入口には石を立て、外の入口には塼様の石材を重ねて閉塞してあつ

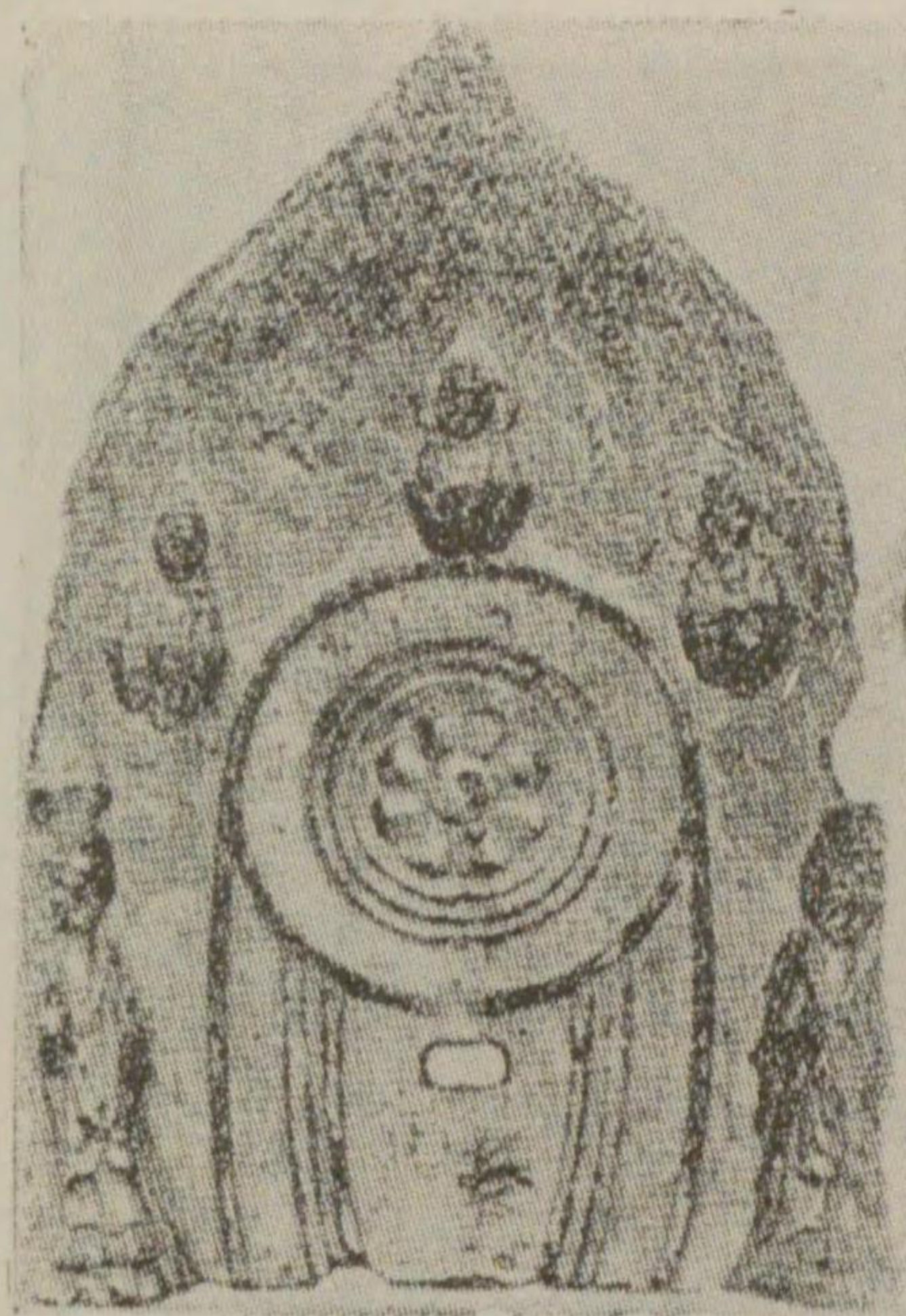






だち其功績を記念せんが爲め既にありし塔に此碑銘を刻したのである。塔は低き基壇の上に立ち初層方約八尺廣き隅柱を有し簡單なる持送を以て著く突出せる屋蓋を承けてゐる第二層以上塔身低矮となり且遞減の度多きを以て頗る雄勁奇拔の外觀を呈してゐる。

第三十一圖



朝鮮總督府博物館藏 金銅背光

質をあらはしてゐる背光の裏に左の刻銘がある。

鄭智遠爲亡妻

趙思敬造金像

彫刻 百濟時代の後期は佛教の輸入と共に佛像の彫刻が著き發達をなせしことは其影響に成れる我飛鳥時代の彫刻物を見ても推想することができる然るに惜しいことには當時の彫刻物は殆ど遺存してゐない唯近年發見せられた二三の小佛像により其一斑を知るのみである。  
扶餘陳列館藏金銅小三尊佛の像は高さ一寸二分五厘背光上部を缺く臺座の下より通して總高さ一寸八分ある手法簡なれどもよく支那南北朝式の特

早離三壁

此像は大正八年扶蘇山城の送月臺より出土せし者にして一昨年九月賊の爲めに盗まれしが間もなく發見せられしも背光の上部を失つたのは惜いことである。(寫眞は盜難以前の撮影)

同陳列館藏金銅佛立像は大正二年二月扶餘面佳塔里より發見せしものにして既に頭部を失ひ體軀亦數個に破裂したれども其の姿勢並びに衣文の手法頗る剛健にしてよく南北朝式の特徴を示してゐる。(今全高四寸八分)

朝鮮總督府博物館藏金銅釋迦如來像の背光は金色猶燦然として居り中央の蓮花の肉取左右兩菩薩及

火焔中の三軀の化佛の手法皆よく南北朝式をあらはし我飛鳥時代との關係を思はしめる背面に

建興五年歲在丙辰

佛弟子清信女上部

□奄造釋迦文佛

願生生世世□佛聞

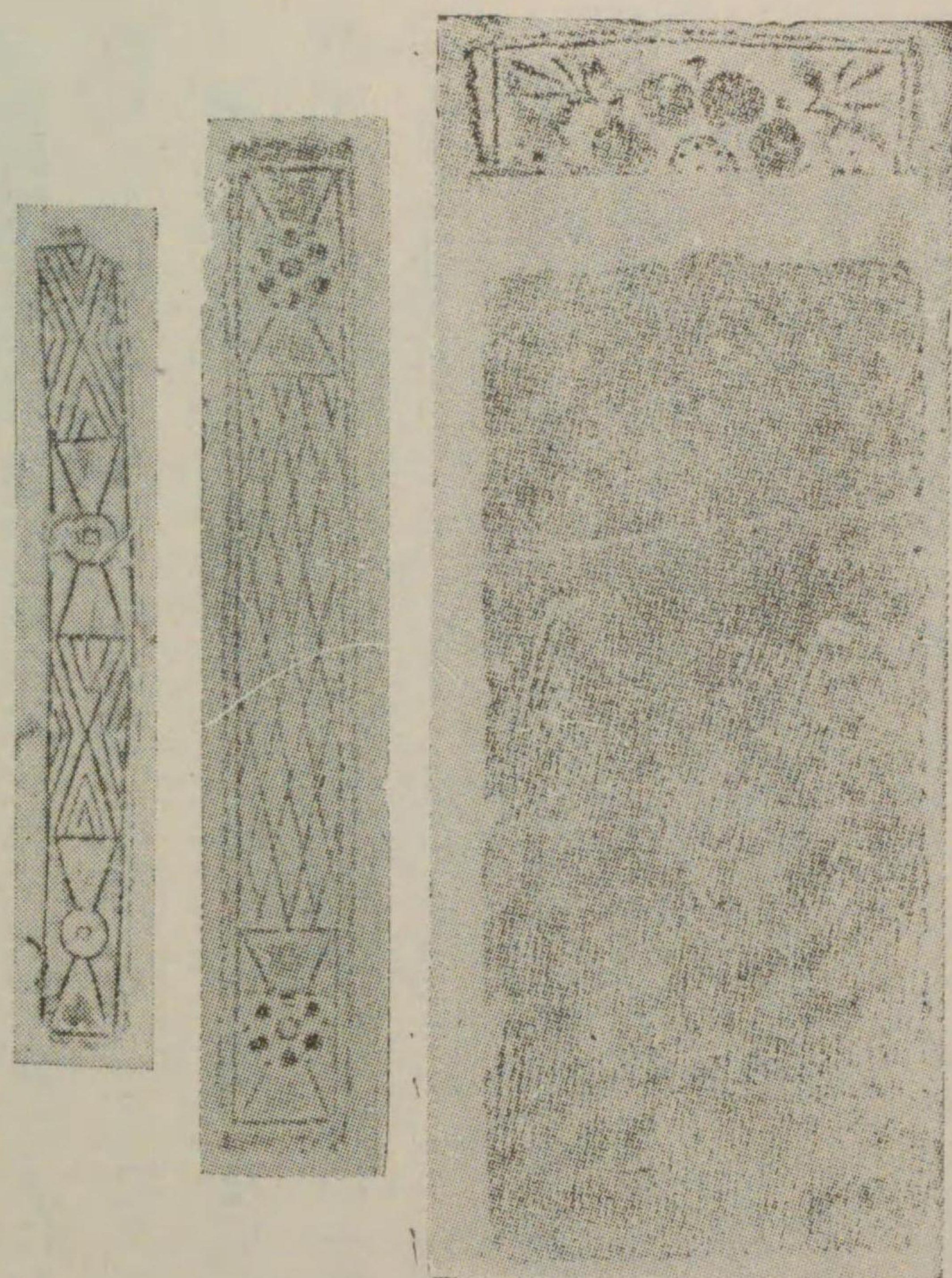
法一切衆生同此願

の刻銘がある上部は百濟にも高句麗にもあるが此背光は多分百濟に屬するものであらう建興五年は或



は百濟の逸年號か其丙辰は様式上威德王四十三年（隋開皇一六年我推古四年西紀五九六年）に相當するものと思はる。

第三十二圖



公州出土磚

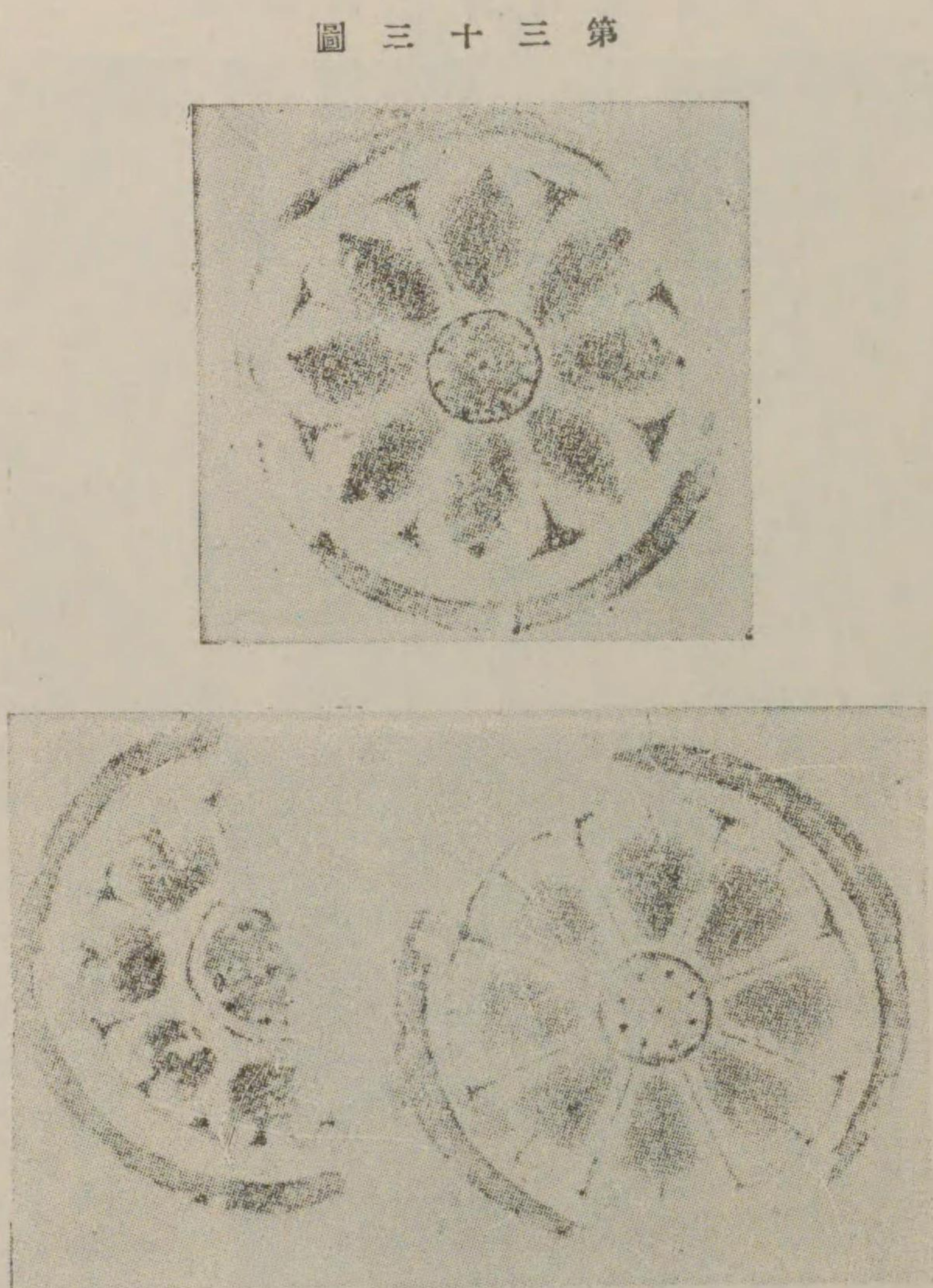
既記の小佛像並びに背光は零細の者に過ぎざれども猶南北朝式をあらはし我飛鳥時代との關係を示せる貴重の標本である。

百濟の故都熊川は今の公州に當り當時の山城址猶存し城内より陶器の破片を多く出だせども其他の遺物を殆ど發見しなかつた而るに大正十一年六月邑内尋常高等小學校の敷地内に於て地形工事の際偶然にも多くの磚を發見した此等の磚は一面には樂浪磚の特色たる幾何學的直線文様錢文様等を有し一面には南北朝式の蓮花文忍冬文を有つてゐる其質樂浪時代の者よりは堅緻にして

して技工は稍纖巧である恐らくは扶餘に遷都以前の者であらう又扶餘の山城内よりも當時の磚が往々

發見されるがこれには何等の文様をも持つてゐない。

扶餘出土巴瓦文様



瓦。扶餘の邑内及び扶蘇山城内から從來多くの巴瓦が發見された此等の巴瓦は何れも周縁稍廣く且高く内部に蓮花文を容れてゐる蓮花文は一般に中房小にして七顆乃至九顆の蓮子を有し花瓣は細長く肉取り深からず頗る雄健の風を帯び我飛鳥寺（法興寺）法隆寺

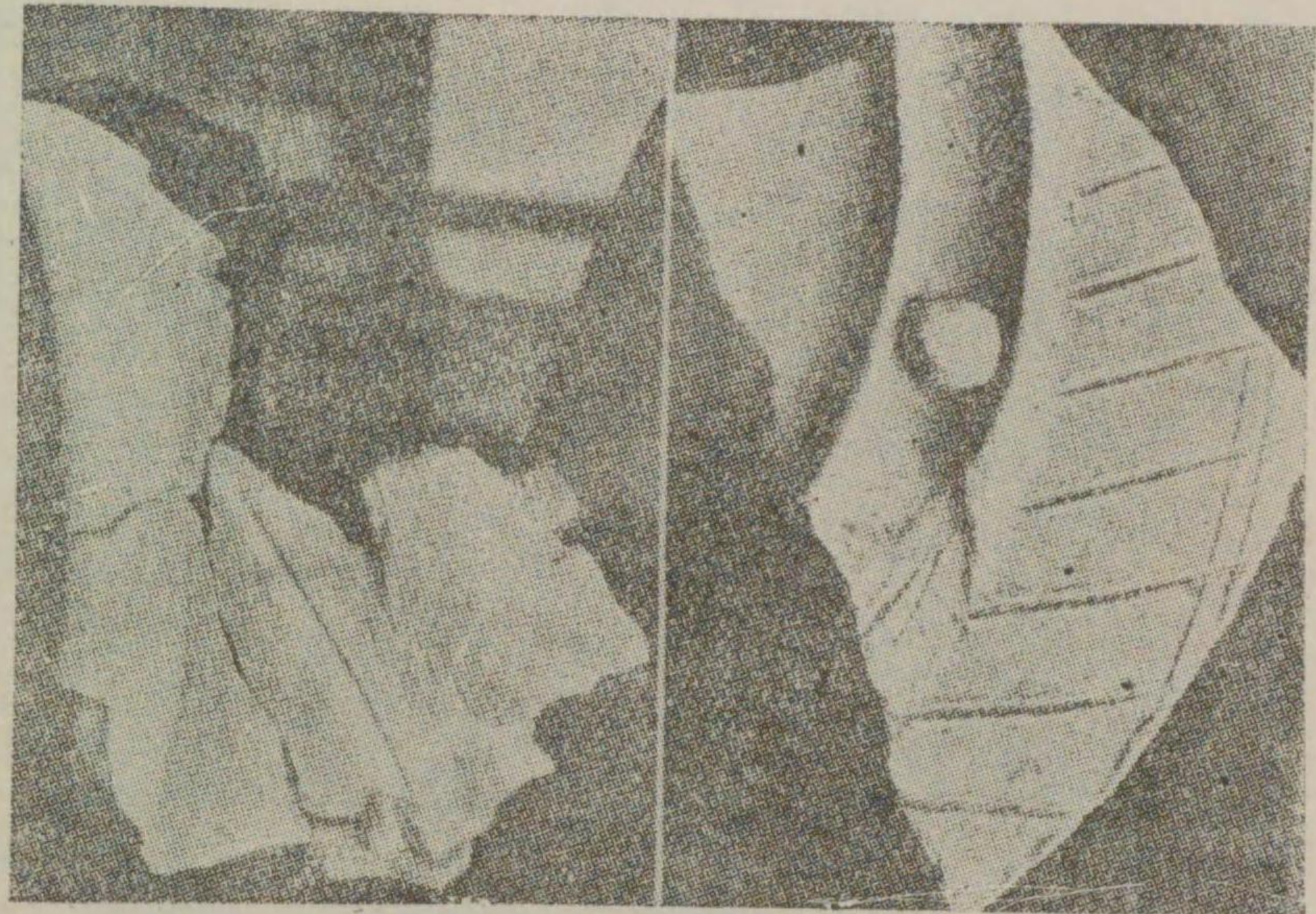
法輪寺法起寺などの境内より出づるものと殆ど同形式である飛鳥時代には百濟より瓦工を招聘し始めて瓦を製出したのであるから、彼此の類似は當然といはねばならぬ唯不思議に思ふは扶餘より當時の



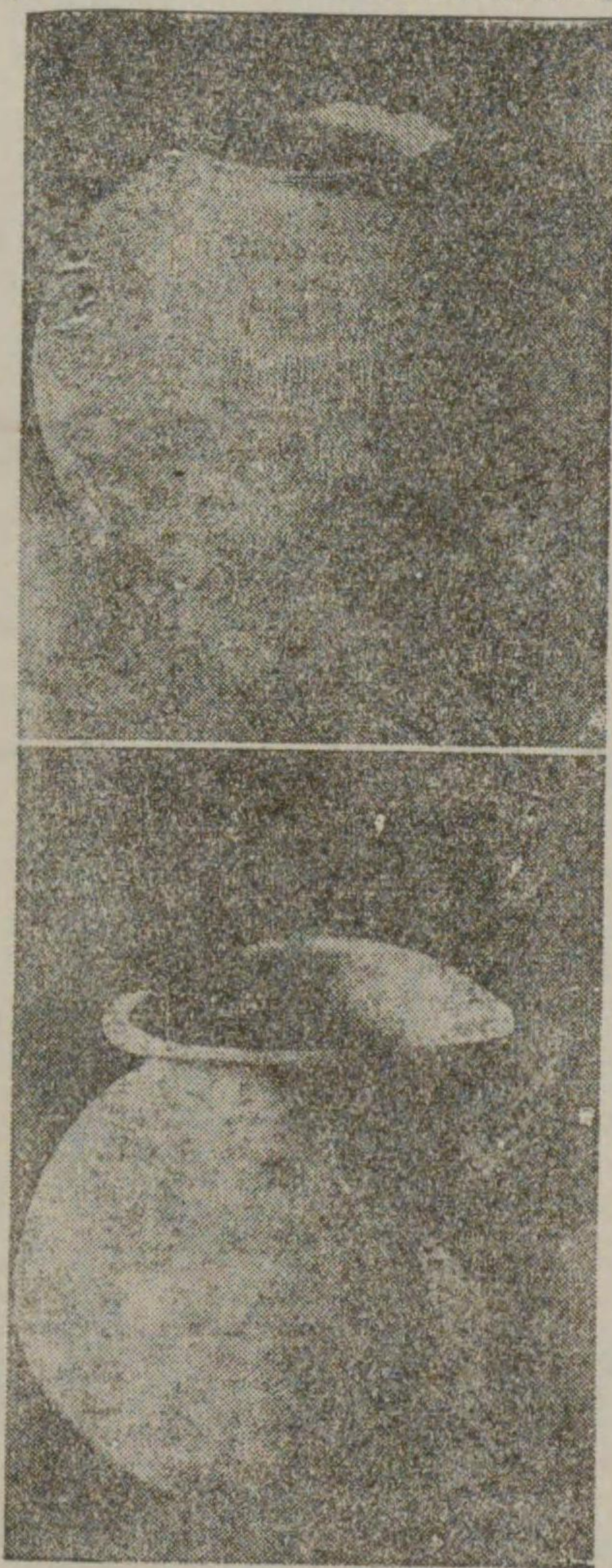
巴瓦の破片を発見すること頗る多きにかゝはらず未だ嘗て唐草瓦の出土を見たことがないことである

第三十四圖

扶餘出土瓦鴟尾破片



第三十五圖



扶餘出土陶甕及陶壺

恐らくは當時猶唐草瓦を用ひなかつたのであらう此點につきては高句麗も同様である。

百濟時代の宮殿や佛殿の屋蓋に鴟尾を擧げてゐたことは百濟系の我法隆寺玉蟲厨子に金銅の鴟尾を冠し法輪寺に當時の瓦鴟尾の殘缺を藏するを見て分かる扶餘の陳列館に扶蘇山城より發見された瓦鴟尾二個の殘片があるが其様式は我玉蟲厨子や法輪寺の者と頗る似たる所がある。

**陶器** 公州の公山城内及び扶餘の邑内外扶蘇山城内等より多數の陶器の破片が發見せられ又陵山里の古墳からも多くの殘片が獲られた扶餘の陳列館内に當時の完全な陶製の甕や壺が陳列されてゐる此等の陶器は割合に薄手にして灰黒色を帯び其外面に繩文打起文を有し其質頗る堅緻高句麗の者とも新羅任那の者とも手法性質を異にし又我國の古墳より出土せる者にも何等の關係はない要するに其様式は特に百濟に於て特殊の發達を遂げたのである。

### 五、古新羅及伽倻時代

朝鮮の南半には早くより馬韓辰韓弁韓の所謂三韓民族が割據してゐた其中馬韓の地に百濟が起り辰韓の地に新羅が國を建て弁韓の地に伽倻（日本の所謂任那）が聯邦を組織したのである此弁韓の地は大體に於て洛東江の流域に當り辰韓の地は其東北部を占めてゐたのである新羅が始めて慶州に國を建てたのは三國史記によれば西紀前五十七年に當つてゐるが是れは大なる誤りで事實は西紀三世紀の終



頃であつたであらう伽倻の大駕洛國の建設も西紀前四十二年となつてゐるけれども是れ亦西紀三世紀の終頃であつたであらう新羅は金城（今の慶州）を根據として統一したる王國を建てしも伽倻は幾個の勢力ある小國集團して一の聯邦の如きものを形成してゐた其小國の數は時代により増減ありしも最も有力なりしは高靈（大伽倻）咸安（安羅）昌寧（比自焯）星州（本彼）金海（加羅）などであつた伽倻諸國は早くより日本に通じ其保護の下に新羅百濟に對抗したが勢威次第に縮まり新羅の法興王眞興王の時悉く其攻滅する所となつた。

新羅は次第に領土を開拓して勢力漸く振ひ法興王眞興王に至りて制度文物亦大に整備し特に佛教の輸入と共に優秀なる南北朝時代の様式は盛に輸入せられ其建築彫刻繪畫其他の工藝は異常の發達を遂げ新羅の文化に一時を劃することとなつた繼で太宗武烈王文武王の時唐の援軍の力を借り百濟高句麗を亡ぼして半島統一の大業を遂ぐるに至つた。

古新羅時代とは其建國より太宗武烈王の即位までを指すのである此時代は大體前後の二期に別けることができる前期は國初より智證王に至るまでを指し主として漢式文化の影響せる時代であり後期は法興王より太宗武烈王の即位までにして佛教の興隆と共に南北朝時代の文化を大に輸入した時代であるが古墳の外遺物極めて少く敢て別々に説くのを必要を認めぬ。

又伽倻諸國の歴史は文献の缺乏のため鮮明を缺いてゐるが文化の性質は古新羅時代と大抵同様であつたやうである此の兩者古墳の様式も内部より出土せる遺物も殆ど同一の性質を有つてゐるから、當時同一の文化圏内に居たのである、爲めに美術工藝の變遷は之を別々に説くのを必要を認めないから茲には便宜兩者を併論することとする。

古新羅の遺物は主として古墳關係の者である尤も其後期には塔婆、瞻星臺、佛像、瓦、磚等が或は存在し或は發見されてゐる。

古新羅時代の都城金城及び月城は今の慶州附近にあつた此慶州の近郊及び周圍の山上山下に無慮數萬の古墳が群在してゐる又大邱、梁山、善山等の地方にも相當注意すべきものがある伽倻諸國の古墳は高靈、咸安、星州、昌寧に重要なる者多く又金海、靈山、咸昌、晉州等にも多少存在してゐる。

慶州の墳墓 慶州の南門外には多數の古墳累々基布し且瓢形の者を混じてゐる此瓢形の者は余等の調査の範圍内では夫妻を葬つた墳壟の相接して出來たもので我國の前方後圓型の者とは關係はない又邑の附近なる南山、西岳、金剛山、明活山の上から麓にかけて無數の古墳が散在してゐるが是等は年代に於て多少後れたものゝ様である。

積石塚 此等古墳の中最も古き形式を有するは考古學者が積石塚と稱するもので多く平地に築かれ



てゐる。先づ地盤を或深さに長方形に掘り手頃の野石を敷きつめ其上に木製の槨を安んじ槨内に木棺を容れ其間地特に頭部の方に多くの明器を置くのである木槨の周圍より上には野石を空積にして或高さに至り内部に雨水の侵透を防がため其上を更に粘土にて厚さ二三尺許を覆ひ然る後に土と砂利とを交互に稍急勾配に被覆して墳壟を築成するのである。

此種の古墳は一般に規模も大に發掘も困難であるから從來盜掘の虞なく割合に豊富の埋藏品を有してゐる其最も大なるは慶州南門外なる鳳凰臺と稱するものにして臺底の徑約二百五十尺高さ約七十尺に達してゐる。

大正四年七月余は谷井文學士と共に慶州南門外皇南里の一古墳(劍塚と名づけた)を發掘し鐵劍、鐵槍及び多少の陶器を得たこれが此種古墳の最初の調査であつた大正七年七八月の頃原田文學士は慶州の東方約一里明活山麓(内東面普門里)の一古墳を發掘されたが亦此種に屬するものにして耳飾、金銀製劍、指輪、勾玉、管玉、小玉、帶金具、鐵槍、銅鏡、馬具などが發見された。

既記慶州南門外鳳凰臺の西方道路を距て、徑約百四十尺高約四十尺の一古墳存在せしが土民次第に封土を削り去り其基底に達せしとき豊富なる遺物が見はれた幸に當局者有志者の盡力により其散逸を防ぐことができた純金製の寶冠出土したから後に金冠塚の名が與へられ昨年濱田博士は梅原末治氏

と共に其圖版と報告を公にされた遺物の重要なものは純金製の寶冠の外純金の耳飾、帶脰、腰佩、腕輪指輪があり又劍、槍、鞍、鐙、杏葉及び銀盒、金銅盒、鐵釜各種の陶器、佩玉、布帛等も發見された特に玻璃の杯北魏式の鏤斗は珍しいものであつた此二者は多分支那より將來されたものであらう鞍及び鐙の金銅透彫金具の裏に玉蟲の羽を伏せてあつた者は我法隆寺の玉蟲厨子との連絡を見るべき珍品である又木棺に漆を塗り文様を描きしが如く彩繪せる漆片が發見された此等の遺物より判ずれば此墳は約千四百年前の者なるべく當時の有力なる國王の陵墓であつたであらう。

大正十三年五六月の間梅原末治氏等は鳳凰臺南方の古墳(金鈴塚)を發掘して前者と同性質なる純金製寶冠、耳飾、帶飾、玻璃製盃、陶製騎馬人物、舟形坏等を獲られた此等裝飾品に玻璃を象嵌せるは實に珍らしく陶製騎馬人物、舟形坏亦當時の風俗の一端を見るべき貴重の標本である其年代は前者に次ぐ者であらう。

石槨を有する墳墓。積石塚の次に見はれしは石槨を封土内に有するものである是れには縦壙式と横壙式とがある縦壙式先づ起り横壙式之に次ぎて行はれたもので或期間は積石塚も縦壙式横壙式の墳墓も同時に作られたやうである。

積石塚には木槨の設けがあつたが腐朽し易き故後に之に代ふるに石槨を以てしたので恐らくは此石



槨は支那民族より學び得たものであらう而も樂浪の如く磚を以て築造するのでもなく高句麗の如く石材を以て一種の天井を構成するのでもなく新羅伽倻共に特殊の形式を有し却て上代我國の古墳に類似してゐる。

**縱擴式石槨** 縱擴式の墳墓は先づ地下に長方形の擴を穿ちて其底に野石を並べ砂利を敷きて床となし更に野石を以て四方の壁を稍内方に傾けて築き上げ木棺明器を容れて後大なる石を並べて天井を構成し粘土を以て其上を覆ひ更に封土を築きて墳を作るのである玄室の四壁天井には一面に漆喰を塗つてゐる。

**橫擴式石槨** 前者より規模大にして普通地平面以上に野石を以て長方形なる玄室を築き天井を構成し其前面中央又は一方に偏して羨道を作り上に封土を築き内部は漆塗を以て喰つてゐる玄室内には一段高く一個若くは二個の床を野石を以て作り其上に砂利を敷き木棺を安置しそして奥壁に近く特に多數の甕罎其他の副葬品を積重ねて置いたものもある。

橫擴式の最も代表的の者は大正七年の頃谷井文學士の發掘せられた慶尙南道昌寧の第十一號墳及び大正九年馬場學士の發掘された慶尙南道梁山の一古墳である前者は伽倻に屬し後者は古新羅の者である共に夫妻合葬の外玄室の前方に少くも三人の遺骨を認め後壁に近く多數の陶器、武器、馬具、鐵釜

の類が置かれ亦豊富な佩飾品が床上に發見された此等の遺物は性質上既記金冠塚の者と大差が無いから殆ど同時代若くは近き時代に積石塚と橫擴式墳とが造られたことが分かる又大正四年余が谷井文學士と共に慶州普門里にて發掘せし古墳夫婦塚は瓢形にして封土中より夫妻の墓と思はるゝ者を發見したが夫の墓は積石塚であり妻の墓は橫擴式の初期と思はるゝものであつた。

右の外慶州、梁山、善山、大邱、星州、晉州、昌寧等に於て總督府古蹟調査員の諸氏により重要な古墳が多く發掘されたが要するに形式も遺物も既記の者と大同小異であつた尤も慶州には當代の終りに近き者に往々石槨ありて棺なく屍體を直ちに床上に置き其頭部に當れる所に石枕があり又兩足を受くるための臺石が置かれて我國の古墳中の或者との連絡を示してゐるものもあつた。

要するに積石塚は新羅伽倻に特有の者にして石槨塚も亦高句麗とも百濟とも構造形式を異にし却て我國上代の者も最も親密なる關係を有つてゐる又慶州西岳里の一古墳内より發見せられし石扉の表裏に支那南北朝式の天部の像を浮彫にせし者は手法頗る渾樸南北朝文化の影響により如何に墳墓の内部が次第に精美の者となつたかを思はしめる。

**殉葬品** 殉葬品は墳墓の年代により又死者の身分により數量性質一様ならざれども金冠塚、金鈴塚の如きは收藏の豊富殆んど他の時代に見るべからざるほどである此等殉葬品の發見により古新羅伽倻



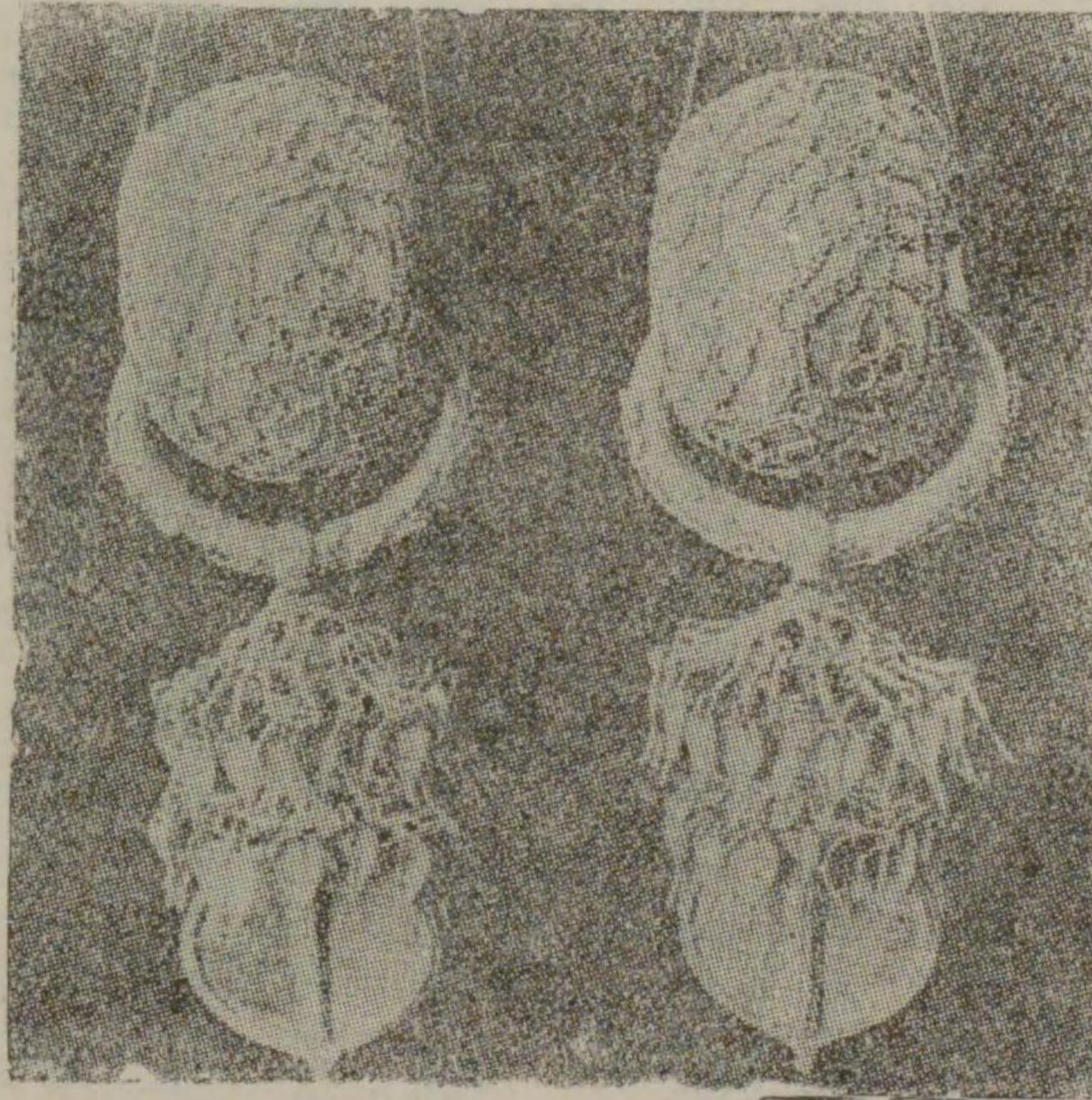
時代の工藝の進歩の程度支那日本との關係を明かにすることができた今此等の遺品を分類すれば  
(一)金屬製服飾品——寶冠、耳飾、釧、指環、帶胯、腰佩、履、金銅鳳形板等

圖六十三第



冠金土出塚冠金

圖七十三第



土出塚婦夫里門普州慶  
飾耳金黃

- (二)珠玉玻璃類——勾玉、丸玉、小玉、切子玉、玻璃杯等
- (三)利器類——刀、劍、斧、鎗、刀子等
- (四)馬具類——鞍、轡、鐙、杏葉、雲珠、鐸鈴等

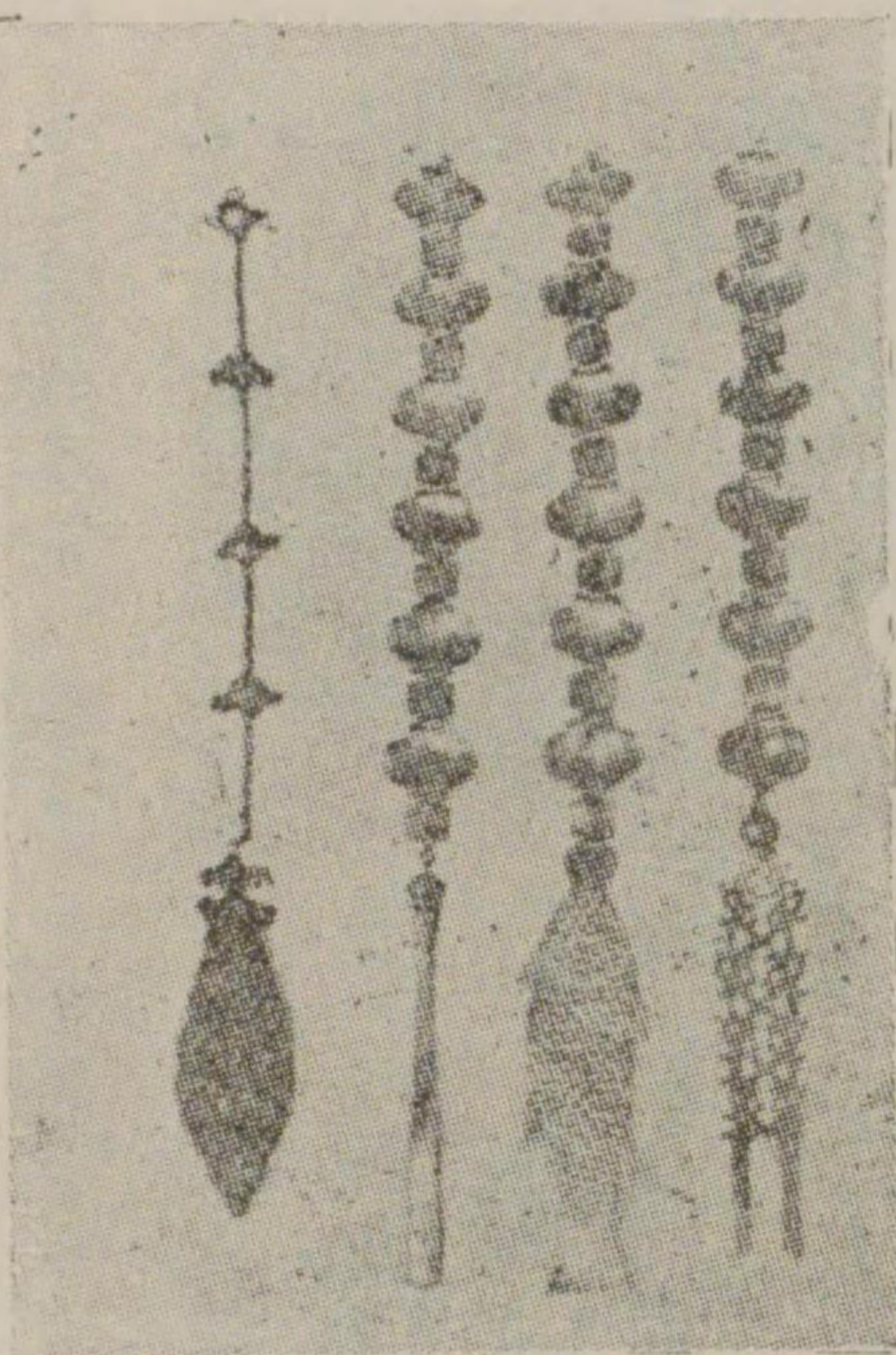
(五)金屬器——銅鏡、鏃斗、鏡、鐵釜等

(六)陶器——坏、高坏、柑、脚附柑、把附柑、碗、缶、甕、壺、埴、土偶等

(七)布帛——布、絹、綾等

(一)金屬製服飾品。寶冠には純金製の者と銀製金銅製の者がある周圍に枝のある薄い立物を繞らして透彫羽様の飾金具は中央より後の方に長く延びてゐる此等の金具には圓き小搖片を線金にて繋ぎ歩々燦然として光線を反射する様に作られ特に金冠塚より出でし者には多數の勾玉を垂下して裝飾としてゐた此種の寶冠は我内地の古墳からも發見され彼此の關係を語つてゐる。

圖八十三第



冠金土出塚冠金  
佩腰

耳飾には單なる金銀環の外或は多くの金搖片を垂下し或は精巧なる金縷細工を施し或は玻璃の象嵌を施したのもある是れ亦我古墳より出づる者と同性質を有してゐる。

釧、指環には純金製、銀製、銅製、金張の者があ  
る手法亦我國より出づる者と似てゐる。

履は何れも金銅透彫にして表面にも底面にも金色の小搖片を着けてゐるのは我古墳出土の者と親密



の關係を有してゐる。

帶胯には頗る精巧なる者がある革帶の面に純金、銀又は金銅の透彫胯を並べて取付け其下に透彫ハ

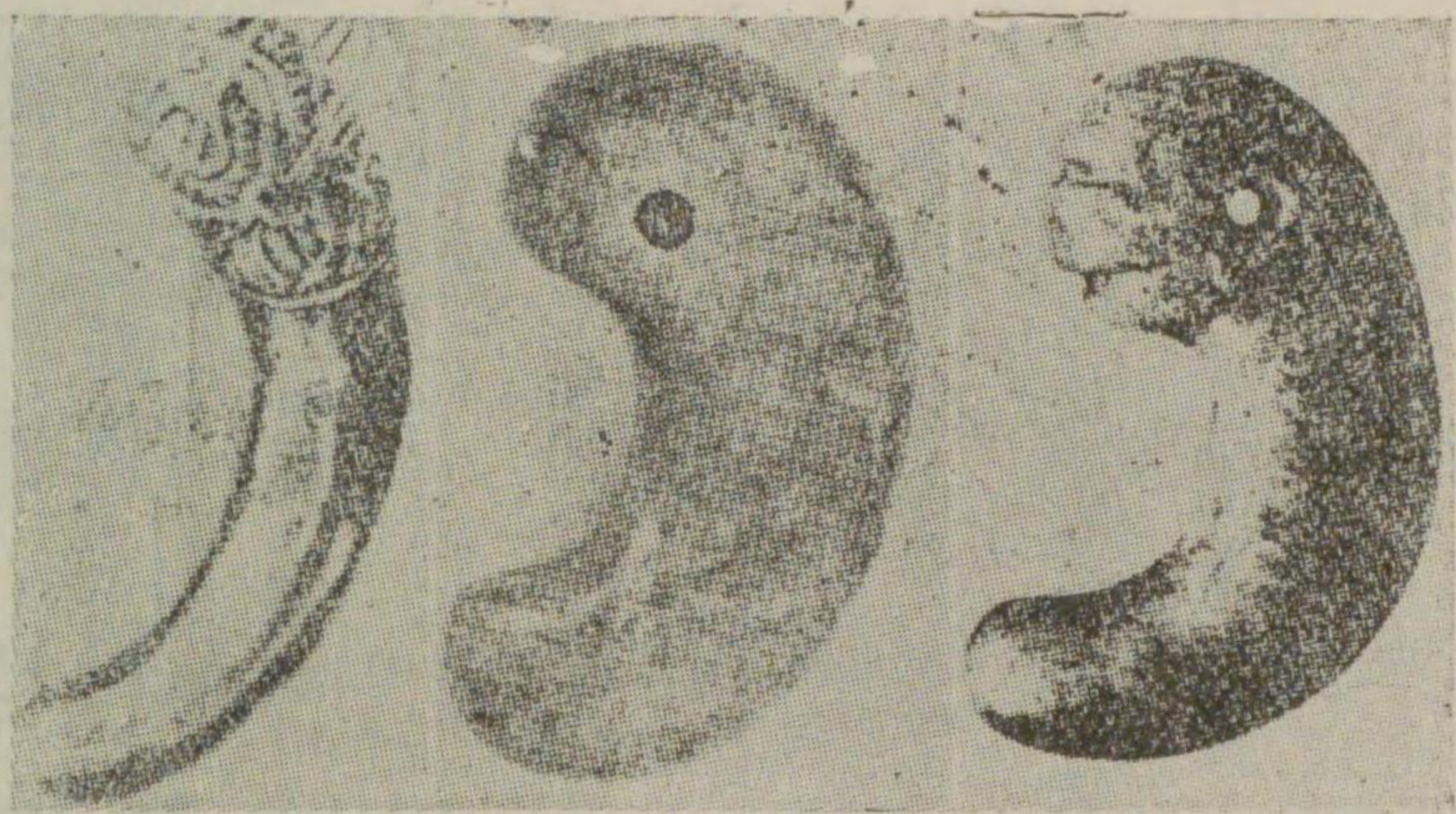
ト形の垂飾又は環飾を施してゐるのは支那に起原を有すれども却て我國の古墳内より發見せらるゝ者に類似してゐる。

此帶より往々金銀製又は金銅製の腰佩が垂下し其端に勾玉、鑷、魚佩。印籠様の者等を着けてゐるのも亦支那に學び得たものである。

(二)珠玉玻璃類 既記寶冠の勾玉の外胸飾腕飾其他種々の裝飾

に珠玉類を用ひてゐる、水晶、瑪瑙、翡翠其他の硬玉から作られた者もあれば玻璃製の者もある又真珠其外の貝類も用ひらるゝ其種類は勾玉、管玉、切子玉、丸玉、小玉などで勾玉には往々頭部に刻線又は金冠飾を施した者もある此等珠玉の佩飾品は我國上代の古墳より出土せる者と密接なる關係を有すれども全く支那との連絡を認むることが出來ぬ尤も金冠塚や金鈴塚などから發見せられた玻璃製杯は全く當時支那よりの輸出

第三十九圖



金冠塚出土(勾玉)

品に相違なからう。

(三)利器類 利器には刀、劍、斧、鎗、刀子等がある刀劍の柄頭には多く鑲頭を有し鑲内に往々三

葉飾龍鳳飾を有せるは支那の影響に出でしものにして又我國出土の者に似てゐる刀劍の鞘の上に更に刀子を附着し火箸様の長さ鐵杆を有せるは特異の手法である鎗は袋穗にして斧と共には是れ亦我古墳の出土者と殆んど同様である。

(四)馬具類 馬具には鞍、轡、鞍轡、杏葉、雲珠、鈴及鐸等がある其様式は何れも支那より影響された

ものであるが亦我古墳發見のものと同様である特に既記の如く金冠塚出土の鞍及び鐸の金銅透彫の裝飾金具の裏に玉蟲の羽を伏せたものは尤も感興を惹くに足るべきものである。

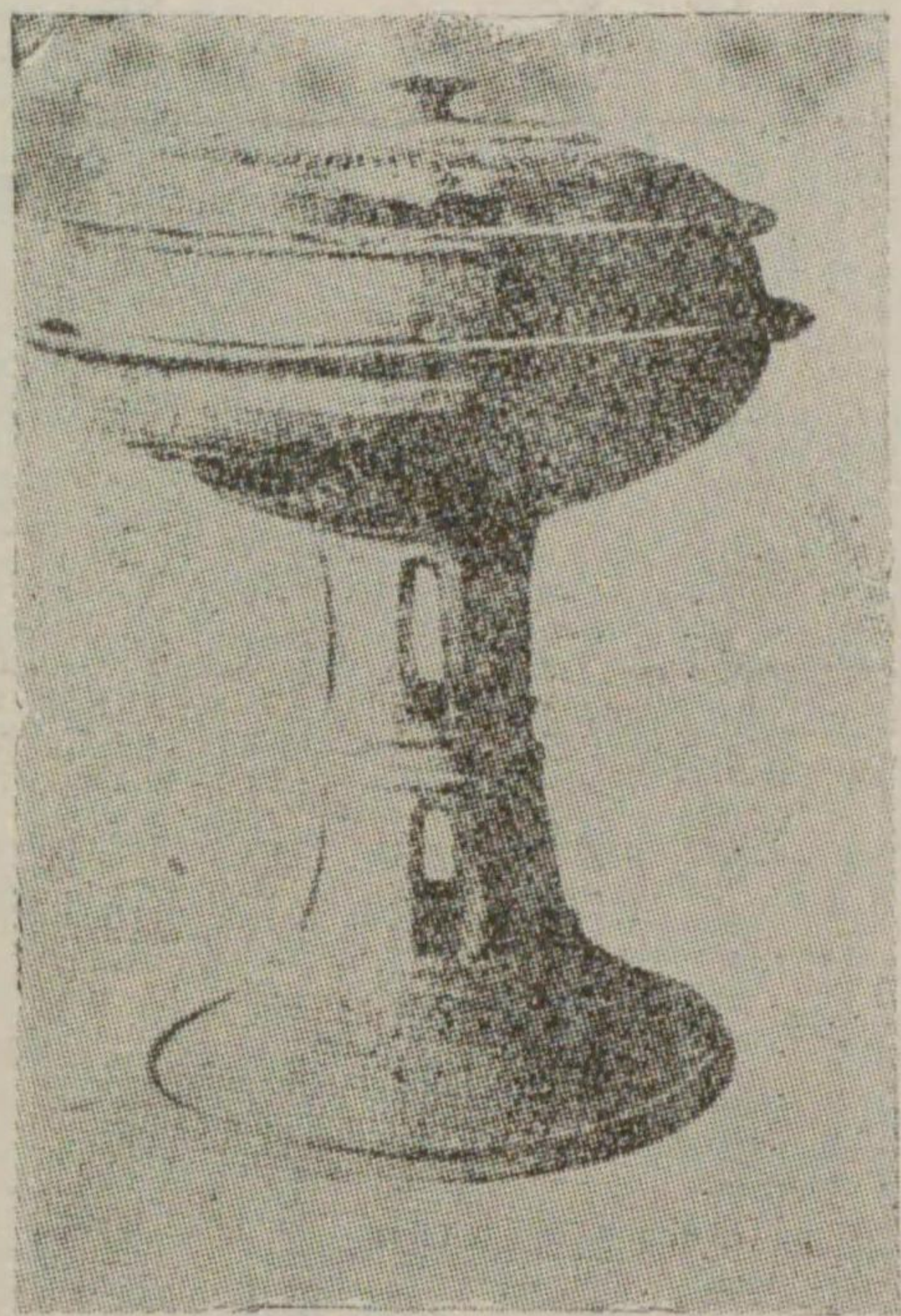
(五)金屬器 金屬器には金鏡、銀鏡、銅鏡、銀盒、銅盒、銅壺などがあるが是等には周漢銅器の影

響は認められず却て當時の新羅伽倻特有の陶器の形を摸してゐる又三脚を有せる鐵釜もある金冠塚より發見せられたる銅製鏃斗は技工精鍊南北朝式の特質を示し他の銅器と全く選を異にしてゐる是れは支那より將來されたものに相違ない漢式銅鏡は樂浪古墳より又我上代の古墳より豊富に出土するにも拘はらず古新羅伽倻の古墳より殆ど發見された例が無い唯晉州より一面發掘されたことがあるのみである是れは彼此の慣習及び信仰の相違を語るものであらう。



(六)陶器 陶器は殉葬品中最も數量の多き者にして一墓室内に往々數百の甕や罎や坏の類を累々積

圖十四第



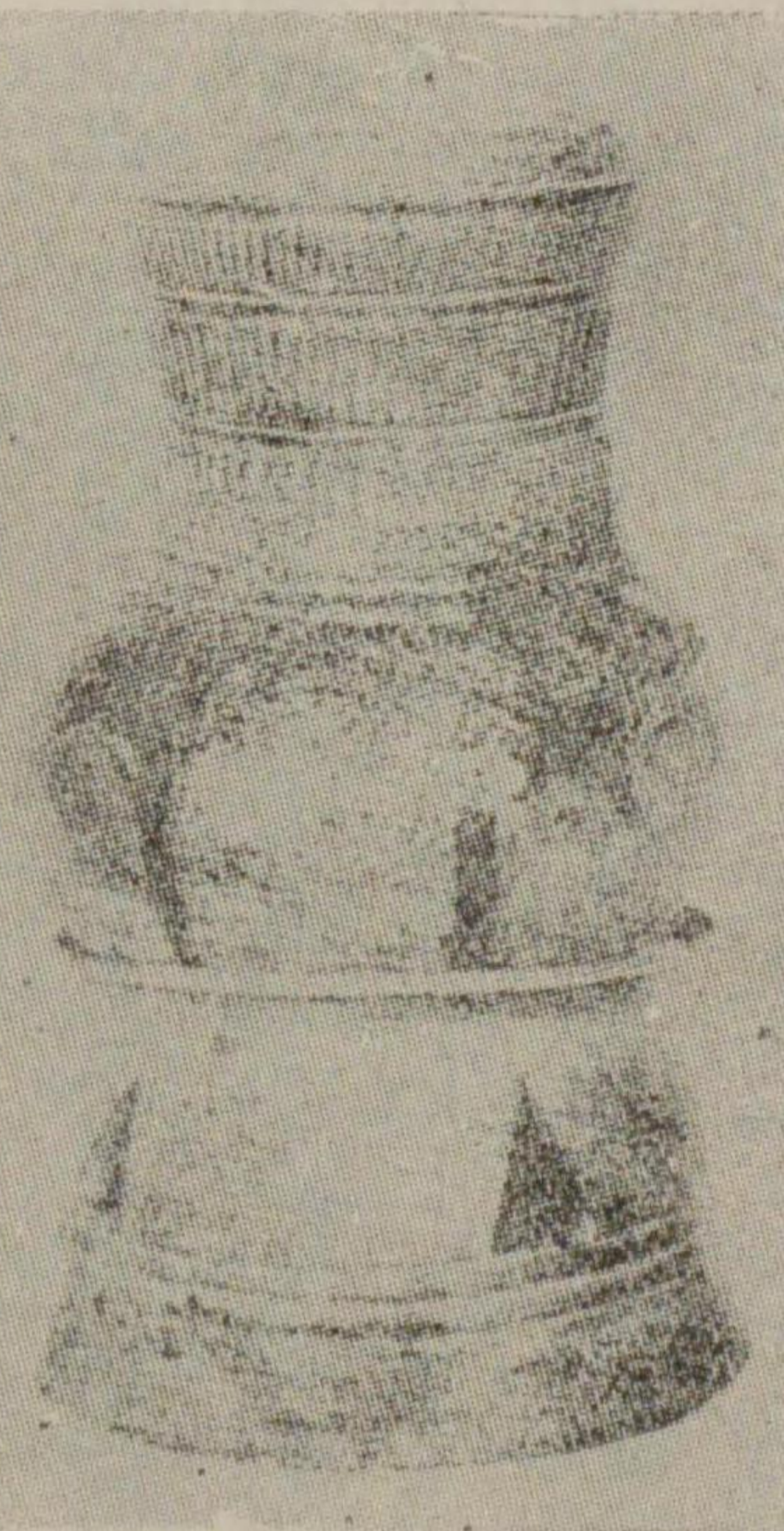
坏高蓋 土出州慶

圖二十四第



罎付脚及珞環 土出州慶

圖一十四第



臺及罎 土出靈高

重ねたものもある此等の陶器内より往々魚骨貝類を發見するから當時諸種の飲料品や食料を容れたものと思はる軟質にして赤褐色を帯ぶる者もあれ共一般に堅緻灰黑色を呈し往々灰被りの爲め釉藥を施

せる如く見ゆるものもある其焼き方といひ形態といひ裝飾といひ我上代古墳より出づる者と最も親密なる關係を有すれども樂浪の者とも高句麗の者とも全く相違し多少百濟の者に近き所がある思ふに此種の陶器は主として古新羅伽倻地方に發達し其手法が上代に於て早く我國に傳へられたのであらう。

其種類は蓋坏、高坏、蓋高罎、罎、脚附罎、罎臺、碗、蓋碗、瓶、甕、壺、埴等にして稀には小なる人物、馬、舟等の土偶がある陶器の表面には篋書櫛書にて平行線文、鋸齒文、波文、方格文、斜格文、小圈文、半圈文などが陰刻され又稀れに異形の人物龍蛇魚鼈禽鳥などはあらはされてゐる罎や碗には往々把手や耳がついて居り其蓋の把や脚臺には三角形長方形梯形の透しが一重又は二重以上に附けられ周縁に瓔珞様の飾りが垂れ下がつてゐることもある或は鳥形、車輪附角形の飲器舟形の坏などは珍らしく罎の口邊に數頭の鹿を立てゝあるのも面白い人物、騎馬人物等の土偶は當時の風俗の好資料となるべきものであるが遺物は割合に少ない。

(七)布帛類 墓中より往々紵布、絹、綾などの殘片を發見することがあるが此等は腐朽して唯大體を辨することが出来るに過ぎぬ又刀劍其他の金屬器に鏽附いて出て來るものもある。

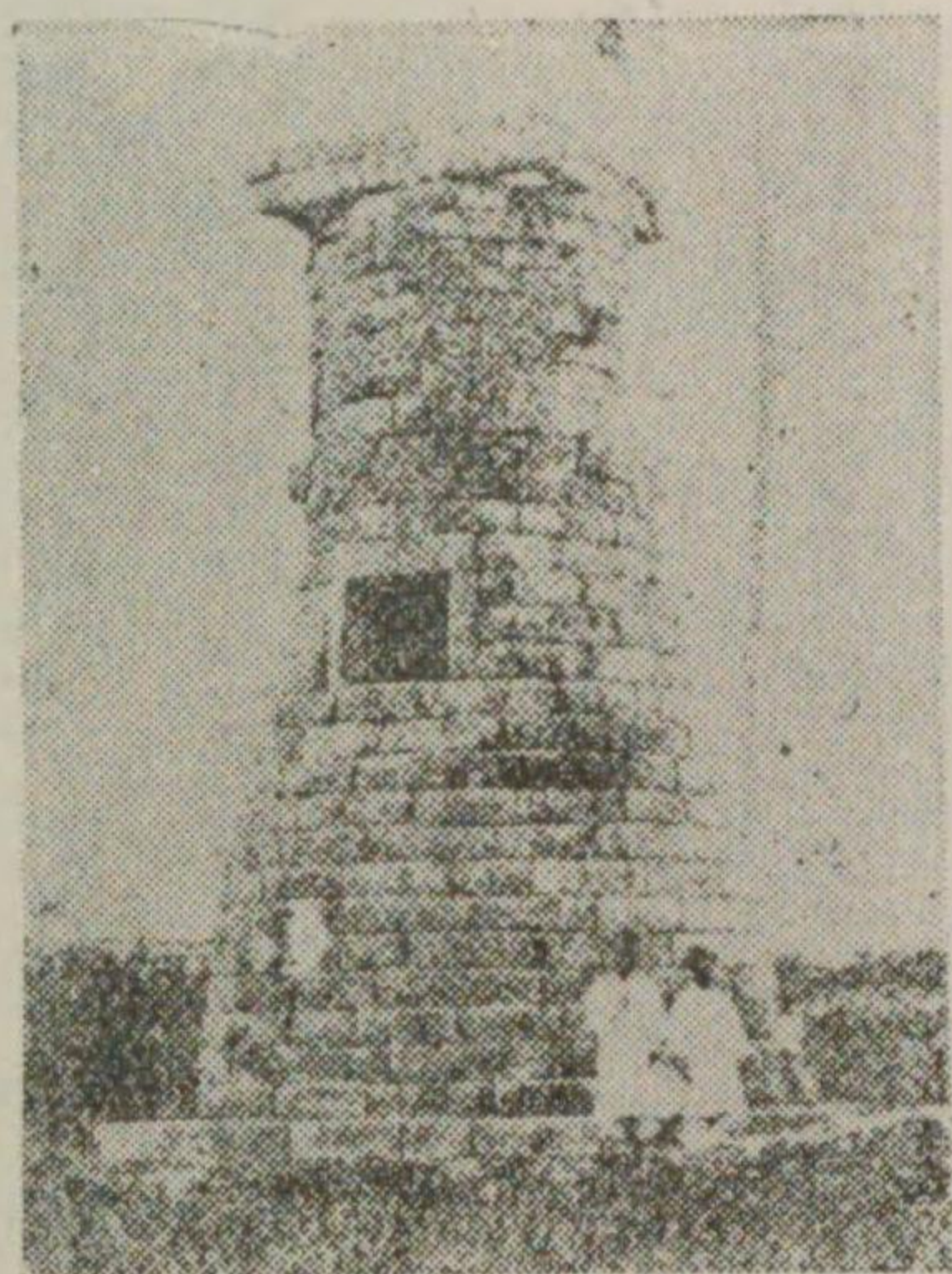
工藝品の性質 古墳出土の古新羅伽倻時代の遺物を見るに一面には固有の特質を充分に發揮すると共に他面には漢式藝術の感化を相應に受けてゐる其陶器は特に南鮮地方に於て固有の發達をなせしも



のにして金冠耳飾其他珠玉の佩飾亦民族的臭味を帯ぶること多けれども其帶胛腰佩は支那に負ふ所多く且刀劍馬具の様式は一層彼の影響の濃厚なるを示してゐる。

古新羅及び伽椰の遺物は我上代の藝術と最も親密なる關係を有し當時南鮮地方は我國と殆ど同様な文化圏内にありしことを思はしめる實際古新羅伽椰の古墳より出土せし者は殆ど總て我にも存し我藝術は彼の影響を蒙りしことの少なからざりしを語つてゐる而も勾玉などの佩飾は恐らくは我より彼に傳へたものであらう。

第四十三圖



慶州瞻星臺

がある其平面圓形で下徑十七尺一寸高さ廿九尺一寸悉く石を以て構築し下部は垂直に始まり上部に向つて壁面漸く内方に傾き全高の三分の一許りの處より其傾斜急となり三分の二許りの處より再び緩に復し更に頭部は少く外に出で以て奇なる輪廓を作つてゐる昔時は其頂に觀測機を据えつけたものであ

建造物 新羅は初め金城に都したが婆娑王の時月城を築

いた金城の位置は不明であるが月城の遺址は慶州の東南約十町許の所にある自然の丘陵を利用して其周圍に高く土城を築きし者にして今猶其城壁の遺址を存し其内部より當時の瓦の殘片が発見せられる此月城の西北に近く所謂瞻星臺

らう。

佛。寺。建。築。

新羅に佛教の入つたのは訥祇王の時沙門墨胡子が一善郡に來たことから始まるといはれ

第四十四圖



芬墓寺塔

てゐるが其大に興つたのは法興王眞興王の時からである眞興王の五年興輪寺成り十四年皇龍寺を創め廿七年祇園實際二寺を立てた眞平王十九年三郎寺成り善德王三年芬墓寺を立てた十四年皇龍寺が出来るなど佛教の隆興に伴ひ次第に大伽藍が建立され支那南北朝時代の様式が輸入されて大なる發展を遂げたのである皇龍寺伽藍は特に其壯大なる者であつた其遺址は慶州の西方約十町の處に存してゐる其金堂は九間四面にして東西約百五十尺南北約六十六尺の大建築である其南にある九層塔の遺址は方七間にして其廣さ方約七十三尺であるから如何に壯大の者であつたかゞ想像される文献には鐵盤以上高四十二尺以下



等は皆廢滅に歸して當時の者としては獨り芬臺寺の塔が遺存してゐるのみである。

芬臺寺は今慶州の東方約十町許にある小伽藍にして今境内に新羅善德王三年（唐貞觀八年我舒明六年西紀六三四年）建立された石塔婆を存してゐる蓋瞻星臺と共に朝鮮最古の遺構である全部磚様の小石材を以て築きしものにして今三層を存してゐる當初は恐らくは三層か五層の者であつたであらう。

塔は方壇の上に立ち初層方二十一尺五寸二層三層と次第に其大さと高さを遞減し以て安定の外觀を呈してゐる各層の軒は磚様小石を次第に積み出して持送りとなし屋根亦同石材を段狀に重ねて作つてゐる。

初層の四面には入口を作り其左右の立石に仁王像を高肉彫に刻んでゐる其様式は南北朝式を本として多少唐の手法を混じ頗る雄渾の氣象を示してゐる又壇の四隅に石獅を安置してゐるが是れ亦豪快の精神に富んでゐる蓋此塔は支那に於ける磚築の塔を小石材を以て摸せしものにして一見磚築の如く見ゆる是れは全く新羅の工夫に出でし者にして支那にはかゝる性質の塔は全く見ることは出来ぬ。

繪畫 佛教の傳來以後新羅の繪畫は百濟や高句麗に劣らぬ程に進歩したに違ひないが全く實例を見ぬ唯皇龍寺の壁に率居といへる者が老松を畫いたが殆ど眞に迫り鳥雀往々之を望みて飛入り踏躓して落ちたといふ傳説が遺つてゐるのみである。

圖五十四第



慶州陳州列館藏  
石造釋迦像

圖六十四第



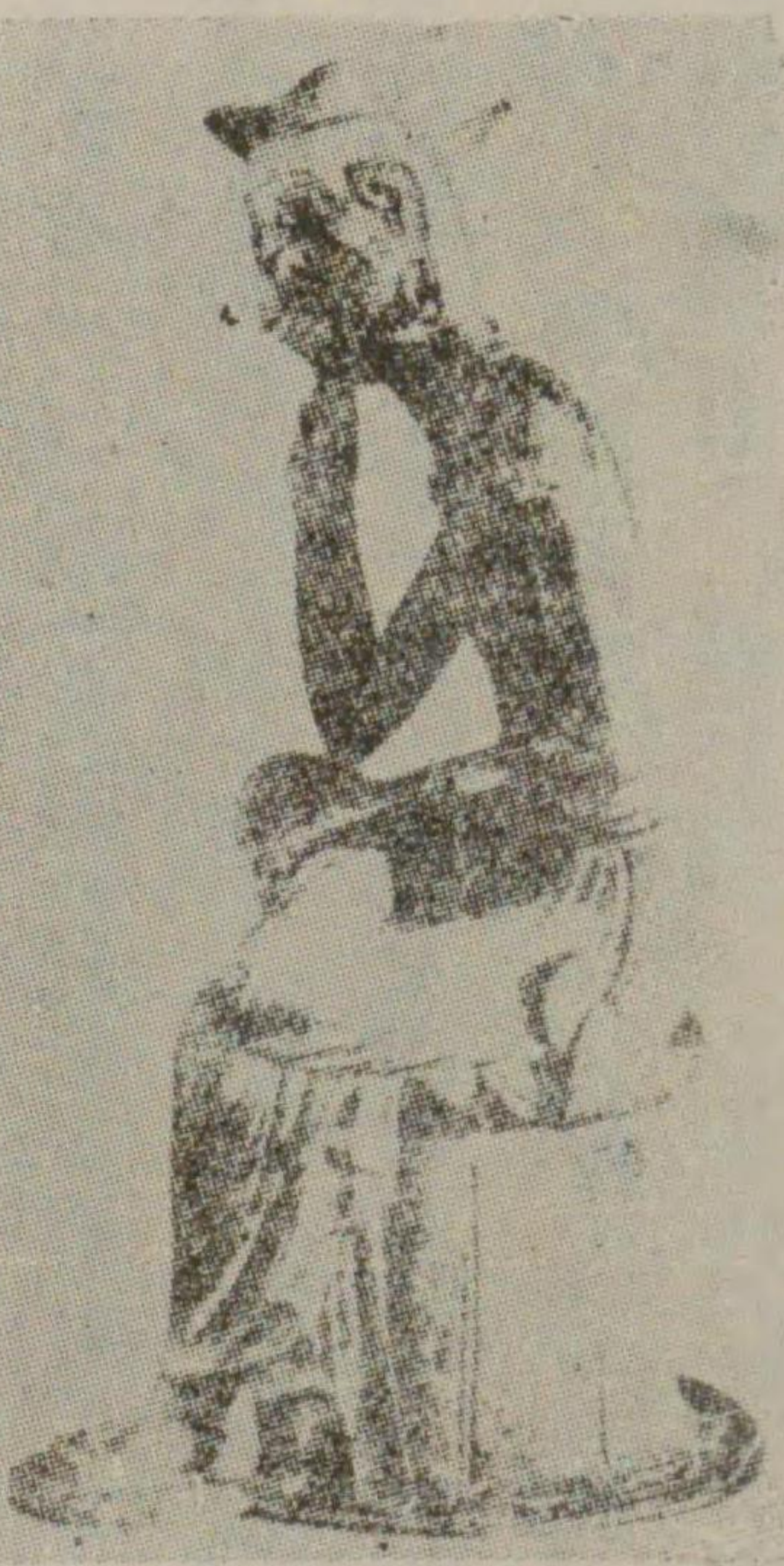
芬臺寺塔  
石刻仁王

圖七十四第



李王家博物館藏  
古墳石扉

圖八十四第



南陽博物館藏  
金銅彌勒菩薩像

圖九十四第



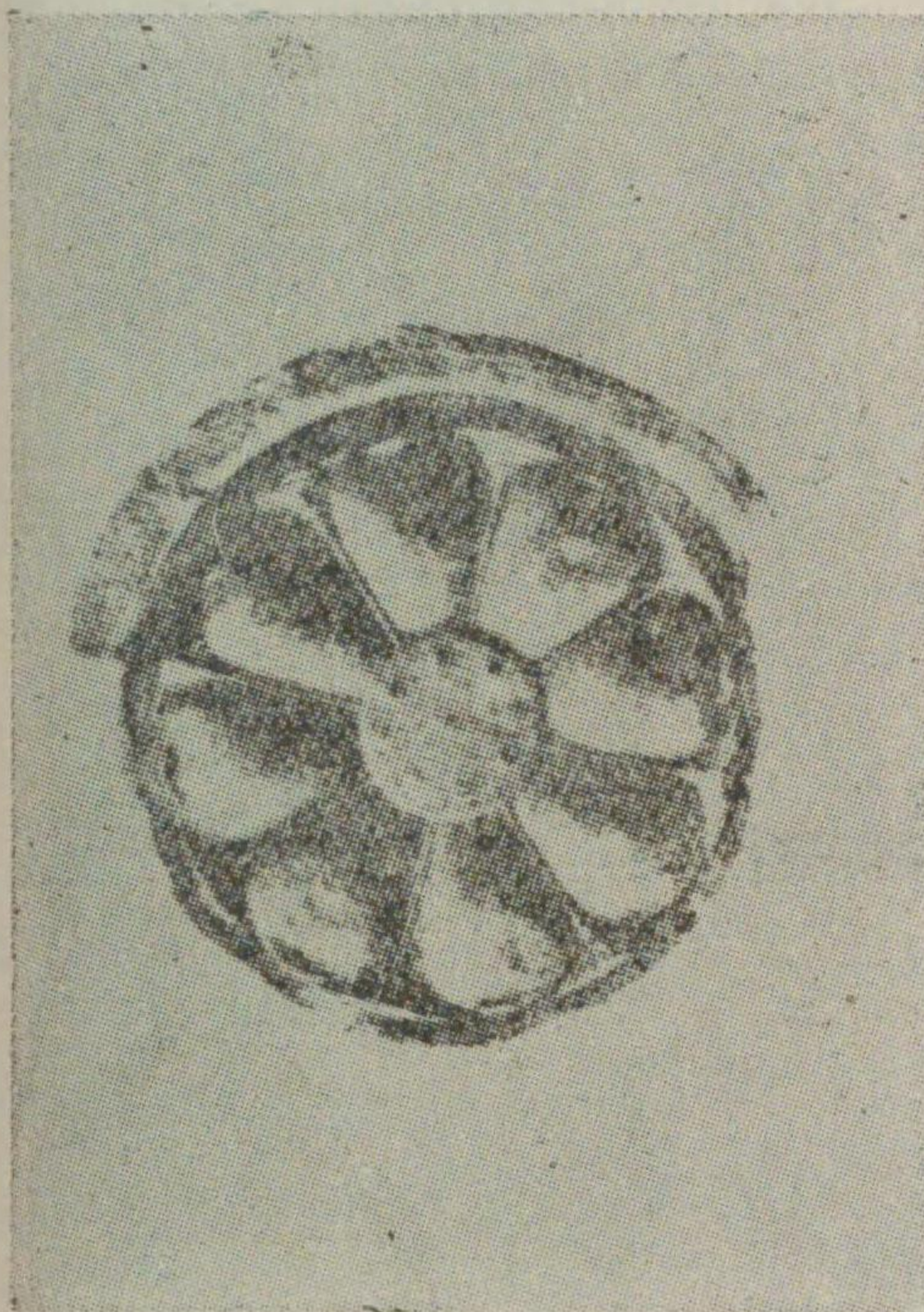
南陽博物館藏  
金銅彌勒菩薩像

彫刻 當代の佛教的彫刻は幸に多少遺存してゐる石像もあれば銅像もある何れも支那南北朝式の手法を示してゐる法興王の二十五年



皇龍寺の丈六の金銅佛を鑄造せしは史上著名の事蹟である今彫刻物の遺存せる者を擧ぐれば石像には明治四十二年余等一行が慶州の西方松花山麓金山齋の附近にて發見した石造彌勒菩薩半伽像（今慶州陳列館藏）がある等身大にして頭部と兩腕とを失つてゐるけれども姿勢といひ衣文の曲線の性質といひ全く支那南北朝式を祖述したものである又慶州仁旺里發見の石造釋迦如來坐像（今慶州陳列館藏）は面相豊圓にして姿勢亦整ひ衣文の曲線穩健にして南北朝式の餘風を示してゐる芬臺寺塔四面入口左右の仁王像は既記の如く善徳王三年の作其姿勢多少唐の影響を受けるてゐるが衣文の褶襞の手法は猶南北朝式の形迹を有してゐる塔の基壇の四隅の獅子石像亦同時の者にして頗る雄渾の氣象をあらはして

第五十圖



慶州出土瓦當

る既記慶州西岳里出土石扉（今李王家博物館藏）の表裏には金剛力士の像を薄肉刻にあらはし渾樸の裡溫雅の風を帯びたるは頗る我法隆寺玉蟲厨子扉繪四天王像の倂がある銅像は割合に多く遺つてゐるが何れも小銅佛である唯總督府博物館及び李王家博物館に藏する金銅彌勒菩薩像は頗る大にして且代表的傑作である前者は面

相姿勢古雅にして雄勁の精神を藏し後者は相好端嚴にして衣文の手法頗る精鍊共に南北朝式の特質を具へてゐる其様式を見るに後者は稍年代に於て後れた者であらう實に此兩菩薩像は古新羅時代を代表すべき最優作にして我法隆寺金堂の藥師釋迦の兩像に接踵すべき者である此他總督府博物館李王家博物館に割合に多くの當代に屬すべき小銅像を藏してゐる如來像もあれば菩薩像もあり又仁王像誕生佛等もある何れも手法簡勁よく南北朝式の神髓を傳へ我飛鳥時代の様式との連絡を示してゐる。

瓦。當時代の者と認むべき瓦當は月城址南山城址皇龍寺址などから往々發見せられてゐる何れも巴瓦にして扶餘より出土せる百濟の者と様式を同じくし周緣割合に高く蓮房小にして細長の瓣を有し頗る雄勁の性質をあらはせる者である亦百濟高句麗と同じく當代の者と確認すべき唐草瓦を發見せぬ。

### 六 新羅統一時代

新羅統一時代とは太宗武烈王の元年（唐永徽五、日本白雉五、西曆六五四）より敬順王の八年（後唐清泰二、日本承平五、西曆九五三）即ち新羅の滅亡に至るまでを指すのである此の時代は支那藝術の黄金時代とも稱すべき唐の文化の影響を受けて其の美術工藝は異常の發展を遂げ半島に於ては空前は勿論絶後の精華を發揮したのである當代の始め太宗武烈王不世出の英資を以て固く唐と結び其力を假



りて先づ百濟を滅ぼし其子文武王の時更に唐と共に高句麗を平らげ半島統一の大業を成就した此武烈王文武王の時代は制度文物皆唐を師宗として雄渾宏麗なる藝術を作り出した特に歴世佛教を崇信し都城を始めとして各道に大伽藍を建立し之に伴ふて建築彫刻繪畫其他の工藝も亦進歩し漸く固有の特色をあらはし景德王惠恭王の頃を頂點として最も纖巧優美の様式を大成するに至つた景德王朝に成りし佛國寺の多寶塔華嚴寺の舍利塔石窟庵の諸佛像惠恭王朝に成りし奉德寺の梵鐘の如き之を支那日本に求むるも多く得易からず實に半島の爲め一大氣焰を吐いたものである又惠恭王の時唐に寄献した萬佛山は細巧富麗彼の上下を驚嘆せしめたを稱せらるゝが如き當時新羅の技工の特質を知ることができ而も其後國運の不振と共に漸く衰兆を萌し纖弱華縟の弊に陥つたそれでも猶後世の企及すべからざる優秀なる特色を有つてゐた。

**宮殿及び苑池** 唐の長安城の壯麗は我國に平城平安城の經營を促せしが如く新羅にも多大の影響を及ぼした文武王の朝半島統一の大業成りしとき其宮闕を修造して内外諸門の額號を定め又池を宮内に穿ち山を造り花卉を植ゑ珍禽奇獸を養ひしが如き宮闕の制度が漸く宏壯の者となつたことを示してゐる今月城の北に雁鳴池と稱する者がある石を積んで山となし以て巫山十二峯に象り池中に點々たる小島嶼を作り、苑池の遺蹟猶觀るべく豊かなる情趣を示してゐる。

**鮑石亭** 慶州の南約一里南山の西麓溪流の旁疎林の中に鮑石亭の遺址がある新羅別宮の在りし處にして憲康王か甬山の神の舞を此に見たことが傳へられ又景哀王が妃嬪と此に歡樂に耽りしとき卒然後

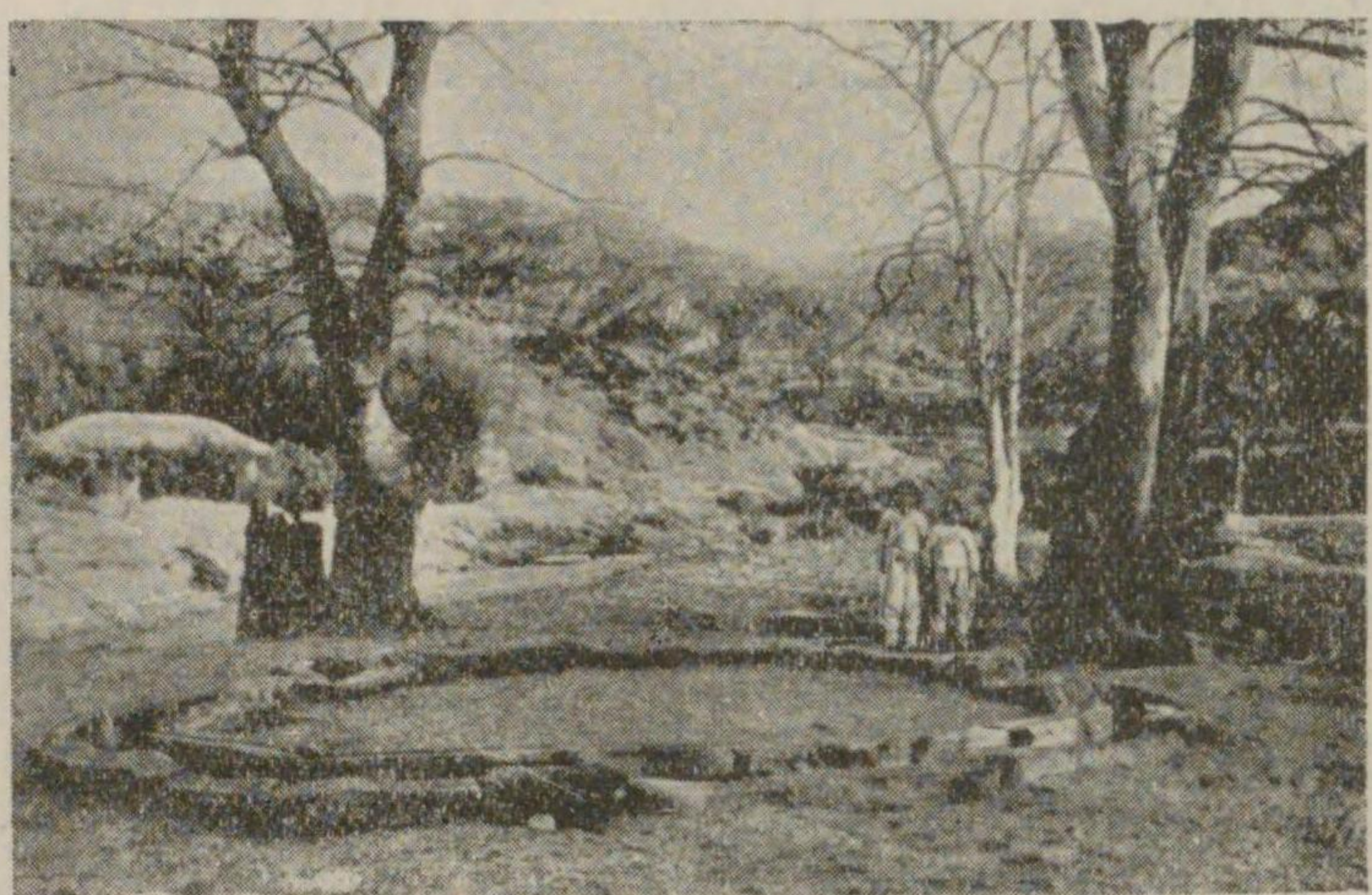
百濟の甄萱の爲め覆滅の慘禍に遭ひしは史上著名の事跡である、此鮑石亭は當時の曲水の遺跡にして狭き石溝を繞らすこと鮑魚の形の如く其一端より溪流を引きて他端に出でしむる様になつてゐる支那には今采の崇福宮の曲水址たる泛觴亭址が嵩山麓に遺つて此れと同巧異曲であるが唐代の者は全く無いから此鮑石亭は貴重の資料といはねばならぬ。

**佛寺** 半島統一以後歴世佛教を信奉し元曉義湘の如き大

德輩出し其都城たる慶州を始めとして各道に大伽藍が連りに創立せられた今其重要なる者を擧ぐれば慶州の内外には四天王寺、奉聖寺、望德寺、感恩寺、奉德寺などがあり其

他太白山の浮石寺、伽倻山の海印寺、智異山の斷俗寺、華嚴寺、雙溪寺、俗離山の法住寺、八公山の

第五十一圖





桐華寺、金剛山の楡帖寺、長安寺、新溪寺など何れも當代に創建若くは重創せられた大伽藍である而も當時の木造建築は一も傳はらず無事に遺存せるは石塔、塼塔、石窟、石浮圖、石碑、石階段等其遺物は割合に豊富であるから之によりて當時建築の様式及び其性質を窺ふことが出来る。

**伽藍の制度** 當代創立の伽藍にして今に遺れる者少なからざれども幾たびかの變遷を経て堂塔僧房は悉く後世の再建にかゝり昔時堂塔の配置を徵するに足るべき者は極めて少ない其中慶州の佛國寺は昔日の規模猶餘影を存し新羅時代伽藍の制度を略想見することが出来る佛國寺は緣起によれば法興王の創立にして文武王の修築を經景徳王の十年に至り國相金大城が更に大に伽藍を興造したといはれてゐる今想像し得べき伽藍の制度は此時の者である。

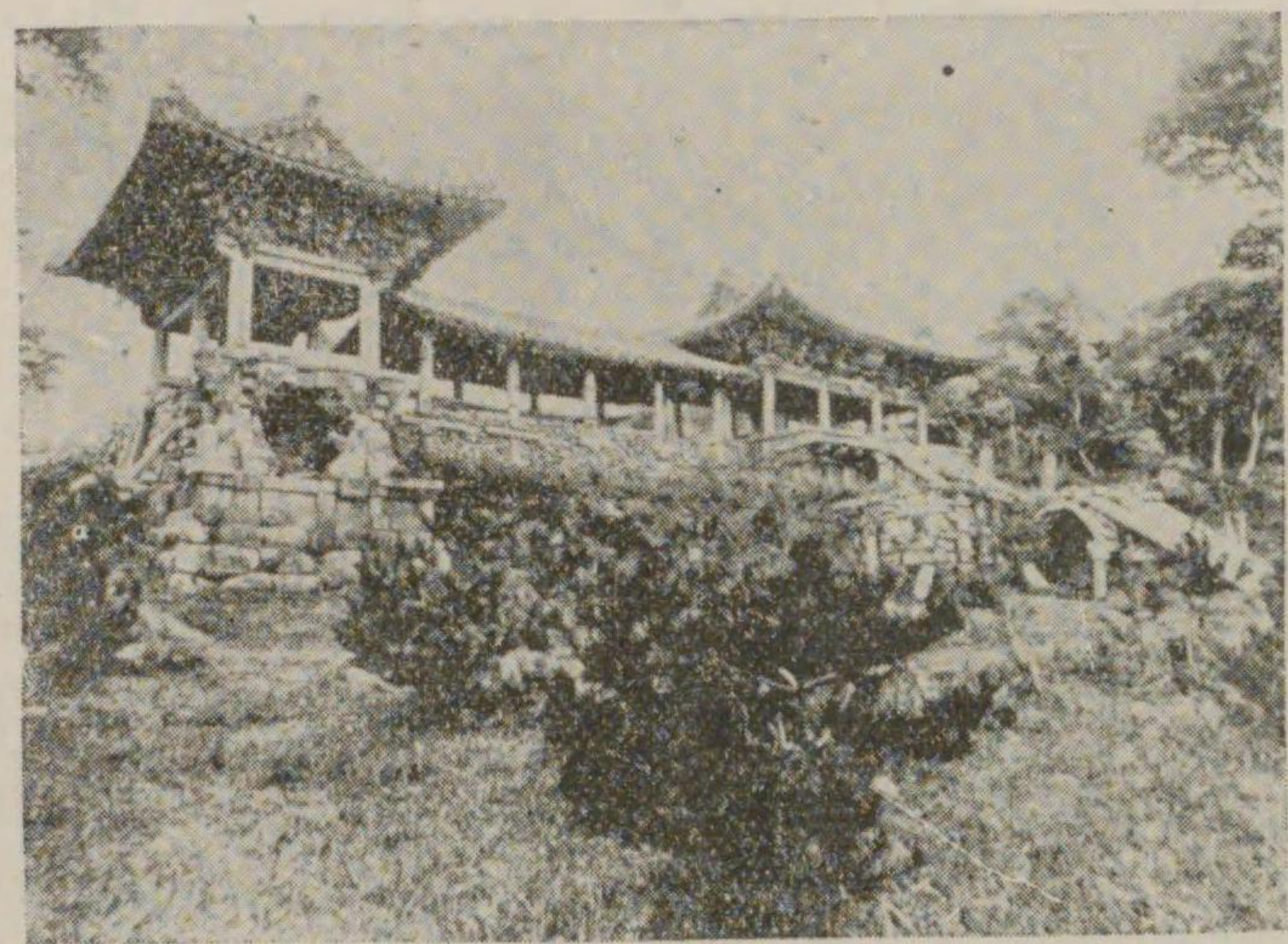
伽藍は南面して石築の高臺の上に立ち東に紫霞門西に安養門を開き紫霞門前には青雲橋白雲橋と稱する奇巧を極めたる石階段を設け安養門前にも蓮華橋七寶橋と稱する稍小なる石階段を架し紫霞門の左右には歩廊東西に延びて其端に經樓鐘樓を起せし者なれども今唯西方の鐘樓(今涵影樓と稱す)を遺せるのみである紫霞門の内には正面に大雄殿が巍然として立つてゐる是れは昔時の金堂の餘影である此大雄殿の前面東に多智塔西に釋迦塔と稱する石造の塔婆の立つてゐるのは我寧樂時代の伽藍に東西層塔の設けがあるのと同様式である更に大雄殿の後には近年まで無説殿と稱する堂宇があつた是れは

昔時の講堂に相當するものである又昔時は紫霞門の左右に延びて東西鐘樓經樓に達せし歩廊が更に北折して金堂を内に包みて講堂の左右に達し又別に此東西廊と金堂とを連絡する歩廊があつたのであるが是れ亦烏有に歸し唯礎石が點々其蹤迹を明かに示せるのみである。

伽藍の西方安養門の立てる處は地一段低く其裡に今極樂殿があり極樂殿の前左右に小僧房が對立してゐる此伽藍の後方にも多少の堂宇の礎石を残してゐる。

今存する所の紫霞門涵影樓大雄殿極樂殿は皆乾隆年間の再建なれども青雲橋白雲橋及び蓮華橋七寶橋と稱する石階段は景徳王朝の者にして其石拱を利用し石欄を設けたる奇工妙想支那にも我國にも其例を見ず其上に建てる門廊傑閣と相待ちて伽藍の前面に壯麗の觀を與へてゐる紫霞内門の兩石塔亦當時の傑作であるがこれは後に説くこととする又大雄殿(金堂)の前面に石燈が立つてゐるのも我寧樂朝伽藍

第五十二圖



佛國寺前景

に多く見る形式である此石燈亦新羅時代の者である。



要するに佛國寺の規模は唐制より得來れる者にして我國の寧樂朝の伽藍の制度に類似せる所あるは當然の事である而も奇巧を極めたる石階段及び石塔婆の様式は全く新羅獨特の者にして當時工匠の創意に出でたものであらう當時の藝術家が唐の模倣にのみ墮せず多少固有の特色を示せるは多とすべきである。

**塔婆** 四天王寺の塔、望徳寺の塔の如き皆木造なりしも是等は悉く烏有に歸し其遺存せる者は主として石造博造の者のみである又別に博石混築の者もあり石造にして其上に石灰を塗りし異例の者もある層數につきて曰へば三重五重最も多く七重十三重に達するものもある屋蓋の形は其流れに多少の反りを有する者普通にして稀には段狀をなせるものもある今當代の塔婆にして現存せる重要なる者を擧ぐれば

○石築塔婆

所在地名	名稱	朝鮮	支那	日本	西曆
忠南益山	廢彌勒寺塔(今存六重)				
同 益山	王宮塔(五重)				
北忠州	塔亭里七重石塔				
慶北州	佛國寺多寶塔	景德一〇	唐天寶一〇	天平勝寶三	七五一

全同	禮	同 釋迦塔	同	同	同	同	同
全同	禮	華嚴寺舍利塔(三重)	景德一三(?)	唐天寶一三	天平勝寶六	七五四	同
慶同	邱	同 東塔及西塔(各五重)	景德一七	唐天寶一七	天平寶字二	七五八	
慶忠	餘	廢葛項寺双塔(各三重)	惠恭七	唐大曆七	寶龜三	七七二	
慶忠	餘	無量寺五重石塔	哀莊二	唐貞元一八	延曆二〇	八〇一	
慶同	川	同 金堂庵東塔及西塔(各三重)	興德九	唐太和八	承和元	八三四	
慶同	川	海印寺三重石塔					
慶同	山	通度寺二重石塔					
慶同	萊	梵魚寺三重石塔					
慶同	州	廢居頓寺三重石塔					
慶同	州	神溪寺三重石塔					
慶同	州	浮石寺三重石塔					
慶同	州	金山寺五重石塔					
慶同	州	石窟庵三重石塔(基壇八角)					
慶同	州	到彼岸寺三重石塔(同右)	景文四(?)	唐咸通五	貞觀六	八六四	
慶同	州	書院洞五重石塔(蓋段狀)					
慶同	州	塔里洞五重石塔(同右)					
慶同	州	廢神福寺三重石塔					
慶同	州	廢淨惠寺十三重石塔					
慶同	州	金山寺六角多層石塔					
慶同	州	後百濟甄萱					



○磚築及磚石混築塔婆

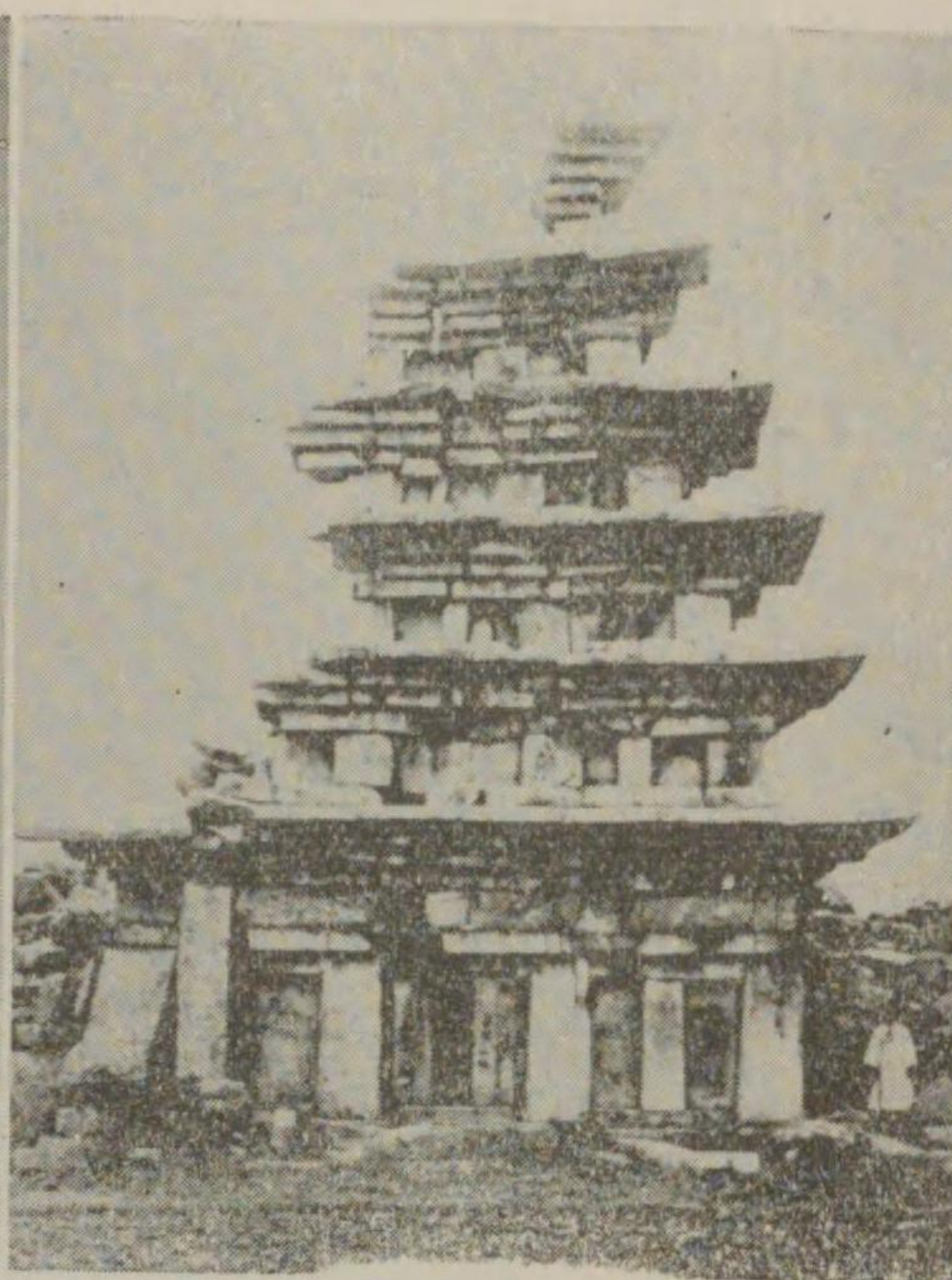
同	同	慶	京
		北	畿
		安	驪
		東	州
			神勒寺五重磚塔
			邑南五重磚塔
			邑東七重磚塔
			造塔洞五重磚塔
			(初層石築軒)
			以上磚築

○石心灰皮塔婆

慶	北	尙	州	上丙里石心灰皮多層塔(今存六重)
---	---	---	---	------------------

**廢彌勒寺石塔** 此等の石塔中最も古式を具へたるは廢彌勒寺の多層塔である上部頽れて今僅かに六重を存してゐる當初は恐らくは七重であつたであらう初重の大きさ方二十七尺三寸三分實に朝鮮第一の大石塔である初層四面各方柱を以て三間に分ち中央に入口を設け左右に窓形を作つてゐる軒は三層の持送り成り軒附薄くして兩端に向つて反り上り以て輕快の觀を呈してゐる二重以上次第に其大きき高さを減じ安定莊重の氣象を發揮してゐる塔の四隅には石獅あつて塔を護るの狀をなしてゐる益山には別に王宮塔と稱する者がある五重石塔にして規模前者に比すれば小なれども様式はよく類似してゐる共に新羅統一時代の初頭に溯るべきであらう。

圖三十五第

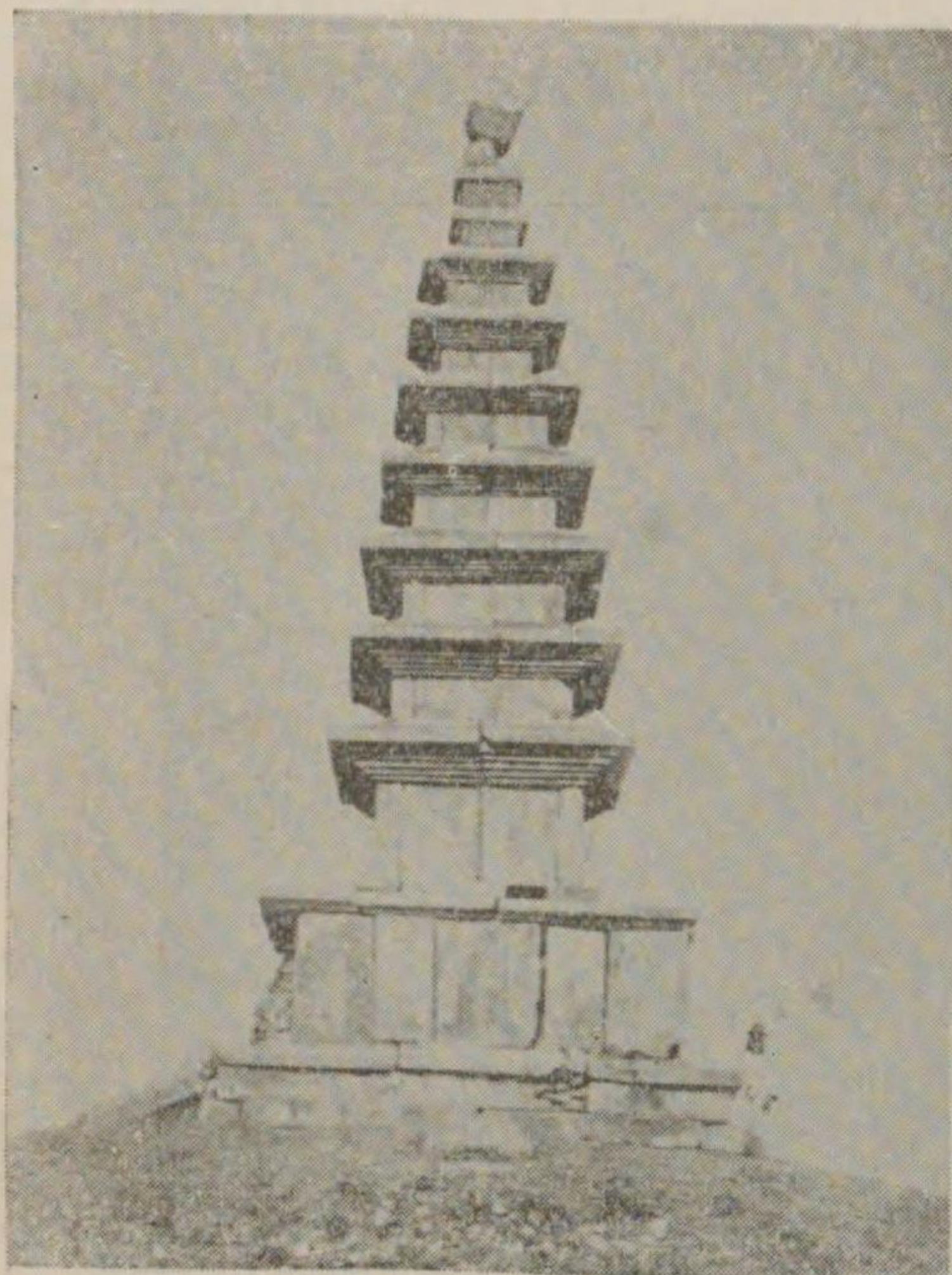


益山彌勒寺石塔

**忠州塔亭里七重石塔**

二成の基壇の上に立ち高さ約四十八尺規模壯大にして各層減縮の度多く秀高の觀を呈してゐる益山彌勒寺塔に亞ぎ半島第二の高塔にして又當代初期に屬する傑作である。

圖四十五第



忠州塔亭里七重石塔

佛國寺多寶塔及釋迦塔 佛國寺紫霞門内大雄殿の前面東に多寶塔西に釋迦塔の立てるとは既に前に説いた其中多寶塔は高さ基壇の上に立ち四面石階を設け初層は中央に稍大なる方形の中心柱あり四隅に矩形をなせる柱を立て其上に簡單なる斗拱ありて以て屋蓋を支へ屋蓋の上に第二層の石勾欄を繞らし更に層を重ねると三たび皆八角の平面をなし奇異なる柱及び勾欄を用ひ其上に八角形の大なる屋蓋を冠し屋頂に相輪を安んじてゐる基壇の四隅には當初石獅を置たのであるが今其二を失つた此塔花崗石を以て恰も木造建築を見るが如き精巧なる手法を弄し形態群

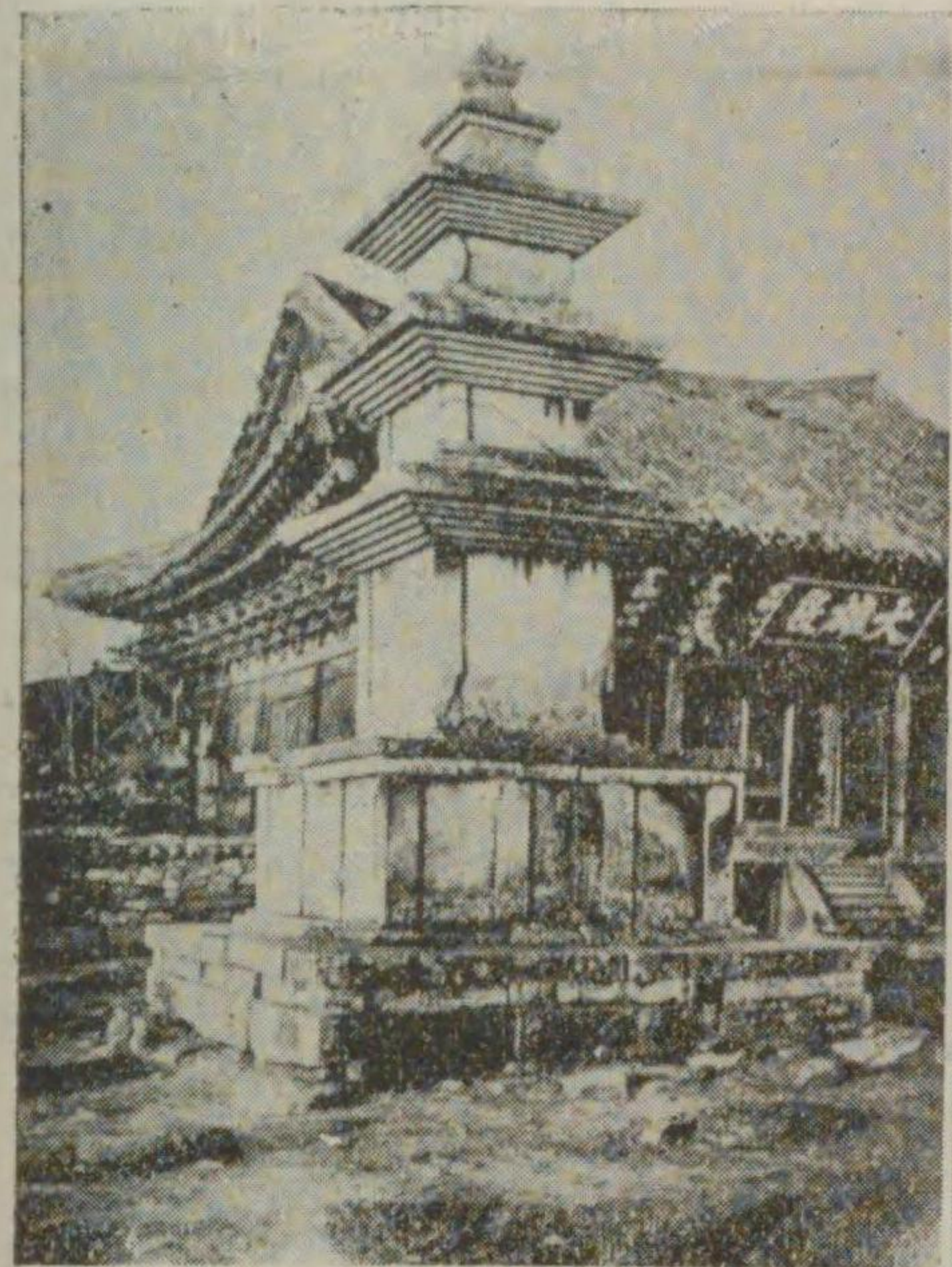


圖五十五第



佛國寺多寶塔

圖六十五第



佛國寺釋迦塔

を絶し奇想天外より來る此の如き異例の塔は支那に於ても全く發見すること能はざれば當時新羅工匠獨特の創意に成りし者に相違ない而も權衡の美手法の妙半島第一の美塔を以て目すべき者である釋迦塔は二成の基壇上に立てる普通の三重塔にして下成壇は低く上成壇は高く塔身次第に其大さと高さとを減縮し以て安定にして秀麗なる外觀を呈してゐる塔身の四隅には各重とも柱形を作り五層の持送りをして以て輕快なる屋蓋を承け頂に寶珠露盤を安んじてゐる高さ約廿六尺手法簡なれども規模大にして權衡亦宜しきに適ひ半島此様式の塔婆の最も代表的の者である。葛項寺雙塔 元金泉郡葛項寺の廢址にありしが今移して京城總督府博物館の庭中に立つてゐる共に三重塔にして其一の基壇に刻銘があつて天寶十七年に

元聖王の母朴氏姨母某氏零妙寺言寂法師三人の建立であることが分かる實に新羅塔在銘唯一の者で以て他の塔婆の年代を稽ふべき好標本である權衡美にして形式手法共に頗る佛國寺釋迦塔に似てゐる。華嚴寺舍利塔 恐らくは景德王朝の者であらう二成の壇上に立てる三重塔にして高さ約二十四尺下

圖七十五第



葛項寺三重石塔

壇は四面に天人の像を陽刻し上壇の中心には舍利を將來せし慈藏の立像を作り四隅には最も雄渾なる石獅を立て以て上の構造を受けしめてゐる初層塔身の四面に戸形を作り其兩旁に四天王兩菩薩仁王の像を分ち刻し各層の軒は五層の持送りによりて支へられてゐる權衡秀麗にして意匠警拔是れ亦新羅工匠の創作に歸すべく佛國寺多寶塔と共に新羅塔の雙璧と稱

するに足るべきものである。

自餘石塔婆 右の外表に擧げた石塔婆は多くは三重乃至五重にして其様式は大抵前記佛國寺釋迦塔と同じく何れも安定莊重の形態を有つてゐる中には上層の基壇の周圍に八神將を陽刻したものもある

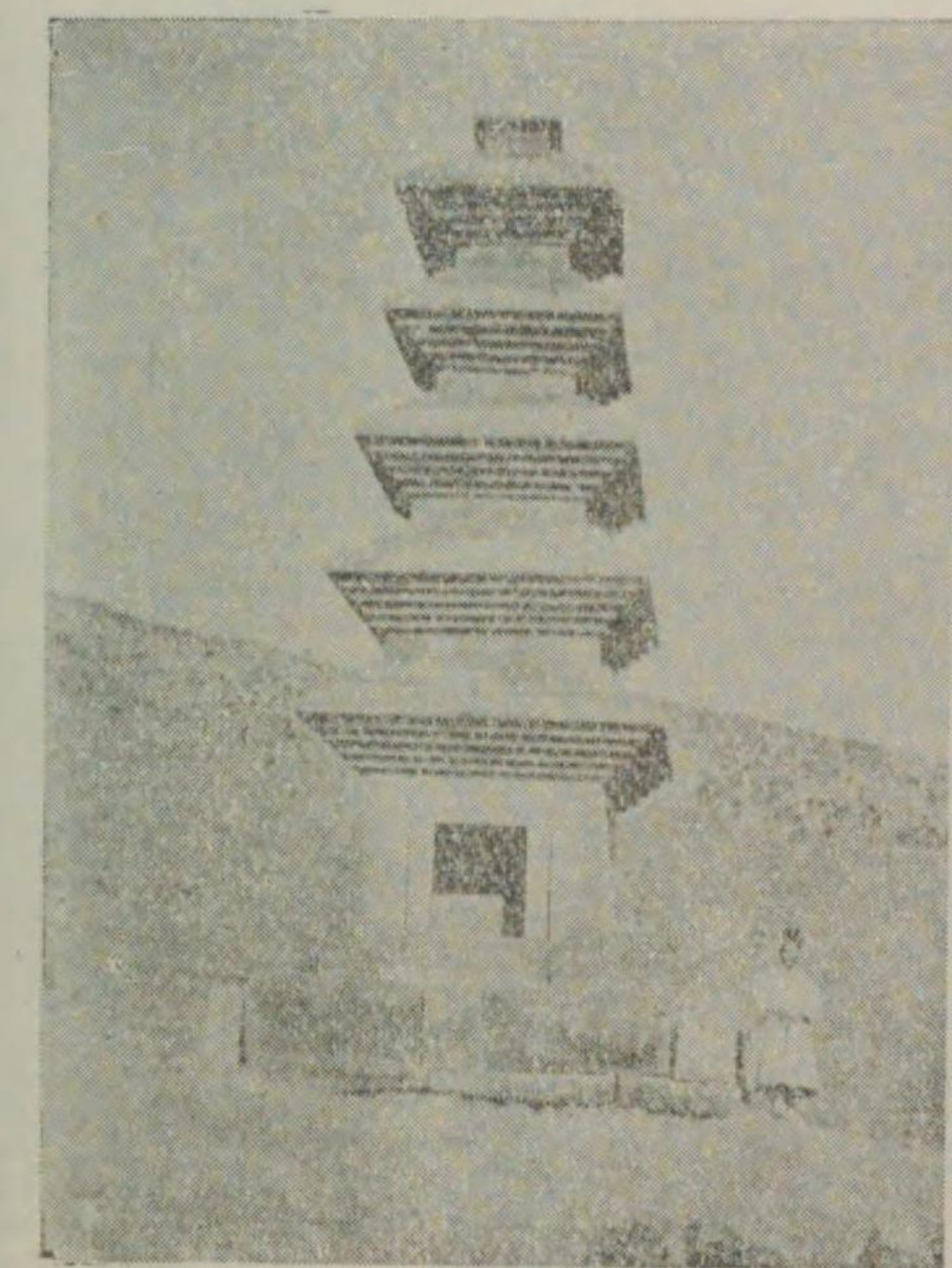


圖八十五第



塔利舍寺嚴華

圖九十五第

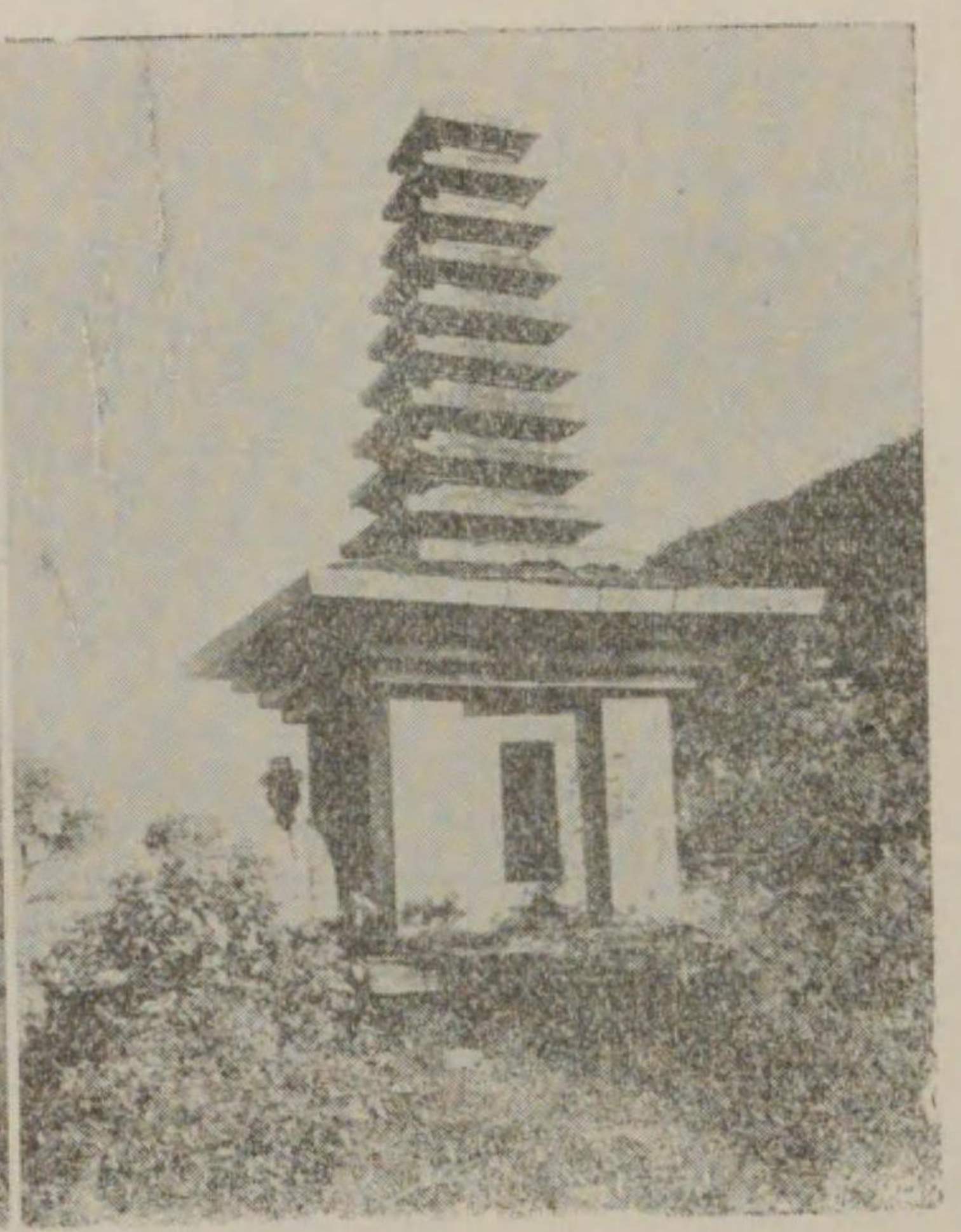


塔石重五洞里塔

又石窟庵三重石塔及び到彼岸寺三重石塔の基壇の八角なるは珍らしく義城郡書院洞五重石塔、塔里洞五重石塔の屋蓋の上面の特に階段状になつてゐるのは、磚築の塔より得來つた手法であらう。廢神福寺三重石塔の各層に高欄様を作れるは特殊の意匠にして特に廢淨惠寺の十三重石塔の初重のみを大にして他の十二重を甚しく低矮に作れるは過高の權衡を避けんがためにして我談山神社十三重塔と石造木造互に材料を異にすれども其着想は同一である次に金山寺六角多層塔は後百濟の甄萱の作なるべく全部完全せざれども其六角なるを各重に小佛を刻み纖巧の手法を弄せるは感興を惹くに足つてゐる。

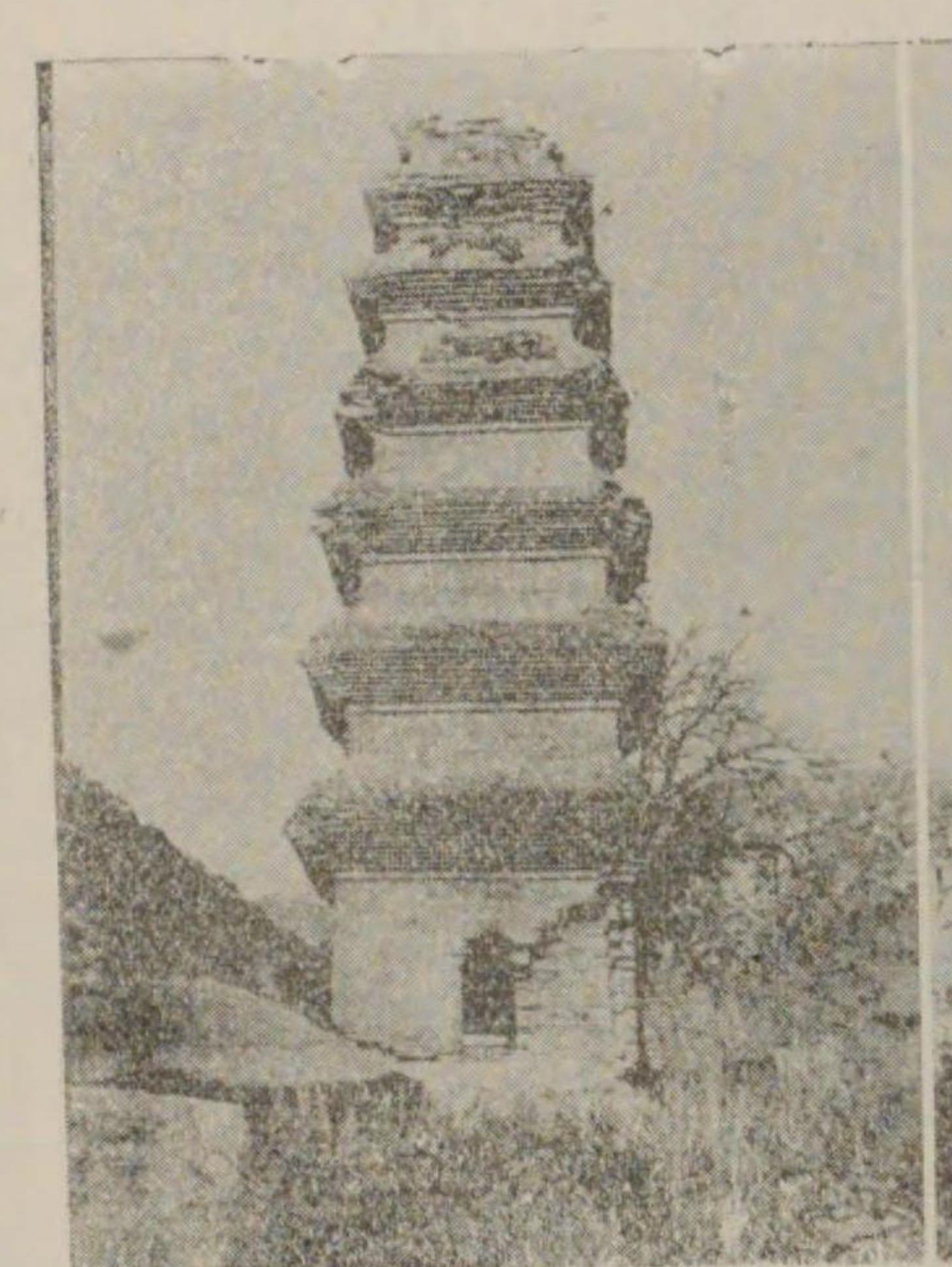
**磚築塔婆** 磚築の塔婆は其構造形式共に唐より傳へられしものにして驪州神勒寺五重磚塔は二成の石

圖十六第



塔石重三寺惠淨

圖一十六第



塔磚重七東邑東安

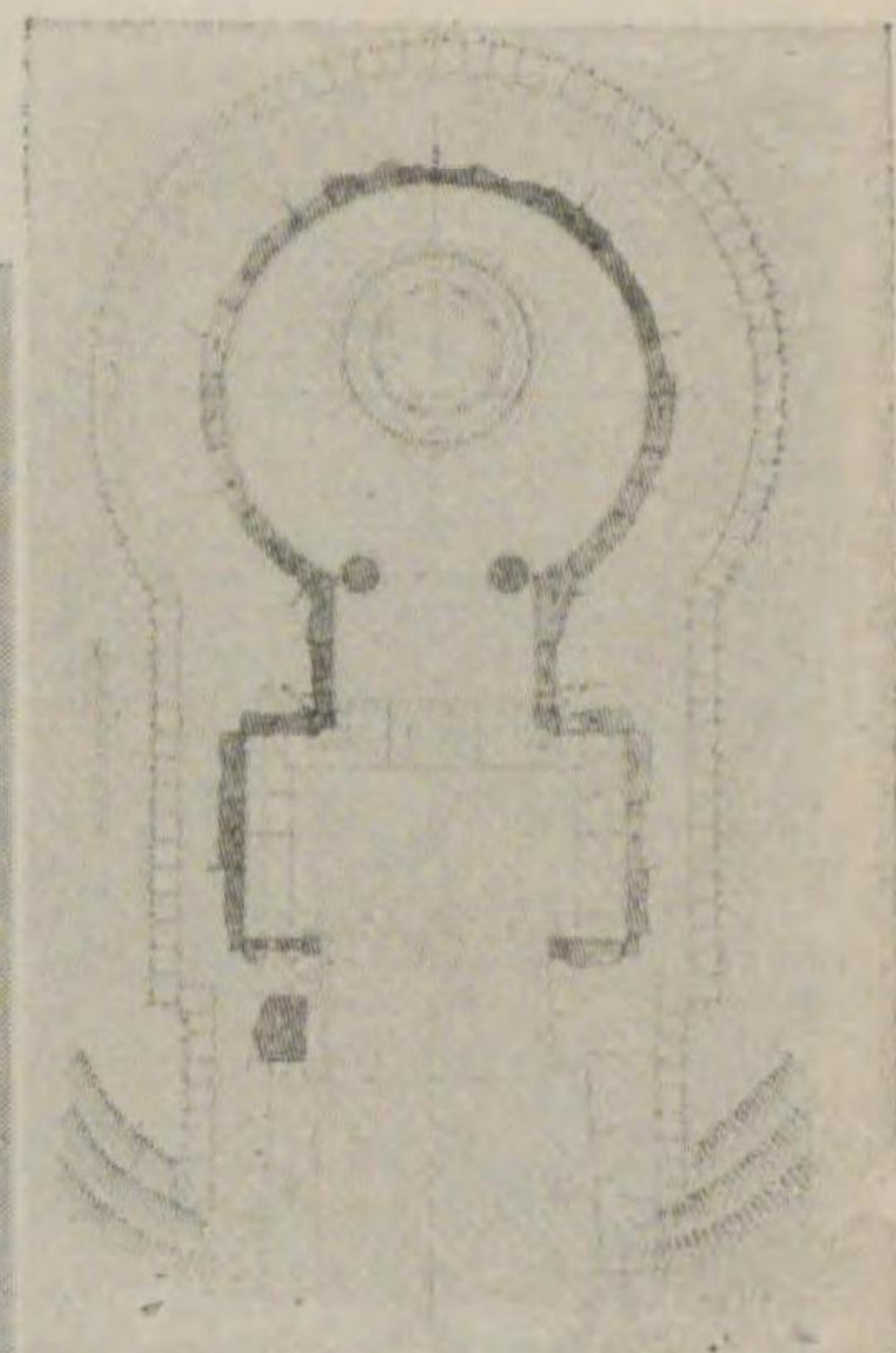
壇の上に立ち各層減殺の度多く頗る輕快穩靜の氣象を表はしてゐる。磚の表面には半圈内に優雅な草花文様を浮彫にしてゐる。

安東には邑南に五重磚塔邑東に七重磚塔が立つてゐる前者は各層減殺の度多く權衡頗る美屋蓋は瓦を以て葺き第二層の南面の壁に仁王像を刻せる石を嵌挿してゐる後者は當初二成の石壇上に立ちしが如く下成壇に八神將を陽刻してゐる第二層以上の塔身急に低矮となり且次第に其大きさを遞減せるを以て頗る安定の外観を呈してゐる又屋蓋は瓦を以て葺いた形迹がある。

安東一直面造塔洞の五重磚塔は磚石混用の一例にして初重を花崗石を以て其軒以上の各重を磚を以て築造してゐる初層の南面入口の左右には芬臺寺塔の



圖二十六第



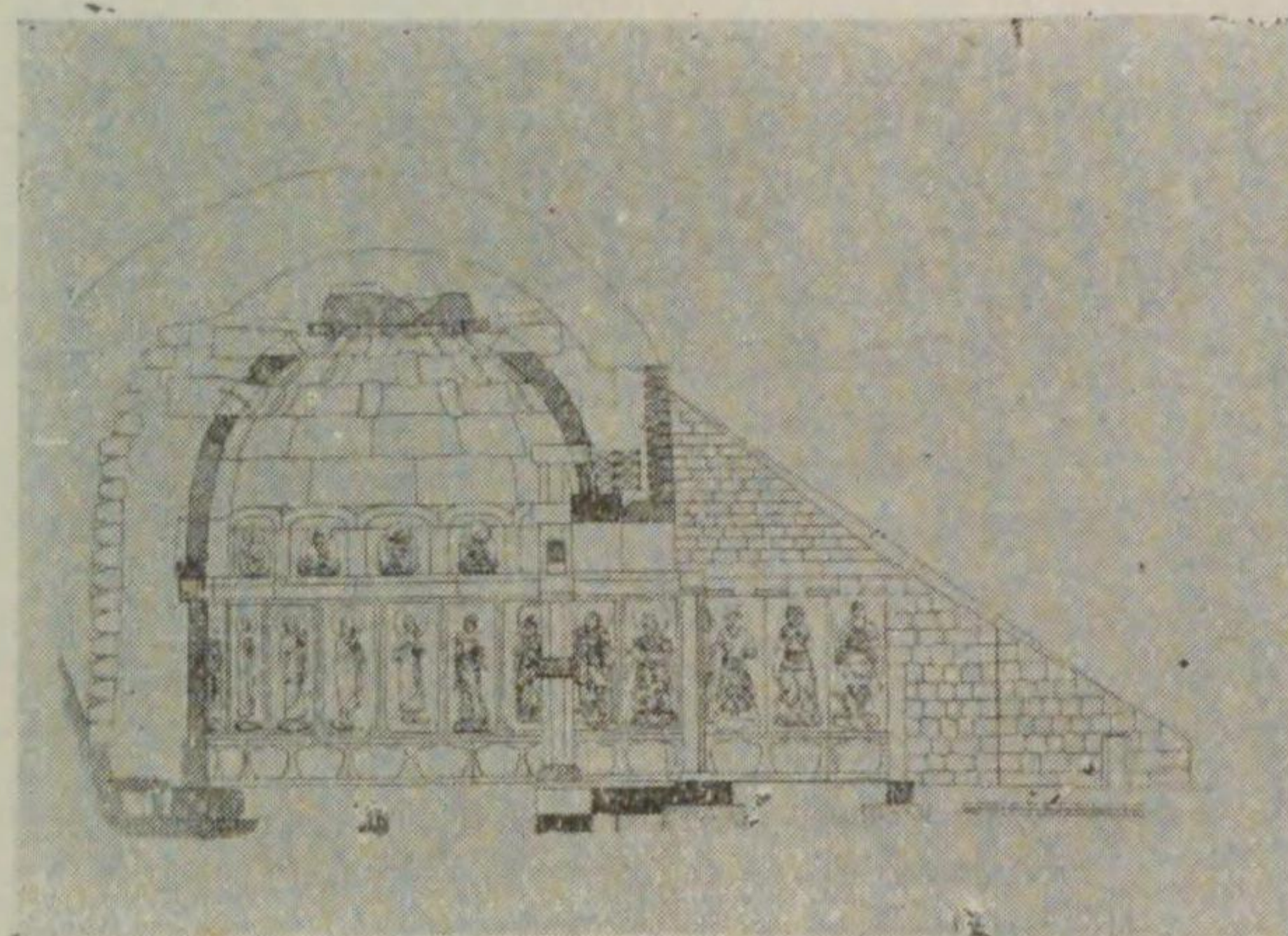
石庵窟石庵窟平面圖

如く仁王の像を高肉彫にしてゐる。

尙州外南面上丙里の多層塔は石心灰皮塔と稱すべきものにして今六重を存してゐる多分當初は七重であつたであらう塔身及軒は大小の粗野なる安山岩を以て築き其上に厚く石灰を塗つたもので他に類例を見ざる構造法である今石灰は殆ど悉く剝離したれども猶往々其痕迹を遺してゐる。

石窟 石窟の遺存せる者は石窟庵の石窟最も偉觀にして他は殆ど言ふに足らぬ石窟庵は佛國寺の後なる吐含山上に在りて佛國寺を經營せし金大城が同時に築造せし者である北魏隋唐間に盛に行はれし支那の石窟を摸せし者にして彼は自然の巖山を開鑿して其内に佛像を刻出だせし者なれども此れは地質上支那の如く開鑿に適せる自然の巖山無かりしにより別に花崗石材を以て石窟を築造し

圖三十第



石窟庵石窟縱斷面圖

其上に土を覆ひて恰も彼の石窟の如くしたのである支那には雲岡龍門を始めとして各地に多數の石窟あれども此の如く築造せし者無きを以て見れば此石窟は全く新羅の工匠の創意に出でしものにして恐らくは佛國寺の石階段や多寶塔と同一人の意匠に出たのであらう構造の奇抜技工の精妙拔類絶羣と謂ふべく古今を通じて半島人の作り出した大傑作である。

此石窟は平面圓形にして徑二十二尺六寸其前面に入口を設け其外更に長方形の前室ありて入口の左右の壁には仁王像を高肉彫にし更に東西壁及び南に矩折せる壁に八神將を分ち刻してゐる又入口の左右の側壁には四天像を各二軀つゞ陽刻して以て石窟の外觀を壯麗にしてゐる石窟内に入れば中央に高さ九尺の釋迦の坐像が蓮座の上に載つてゐる其端嚴の相好偉麗の體軀當時の支那日本の者と比較するも少しの遜色はない實に朝鮮に於ける彫像中の最傑作である。

更に石窟周圍の腰壁には格狹間形を作り其上に十一面觀音十羅漢諸天等の立像十三軀を薄肉彫にせる者を立て此等圖像石の上には長押石を載せ其上後面には中央に本尊の圓光を刻み左右に五個の小龕を作り内に文珠、維摩、地藏其他兩菩薩の像を容れてゐる是れより上は石材を累積して巧みに穹窿の天井を造り中心に大なる蓮花を刻み出してゐる此石窟は管に構造の奇巧を極めしのみならず、壁面に薄肉彫に刻み出せし菩薩羅漢諸天の像亦典雅優麗入神の技より成つてゐる。



浮屠。浮屠とも書く即ち佛舍利又は高僧の遺骨を藏する小石塔婆である當代に屬する者は多少遺存してゐる今之を擧ぐれば

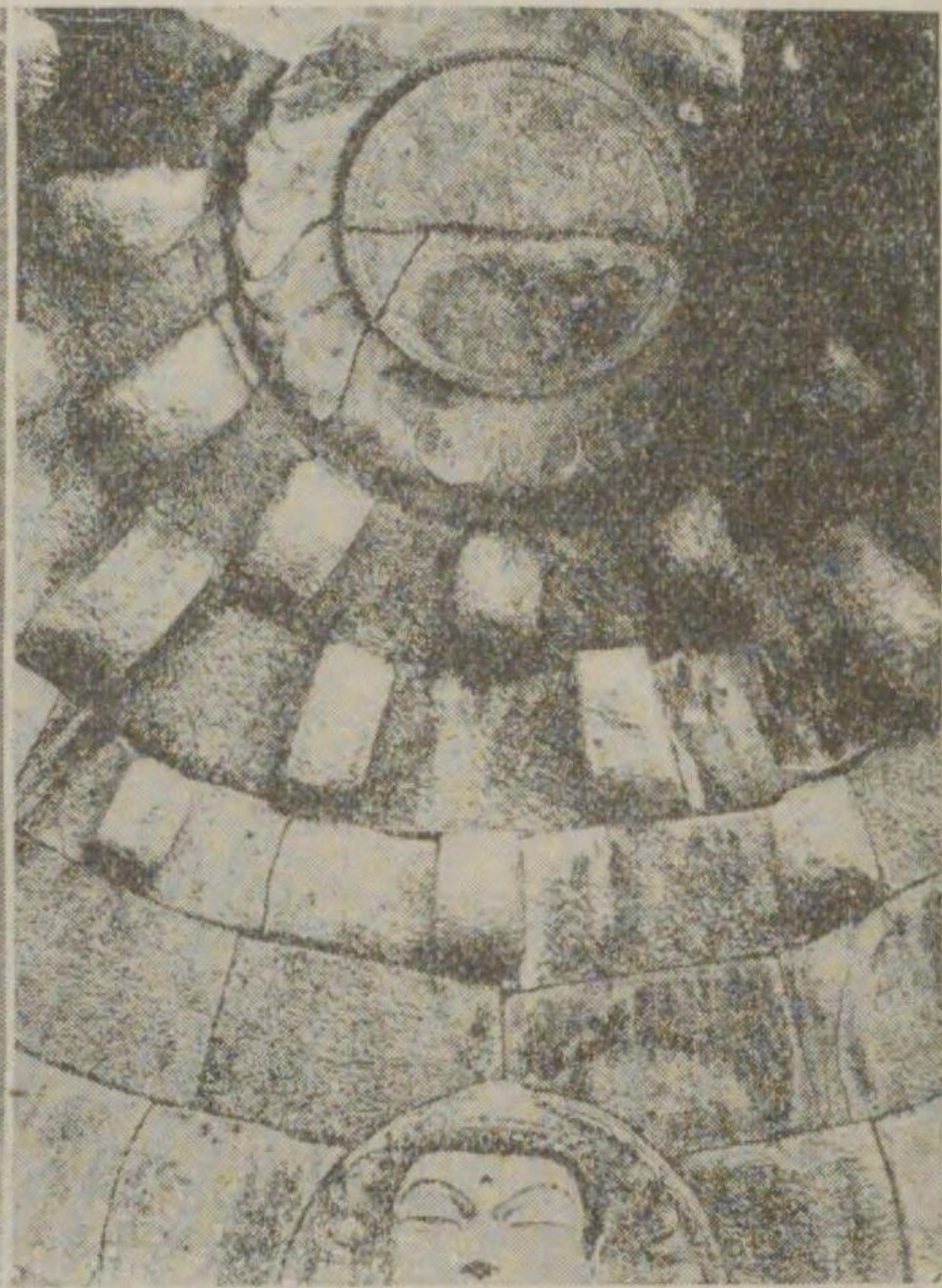
江原州	廢興法寺廉巨和尚浮屠	文聖五	唐會昌三	承和一〇	八四三
慶北州	佛國寺浮屠	景明八	後梁龍德四	延長二	九三三
慶南	鳳林寺眞鏡大師寶月凌雲塔	後百濟甄萱			
全北	金山寺舍利塔				

興法寺廉巨和尚浮屠。今移されて京城バゴダ公園内にある塔内から「會昌四季歲次甲子季秋之月兩

旬九日遷化廉巨和尚塔」云々の銅板墓誌が發見せられた浮屠は平面八角形にして基壇塔身及び蓋の三部より成り基壇低く塔身大に屋蓋輕く上に寶珠飾を載せてゐる基壇は上に豊肥なる蓮花を作り腰には各面格狹間内に舍利塔を陽刻し下には臥獅を高肉彫にあらはしてゐる塔身前後に扉形を作り四隅に四天王像を刻み基座には各面格狹間内に天人像を浮彫にしてゐる軒には垂木形をあらはし饅頭形の持送には天人を作り蓋上は瓦葺を摸してゐる全體の權衡莊重にして手法精鍊新羅中期を代表すべき尤作である。

佛國寺浮屠。元無說殿の東北羅漢廳址の前に立つてゐた其後何れへか運び去られて今在る所を知ら

圖四十六第



石庵窟窰窟天窰井

ぬ石燈様の浮屠にして地臺石は六角に造られ其上に刻める豊肥なる蓮座の上に雲文を高肉彫にせる竿石が立ちて中臺石を承けてゐる中臺石の下にも蓮花の彫刻がある鼓胴様の塔身其上にありて周圍に富麗なる三佛龕を刻んでゐる蓋は十角形にして頗る輕快頂に寶珠露盤を上げてゐる意匠自由にして技工巧麗亦新羅中期の優作を以て目すべき者である。

圖五十六第



興法寺廉巨和尚浮屠

鳳林寺眞鏡大師寶月凌雲塔。今移されて總督府博物館に在る景明七年に成りし者にして亦石燈様に近きも竿石に當れる處著く低くして扁鼓狀をなしてゐる權衡よく整ひ手法亦精美新羅末期の代表作である。

金山寺舍利塔。恐くは寺の創立の頃後百濟の甄萱

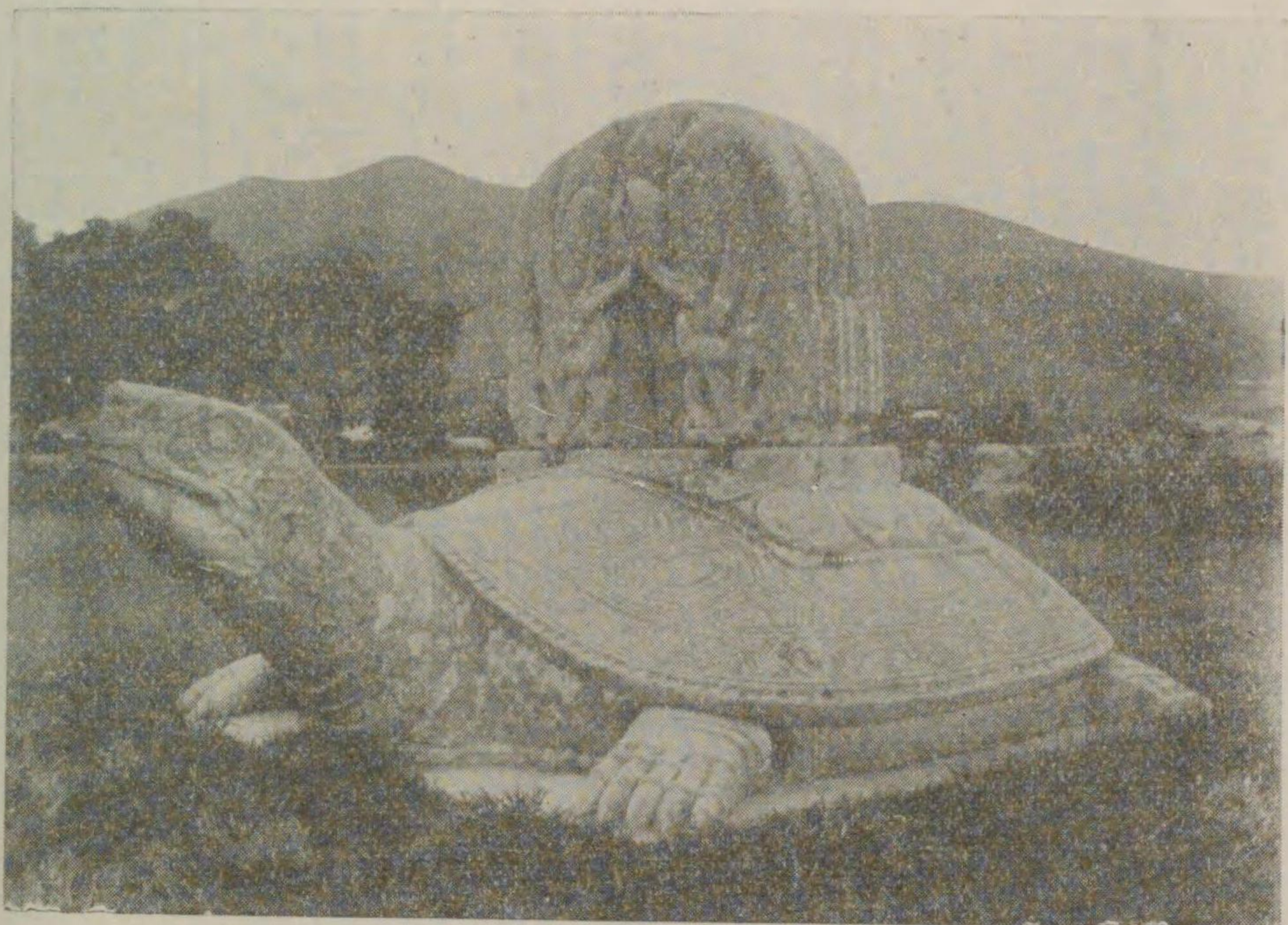
の作つたものであらう廣き二成の基壇の中央に立つてゐる基壇の周圍には天人を浮彫にし更に其外に







圖七十六第



太宗武烈王碑

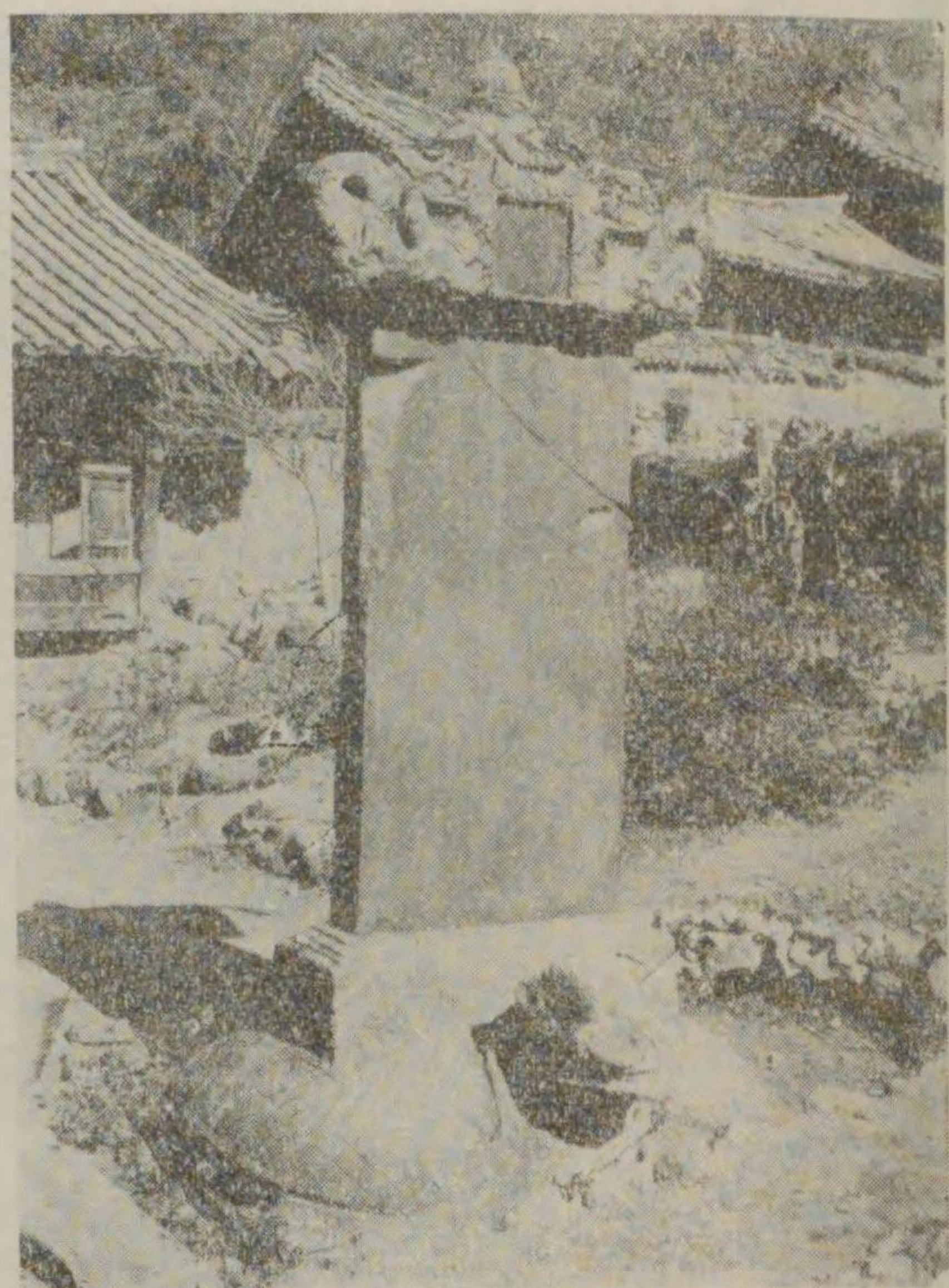
慶州四天王寺碑龜趺 慶州四天王寺址の前面に今唯龜趺のみを存してゐる手法太宗武烈王碑及傳金陽碑の龜趺に類似し亦羅初の優作である四天王寺は文武王朝の創立であるから碑も其の時に成たのであらう。

雙溪寺眞鑿禪師碑 前記羅初の碑の外聖德王陵、

景德王陵、興德王陵の前にもそれ〴〵碑があつたのであるが今は唯龜趺のみを存し其龜趺も頭首を失つてゐるからあまり参考にはならぬ唯次第に技巧の陵夷するを見るのみであるかくして中期に屬する碑には殆ど完全なる者なく後期に至りて實例が再び多くなつて來る此眞鑿禪師碑は其代表的の者である之れと殆ど同時に成りし者には聖住寺大朗慧和尚碑がある

何れも唐の様式より離れ固有の特色をあらはし次の高麗碑の標準となつたのである龜趺は寫實を離れ

圖八十六第



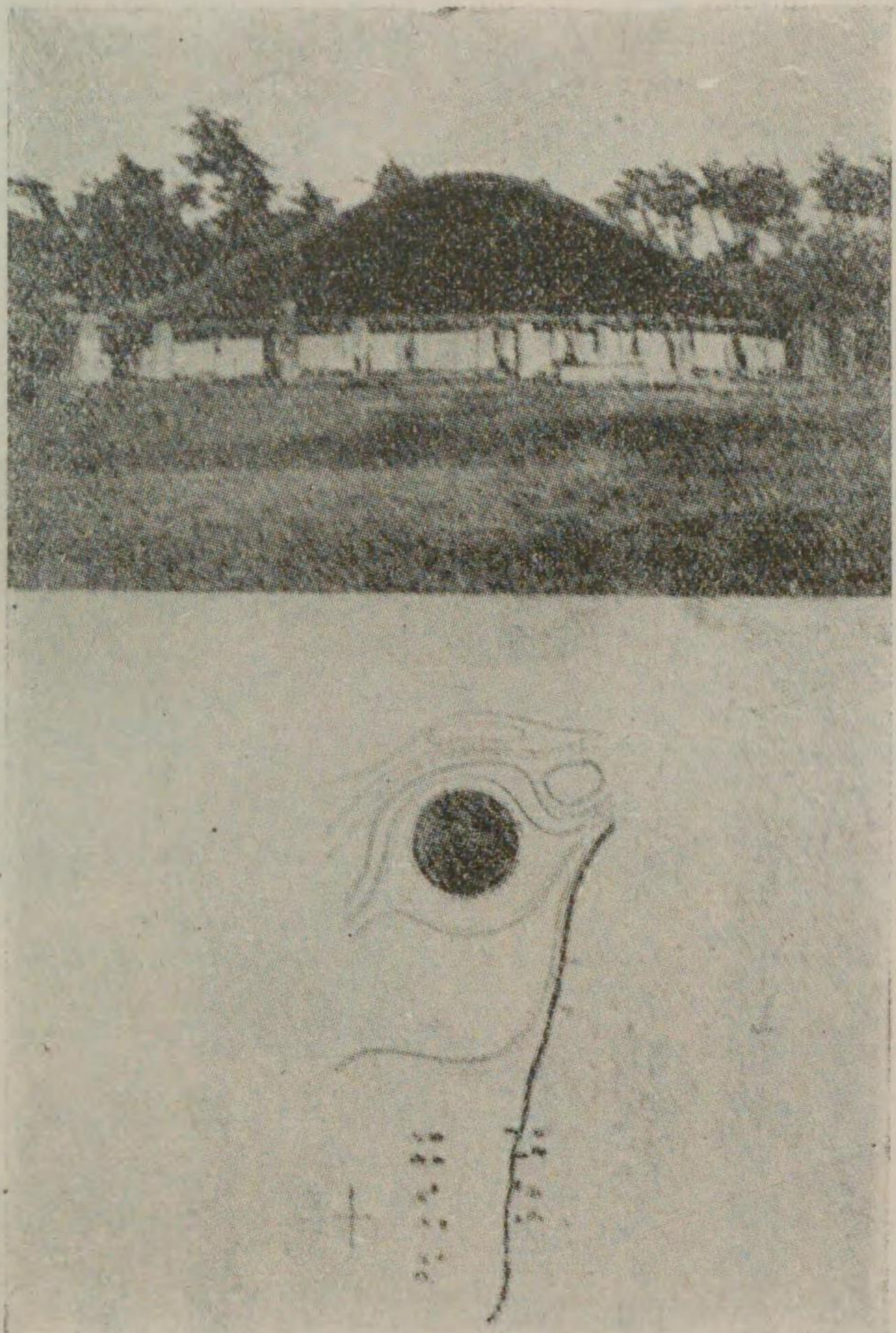
陵墓

て其頭部は獸に近く背甲文は形式化し碑身薄きに過ぎ螭首著しく低くして且厚い蟠龍の様式も特異の者となつた又月光寺圓朗禪師碑は龜趺螭首共に一種雄麗の風を示し鳳林寺眞鏡大師碑は眞鑿禪師碑に似て碑身の側面に雲龍を薄肉彫にせるは現存新羅碑唯一の實例である。

古新羅時代の陵墓は唯一の墳壟に過ぎざりしが當代に入り唐制の影響を受けて次第に壯麗なる象設を施し又多少地相に留意することとなり後の高麗時代の陵制の基を開いた當代の陵墓は一も發掘調査を経たことが無いから殆ど明器の出土もなく玄室の構造をも詳かにすることができぬ特に佛教隆盛の結果火葬の法次第に盛んに最早墳壟を起すことなく山上巖石の間に小壙を設けて骨壺を藏することゝなつた隨て明器の埋藏もなく工藝品の資料は却て前時の如く豊富で無い。



太宗武烈王陵(慶州郡府内面) 慶州の西南西岳里にありて東面してゐる墳は平面圓形にして基邊は野石を處々に立て、固めとしてゐる其前面に供物を並べる石床があつたのであるが今破壊してゐる更



圖九十六第

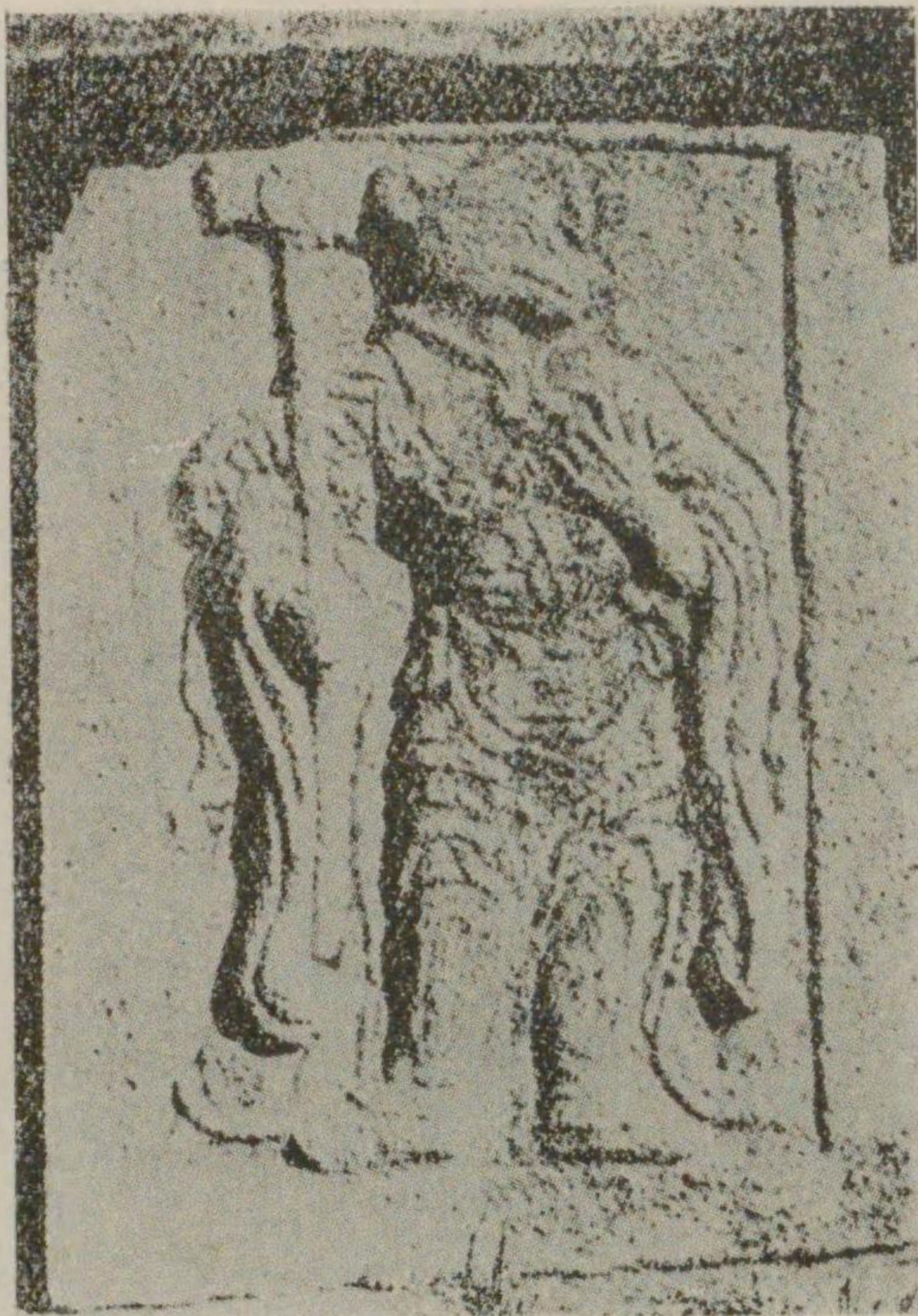
圖十七第 掛 陵

に其前面約七十步參道の左方に碑が立つてゐたのであるが今碑身を失ひて龜趺と螭首を存してゐる此碑は當初碑閣の内に安置されたので今猶礎石が四隅に横はつてゐる要するに太宗陵は其墳隴は從來の様式に従ひしも其前面の石床は蓋し當時の創意に出で更に碑及び碑閣を立てし

は全く唐の制度を摸したのである。

文武王陵(慶州郡外東面) 文武王陵は古來種々の傳説ありて其位置確定せざれども余は慶州の東南約四里半(慶州郡外東面)にある掛陵と稱する者が文武王陵ではないかと思ふ墳の周圍に護石及び石欄を繞らし其前面に石床を置き更に其前方參道の左右に石獅二對文石一對武石一對石柱一對を立てゝる。

圖一十七第



石 未 陵 掛

墳の周圍の護石は葛石束石立石地覆石より成り十二支の方角に相當する束石に其方位の十二支神像を陽刻してゐる此十二支神像は頭部はそれの動物をあらはせども其服裝は神將の風をなし各得物を執り極めて雄麗の風格を示してゐる此墳の外部を繞らすに石欄を以てしてゐる此石欄は從來木柵を墓の周圍に繞らせし者を石に代へたのである即ち或間隔を以て尖頭の石柱を立て二處の貫石を以て是等を連繫し更に正面に石床を設けてゐる(石床破壊して今殘石を存す)のは蓋新羅の創意に出たのであらう而も參道の左右なる石人石獸石柱の屬は全く唐制より出で來れる者にして石獅の雄渾石人の英豪實に初唐藝術の眞髓に觸れてゐる石柱は八角形であるが今頭部を失つてゐる。



圖二十七第



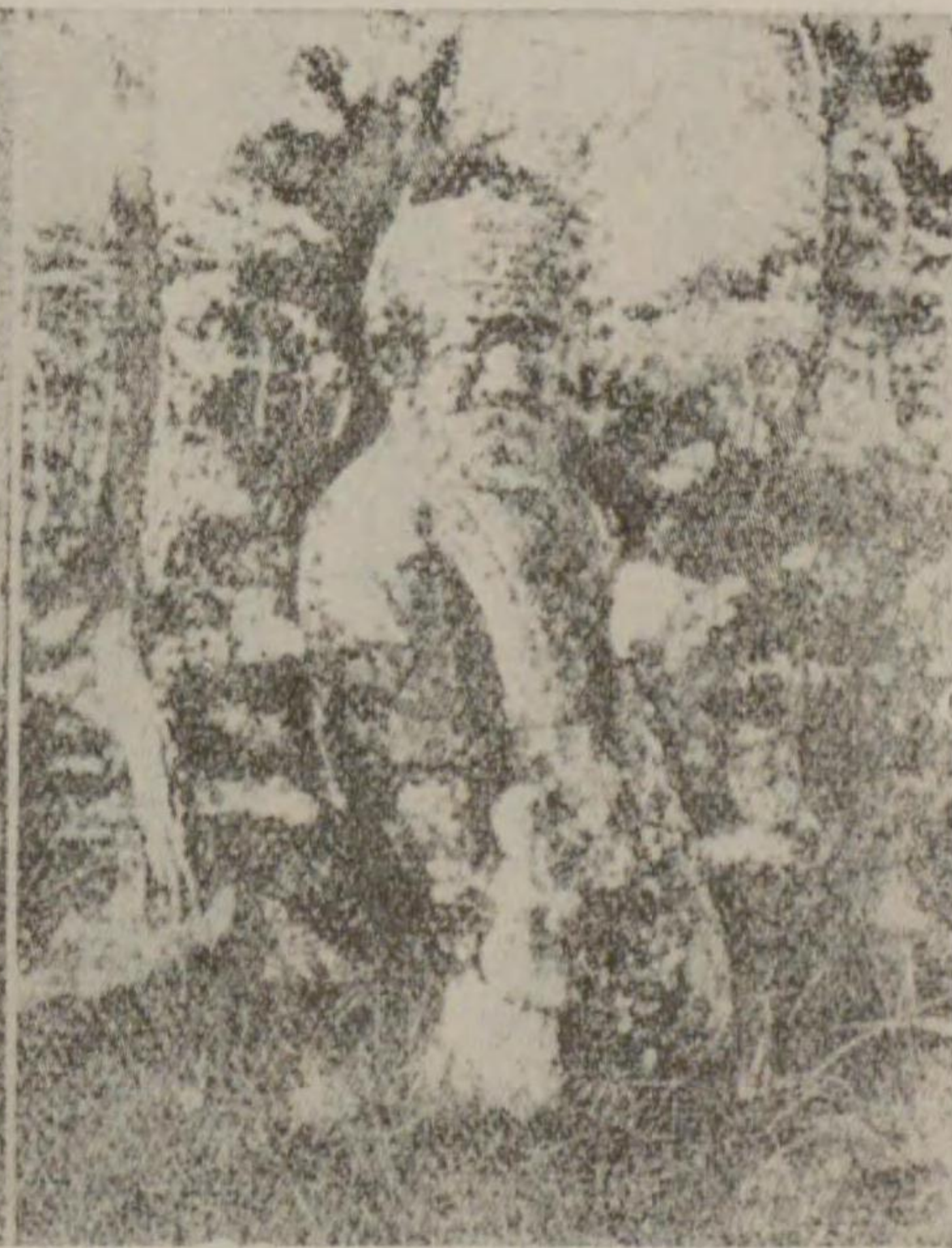
獅石陵掛

圖三十七第



石文陵掛

圖四十七第



石武陵掛

圖五十七第



石辰墓干角金傳

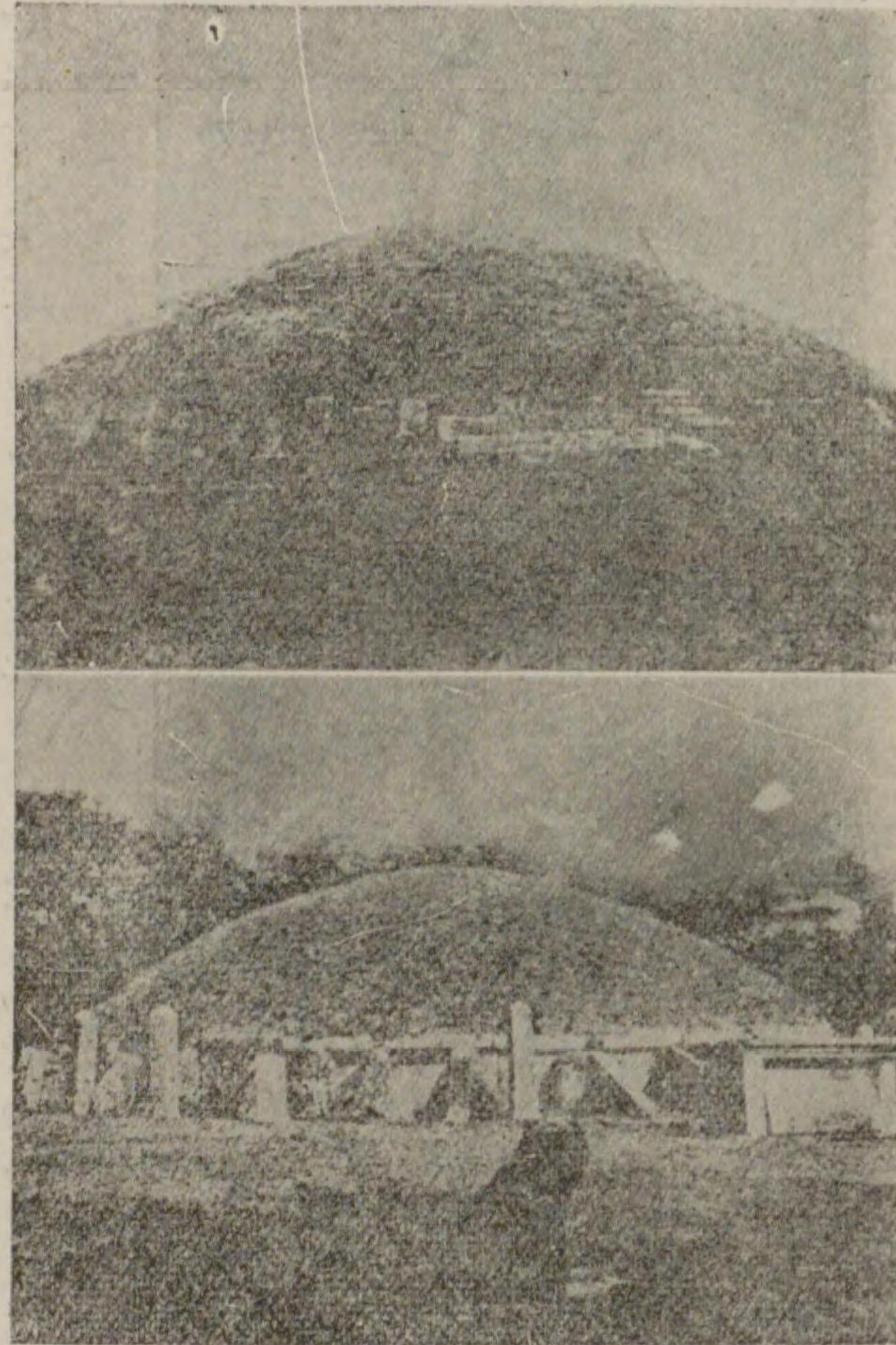
要するに文武王は武烈王に次ぎて高句麗を滅ぼし半島統一の大業を成就せし英主なれば其陵は全く舊型を脱して一は唐の制度に準ひ一は半島固有の特質を發揮し後の陵墓の標準となつたのであらう。

神文王陵

聖德王陵

角干墓(慶州郡府内面) 慶州

圖六十七第



圖七十七第

に平地なるに拘はらず山上に築かれし此墓の地相は唐の高宗の乾陵によく似てゐるのと其墳隴の護石東石の十二支神の像及び周圍石欄の様式は文武王陵の者と殆ど一致してゐる點より寧ろ之れを金仁問

朝鮮の美術工藝



の墓とする方適當であると思ふ特に護石の十二支神像の雄麗なるは却て掛陵を凌駕せんとしてゐる唯其前面に石人石獸石柱を缺いてゐるのは當初より無かつた者か或は後世他に運び去りしものか明かでない多分此等の象設は初めより簡略せられたものであらう。

第七十八圖



聖德王陵申石

神文王陵(慶州郡内東面) 慶州狼山の南六七町の處にありて南面してゐる此陵は文武王陵の頗る唐制に倣ひ且壯麗なる施設をなせしに反し再び簡易の者となり墳の周圍には切石を疊みて護石となし三角狀の控石を四十四ヶ所に放線狀に配置してゐるそして石欄石人石獸石柱等の象設はない唯太宗武烈王陵の如く其前面に石床を置いてゐるのみである。

聖德王陵(慶州郡内東面) 聖德王時代は新羅藝術發達の頂點に近い隨て其陵制も亦頗る宏壯の者となり益新羅固有の特色を示すことゝなつた即ち陵は文武王陵と神文王陵とを折衷し更に新機軸を出した者である其墳隴は南面し周圍に護石を繞らしたれども神文王陵の如き控石を三十ヶ所射出し控石の

間十二支の方角に當れる處にそれ〴〵其方位神の彫像を立て更に其外圍に石欄を繞らしてゐる即ち文武王陵及び角干墓の護石の束石に神像を刻める者を丸彫りとしたので此等神像の猶遺存せる者は最も雄麗の氣象をあらはしてゐる更に其前に石床を置き左右に文石を立てゝゐる文武王陵にては唐制の如く石獅二對を前に列してゐるが此陵にては前方に一對後方に一對置いて陵を守護するの意を表はしてゐる此の如く陵の前後に石獸を置くことは支那に無き所にして是れが後世朝鮮特有の制度の濫觴となつたのである又參道の東方に石碑を立てゝあつたが今頭部を失つた龜趺が存してゐるのみである。

景德王陵(慶州郡内東面) 墳隴の制度は再び文武王陵の如く護石の束石に十二支神像を陽刻し周圍に石欄を繞らしてゐる十二支神像の様式は頗る纖巧となり文武王陵角干墓の雄大なる者と頗る性質を異にし新羅固有の趣味をあらはすことゝなつた其前面の石床は割合に完全に存して當時の形式を見ることが出来る。

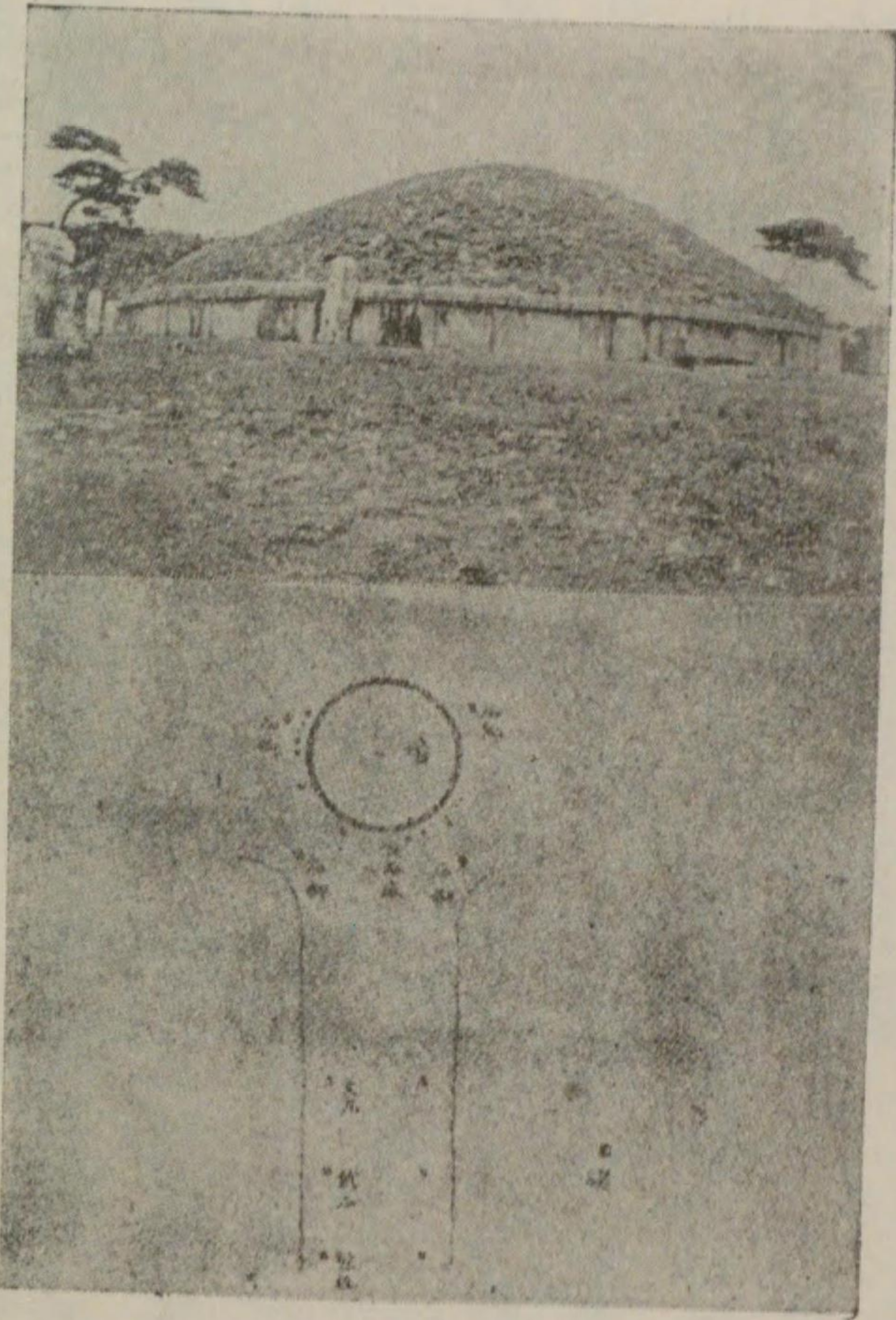
憲德王陵(慶州郡川北面) 慶州の東方明活山の西北なる平地にある今大半破壊されてゐるが墳の周圍の護石及び石欄の様式は文武王陵に似てゐる前面に石床ありて上に蓮花を刻んでゐる今石人石獸等の象設を缺いてゐる。

興德王陵(慶州郡江西面) 新羅王陵中最も制度の完備せる者で次の高麗陵の標準となつたものであ



る新羅は從來地相にあまり注意を拂はざりしが此陵に至り始めて地相の選擇に重きを置くこととなつた即ち後には稍高き山を負ひ左右には後の山より分派せる丘陵前に延びて龍虎の勢をなし南は廣き平野に臨んでゐる是が次の高麗朝鮮時代の陵墓の地相の標準となつたのである墳隴の周圍の護石の束石

圖九十七第



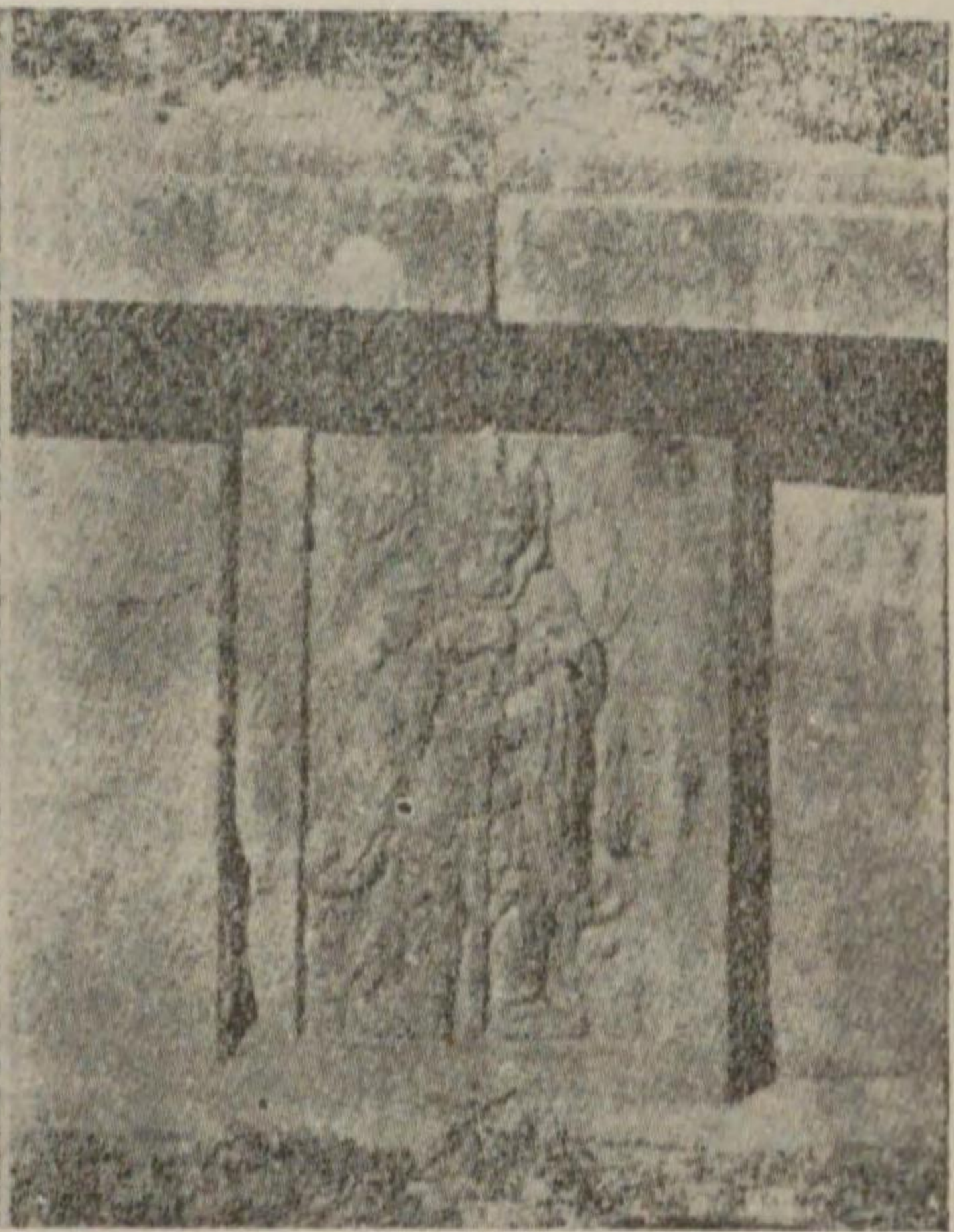
も多少纖弱の風がある是れ新羅の藝術が次第に初期雄大の風を失ひ固有の特色を示す様になつたのである。

圖十八第

陵王德興

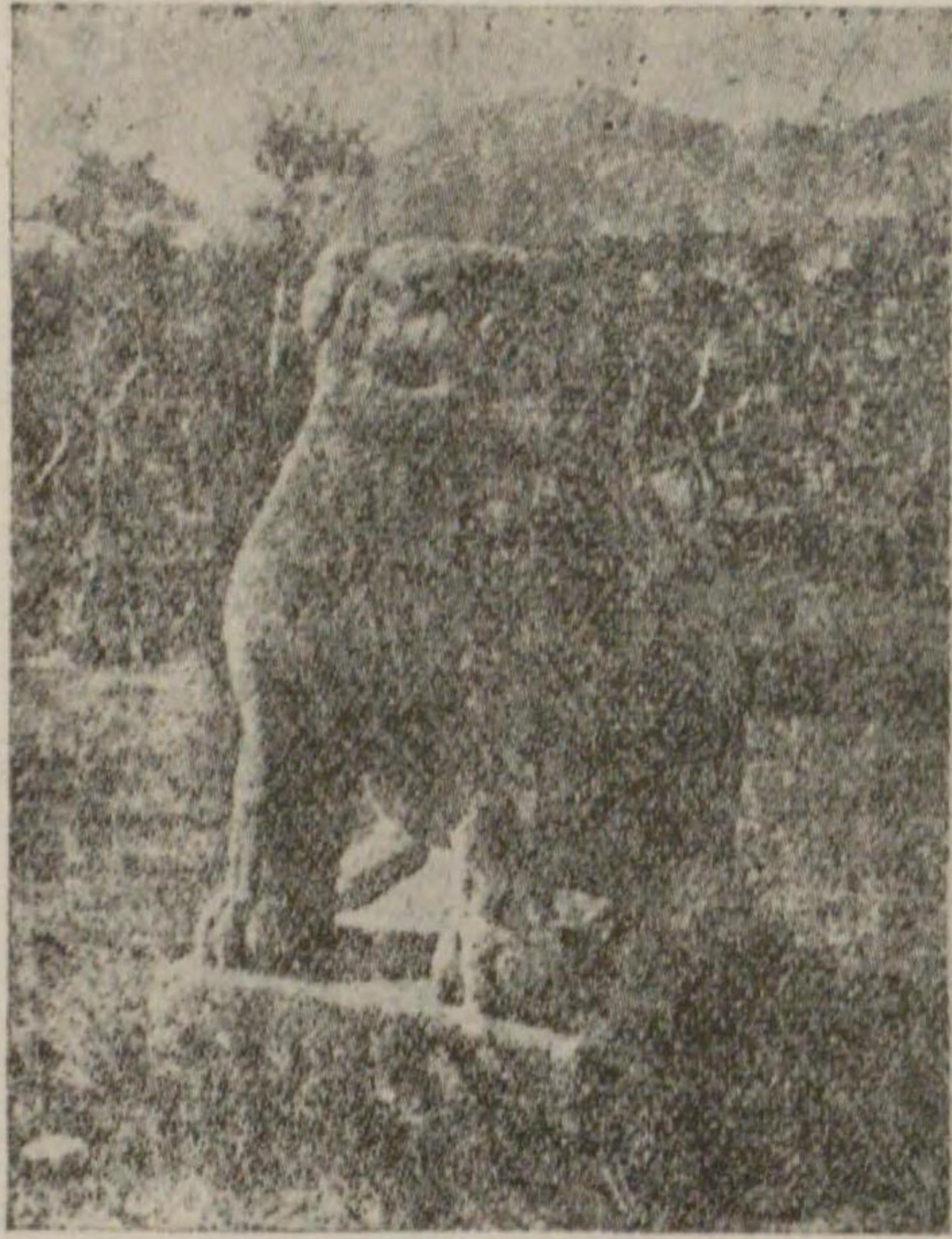
には十二支神の像を浮彫にしてゐるが稍纖弱の弊に陥つてゐる其周圍には例の如く石欄を繞らし前面に石床を置き四隅に石獅を配し墳を守護するの狀をなさしむること景徳王陵の如く更に前面に文武石人各一對石柱一對を立て東方に碑を立てたのであるが今碑身を失ひ頭部を失ひたる龜趺のみ遺つてゐる石獅文武石人手法巧麗なれど

圖一十八第



石午陵王德興

圖二十八第



獅石陵王德興

他の諸王の陵は多くは形式簡單にして或は太宗武烈王陵の如く墳隴の周圍に處々土留石を配し(景康王陵)或は束石なき護石を繞らし(定康王陵、憲康王陵)別に石欄石人石獸石柱石碑等の設が無い唯佛國寺驛の附近にある者何人の墓なるや不明なれど其他の王陵の墳隴が悉く平面圓形なるに反し是れは方形にして四面の護石の束石に十二支神像を配してゐるのは珍らしい其上此墳のみ近時土民の發く所となり内部の玄室の構造の明白になつたのは當時代唯一の例で是によりて他の陵墓の玄室の形式を推すことが出来る玄室は長方形にして四壁は切石を以て築き天井は大なる石を並べ床には石を敷き棺を安置すべき石床を一段高く設け前面に參道を有してゐる遺物は







同	同	京	畿	廣	州	鐵造釋迦坐像 今李王家博物館藏
同	同	京	城	州	鐵造釋迦坐像 今李王家博物館藏	總督府博物館藏小銅像
同	同	京	城	州	鐵造釋迦坐像 今李王家博物館藏	李王家博物館藏小銅像

石窟庵佛像

慶州石窟庵なる石窟のことは既に前に説いた其内部に安置されたる本尊釋迦如來の坐像は石蓮座の上に在りて高さ約九尺姿勢莊重にして相好端嚴衣文の線條は流暢にして手法頗る勁健蓋朝鮮に遺存せる最も優秀なる彫刻にして之を當時の支那日本の傑作に比するも殆ど遜色はない又石窟の内外の壁に陽刻された十一面觀音、十羅漢、梵天、帝釋天、四天王、仁王、八部神將等の像は何れも無比の優作特に十一面觀音及び梵天の像は技工精鍊にして最も端麗崇高の精神を發揮してゐる。既に説きしが如く石窟の構造は支那の範疇を脱して獨得の工夫を運らせし者である。是等の佛菩薩天部等の像も亦唐の様式を離れて新羅固有の情趣をあらはし當時新羅文化の性質を明かに語つてゐる。

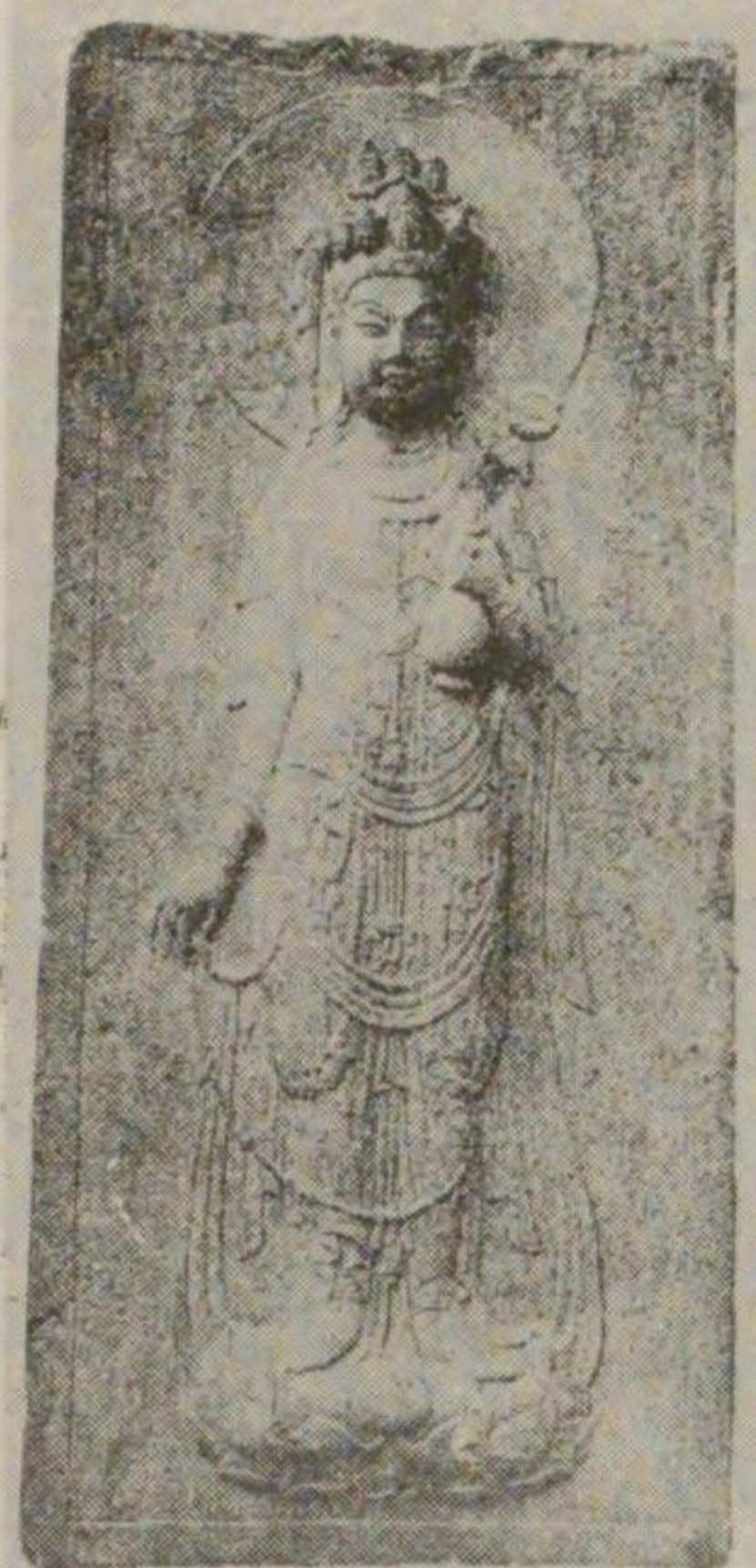
甘山寺石造彌勒菩薩立像及阿彌陀如來立像 元慶州郡外東面上薪里なる甘山寺廢址にありしが、今移されて總督府博物館内に安置されてゐる。背光の刻銘によれば聖德王十八年(開元七年)重阿含金志誠が國王、考妣、亡弟、亡妻、亡妹及び繼妻、庶兄等の爲め甘山寺を創め此等の佛像を造りし者にして現存在銘佛像中最古の者である。共に花崗石より成り多少磨滅の憾なきにあらざれども相好端嚴にして

圖三十八第



石窟庵釋迦像

圖四十八第



石窟庵浮彫一十面觀音像

圖五十八第



甘山彌勒勒像

朝鮮の美術工藝

軀軀の權衡亦美に細麗なる衣文を透して肉體美の窺がはれるやうに巧みに刻まれてゐる背光は佛體と共に一石より作り出され周縁に富麗なる雲文花文を配し火炎を刻んでゐる。

南山西麓石造釋迦如來立像 元慶州南山の西麓にありし者にして今移されて慶州陳列館内にある面相豊麗衣文穩健にして姿勢も亦よく整ふてゐる特に舟形の背光には火炎の代りに一種の寶草飾を浮彫にしてゐるのは珍らしい。

桐華寺毘盧庵石造毘盧舍那佛坐像 此像は八公山桐華寺なる毘盧庵の佛殿に安置されてゐる同寺三重石塔は惠恭王頃に作られたやうであるが此佛像も恐らくは其前後に成つたものであらう八角の臺座上に跏趺坐せる石像にして石造の背光を有してゐる像は高



圖六十八第



圖七十八第



圖八十八第



像佛那舍盧毘造銅殿雄大寺國佛 像佛藥造銅寺栗栢 像銅小殿仁能寺楡

さ約四尺五寸權衡美に衣文亦雄麗なれども近年拙劣なる補彩のために大に面目を損せしは惜むべきである。臺座は上下に蓮華を刻み腰に寶相花及び獅子を作つてゐる又背光には九躰の化佛を顯はし纖巧なる花文火炎を浮彫としてゐる兎に角此像は臺座背光共に完備せる此種石造の最も代表的の者である。

毘盧寺寂光殿石造毘盧舍那佛坐像及阿彌陀如來坐像。毘盧寺は慶北榮州郡小白山にありて文武王十六年の創立と稱せられてゐる其佛殿内に安置せる此兩佛像は年代不明なれども恐らくは當代初期の者なるべく躰軀の美面相の美線條の美手法の美相待ちて此種希有の傑作たることを示してゐる。

慶州掘佛寺四面石佛。三國遺事には景德王の時始めて地中より掘り出せる者と稱してゐる其眞否不明

なれども兎に角當代初期に屬すべき者であらう其石の正面廣さ約十二尺釋迦三尊を造顯し右側面は廣さ約六尺八寸高肉彫の立菩薩及び陰刻立佛二軀を作り背面は廣さ約九尺二寸藥師坐像を陽刻し左側面は廣さ約七尺二寸立佛二軀を半肉彫としてゐる要するに此四面佛石は當時此種彫刻の最も偉大なる者にして手法穩健最も雄麗の氣象を示してゐる。

防禦山第二峰摩崖陽刻三尊佛像。咸安防禦山第二峰にある磨崖三尊佛像は刻銘により哀莊王二年に成つたことが分かる陰刻と陽刻とを合せ用ひた簡樸の作であるが其年代の正確なるは貴い俗離山法住寺にも磨崖彌勒菩薩の大像がある大なる巖石の面に陽刻され今地上高約二十尺臺座の上において兩脚を垂れてゐる面相衣文皆雄勁の手法より成り此種磨崖佛中最も傑出せる實例である。

佛國寺大雄殿銅造毘盧舍那佛坐像及極樂殿銅造阿彌陀如來坐像。佛國寺の石塔石階段が景德王朝に經營せられしことは既に前に説いた今大雄殿内にある毘盧舍那佛及び極樂殿安置の阿彌陀如來の兩銅像亦恐くは其頃に成つた者であらう何れも等身像にして姿勢雄偉衣文の手法亦勁健其面相亦端麗なりしも近年胡粉を塗り眼や口や眉や髯などを描き拙惡な補修をしたため頗る當初の美を毀損したのは惜むべきである。

栢栗寺銅造藥師如來立像。慶州邑城の東北金剛山に栢栗寺と稱する古刹がある其佛殿の内部に銅造



藥師の立像がある相好豊麗姿態よく整ひ適勁なる線條を以て衣文を作つてゐる。其様式を見るに前兩者と年代に於て大差なかるべくそれ等と共に現存せる當代銅像中の最大にして且最優の標本であらう。

楡帖寺能仁殿銅造五十三佛像

東國輿地勝覽に此五十三佛は月氏國より鐵鐘に乗り海に泛ひて來り金剛山の洞門に入り楡樹の下なる大池の岸に羅列せしを新たに楡帖寺を創めて安置した者であるといふてゐる今寺の本殿たる能仁殿内に楡樹の幹や枝を摸し枝上處々に金銅の小佛像を安置してゐる今三軀を失ひ五十軀を存してゐるが其中四十四軀だけが當代に屬すべき者で其他は高麗時代に屬すべき者である此等小像は多くは釋迦、藥師、彌陀等にして最も大なるは身長一尺三寸三分に至り最も小なるは一寸九分に過ぎず多くは六七寸前後である何れも當代の優作にして中には相好秀麗姿勢優雅にして技工の精鍊嘆稱に値すべき者もある蓮座亦變化に富み意匠頗る自由である唯近年新たに金箔を押せしため多少の外觀を損せしもそれが割合に新らしく見えしにより却て散佚の難を免かれたのである余は大正元年十月始めて寺に至り之を見て一佛殿内にかく多數の優秀なる新羅佛を保存せるに驚き寺僧と當局に注意し保護の道を講ずることゝしたが其設備未だ成らざる前に賊の爲め數軀を盗み去られしは惜しむべきことである。

圖九十八第



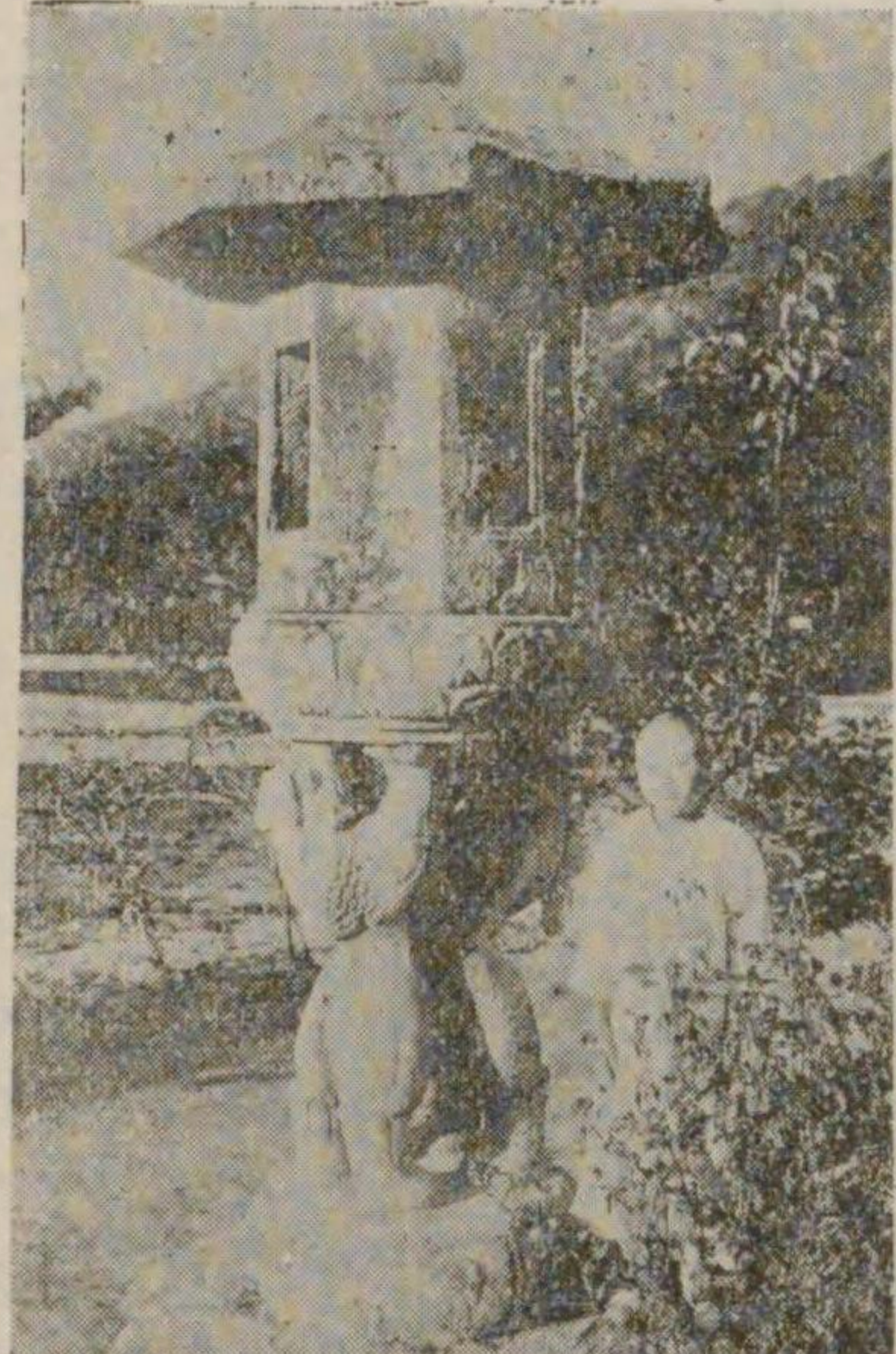
像那舍盧毘造鐵寺岸彼到

圖十九第



像銅小館物博府督總

圖一十九第



燈石獅双寺住法

到彼岸寺鐵造毘盧舍那佛坐像 像は高さ三尺三寸九分鐵造にして亦鐵造の臺座の上に載つてゐる臺座の上下には雄健なる蓮瓣を刻んでゐる像は姿勢端麗權衡美にして衣文の曲線頗る流暢なれども近年全身を石灰にて塗り勝手に眉目口髻を描いたため大に美質を損してゐる併し像背に咸通六年の銘文を刻してゐるから製作の年代も確實で在銘銅造唯一の實例となつてゐる。

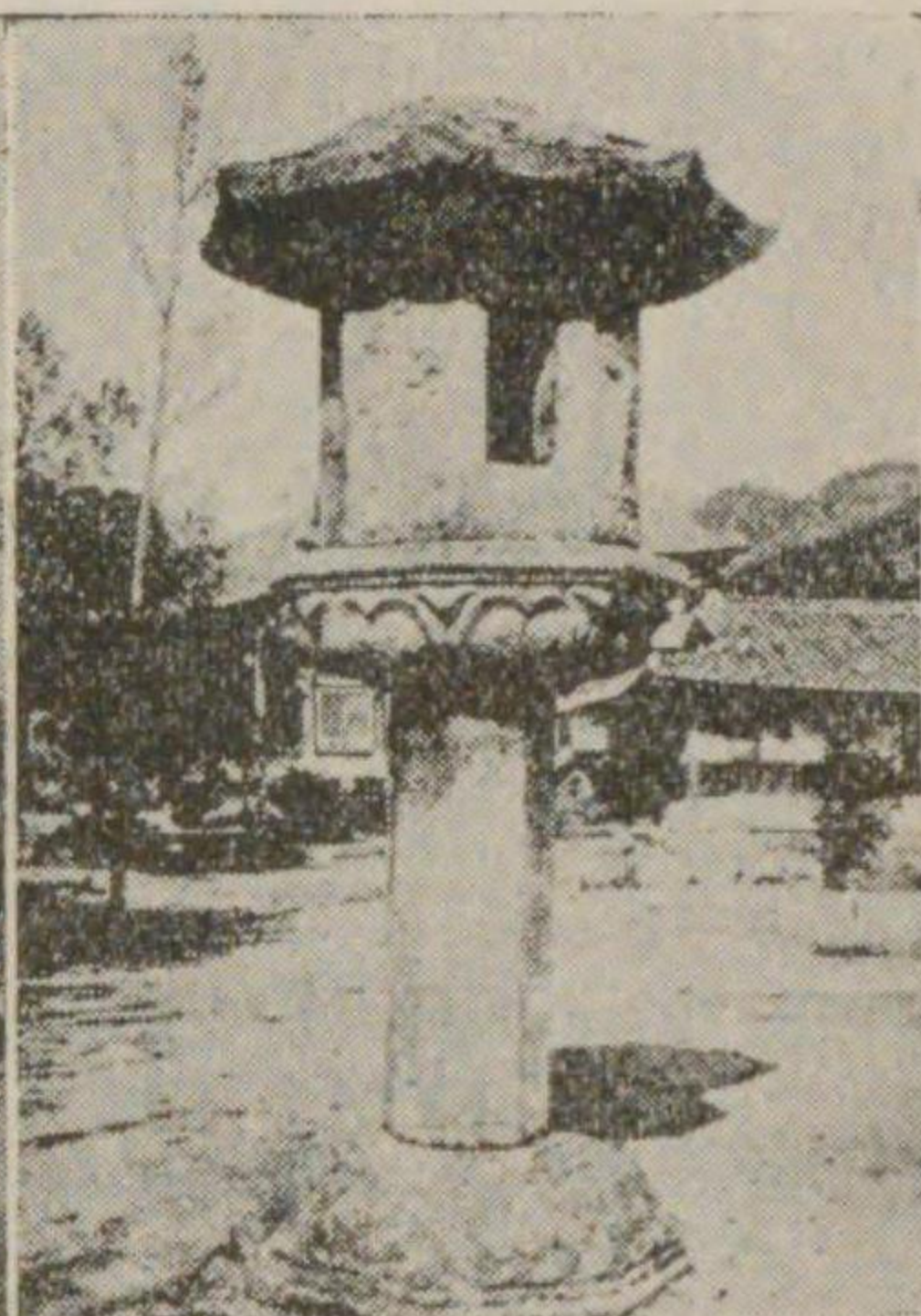
自餘鐵像 當代に屬すべき鐵像は右の外往々遺存してゐる其中最偉大なるは廣州郡西部面の廢寺にあつた釋迦坐像にして高さ約九尺五寸技巧はやゝ洗鍊を缺きたれども其鐵佛として偉大なる點に興味がある忠州邑内丹湖寺及び邑東南廢寺址にある兩鐵造釋迦の坐像亦佳作を以て目すべきものである。







圖二十九第



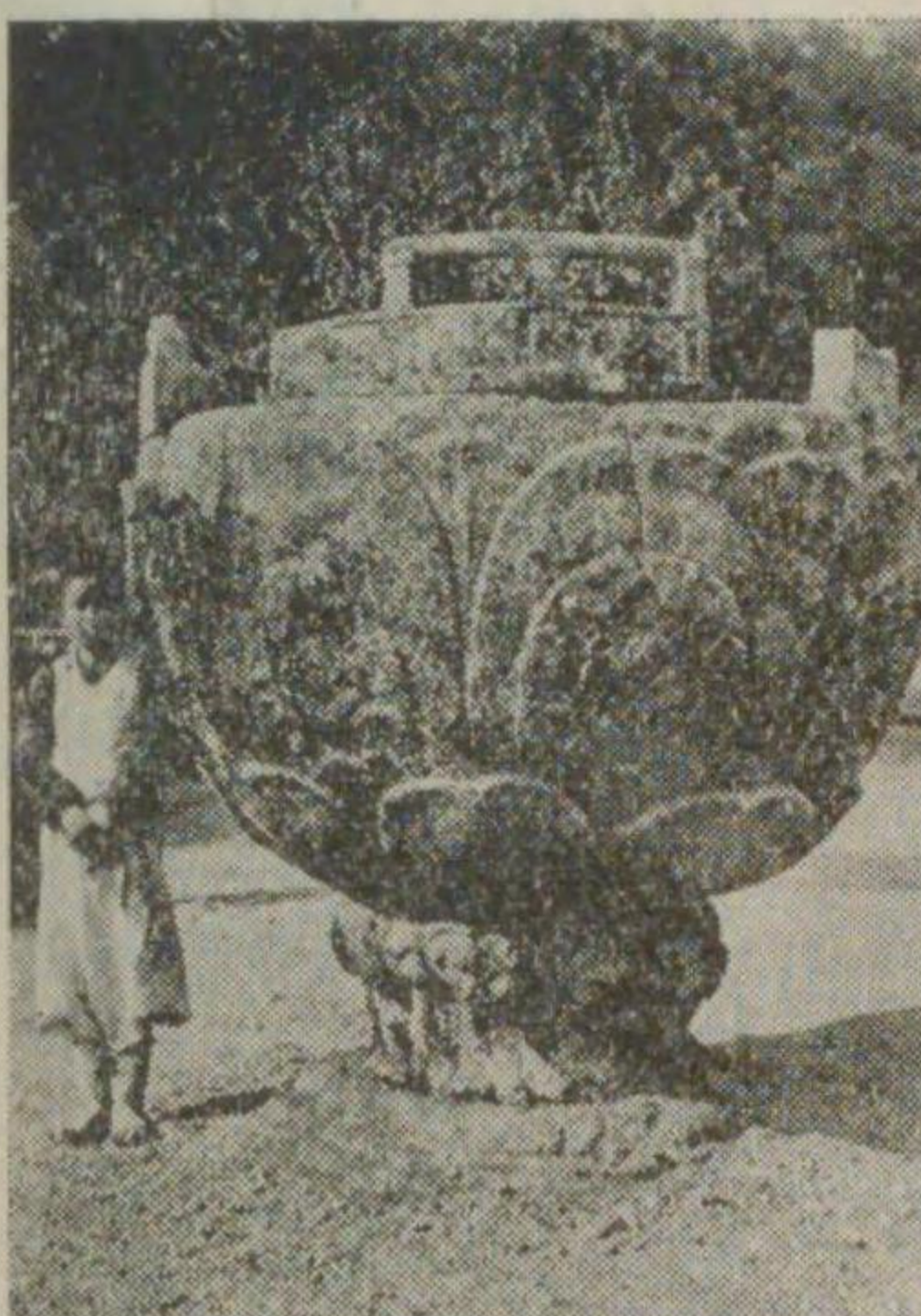
燈石王天四寺住法

圖三十九第



燈石寺殿華

圖四十九第



池蓮石寺住法

部から成つてゐる中に就き最も珍らしきは俗離山法住寺の双獅石燈である其竿石は兩頭の獅子相對立して中臺石を支承するの状をなしそして其獅子は最も雄渾簡勁の氣魄をあらはしてゐる同寺四天王石燈は蓋朝鮮に於ける石燈の雄にして其竿石の細く火袋石の大なるは我東大寺大佛殿前の金銅大燈籠を想起せしめる火袋石は八角にして其四隅に雄麗なる四天王を浮彫にし地臺石の上面と中臺石の下面に豊美なる仰蓮覆蓮を刻み出してゐる同寺には猶他に二基の當代に屬する石燈がある浮石寺、佛國寺、梵魚寺、海印寺の石燈は形式前者に似て多少優雅の風を帯びてゐる特に浮石寺石燈の火袋石には立菩薩像を浮彫にしてゐる。

華嚴寺覺皇殿前石燈 は高さ約二十一尺朝鮮現存最大の實例にして其竿石は瓶の如く胴部膨れて上下くびれ八角の蓋石の隅々に反花を作り頂に寶蓋を有せる相輪様の者を冠せるな

ど蓋從來の形式を本としてそれに新機軸を出させる者である慶開仙寺石燈は其様式前者に同じくして規模較小手法寧精麗である火袋石の左右にある刻銘によれば唐咸通八年の建立の如く別に龍紀三年の刻銘がある元慶州邑内にありし石燈は今移されて陳列所にあるが其八角の地臺石の周邊なる格狹間内に天部像を容れ上に雄麗なる蓮華を刻み出させるは蓋此種無比の傑作である。

以上の外桐華寺、金山寺、無量寺等にも當代に屬すべき石燈を有してゐるが何れも法住寺四天王石燈の流れを汲める者である。

石蓮池 忠北報恩郡の俗離山法住寺に石蓮池と稱する者がある先づ臺石に蓮華を刻み其上に沸き上がる雲を作り以て偉大なる石蓮花を承けてゐる蓮花の周圍に刻まれた瓣面には寶相花を浮彫にし富麗の氣象をあらはし更に石蓮花の上面は深く鑿開して水を湛へ其周縁に我寧樂時代の様式を想起せしむべき高欄を繞らし内に蓮を植ゑる様にしある形態頗る美にして手法洗鍊恐らくは當代初期に屬すべき者であらう。

金工 の主なる者は銅鐘である而も朝鮮に於ける遺物は僅かに二口日本に保存されし者亦二口に過ぎぬそれでも朝鮮遺存の者は當代を代表すべき傑作にして今支那にも日本にも之に比すべき者を發見せぬ其四口は左の如くである。



江原平昌	上院寺鐘	聖德二四	唐開元一三	神龜二	七二五
慶北慶州	奉德寺鐘(今在慶州陳列館)	惠恭六	唐太曆五	寶龜六	七七〇
日本福井	常宮神社鐘	興德七	唐太和六	天長九	八三二
日本大分	宇佐八幡宮鐘	孝恭七	唐天復三	延喜三	九〇三

右の外對馬國國分八幡宮に天寶四年(景德四)在銘の鐘ありしも維新の際失はれた又播磨の尾上神社にも様式上當代の者と認むべき鐘あれども年代銘は無い。

此等の鐘は何れも支那日本の者と異り一種朝鮮式とも稱すべき特異の様式を有つてゐる支那唐代の鐘又は我寧樂平安時代の鐘は共に其周圍に袈裟襷と稱する紐様の線を以て縦横に鐘を縛つた形をあらはし上部に乳を並べ下部に撞座を設け更に頂部に兩龍相背きて成れる所謂龍頭が附いてゐる。

然るに新羅時代の鐘は此れに異り袈裟襷なく肩帶口帶と稱して寶相花などの文様を浮彫にせる廣き帶を肩頭と口縁とに繞らし更らに肩帶の下に接し四方に所謂乳廓を作つてゐる乳廓の周縁亦寶相花飾を施し廓内に九個の蓮華様乳を配し乳廓外の間地には飛天像を陽刻してゐる更に鐘頂には一隻の龍と旗挿と稱する筒様の者を以て龍頭としてゐる此様式は支那にも日本にも全く形迹を發見することができぬから恐らくは新羅に於て工夫されし者なるべく高麗朝鮮時代を通じて永く其影響を遺してゐる。

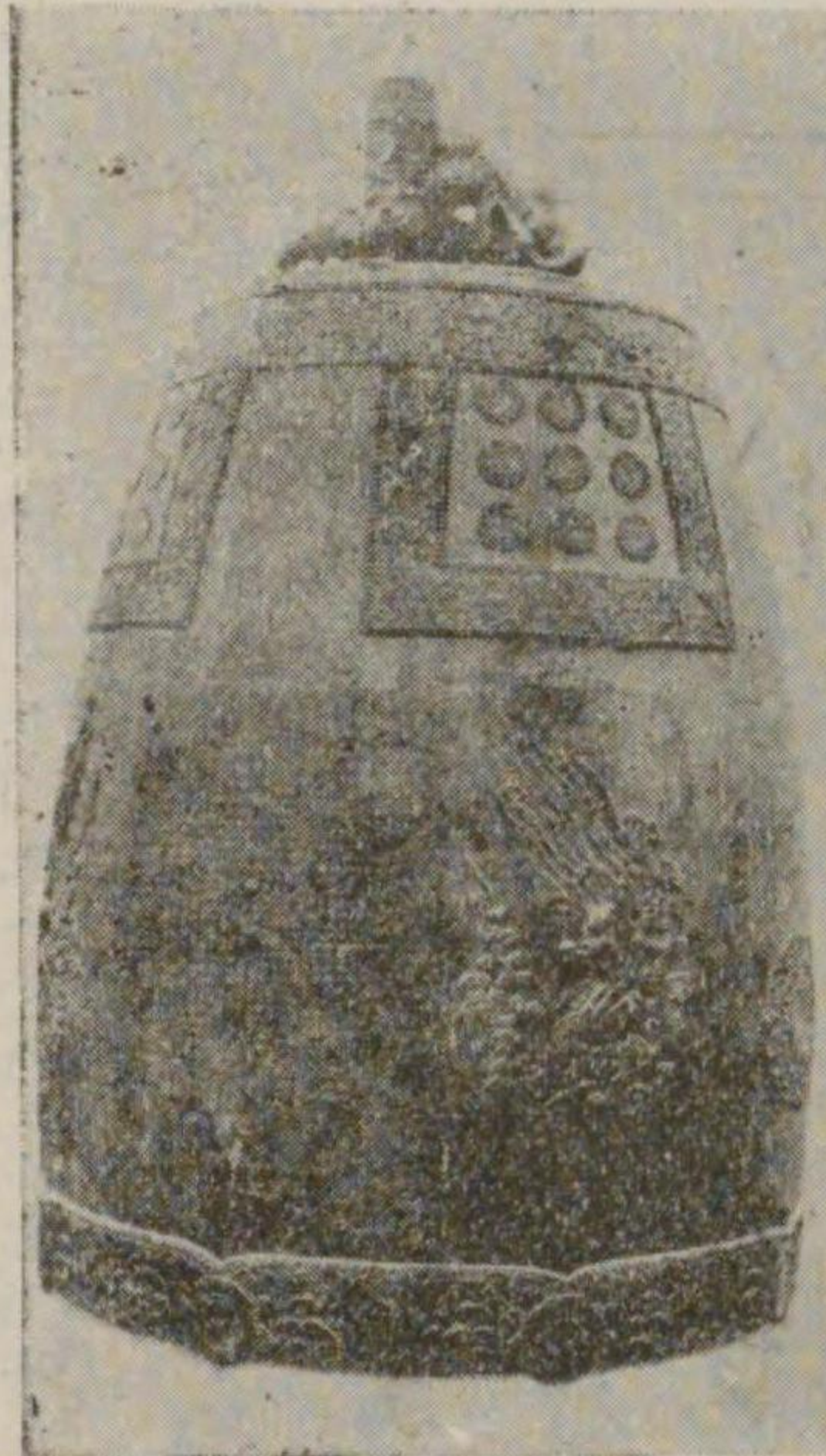
五臺山上院寺の鐘は開元十三年、慶州陳列館なる奉德寺の鐘は大曆五年の刻銘を有し朝鮮に於ける。

圖五十九第



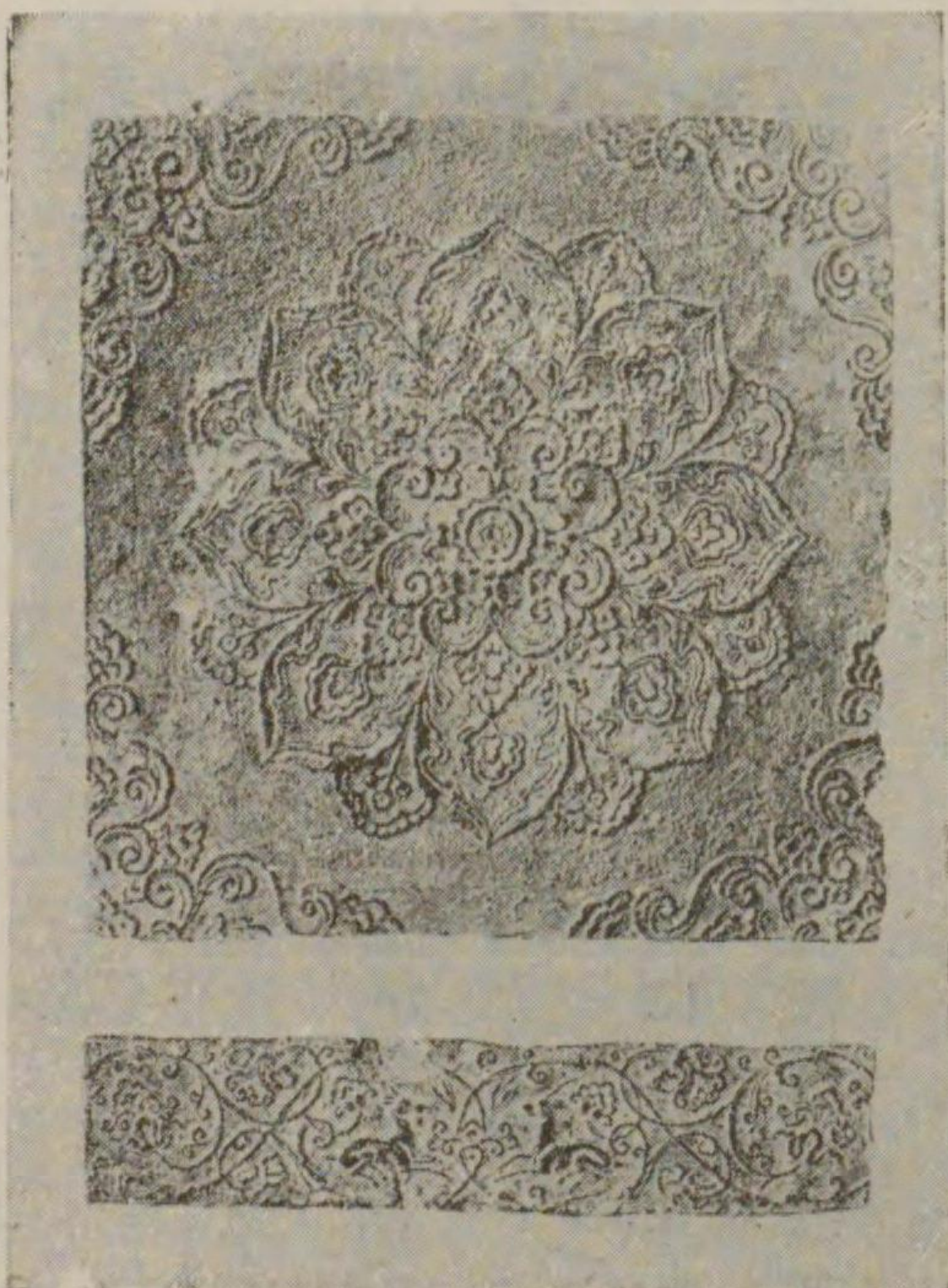
鐘寺院上

圖六十九第



鐘寺德奉

圖七十九第



博様文彫浮土出州慶

る最古の實例にして亦最美の標本である其優秀なる點に於ては古今を通じて之に比敵すべき者はない上院寺の鐘は肩帶口帶乳廓の周縁に繊麗なる天人及び寶花をあらはし乳廓の下に當りて左右に各一對



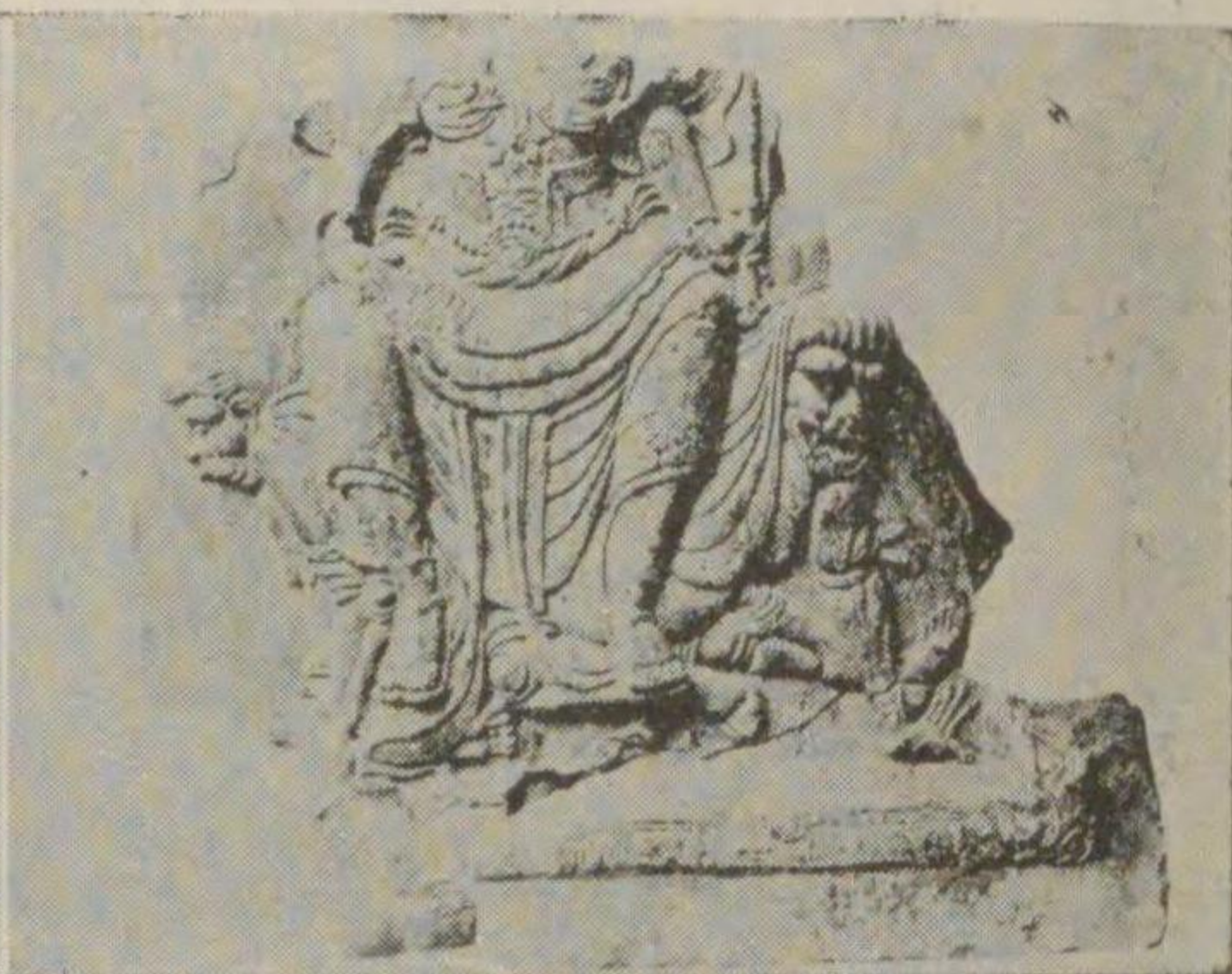
づゝの天人を陽刻して優婉温雅の妙趣を示してゐる其他撞座の寶相花の文様は穩麗に龍頭の手法は雄渾の精神をあらはしてゐる。

**奉德寺鐘** 元慶州南門外鳳凰臺下の鐘閣内にありしが今邑内陳列館に移されてゐる口徑實に七尺五寸京城鐘路なる普信閣の大鐘と共に大きに於ては現在朝鮮に於ける銅鐘の兩大關である其鐘口は八稜形をなし口帶肩帶及び乳廓には富麗を極めたる寶相花文を陽刻し乳廓内には九個の蓮花文を容れ乳廓の下には各雄麗なる飛天像を作り別に豊美なる撞座と豪勁なる龍頭とを以て古今無比の名鐘を鑄成したのである此鐘は銘文によれば景德王が其父聖德王のために銅十二萬斤を捨て鑄造せんことを企てられしも果さずして薨せられしかば其子惠恭王遺命を奉じて鑄成せし者である。

**越前常宮神社の鐘** は太和六年宇佐神宮の鐘は天復三年の銘を有し早くより我國に將來せられしものである而も前兩者に比すれば形式は同一なれども年代も後れ規模も小に技工も亦粗笨となり新羅の藝術が次第に後期に向ふに隨ひ衰頹の兆を萌せしことを語つてゐる。

**磚** 慶州附近に於ける當時代の宮殿佛寺の廢址より美なる裝飾を有せる磚の殘片が多く發見された此等の磚は平面多くは方形なれども稀には長方形の者もある表面の中央には大なる寶相花文若くは蓮花文をあらはし四隅にも亦寶相花文を配せる者最も普通にして往々幾何學的な文様、佛殿様、佛塔様等を浮彫にした者もある又側面にも往々唐草文様を施せる者もある此等の文様は何れも纖麗優美の氣象をあらはし技工の洗鍊頗る歎賞に値する。

圖八十九第



磚釉土出寺王天四

圖九十九第



瓦鬼土出州慶

慶州四天王寺廢址より四天王像の陽刻を施せる磚片が發見せられた此等四天王像は表面に黄碧色の釉藥を施し姿態頗る寫實的にして最も雄渾の風貌を具へ足下に雌伏せる鬼形の怪異にして表情の美に富めるなど無比の傑作を以て目すべき者である又同寺址より綠釉を施せる床磚が出土したが現に慶北榮州浮石寺無量壽殿の内部佛座の周圍にも當代の施釉磚が敷かれてゐる當時唐の影響を受けて此種技術の發達實に驚くべき者があつたのである。

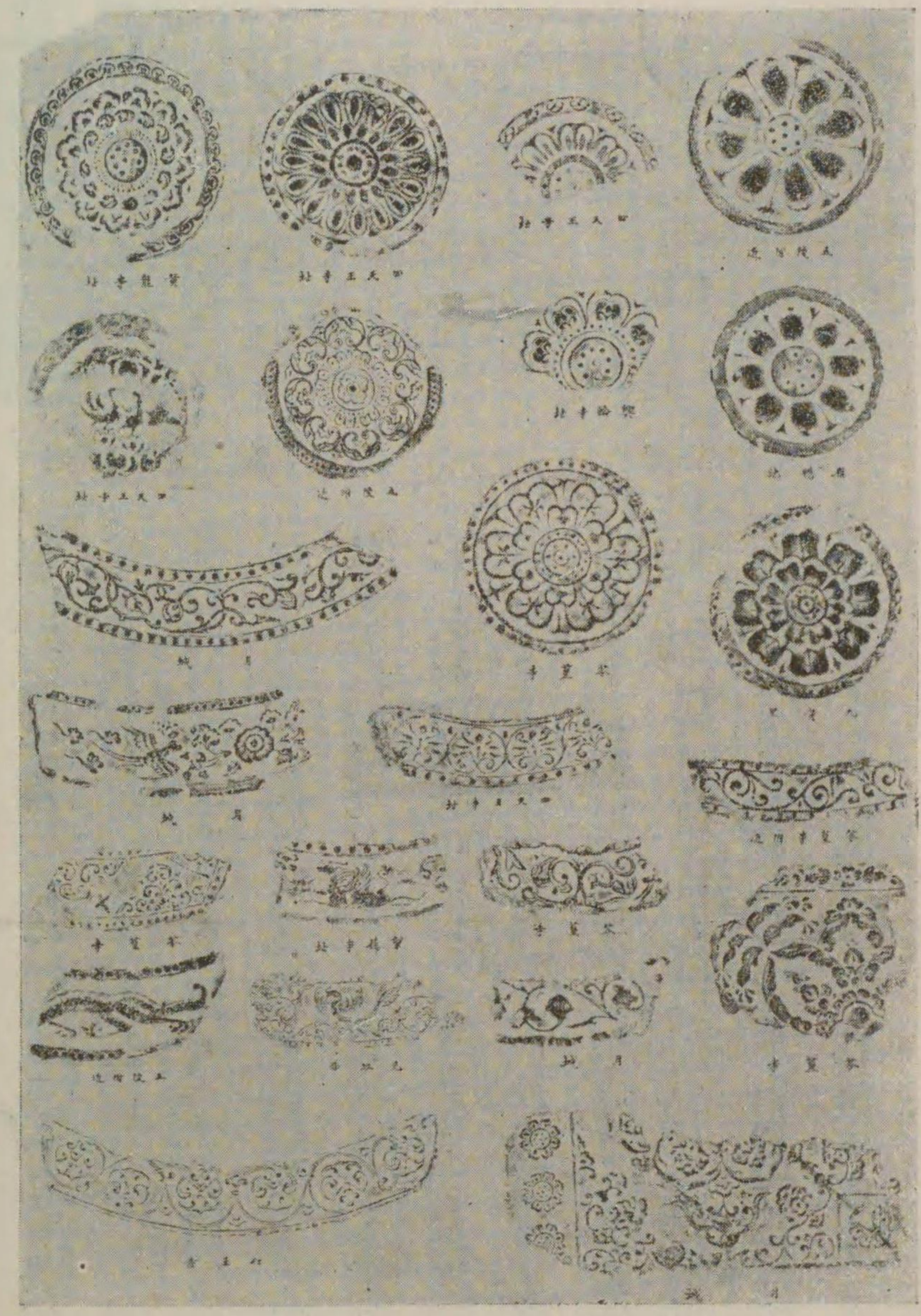
**瓦** 慶州を始めとして各道の伽藍及び其廢址并びに宮殿の遺址より多數の瓦が發見せられた巴瓦唐草瓦最も多く稀には鬼瓦もあれば鳴尾の殘缺もある。

巴瓦には蓮花文を用ひし者最も多く又寶相花文、鬼面文、瑞禽、鳳



鳳文、伽陵頻伽文等往々應用せられてゐる唐草瓦には忍冬文、寶相花文、葡萄唐草文、蓮唐草及び菊唐

圖 百 第



標文當瓦代時一統羅新

草文、雲文、火炎文等多く用ひられ又麒麟、鳳凰、瑞禽、鬼面、等を浮彫にした者もある要するに此等瓦當の文様は技工精鍊にして或は雄健或は優雅或は富麗或は纖巧の氣象をあらはし特に瓦當の下面軒先に露出せ

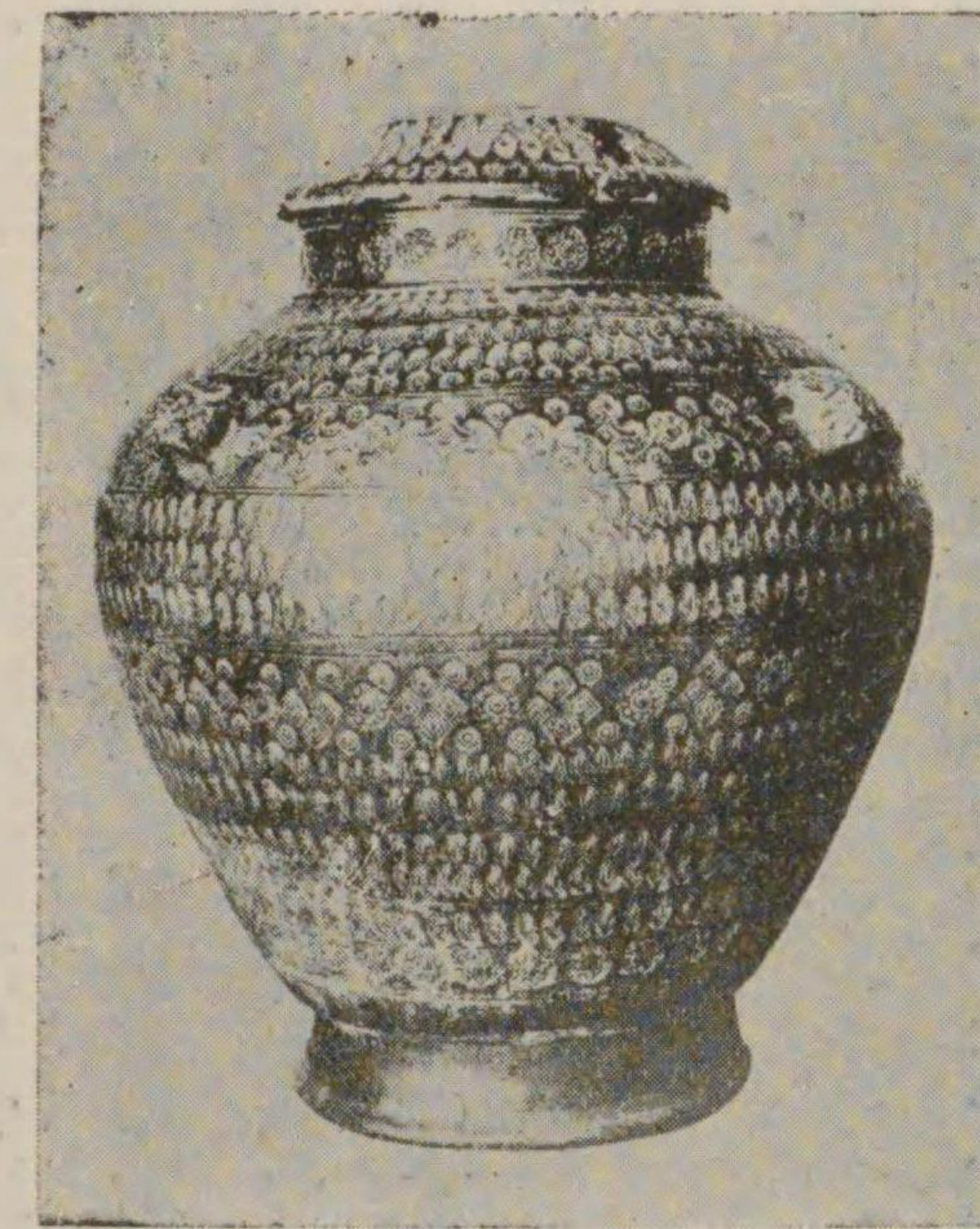
る處にも往々精細なる文様を作つてゐるかくの如く意匠の變化縱横にして手法の細巧纖麗なるは新羅

圖 一 百 第



壺骨土出州慶

圖 二 百 第



壺釉黃土出州慶

固有の情趣を發揮せる者なれども一面には雄大豪健の精神を缺ける憾みがある又鬼瓦の完全なる者や其殘缺も相當に發見されてゐるが何れも技工精美頗る雄麗の氣象を發揮してゐる。

陶器 當代は佛教の隆盛に伴ひ火葬は一般の風習となり王陵の外は亦大なる墳墓を築くことなく遺骨は陶製の壺に藏め山上に小石室を作りて其内に藏むることゝなつた此等の陶製の壺は慶州附近なる南山仙桃山、金剛山、明活山等の山上より多量に發見された單獨に出づる者もあれば大なる壺の中に一個若くは數個の小壺を容れた者もある蓋と身との間には石灰を塗つて塞ぎ或は上下に作り出された鈕の孔に鐵杆を貫きて固めとしたものもある。

此等の陶器は無文の者もあれども多くは細密なる



印花文を有してゐる其質は灰黒色にして堅緻稀れに黄色、碧色、緑色の釉薬を施し精麗優雅歎賞に値すべき者もある要するに陶器は其焼方に於て其形態に於て其裝飾の方法に於て前代より一段の進境を呈し特に唐の影響により美しき釉薬を施せる者もあらはるゝに至つたのである惜むべきは從來出土せし者は此等骨壺の類に限られ他の種類の者を發見せざる故充分當時此種技工の發達を知ることができぬことである。

## 七 高麗時代

高麗の太祖王建は建國の始め都を松岳(今の開城)に奠め此に先づ壯麗なる宮闕を立て市塵を置き坊里を定め法王、王輪等の十寺を都城内に徧め大に紀綱を振作し佛教を興隆し文學を奨励し以て半島統一の大業の基を開いた。爾後殆ど二百年間は屢ば契丹の入寇ありしも比較的平和の時代にして物質的文化は大に發展した。李資謙の亂以後百年間は權臣交も威福を弄し紀綱紊亂の極に達し文化も隨て遂巡した。其後蒙古に隸屬すること約百年國王の廢立より大小の政務皆彼の羈絆を脱することが出来なかつた。元の滅亡後明の正朔を奉じ銳意古制を回復せんとしたが間もなく朝鮮の太祖李成桂の爲めに滅ぼされた。

高麗時代の文化を通觀すれば大體前後の二期に別つことができる。前期は太祖の建國より高宗の初年に至るまで、一面には新羅の文北を繼承し一面には宋の影響を受け更に固有の特色を發揮して建築に於ても彫刻に於ても其他の工藝に於ても頗る觀るべき者があつた。而も新羅時代の者に比すれば雄健の氣象次第に衰へて頗る纖巧華縟の弊を萌した。後期は高宗以後其滅亡に至るまで、新たに元の文化の影響を蒙りしも其藝術は漸く衰頽退化の運命に陥つた。前期に於ては初め宋の正朔を奉じ後遼金に服事せしも遼金の文化は主として宋を祖述せしのみならず高麗は始終中華として宋を敬慕し宋を師宗とせしを以て其感化を受くることも亦少くはなかつた。元は一方には宋の文化を繼承し一方には喇嘛教を崇信して西藏の影響を被ること大なる者ありしを以て高麗の藝術も其感化により多少喇嘛的色彩を帯ぶるに至つた。

建築物としては石造の塔婆浮屠の類多く保有され特に二三の木造建築が遺存し木造の彫刻や繪畫も僅かながら現存し其上古墳内より當時の優秀なる陶器銅器等の工藝品が多量に發見され爲めに當時代藝術の真相も次第に明かになつてきた。

都城 開城は高麗五百年間國都のありし處北は松岳に據り南は龍岫山に至り山谷の地形を利用して周圍に土築の羅城を繞らしてゐた。此羅城は顯宗の時契丹に備へんがため始めて築かれたものでそれ



までは唯天險に頼りて固めとしてゐたに過ぎなかつた。周圍に大門四、中門八、小門十三を開き其中正西門たる宣義門は上に樓觀を起し甕城を構へた堂々たる者であつた。此等の城壁は今猶形迹を有する所あれども多くは削平壞圮されてしまつた高麗の末年恭讓王の特別に其中に石築の内城を築いたが李

滿月臺

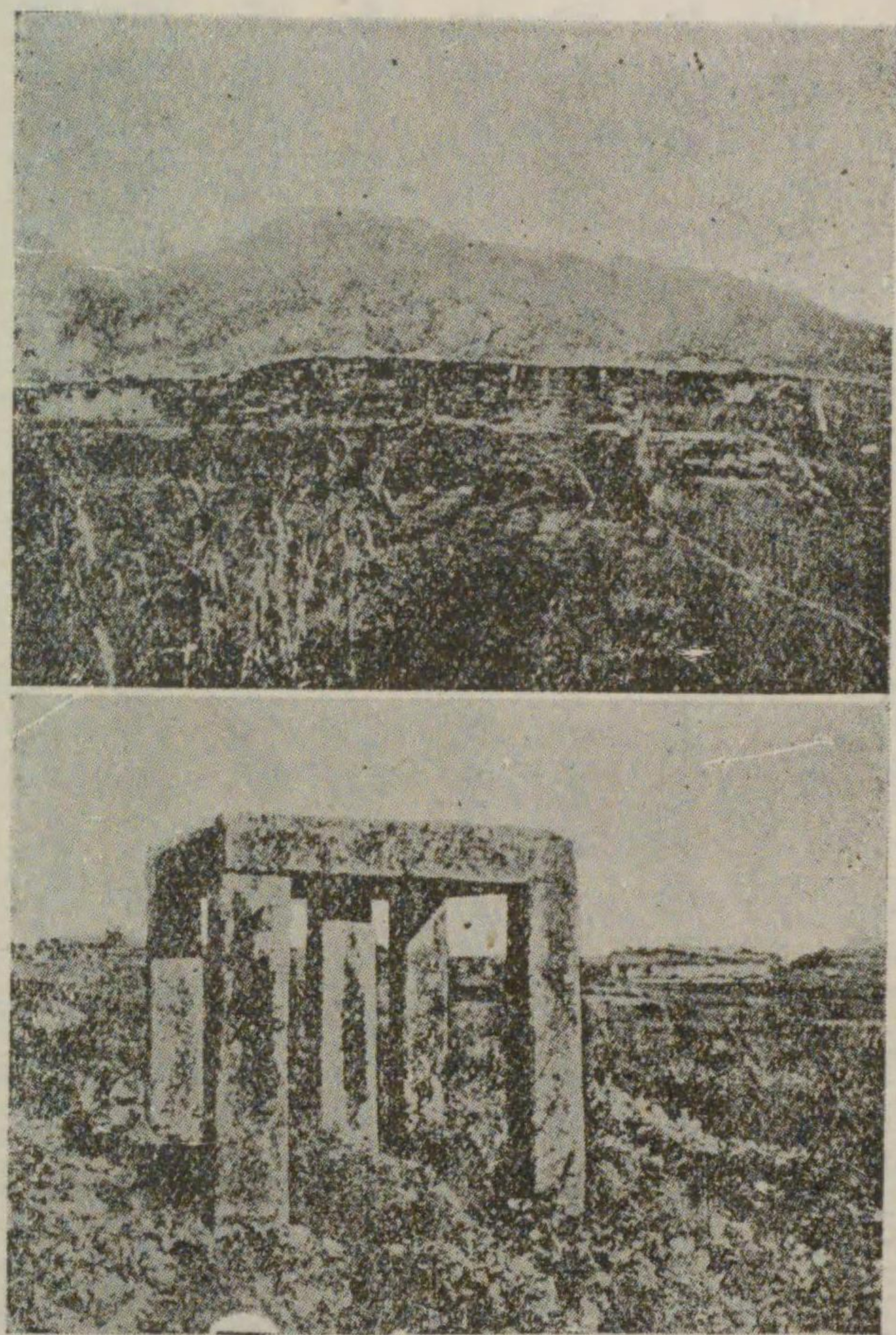
瞻星臺

朝太祖の時に至り始めて完成した。

●王宮 王宮の遺址は今滿月臺と稱し多少當時の殿門の形迹を徵する事が出来る。滿月臺は松岳の南麓に斗出せる高臺地にして其左右岡巒環擁龍虎の勢をなし主水客水其間に合流し南朱雀峴を隔て、遠く進鳳山を望む所謂四神相應の地にして異僧道誥の相する所と傳へてゐる。

樓を起し旁らに兩觀を設けた者であつたが今其遺址は耕地となつてゐる門を入れれば主水西より東に彎

第三百圖



第四百圖

流し其上に石橋を架した形迹が猶遺つてゐる。是れは宋の汴京の宮城の正面丹鳳門内にある州橋の制度に摸したものである。次に壯麗なる神鳳門、閭闔門次第して立ち今猶礎石を指點することが出来る。次は主要なる殿門の立ちし高臺にして高臺の前面には大規模の石階三道を設け其上に會慶殿門が立つてゐた。此門は五間三戸の門にして之を入れれば廣潤なる中庭を前にして宏麗なる會慶殿が立つてゐた。高麗圖經に『東西兩階、丹漆欄檻、飾以銅花、文彩雄麗、冠於諸殿』と載せたるを見ても其輪奐の美が想像さる。今其趾跡を見るに礎石猶現存して昔時の平面を窺ふことができる。即ち其平面は正面九間側面三間にして其中、中央三間を正殿となし左右各二間を夾室となし其間に一間の合の間を設けてゐる所から想像すれば今普通見る所の客舎の如く中殿の屋蓋は一段高く左右翼の屋蓋は其下に低く接續してゐた者らしい。會慶殿門の東西より廡廊左右に延び中庭及び會慶殿を内に包みて北行し王宮の周圍を繞つてゐた。會慶殿の後は地勢漸く高く長和殿其他の殿宇門廡次第に建てられてゐたので今猶趾跡を髣髴することが出来る。會慶殿の西北別に乾德殿があり其後に萬齡殿東に長齡殿其北に延英殿閣があつたが其趾跡は今遺つてゐない。高麗圖經に王宮の事を記して『圓樞方頂、飛翬連臺、丹碧藻飾、望之潭潭然、依崧岳之脊、踏道突兀、古木交陰、殆若嶽祠山寺而已』といへる者古來常に宮闕を平地に起せし支那人の目には不思議に映したに違ひない。而も其宏麗の美は今日遺存せる趾跡石階の壯大なるを



見ても想像することが出来る。

王宮は此の如く地形の選擇に於て支那の宮闕と相違すれども殿門の配置は唐宋の制度を參酌せし者にして其構造様式亦彼に學ぶ所多かつたであらう。近年殿堂の遺址から石階に用ひられし獸頭や多數の當時の磚瓦の類が発見せられた。

滿月臺の西方に瞻星臺と稱する者が立つてゐる。其平面は方七尺許四隅の方柱と中心の方柱とを以て其上に平らに架せられたる石床を支へてゐる。當初は其上に天象を觀測する機械を据付けたのであらう。唯史的方面の資料たる外藝術方面には格別價值ある者ではない此點につきては慶州の瞻星臺より遙かに劣つてゐる。

**佛寺建築** 佛教は高麗時代を通じて最も隆盛を極め王城の内外より各道に亘りて大伽藍が創建せられ佛教的藝術は大なる發展を見た。太祖は先づ都城内に法王、王輪、興國、開國等の十大寺を創め文宗の經營せし興王寺は十二年を閲して成り規模極めて宏麗其金塔は銀を裏とし金を表とし銀四百二十七斤金一百四十斤を要した。睿宗が安和寺を重修せし時其扁額は宋の徽宗の御書にして其門額は大師蔡京の書する所其丹青營構の巧海東に甲たりと稱せられた。又演福寺の佛殿は雄壯王宮に過ぐと曰はれ其五重塔は高さ二百尺を超えた。此他王城の郊外にあつた歸法寺、靈通寺、玄化寺の如き皆壯麗な

る大伽藍であつた當時佛寺の經營の盛なる以て一斑を想像すべきであらう。

此他諸道に或は再建され或は開創された大伽藍は枚擧に遑なく建築彫刻繪畫は勿論佛教的藝術は爲めに大なる發展をしたのである。然るに此等の伽藍は或は風雨の侵蝕により或は李朝排佛の大打撃を被りて大抵廢滅に歸し當時の建造物にして僅かに遺存せるは主として石造の塔婆浮屠の屬である。唯左記三字の木造建築の其間に無事に保存せられ高麗時代の様式を稽ふることを得るは僥倖と謂はねばならぬ。

慶北	州	浮石寺無量壽殿	辛 三	明洪武 一〇	天 授	三	一三七七
同	同	同 祖師殿	辛 三	明洪武 一九	元 中	三	一三八六
咸南	安邊	釋王寺應真殿	辛 一三	明洪武 一九	元 中	三	一三八六

**浮石寺無量壽殿** 浮石寺は新羅文武王十六年(西曆六七六)義湘法師草創の名刹である。其本堂たる

無量壽殿は高麗時代の遺構にして大正五年十二月修理の際西北の隅木に左の墨書が発見された。

鳳凰山浮石寺改椽記

此寺、唐高宗二十八、儀鳳元年、新羅王命義相法師始立、創建後元順帝十七年、至正戊戌、敵兵火其堂、尊容頭面、飛出烟燄中、在于金堂西隅文藏石上、而奏于 上、泪洪武九年丙辰、圓融國師改造改金、而至



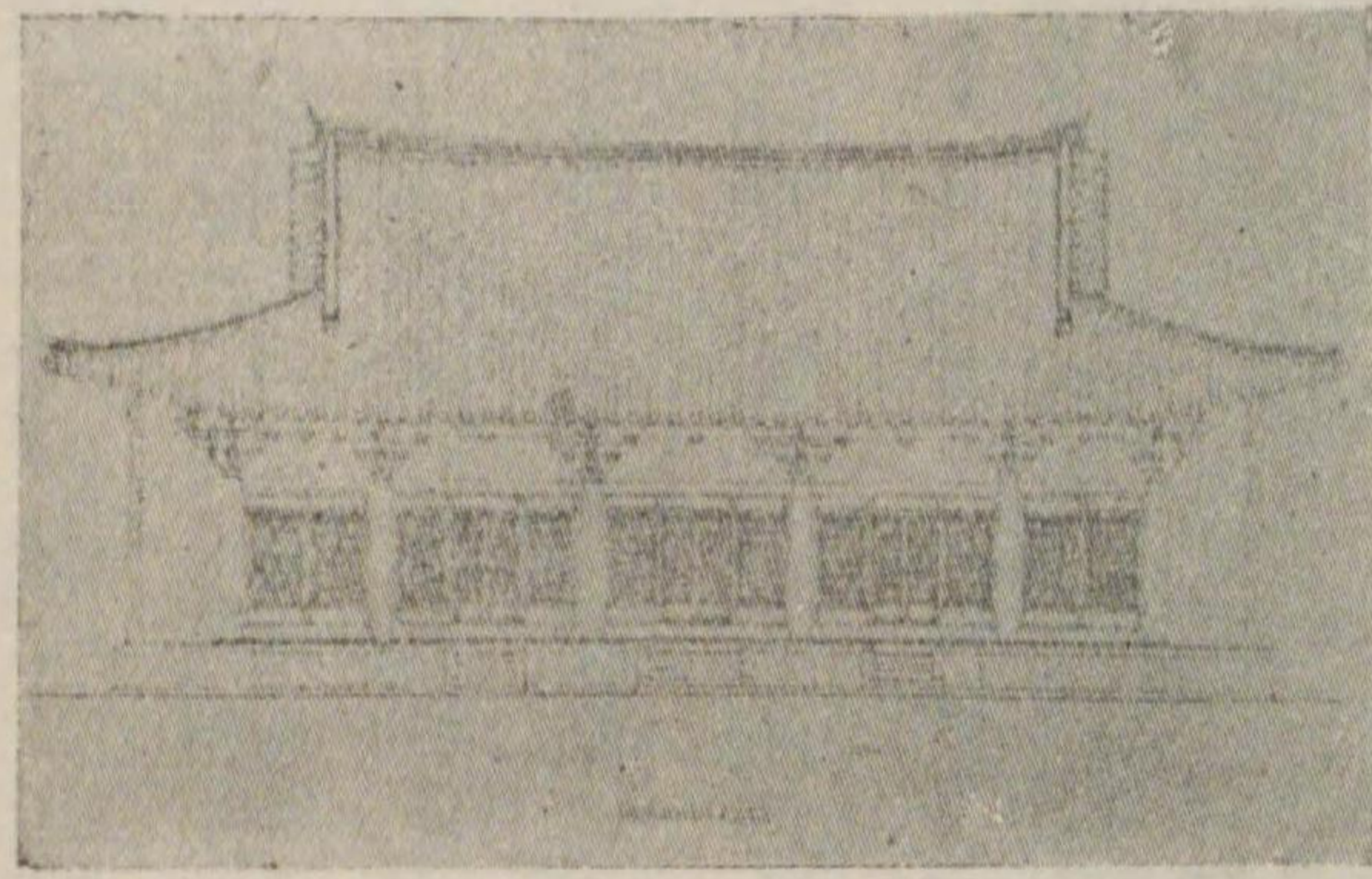
萬曆三十九年辛亥五月晦日、風雨大作、折其中樑、明年壬子、改椽新其畫彩、儼若舊制也、……又西南隅木にも左の墨書があつた。

此金堂者洪武九年、經倭火後改造、而至萬曆三十九年、自折口椽也。壬子年始役、畢於癸丑年八月也、此兩墨書によれば無量壽殿は至正戊戌（至正十八年高麗恭愍王七年）倭寇の爲めに焼かれたが本尊の頭部は不思議にも烟燭中より飛び出して無事であつた。其後洪武九年（高麗辛禑二年西曆二二七六年）再建し又佛像も新たに金を塗つたといふのである。此説に従へば此無量壽殿は高麗末の者となるのであるが余は様式上之を信ずることができぬ同寺祖師殿は次に説くべきが如く明かに洪武十年（辛禑三年）の再建であるから若し此隅木墨書の如く無量壽殿は洪武九年即ち其一年前に建てられし者ならば其構造に於て其様式手法に於て必ずや共通する所の性質を有つて居らねばならぬ。然るに兩者を詳細に觀察すれば其斗拱に於ても列形に於ても構造に於ても彼此甚しく相違し到底同時代に成りし者と考ふることができぬ。少くも無量壽殿は祖師殿より百年乃至百五十年程は古い様である。余の想像によれば晚くも今より約六百五十年前頃の者であらう隅木の墨銘は祖師殿の再興された辛禑二年を距ること二百三十四年後の萬曆三十九年に當れば祖師堂兵火後再興の際同時に無量壽殿を修復せしを再建と誤り倭寇兵火の説を附會した者と思はる。

是れ實に第是れ實に第二の法隆寺問題である。而も何れにしても此無量壽殿は高麗時代の再建たることは明かにして現在朝鮮に遺存せる最古の木造建築である。其平面は正面五間側面三間にして石壇上に立ち單層入屋造にして瓦を以て葺いてゐる。形態莊重にして特に内部天井構架の法は頗る奇巧を極めてゐる。

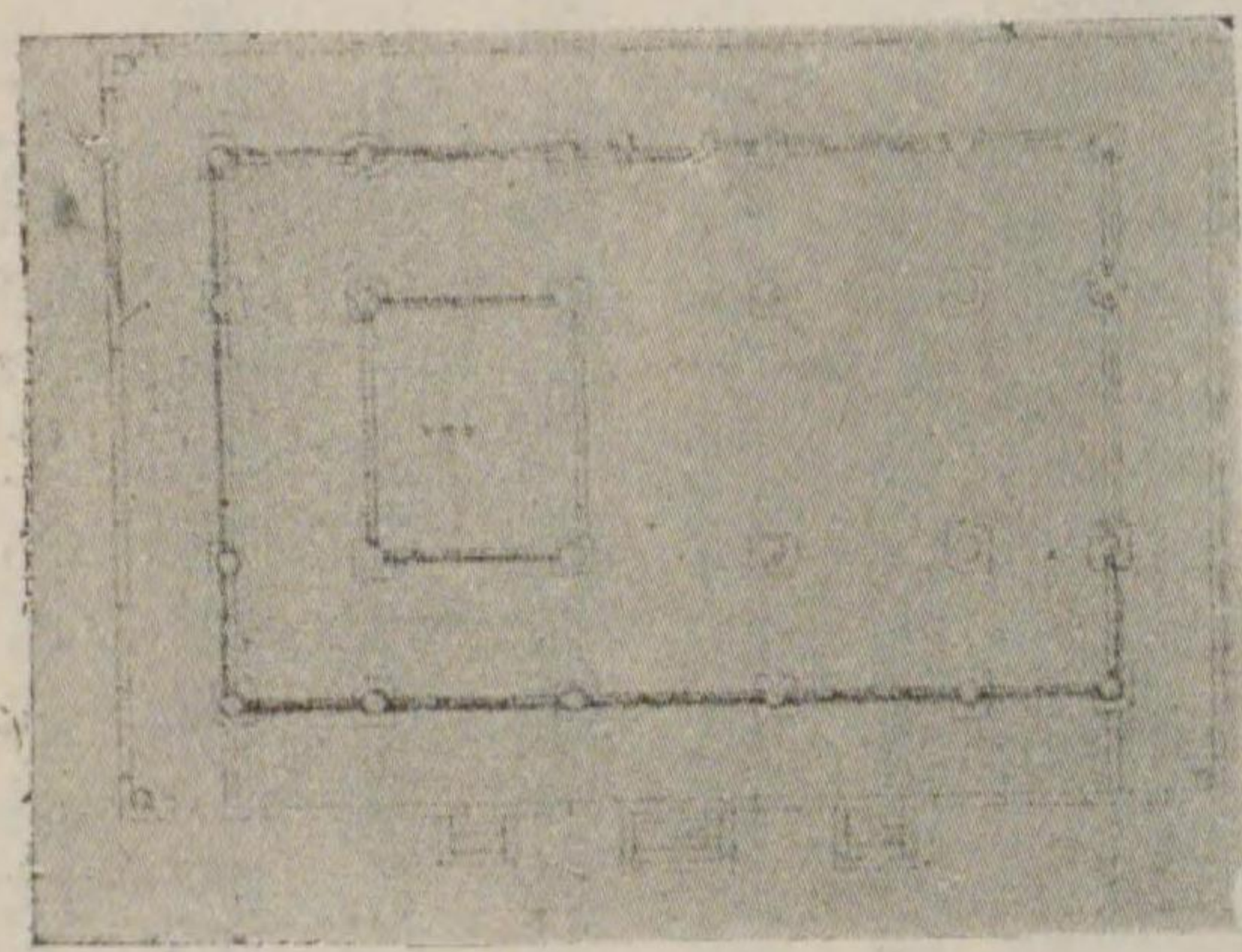
更に其細部を見るに柱は太くして膨みを有し胴部の徑最も大にして上下に向つて減殺し恰も我飛鳥時代の法隆寺金堂の柱を想起せしめる蓋し我國に於ては寧樂時代を経て次第に此膨み僅少となり終に

第 百 五 圖



浮石寺無量壽殿正面圖

第 百 六 圖



平面圖

藤原鎌時代に於て全く消滅したれども朝鮮に於ては長く繼續して高麗時代に入りても猶衰へざること語るものである。組物は二手先亞麻組にして斗の列形は我鎌倉時代の東大寺南大門醍醐寺經藏に於ける所謂天竺様の如き性質を有せるも面白い其の肘木の端は我和

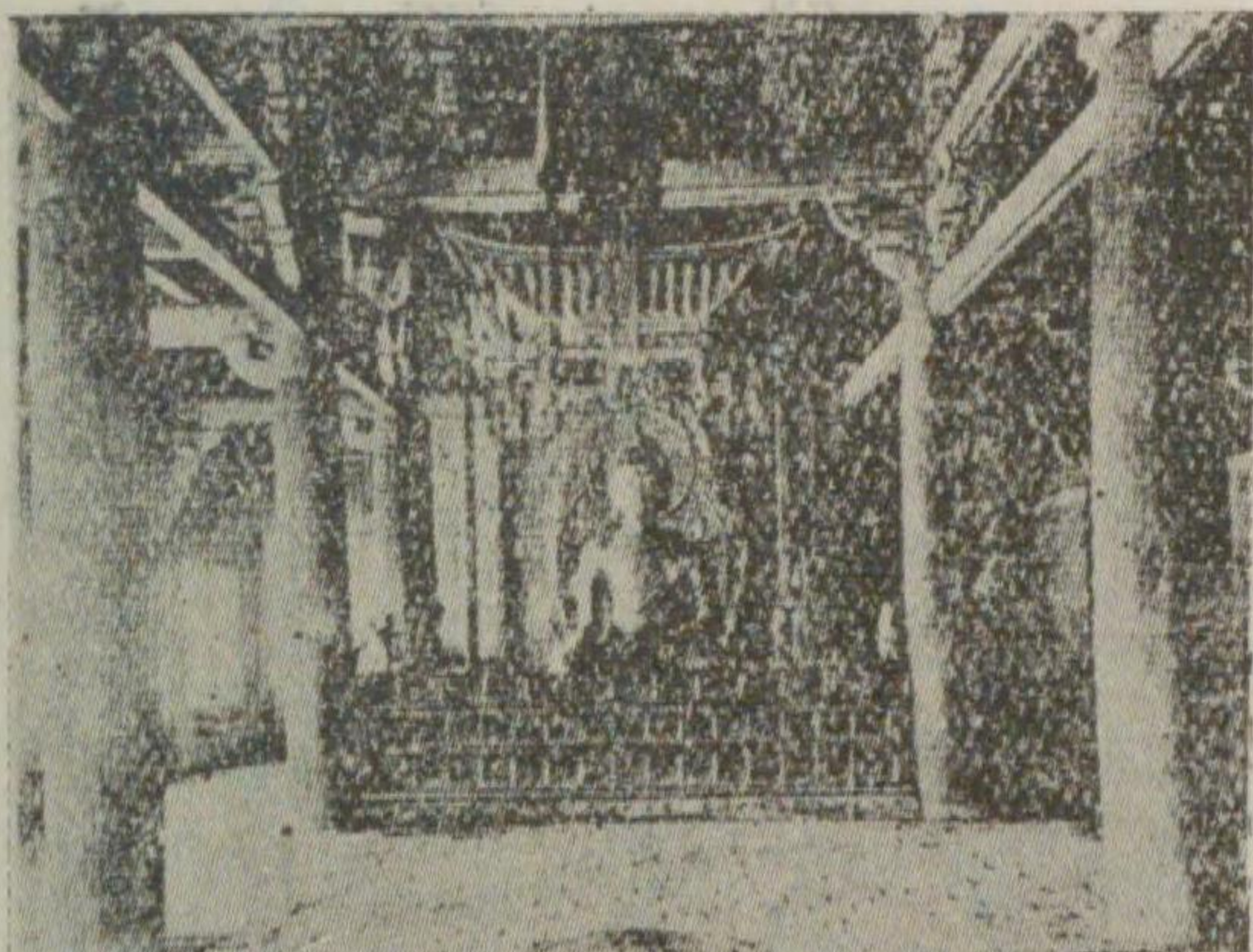


様に同じく一種雄勁なる刳形から成り又組物中にある拳鼻は奇異なる輪廓を示してゐる。軒は二重椽にして地極方に飛檐極圓なるは我寧樂時代の藥師寺東塔、唐招提寺金堂と同様である。此手法は我國にては藤原時代にて消滅し鎌倉時代には地極も飛檐極も共に方形となりたれども朝鮮にては永く繼續せることを示せる者である。内部の床は今普通の瓦を敷きたれども本尊を安置せる佛壇の内部塑造の佛座の周圍の床には碧釉の力磚を敷いてゐる。其碧釉は厚くして全く慶州四天王寺遺址より出づる新

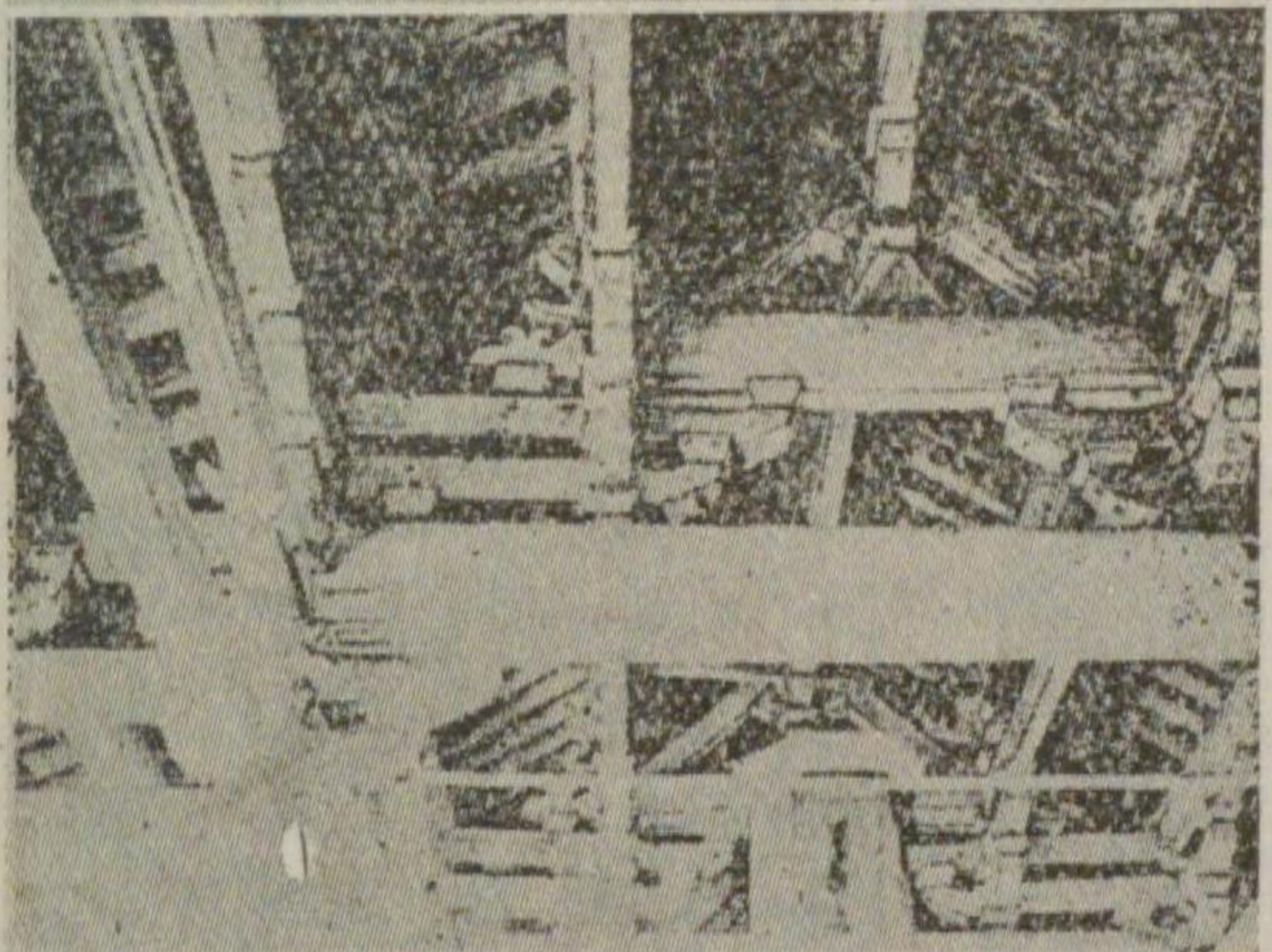
第百七圖

第百八圖

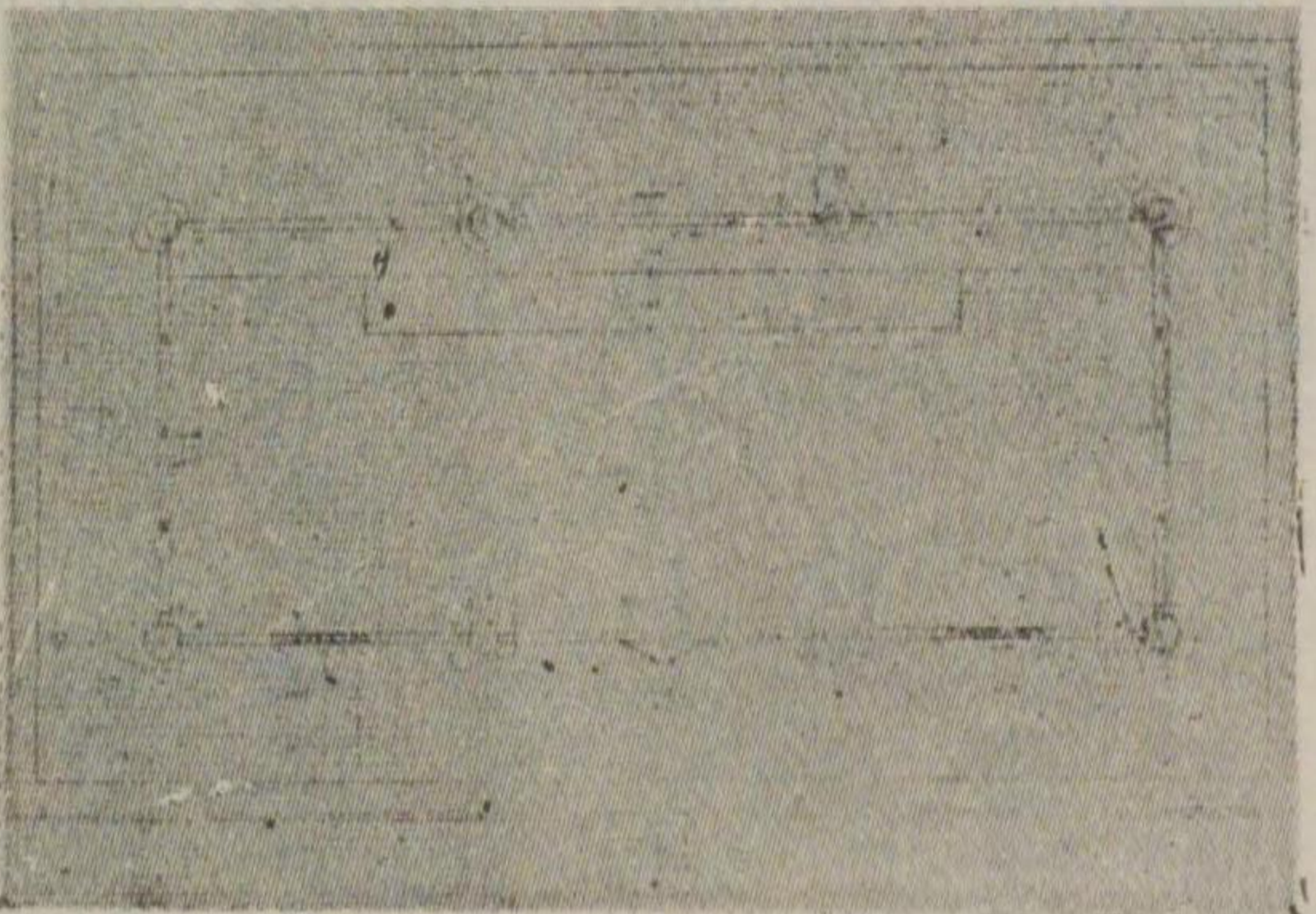
第百九圖



無量壽殿内部



同内部天井



組師殿平面圖

羅時代の碧釉磚と同様である。四天王寺は文武王の時此浮石寺と共に創立せられたれば彼此碧釉磚を使用せしことは有り得べきことである。而もかゝる僻遠の地まで碧釉磚を運び來りしことを見れば文武王が如何に此伽藍に重きを置きしかや

思はるゝ天井は所謂化粧屋根裏にして自由にして而も複雑なる組物を應用して二重虹梁を承け以て奇巧なる天井を構成するに成功してゐる。其構架の法は我天竺様の醍醐寺經藏及び其系統を引ける東大寺法華堂禮堂の屋根裏に類似してゐる。

内陣には西方に偏して佛壇を設け其上に秀麗なる丈六阿彌陀如來の坐像を安置し上に纖巧なる天蓋を懸けてゐる。此佛壇天蓋は萬曆年間の修造なれども本尊は恐らくは無量壽殿と同時に造られし者であらう。其殿の中央にあらずして一方に偏し且東向せるは如何なる理由に出でし者か明かでない。

裝飾は大體に於て柱はベンガラ塗組物以上は綠青を主として用材の下端、木口等に往々ベンガラを施し割合に賑かに且快き對照を示してゐる。

要するに此建物は構造自由にして手法洗鍊各種の繪様刳形頗る雄勁の風を帯び猶我飛鳥寧樂時代の手法を遺せる所もあれば我鎌倉時代に宋より入り來りし天竺様の細部をも保有し新羅以來の傳統の様式に宋の影響を思はしめる。其技巧の點より之を我鎌倉時代の最も優秀なる者に比するも決して遜色を見ない。高麗時代の建築の發達以て想像すべきである。實に此無量壽殿は現存朝鮮に於ける最古最優の木造建築にして其内部に安置せられたる彌陀の木像と共に高麗時代の藝術の爲めに萬丈の氣焔を吐く者である。



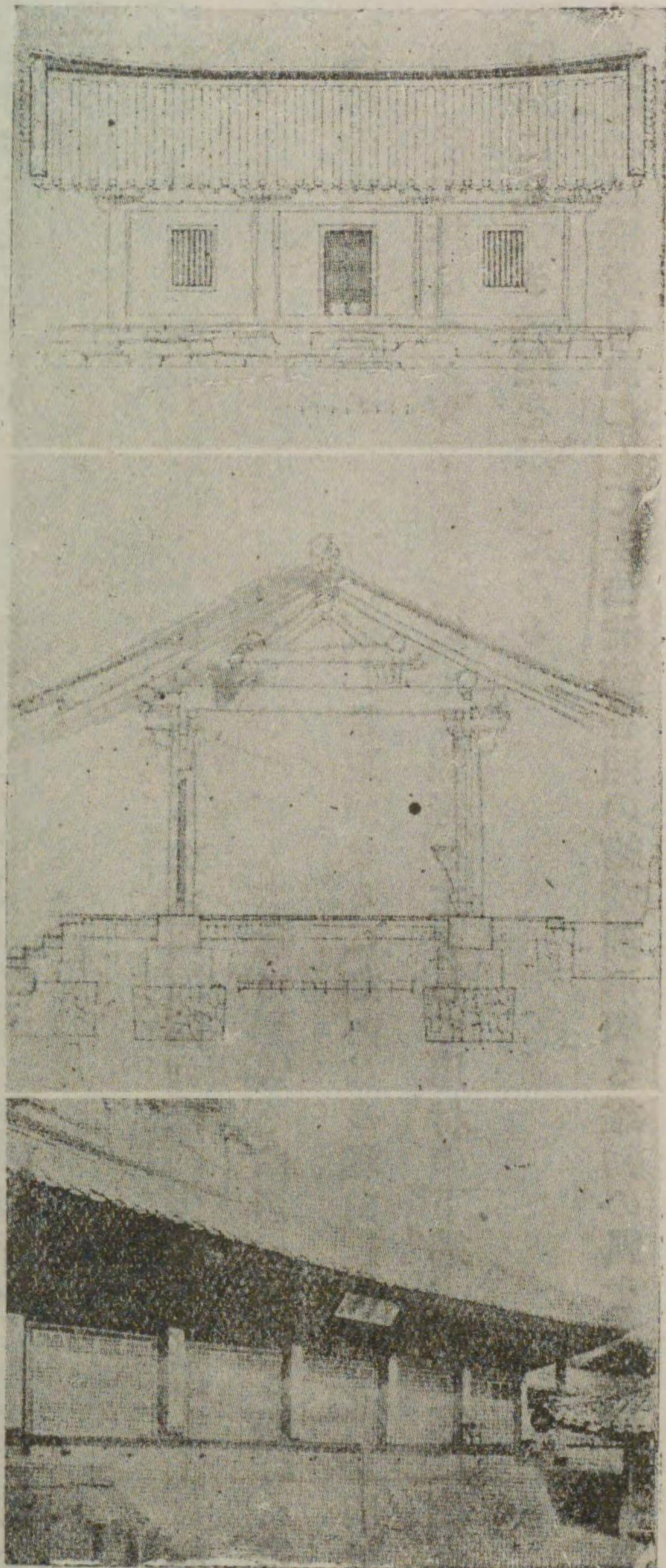
同寺祖師殿 無量壽殿の東北七八町の山上に在る小堂宇にして大正五年修理の際添衍の上端に左の墨書が発見された。

宣光七年丁巳五月初二日立柱、大施主、寺住持國師圓應尊者、雪山和尚、同願主、真信翁主李氏、(以下略)

第一百十圖

第一百十一圖

第一百十二圖



祖師殿正面圖

祖師殿縱断面圖

釋王寺應眞殿

宣光は北元の年號であり其丁巳は高麗辛禑の三年にして明の洪武十年(西曆一三七七年)に相當して、

ある此墨書により此建物の再建年代は明確になつた正面三間側面一間單層切妻造にして瓦を以て葺いてある石壇上に立ち其柱には膨みを有し其組物は出組にして肘木の端には一種の刳形を作り斗の刳形内彎狀をなさず直線形より成れるは大に無量壽殿の者と性質を異にし三角狀の拳鼻と共に元の影響を示し李朝様式の先驅となつてゐる。軒は無量壽殿と同じく二重檼にして内部の床には瓦を敷き天井は二重虹梁を架せる化粧屋根裏となつてゐる。

建物の前面中の間には入口を設け脇の間に小なる櫺子窓を開きそして入口及び窓の左右なる内部の壁面には四天王兩菩薩の圖を描いてゐる亦此建物と同時の壁畫である。

要するに此建物は規模小なれども高麗末期の様式を示して李朝初期の建築との連絡を見るべき重要な標本にして手法簡樸の裡雄健の風を帯び特に地上に遺存せる當時代唯一の壁畫を保有せるの點に於て一層の價値を増す者である。

釋王寺應眞殿 釋王寺應眞殿は洪武十九年李朝の太祖李成桂が猶高麗の一將軍たりし時創建せし者で高麗末年の建築に屬し朝鮮時代の様式との連鎖をなす者である。五間二面單層切妻造の堂宇にして其柱は太くして膨みを有し組物は二手先にして唐様風の尾檼及び簡樸なる拳鼻を有し軒は二重檼にして屋蓋は瓦を以て葺いてゐる。内部の床は板を張り天井は格天井となつてゐる。内外に施された彩色





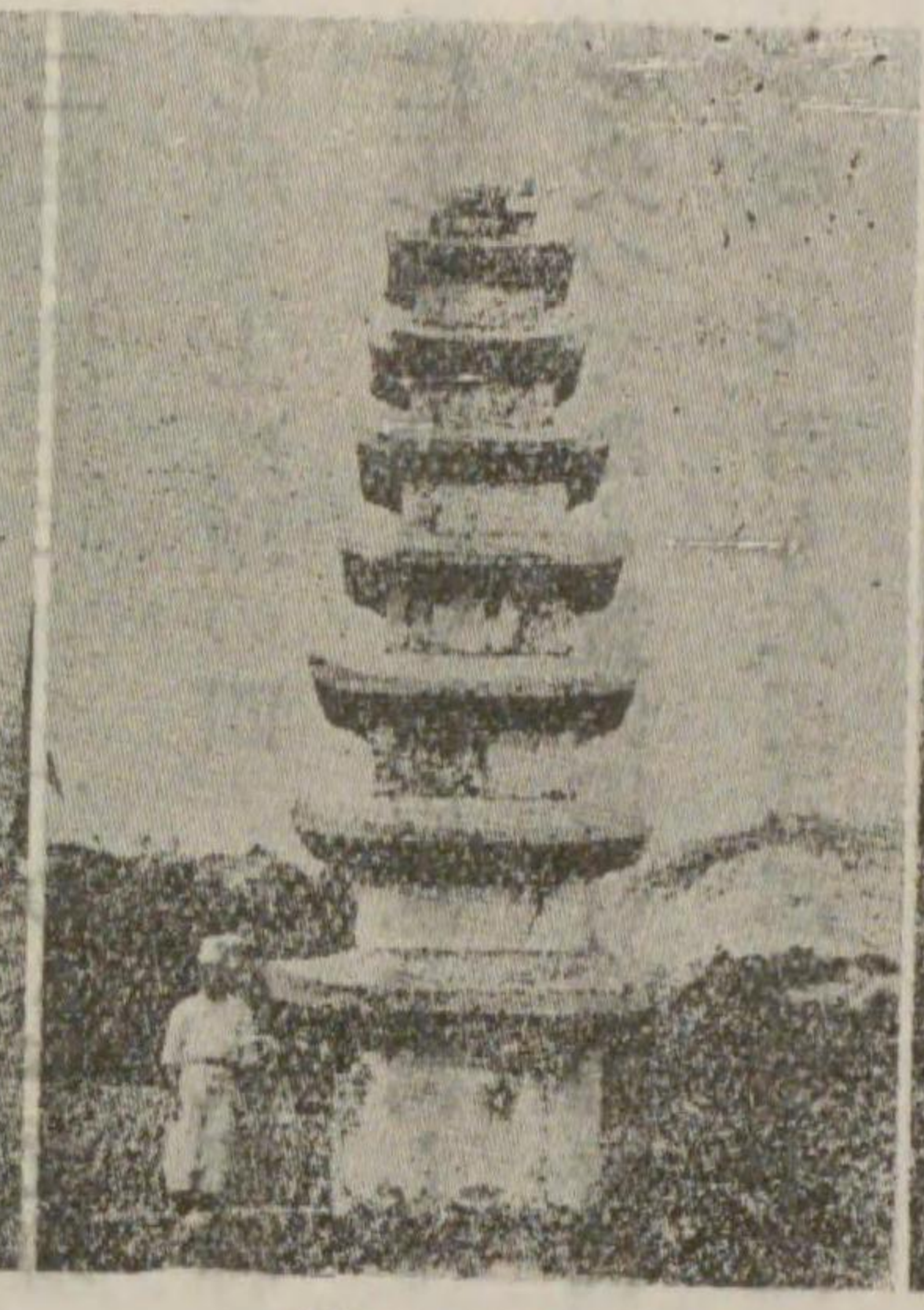


圖三十百第



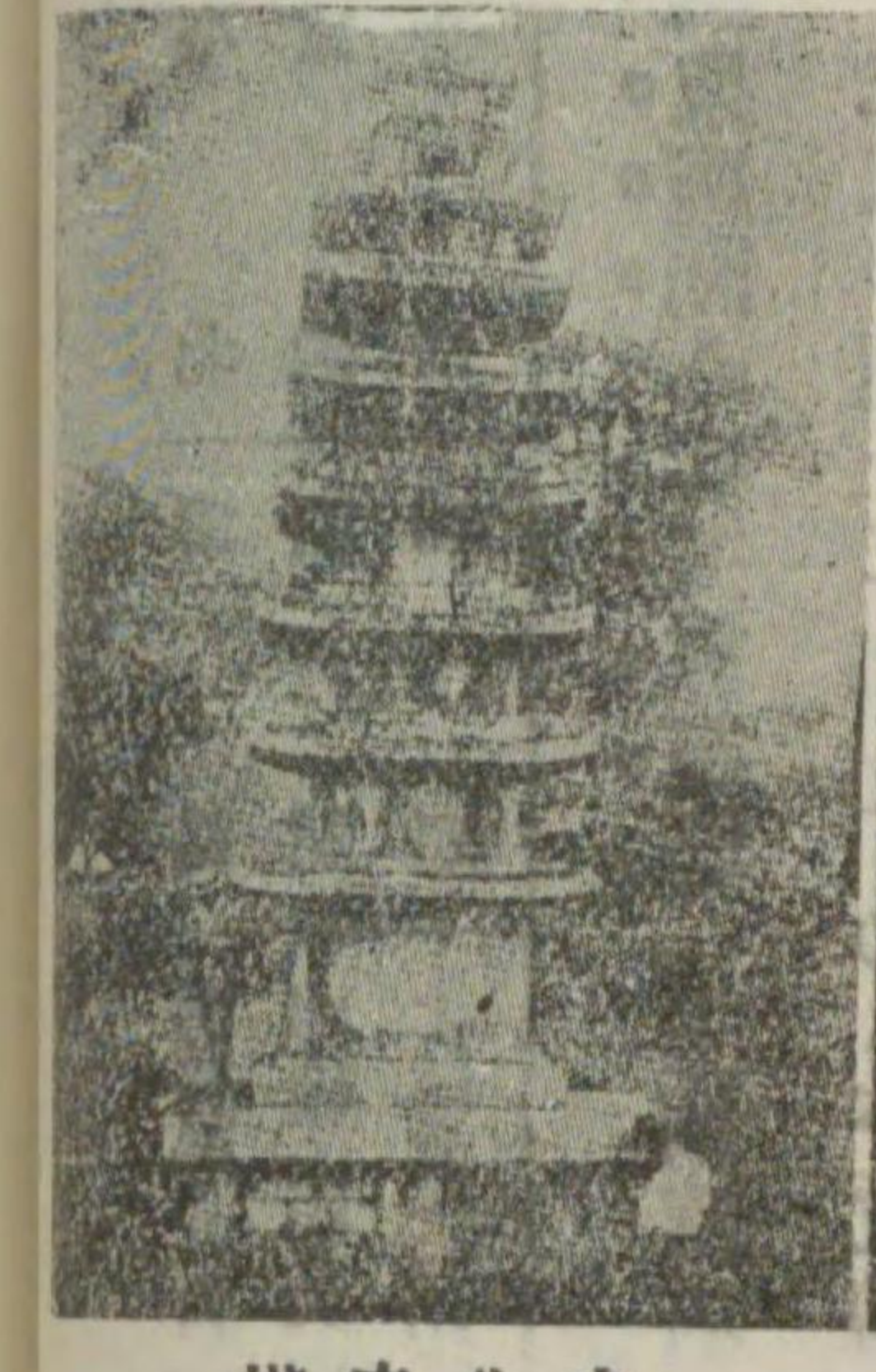
開心寺塔

圖四十百第



開國寺塔

圖五十百第



立化寺塔

玄化寺七重石塔。今玄化寺の廢址に立てる玄化寺碑によれば顯宗十一年の剏造にかゝり規模の大手法の雄麗琢の美蓋高麗時代此種唯一の傑作である。加之其様式は全く新羅の舊型を脱却して自在に大膽に固有の特質を發揮してゐる。其壇は一成にして特異の築造法を用ひ初層塔身の四面には格狭間内に釋迦三尊、兩羅漢、四天王、兩侍者を刻み出だし第二層以上亦塔身の各面に釋迦三尊、兩羅漢を格狭間内に容れてゐる各層の屋蓋は軒深く軒附薄くして兩端に力強く反り上がり以て奇抜にして而も輕快なる形態を作り出だし塔身に彫刻せられたる豊麗なる圖樣と快き對照を示してゐる。

靈通寺五重石塔及三重石塔。開城靈通寺の廢址には五重石塔を中央にして左右に各一基の三重塔が立つてゐる。其年代は不明なれども新羅塔の遺制に成りし者蓋し當代初期に屬する者であらう。

興國寺石塔。今開城兵部橋附近なる一民家の敷地内に立つてゐる基壇に菩薩戒弟子、平章事姜邯瓚、奉爲

邦家永泰、遐邇常安、敬造

此塔、永充

供養、

時天禧五年五月

日也

の刻銘がある當時姜邯贊大に契丹を破り國家少康を得、契丹の年號を廢して宋の年號を用ふるに至つた此時此塔の建立は以て彼の憂國の情を見るべく史蹟としても貴重なる者である唯惜むべきは形態完からず基壇の上に初層塔身の外三重の屋蓋を存するに過ぎないことである。基壇の葛石の下には豊美なる蓮花を刻み塔身の正面に戸形をあらはし軒の下面には開國寺塔と同様の列形を用ひてゐる。

獅子頻迅寺獅子塔

佛弟子高麗國中州月

岳師子頻迅寺棟梁、

朝鮮の美術工藝

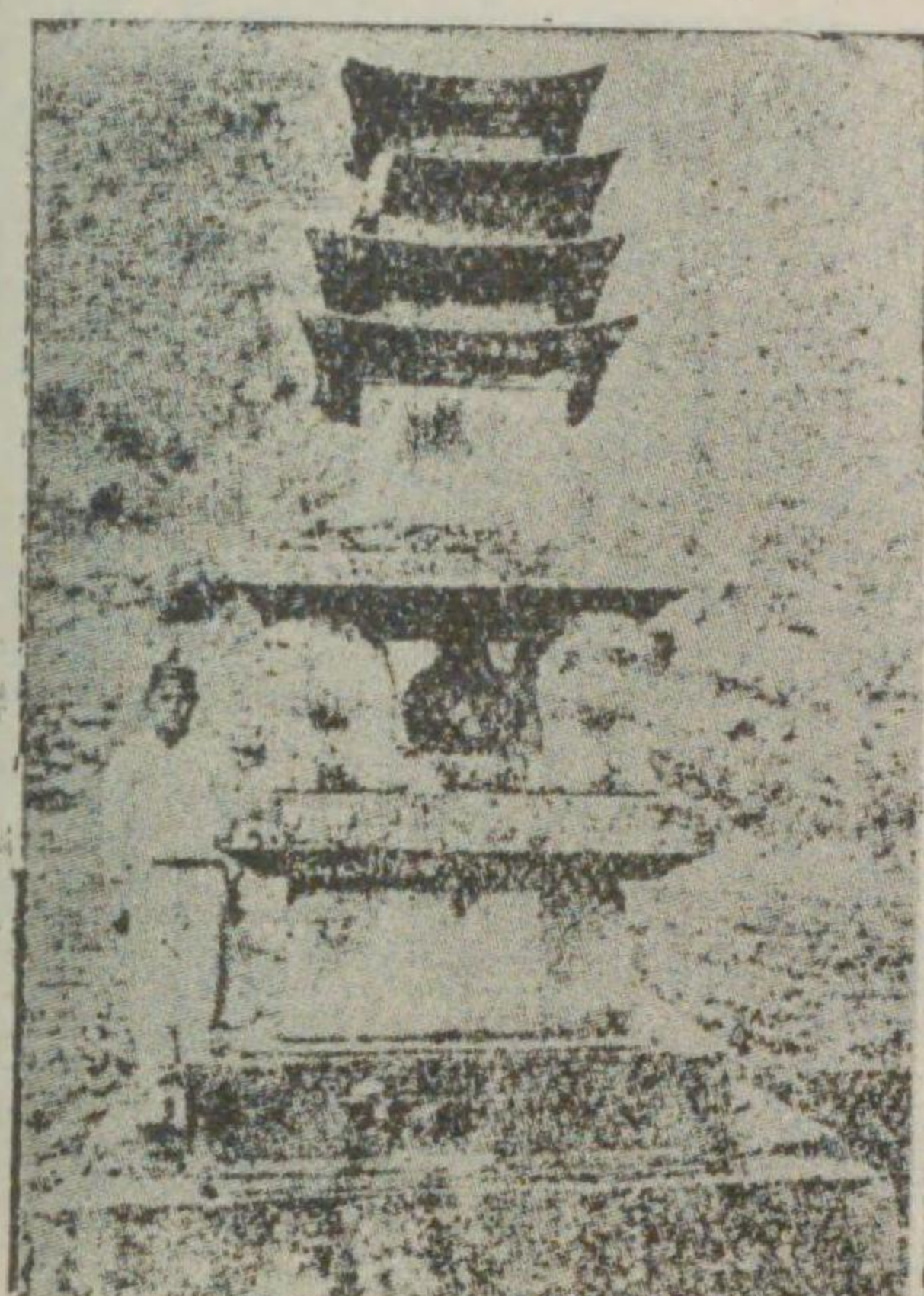


圖六十百第



刻影身塔層初塔寺化玄

圖七十百第



塔寺迅須子獅

奉爲 代代

聖王恒居万歳、天下大

平、法輪常傳、此界他方、

永消怨敵、後愚生□□

即知花藏、迷生即悟正

覺、 敬造九層

石塔一坐、永充供養、

大平二年四月日謹記

是れによれば元九層塔なりしも今僅かに四層を存するのみである。大平二年は顯宗の十三年で前者に後るゝこと僅かに一年である基壇は上下二成より成り上壇は中心に慈藏の坐像を置き四隅に獅子像を安んじ以て上の構造を支へてゐる。其構想は蓋し新羅の華嚴寺舍利塔より出でし者なれども彼の雄麗なるに反し頗る古樸にして雅氣

を帯びてゐる。塔は各層減殺の度少く軒附の傾斜急に過ぎ軒裏の刳形亦纖細に失し高麗塔としては相當の價値を認むべきも華嚴寺舍利塔に比すれば權衡に於ても技巧に於ても表現に於ても頗る劣つてゐる。是れやがて新羅高麗兩時代に於ける藝術の眞價を反映する者であらう。

淨兜寺五重石塔 元慶北漆谷郡若木にあつたが今は移されて總督府博物館敷地内にある。上成基壇に左の刻銘がある。

特爲

家國恒安、兵戈永

息、百穀豊登、敬造

此塔、永充

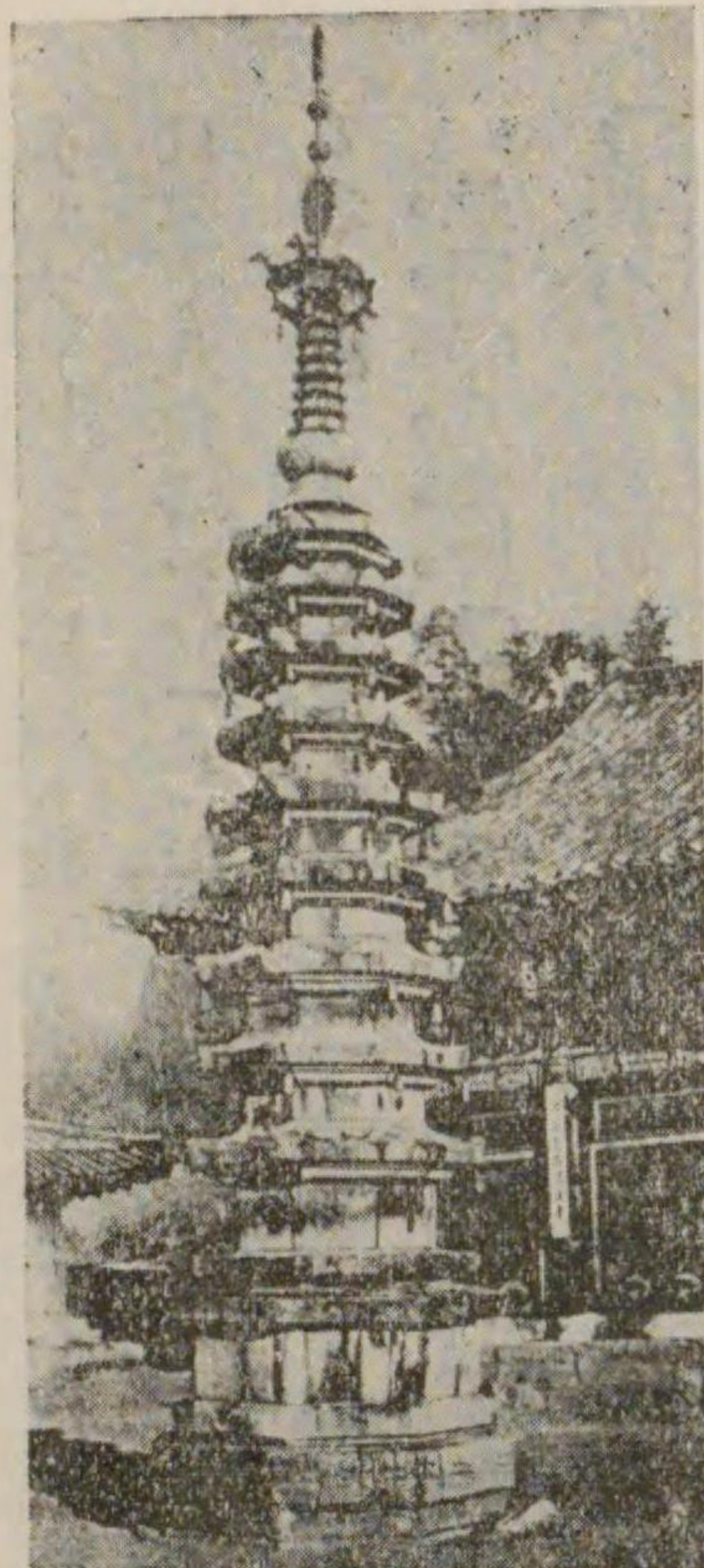
供養、

大平十一年辛未正月日

是れによりて此塔が大平十一年(顯宗二十二年)に立てられたことが分かる。二成の基壇上に立てる五層塔にして下成壇の四面に各三區の奇なる格狹間を作つてゐる各層の塔身屋蓋は減殺の度多く纖細なる四出の持送りを軒下に刻み出してゐる要するに此石塔は新羅塔の形式を學びて各部の權衡及び手



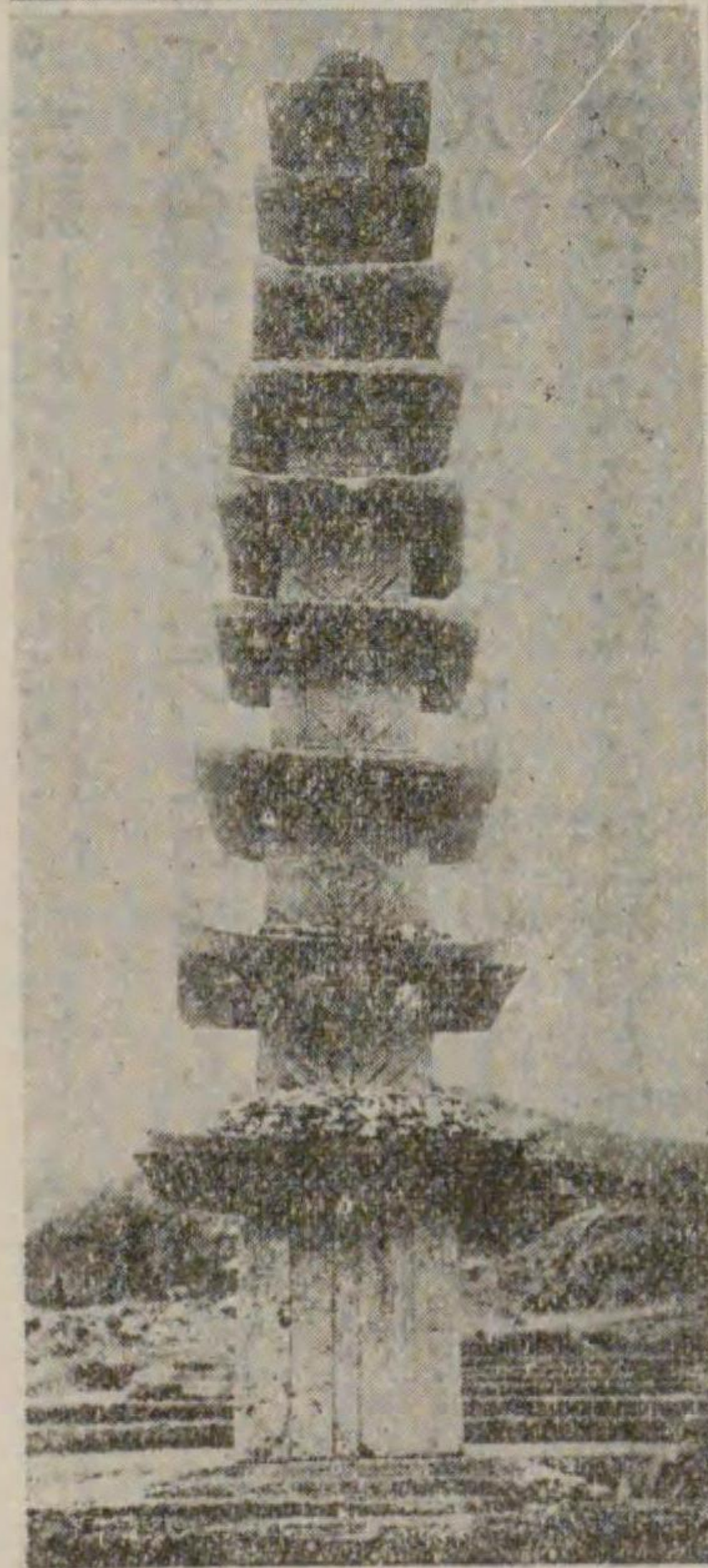
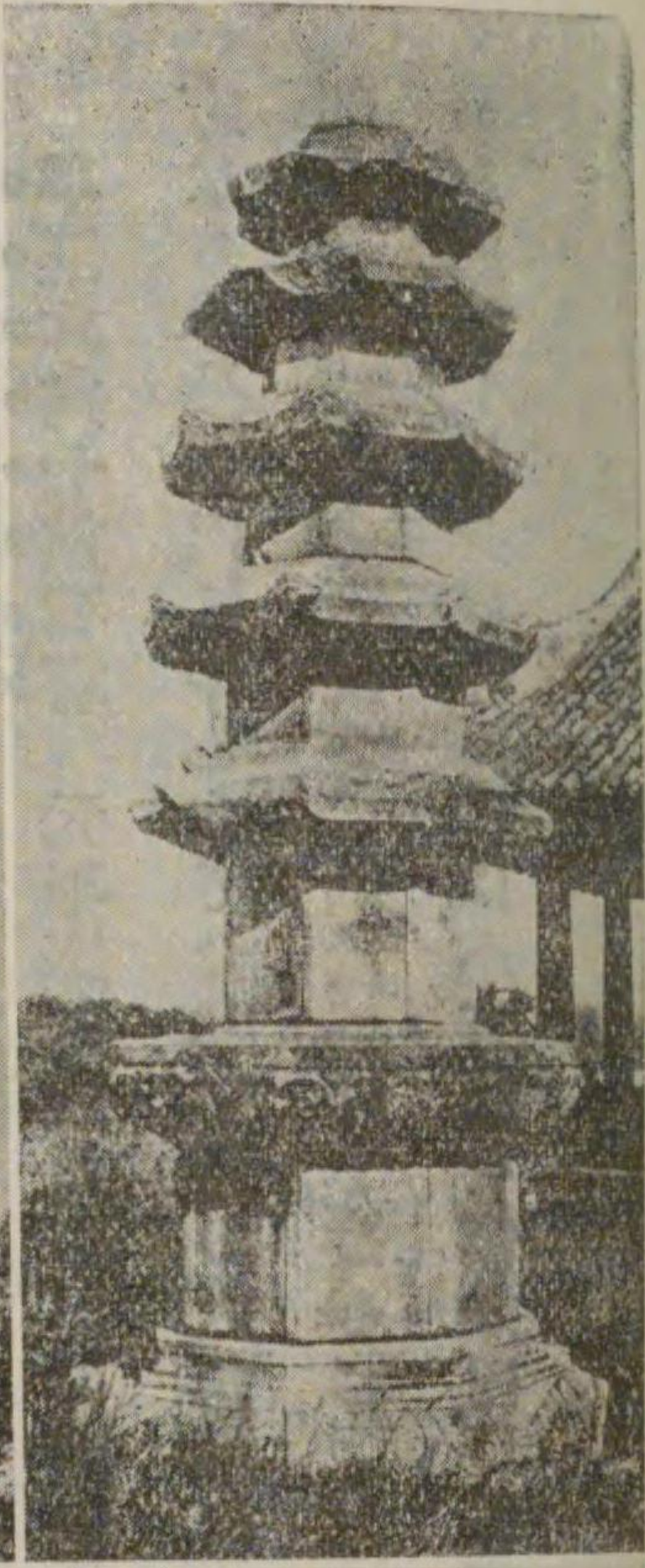
圖三十二百第  
塔石重九角八寺精月



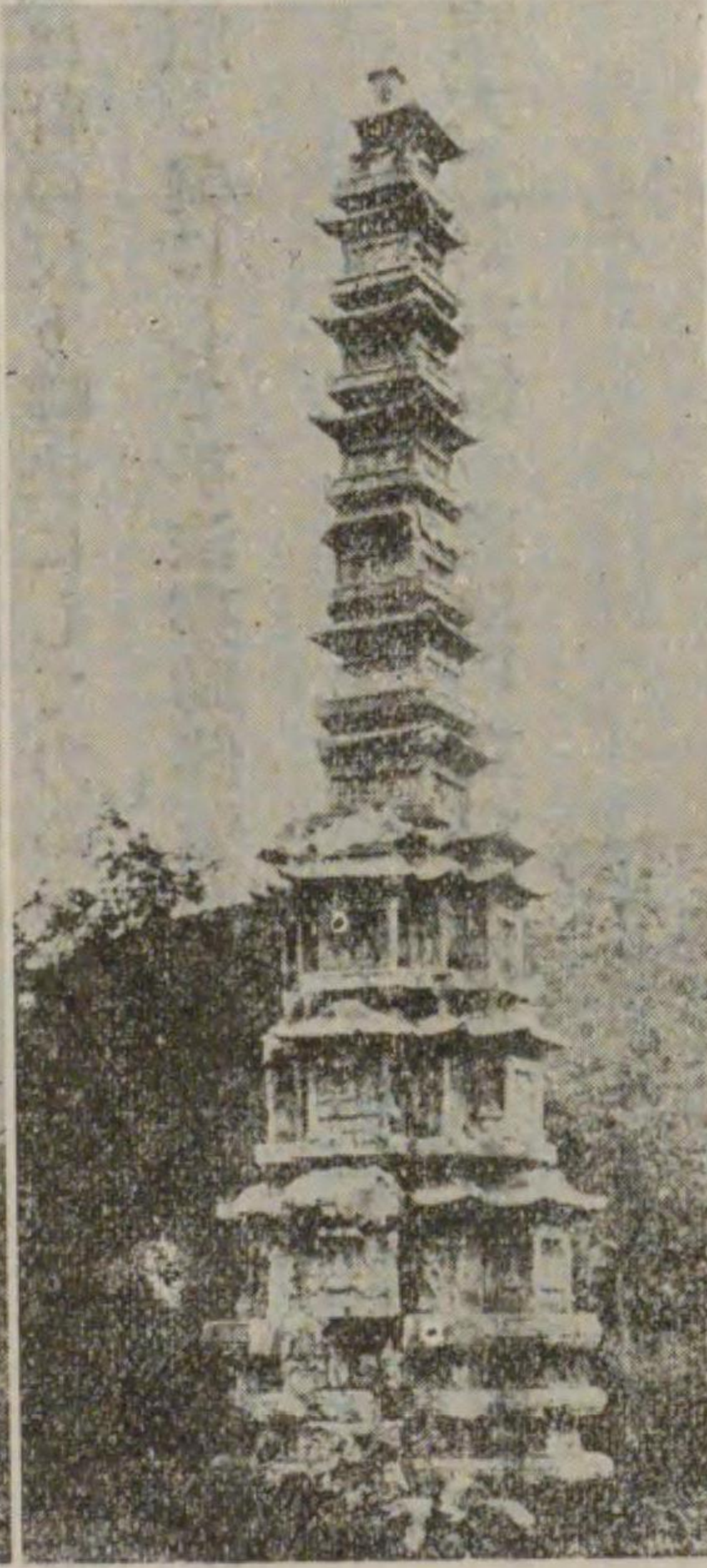
圖二十二百第  
塔石重七角六壤平



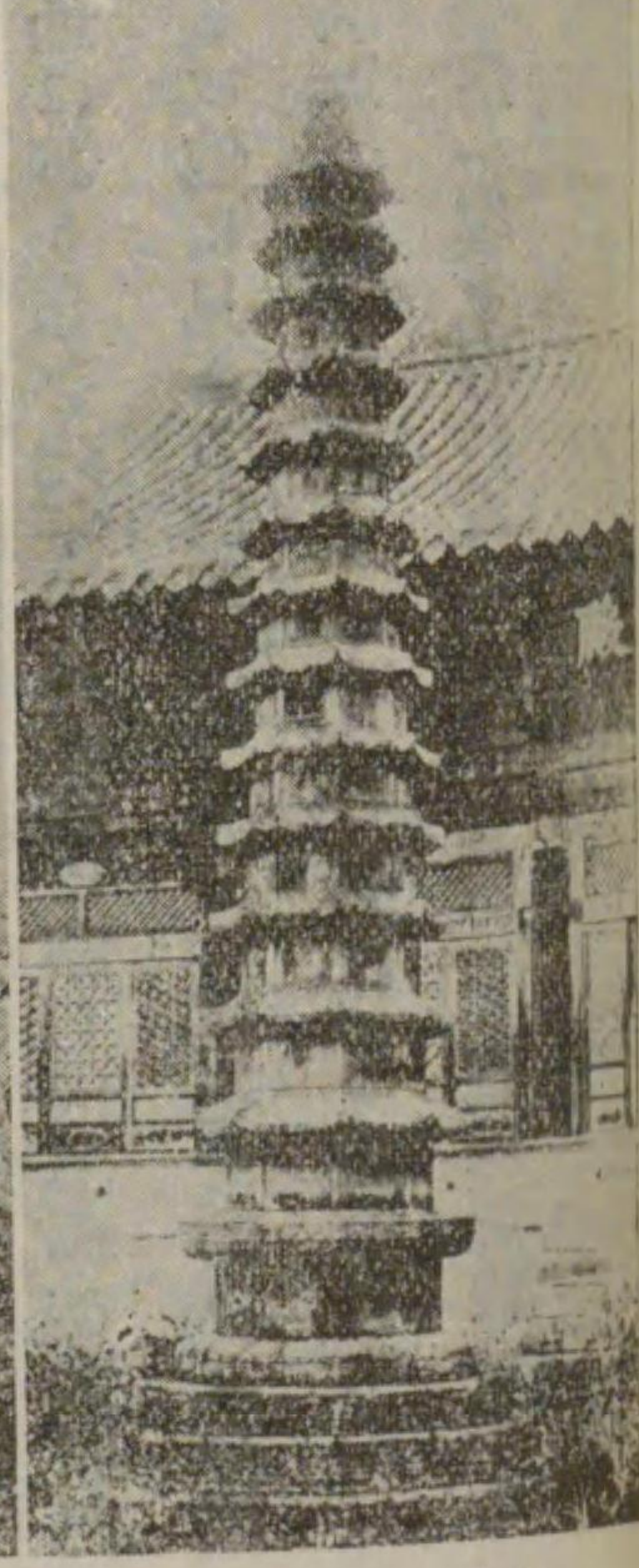
圖一十二百第  
塔石重五角八寺明永



圖六十二百第  
塔石重九峯塔多

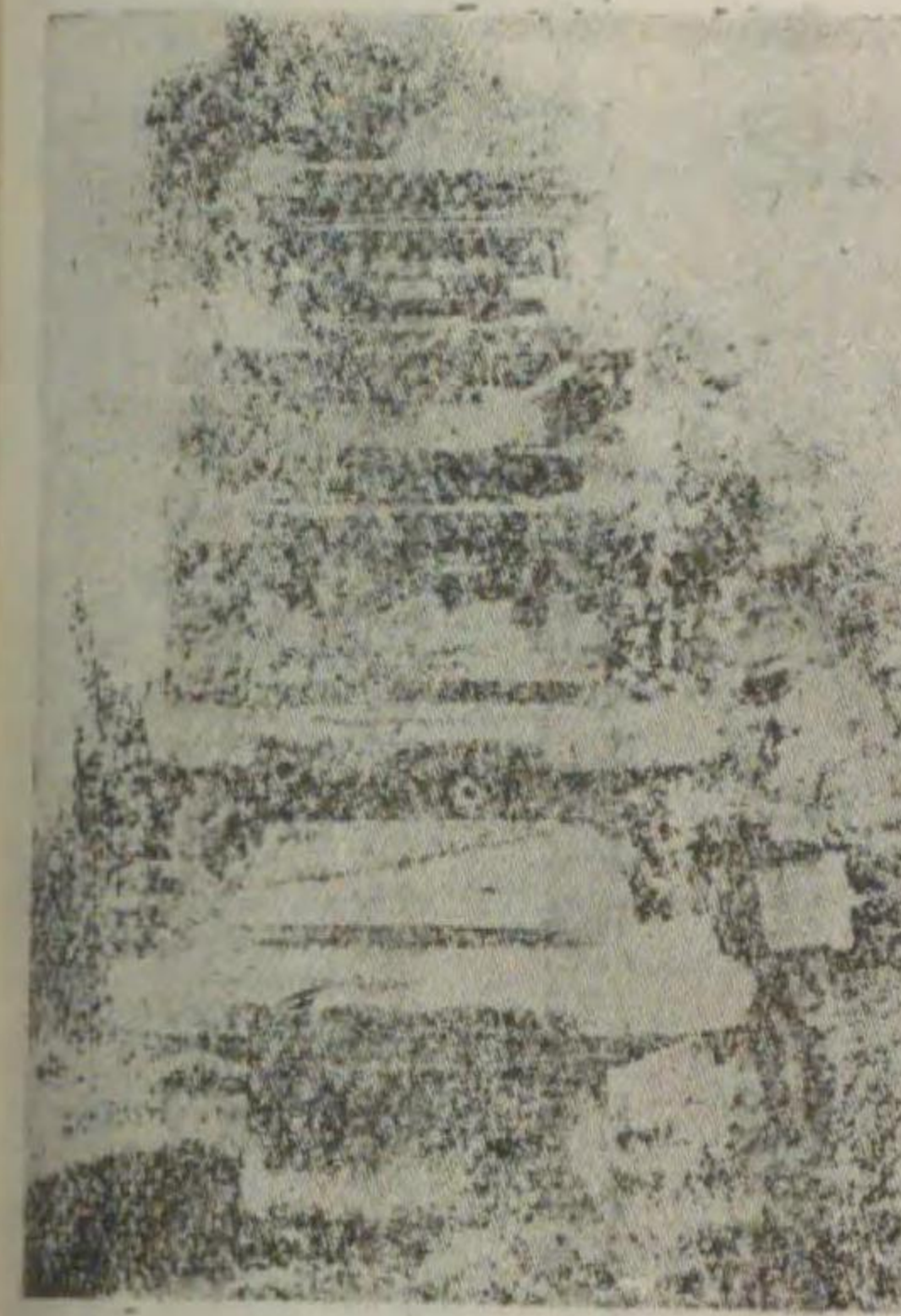


圖五十二百第  
塔層多石理大寺天敬



圖四十二百第  
塔石重三十角八寺賢普

圖十二百第



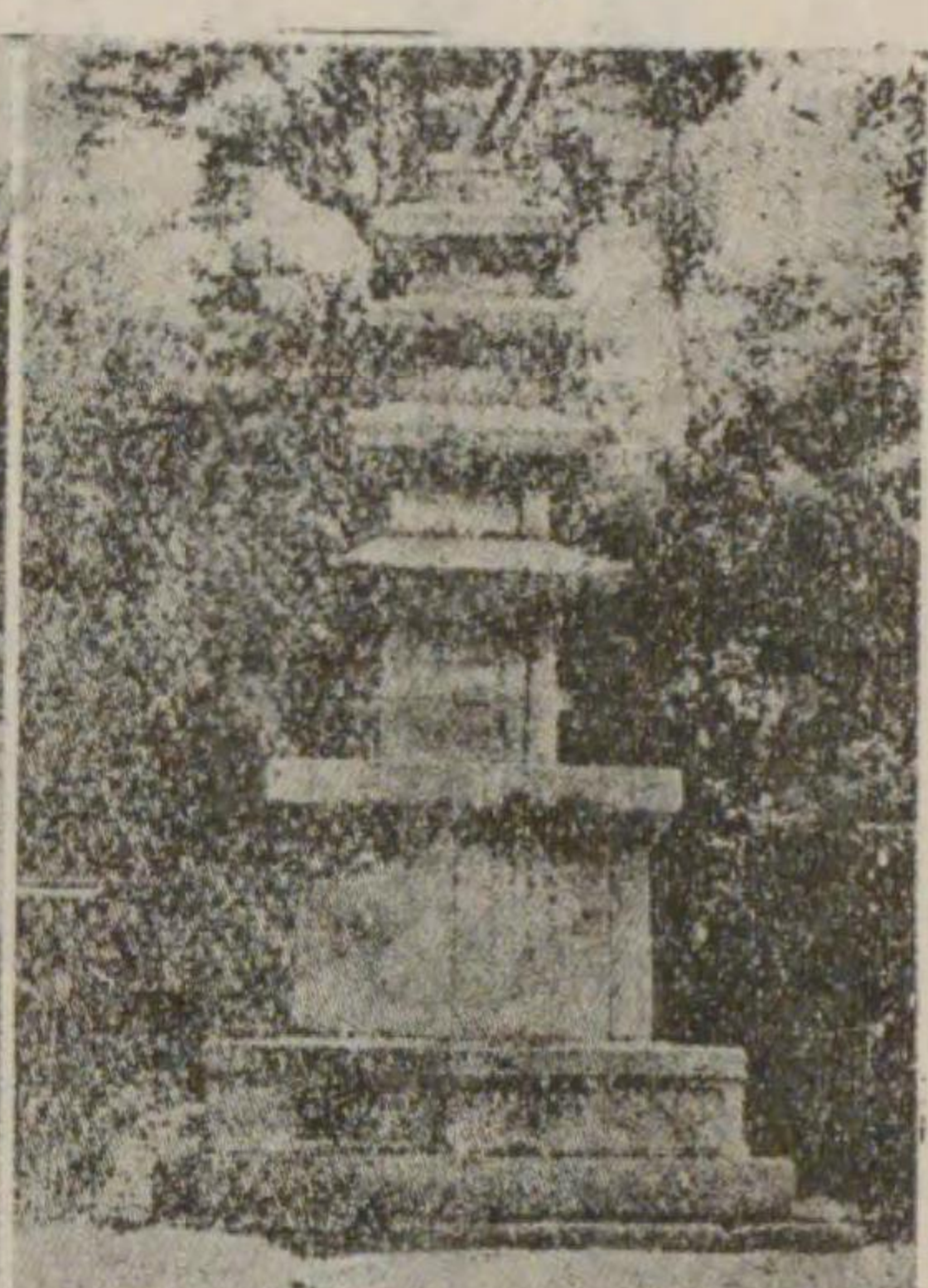
塔寺敬興

圖九十百第



塔寺賢普

圖八十百第



塔寺兜淨

法に多少の特色を示したものである。

普賢寺九重石塔 此塔は妙香山普賢寺萬歲樓前に立つて  
ゐる。初層塔身の刻銘によれば遼重熙十三年（靖宗十年）に  
建てられし者である塔は基壇の上に立ち各層減殺の度多く  
屋蓋の勾配急にして軒薄く繊細なる持送りを以て之を承く  
るは他に見ざる所形態常套を脱し莊重の權衡を得たるは主  
として之れが爲めである。

興敬寺五重石塔 京城東大門外一里許の處に立つてゐ  
る。第二層以上四面に高欄様の刹形を繞らせると塔身に各  
面二區の羽目形を作れると軒裏に奇異なる刹形を作れると  
は他に多く見ざる所形態爲めに變化に富み頗る安定莊重の  
外觀を呈してゐる恐らくは中期以後の者であらう。

八角多層塔及六角多層塔 新羅時代の塔婆は殆ど悉く方  
形の平面を有せしに、高麗時代に入りて此方形の外別に八



角形六角形の多層塔も建てらるゝことゝなつた。支那に於ては唐時代には主として方塔を立て宋代には多く八角塔を立てたから高麗も其影響を受けて八角塔六角塔を造つたのであらう。今左に其主要なる者を説くことゝする。

**永明寺八角五重石塔** 八角の基壇の上に立てる八角五重石塔にして基壇の上下に豊勁なる蓮花を刻み腰石に多少の膨みを有つてゐる。各層の塔身は次第に其大きさと高さを減縮し塔身は其側面に於て多少の膨みを有し且細長なる隅柱形を作り屋蓋は軒の反り輕快にして力あり軒裏には蓮花を浮彫にし隅毎に反花を上を刻み出してゐる。全體の權衡頗る美にして手法亦勁健蓋高麗初期に屬する傑作である。

此塔と殆ど同様式同手法の八角五重塔は今東京大倉集古館の敷地に立つてゐる。亦平壤附近より運び來つた者である。

**平壤六角七重石塔** 元平壤外城内平川里廢寺址にありしを先年平壤驛前に移し近年再び大同門の北方なる小公園内に移し立てた其平面の六角形なるは他に見ざる所基壇の上下に蓮花を刻み（今壇の上部の石は移轉の際誤つて倒置されてゐる）其上に七重の塔を立てゝゐる。各層の塔身屋蓋は次第に其大心を遞減し塔身の各面には小方龕を作り内に各坐佛一軀を容れ更に塔頂に美なる寶珠を載せてゐる權

衡よく整ひ高秀の觀を呈すれども其手法は雄勁の氣象に缺けてゐる恐らくは高麗中期以後の者であらう。

**五臺山月精寺八角九重石塔** 八角二成の基壇上に立てる九重石塔にして基壇は下成低く且割合に小さく各面二區の格狭間をあらはしてゐる。塔は平面八角にして層々其高さと大きさを遞減し形態莊重手法雄勁實に麗時に於ける此種最大最優の傑作である。其頂上を飾れる相輪は恐らくは朝鮮初期の者であらう。此相輪は露盤より受花までは石造にしてそれより以上は銅造にして各輪蓮花を綴り寶蓋あり水煙あり更に頂上に二顆の寶珠寶劍とを上げ以て塔頂を飾り更に各層の屋蓋の隅々に寶鐸を懸け以て一段の風趣を添えてゐる。此塔建立の年代不明なれども其手法は永明寺の八角五重塔に伯仲してゐる亦麗初の者であらう。

**妙香山普賢寺八角十三重石塔** 此石塔は普賢寺大雄殿前に立ち各層の減度割合に少きを以て多少過高の感を與へる且軒付薄く軒の出少く前者に比すれば稍纖巧に失し莊重の觀に乏しい。基壇は一成にして上下に細巧ある蓮花を刻み更に三層の基石上に立つてゐるが基石の各側面亦纖巧なる小格狭間を列刻してゐる。其年代は恐らくは高麗の中期以後に屬する者であらう。

**敬天寺大理石多層塔** 此塔は元開城郡扶蘇山敬天寺址に立つてゐる。先年内地に移されしが今總督



府博物館の所有に歸した内地へ運んだ際多くの斷片に破碎され再建の困難の爲めまた其儘になつてゐるのは惜むべきである。此塔の由來に就き種々の説あれども刻銘によれば至正八年戊子三月三重大匡晉寧君姜融等が元の皇帝、皇后、皇太子等の壽福を祝し併せて國家の安泰を祈らんが爲めに立てたものである。至正八年は高麗忠穆王の四年である。其様式は全然元の特質を示し且喇嘛的手法を用ひ到底高麗技術家の手に成りし者と想像することができぬから恐らくは元の工人が其國の石材を運び來りて造つた者であらう。東國輿地勝覽に「諺傳、元脱脱丞相、以爲願刹、晉寧君姜融募元朝工匠造此塔、至今、有脱脱姜融畫像」といへる者蓋眞を傳へたものであらう。

此塔は四面斗出星形の平面を有せる三層の基壇の上に同じ平面の塔身三層を重ね更に其上に平面方形の七層の塔身を起した者である。俗に之を十三層塔といつてゐる。此斗出星形の平面は喇嘛藝術の影響に歸すべき者で元來中印度に起り西藏に入り支那に傳へられたのである。此塔は灰色の大理石を以て築造せられ基壇の徑十尺三寸全高約四十餘尺に達してゐる。基壇の周圍には佛菩薩人物、草花蟠龍等を陽刻し其上に立てる十層の塔身には柱斗拱高欄屋蓋を作り十二會相を刻み佛菩薩天部其他の像を隙間もなく彫刻し手法精鍊にして最も富麗莊嚴の外觀を示してゐる。

要するに此塔は全體の權衡完美にして手法亦自在に奇趣湧くが如く其意匠の豊富技工の精妙形態の

奇拔當に朝鮮塔婆中の一異彩たるのみならず。支那に於ても元代此種の遺物殆ど迹を絶ちたれば東亞美術の研究上貴重の標本と謂はざるべからず。此塔は高麗時代の建築界に如何なる影響を與へたるや遺物の證明すべき者なきも次の朝鮮時代に入りて京城大圓覺寺塔婆驪州神勒寺塔婆等に甚大なる感化を與へ當時の藝術に少なからざる貢獻をしてゐる。

### 多塔峯石塔婆

全羅南道和順郡なる多塔峯と稱する處には山谷の間東西半町南北一町半許の田面及び其兩旁の山の巖上に十四基の石塔二十餘軀の石佛が散在してゐる。傳説によれば昔時異僧道誥一日に千佛千塔を造らんとして日將に暮れんとす。乃ち之を封して落ちざらしめ以て造成の功を竣へたといふことで今猶西方なる高峯を日封峯と稱してゐる。而も是れ一の傳説に過ぎず其建立の來由は全く不明であるが是等石塔石佛の様式より判すれば高麗時代の初期に成つた者のやうである。

此多塔峯には今二重方塔一基・三重方塔二基・六重方塔一基・七重方塔五基・九重方塔一基・四重圓塔一基・七重圓塔一基が高低參差林立し方塔あり圓塔あり二重・三重・五重・六重乃至七重九重の各種類に互りて宛然石塔婆の陳列場のやうである。此等の塔は大體に於て新羅塔の系統に屬し手法簡樸にして權衡高險に過ぎ稚拙粗野の態あれども意匠の自由手法の不羈他に殆ど類例を見ず實に麗初に於ける珍奇なる一大異蹟である。特に圓塔が我法隆寺百萬塔を想起せしむるも面白い。此多塔峯の岩質は玢岩



層より成り粗鬆にして施工に容易なれば此等の石塔は皆此岩石より造り出され種々の技巧を弄してゐるのである。

**浮屠** 佛教は高麗時代を通じて隆盛を極めしも特に國初より中葉に至るまでは名僧知識輩出し王室の尊信も篤く其墓には國王の教旨を以て浮屠碑碣を立て其高德を表彰するの例であつた。是等浮屠の遺存せる者も少なからず中には往々雄麗豊美を極め當時藝術の真相を反映する者もある。而も中期以後は紀綱の廢弛と共に浮屠の建置も少く其様式も次第に退化することゝなつた。初期の者は新羅の型式の繼承であつたが漸次固有の特色を發揮し特に末期に於て印度系に屬する石鐘と稱する者も見はれ次の朝鮮時代に大なる感化を及ぼすことゝなつた。今其重要なる者を擧ぐれば

江原	廢興法寺眞空大師塔	太祖	二三	後晉天福	五	天慶	三	九四〇
京畿	廢高達院元宗大師慧眞塔	光宗	二六	宋開寶	八	天延	三	九七〇
忠北	廢淨土寺弘法大師實相塔	顯宗	八	宋天禧	元	寬仁	元	一〇一七
江原	廢居頓寺圓空國師勝妙塔	顯宗	一六	遼太平	五	萬壽	二	一〇二五
江原	廢法泉寺智光國師玄妙塔	宣宗	二	遼天安	元	應德	二	一〇八五
全北	金山寺眞應塔	睿宗	六	遼天慶	元	天永	二	一一一一
慶北	桐華寺弘眞大師塔	忠烈	一〇	元至元	二一	弘安	七	一二八四
京畿	華藏寺指空定惠靈塔	恭愍	王朝	明洪武	二	天授	五	一三七九
京畿	華嚴寺普濟舍利石鐘	辛禔	一〇	明洪武	一七	元中	元	一三八四
平北	安心寺石鐘	辛禔	一〇	明洪武	一七	元中	元	一三八四

圖七十二百第



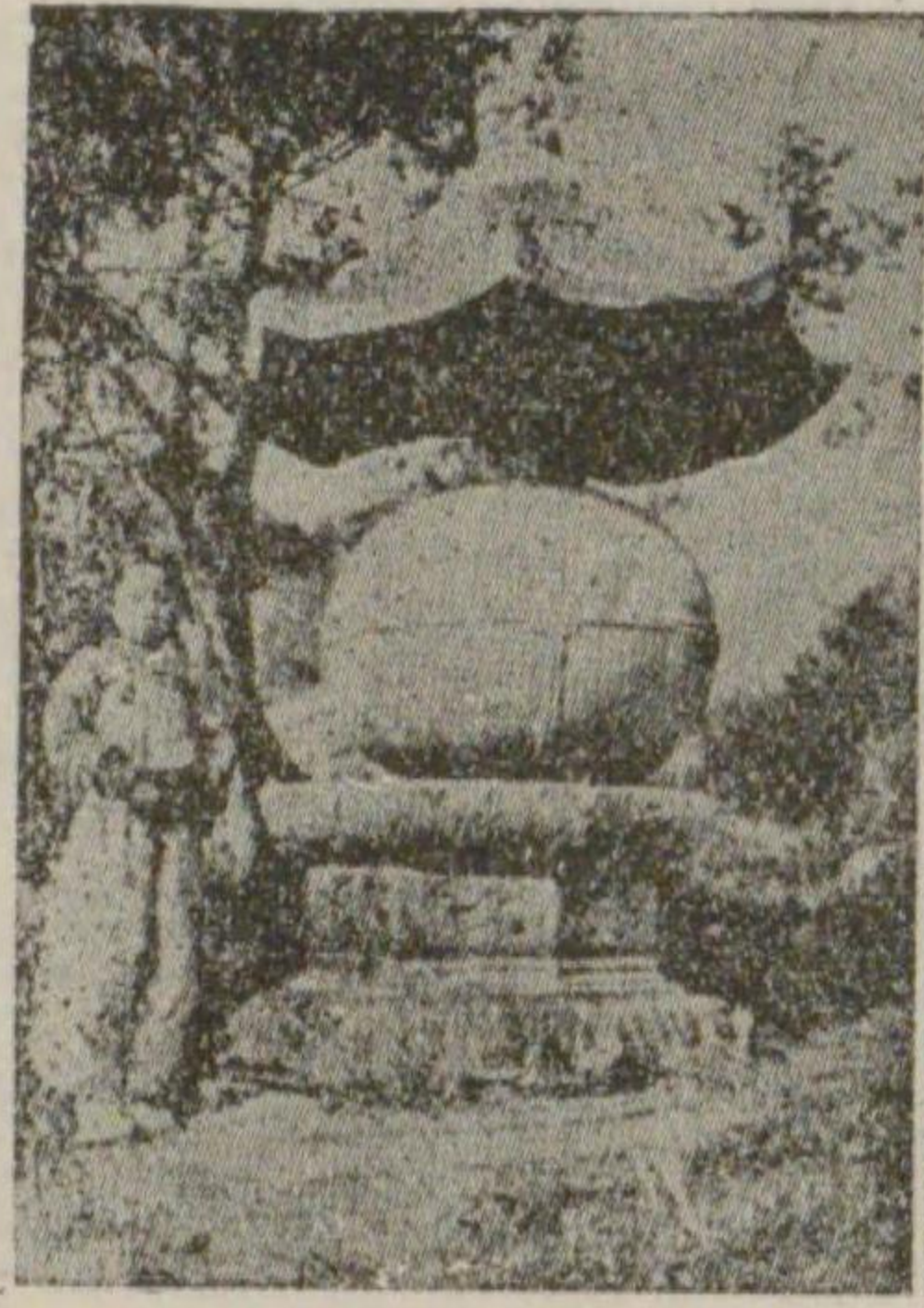
塔師大空眞寺法興

圖八十二百第



塔師大元院達高

圖九十二百第



塔師大法弘寺土淨

**廢興法寺眞空大師塔** 高麗太祖の建つる所新羅系の様式を有し其平面八角形にして基壇塔身及び蓋の三部より成る。基壇の上下に豊肥なる蓮花を刻み腰に雲龍を高肉彫として雄渾の氣象をあらはしてゐる。塔身稍小にして正面に戸形を浮彫にし蓋は瓦葺を摸し隅毎に反花を作り頂に寶珠寶蓋を冠してゐる。新羅の者に比すれば形態稍劣れども細部は猶雄麗豪勁の手法を示してゐる。  
**廢高達院元宗大師慧眞塔** 光宗二十六年建つる所亦八角形にして其基壇には靈龜の塔を負へる狀を刻み綴るに雲龍を以てし最も豪宕雄渾の氣魄を露はし其上下に雄勁なる仰蓮覆蓮を刻み出してゐる塔身は八角にして稍小に正面に戸形四隅に四天王像を陽刻し蓋は大なる二重の寶蓋狀をなし隅毎に反花を挺出せしめてゐる。要するに此浮屠形態奇抜にして常套を脱し技巧精鍊にして豪宕の氣象をあらはし常に高麗浮屠中第一の傑作たるのみならず此種の者としては古今を通じて之れに比肩すべき者は無い。



圖十三百第



塔師國空圓寺頓居

圖一十三百第



塔師國光智寺泉法

圖二十三百第



塔應真寺山金

此高達院廢址には前者に近く一石浮屠が立つてゐる。何人に屬すべき者か不明なれども其様式手法殆んど相伯仲し技工も殆ど彼に譲らず年代も亦彼に近い者と思はれる。

廢淨土寺弘法大師實相塔 顯宗八年の建立にして其形態の珍異他に類例を發見せぬ。其基壇は八角にして腰に纖巧なる雲龍を刻み上下に豊美なる蓮花を作り其上に扁球狀の塔身を安んじてゐる此塔身は舍利壺を表はせる者にして縦横に紐を以て縛せるの状を見はしてゐる更に奇なるは此塔身の上に短き柄を立て以て寶蓋を支へてゐることである寶蓋の頂には寶珠を上げ裏には優美なる飛天の像を薄肉彫としてゐる。意匠の斬新手法の纖麗實に麗時の傑作である此浮屠は今總督府博物館の庭中に移されてゐる。

廢居頓寺圓空國師勝妙塔 顯宗十六年建つる所八角形の浮屠にして權衡は多少議すべき所あるも細部は頗る優雅である唯纖巧に失して雄勁の精神に缺けてゐる基壇の腰には格狹間内に八神將の

像を浮彫となし上下に優美なる蓮花を作る塔身の周圍に四天王及び檀子窓を見はし二重蓋を載せてゐる此浮屠は今移されて京城に在る。

廢法泉寺智光國師玄妙塔 宣宗二年建つる所其技工の精麗裝飾の富贍古今を通じて之れに比すべき者は無い。而も雕琢餘りありて纖巧に失し元宗大師慧真塔の如き勁健雄豪の精神に乏しい以て高麗の藝術の次第に頽唐の弊に陥らんとせるの状を見ることが出来る。今移されて總督府博物館の後庭に立つてゐる。

此浮屠の基壇塔身寶蓋皆方形の平面を有せるは從來の典型を破り新生面を開いたものである。基壇は上下の二成より成り更に其下に三級の基石を重ねてゐる下成壇の周圍には或は蓮花或は草花或は格狹間を刻み上成壇の四面には神仙寶塔等の圖を見はし上には垂帳を作り四隅に獅子を配してゐる。塔身正面には戸形を他の三面には二處の華頭窓様を並べ其周圍を瓔珞を以て飾つてゐる。蓋及寶珠亦殆ど隙間もなく纖巧なる彫刻を施し軒附に天人鳳凰化佛を浮彫りにし下に瓔珞寶鐸を懸くるの状をあらはしてゐる。

金山寺眞應塔 睿宗六年建つる所方形の基石の上面に蓮花を浮彫となし其上に截頭砲彈狀の塔身を立て二重の八角寶蓋を冠せるは從來の典型を破りて新機軸を出だせし者である。



桐華寺弘眞大師塔

此塔は八公山中桐華寺の境域にありて建立年代不明なれども様式上高麗中期の

者であらう。基壇は二成にして下成は方に各面に四區の格狭間を刻み上成は八角形にして權衡寧ろ低矮上に大なる仰蓮を刻めるは亦新様式である。塔身八角形にして上に八角の蓋を戴いてゐる。

華藏寺指空定惠靈照塔 西天竺より恭愍王の時來

朝せし胡僧指空の浮屠にして其示寂は恭愍王十二年なれば此塔は其後遠からず建てられたのであらう。

其様式が全く舊型を破り印度の卒塔婆式に準つたのは或は彼の意味に據つたのではなからうか。廣き方壇の中心に八角の基石を重ねること二層上に覆蓮花を刻みて座となし半球より大なる塔身を載せ塔身の肩部に蓮花其他の彫飾を施し頂に短き相輪を冠して

圖三十三百第



桐華寺弘眞大師塔

圖四十三百第



華藏寺指空塔

ゐる。此形式は全く中印度の卒塔婆系に出で爾後の浮屠の樣式に大なる影響を與へた華藏寺東南峯に

も是れと同様式の浮屠があるが何人に屬するや不明である。

神勒寺普濟舍利石鐘

指空の高弟懶翁の爲めに立てられし者にして指空塔の一層簡單化された者である。其形梵鐘に似てゐるから朝鮮では此種の浮屠を石鐘の名を以て呼んでゐる廣き方壇の中心に方

形の基石を置き其上に鐘形の塔身を安んじ頂に火炎狀を四方に作れる寶珠を冠してゐる。妙香山安心寺の石鐘は指空と懶翁の舍利を藏めし者にして其形式全く神勒寺の者と同様である。

石碑

當代の石碑は初期に於ては新羅時代の様式を繼承して雄麗の氣象に富み特に國王の敎命によ

りて立てられし高僧の碑には富麗の彫飾を施せる者が多かつた其後漸く固有の特色をあらはし來り或は螭首の代りに寶蓋を冠し或は屋蓋を戴き或は是等の裝飾を略して頭部を半圓狀扁圓狀となし或は袴

腰狀となし次第に簡素の者となり特に後期に入りては意匠貧弱に流れ技工も亦頗る粗拙となつた。碑身の裝飾としては其周縁及び額の左右に寶相花文又は鳳凰文を刻み碑側には往々升降の龍を浮彫

にあらはせる者があつた。而も是等は主として中期以前の者に限られてゐる。

今此等石碑の重要なる者を擧ぐれば

黃海州	廢廣照寺眞徹大師碑
江原州	廢興法寺眞空大師碑

太祖 二〇	後晉天福 二	承平 七	九三七
-------	--------	------	-----

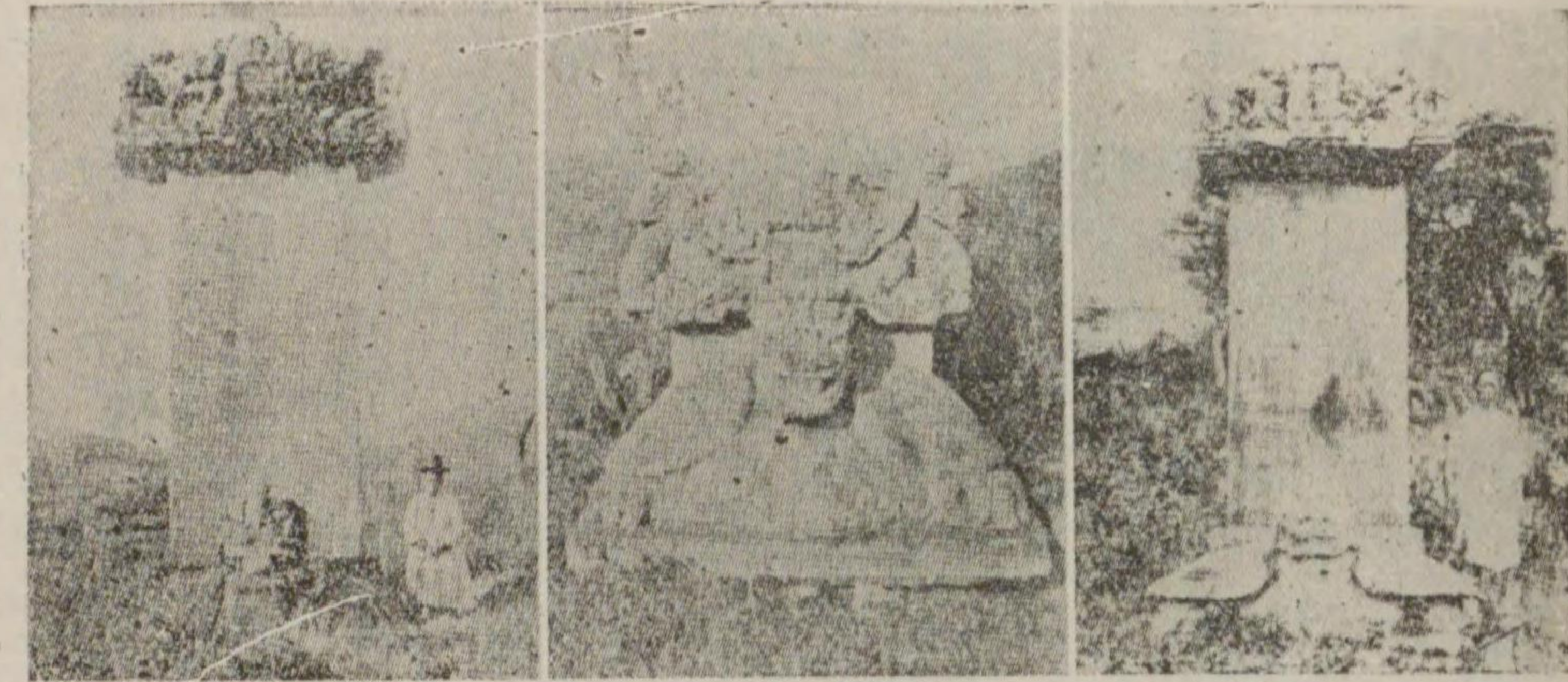


江	忠	京	忠	京	江	江	全	京	黃	江	平	京	京
原	北	畿	北	畿	原	原	北	畿	海	原	北	畿	畿
江	忠	麗	忠	麗	原	原	金	開	海	春	寧	開	麗
陵	州	州	州	州	州	州	堤	城	州	川	邊	城	州
普賢寺朗圓大師碑	廢淨土寺法鏡大師碑	廢高遠院元宗大師碑	廢淨土寺弘法大師碑	玄化寺碑	廢巨頓寺圓空國師碑	廢法泉寺智光國師碑	金山寺真應碑	廢靈通寺大覺國師碑	神光寺無字碑	清平寺文珠院碑	妙香山普賢寺碑	廣通普濟禪寺碑	神勒寺普濟石鐘碑
太祖	太祖	光宗	顯宗	顯宗	顯宗	宣宗	睿宗	仁宗	仁宗	仁宗	辛禰	辛禰	辛禰
二三	二六	二六	八	一二	一六	二	六	四	八	九	三	三	五
後晉天福	後晉天福	宋開寶	宋天禧	宋天禧	遼太平	遼大安	遼天慶	宋宣和	南宋建炎	南宋建炎	金身統	明洪武	明洪武
八	八	八	元	元	五	五	七	七	四	四	元	一〇	一二
天慶	天慶	天延	寬仁	治安	萬壽	應德	天永	天治	大治	大治	永治	天授	天授
三	六	三	元	元	元	二	二	二	五	五	元	三	五
九四〇	九四三	九五七	一〇一七	一〇二一	一〇二五	一〇八五	一一一一	一一二五	一一三〇	一一四一	一一四一	一三七七	一三七九

廢廣照寺眞徹大師寶月乘空塔碑 太祖二十年立つる所新羅末期の碑式を承け螭首は碑身より著しく大にして而も低矮以て蓋狀をなし中央に方額を作り左右に雲龍を刻んでゐる龜趺亦雄豪の風を帯びてゐる蓋麗初此種の傑作である。

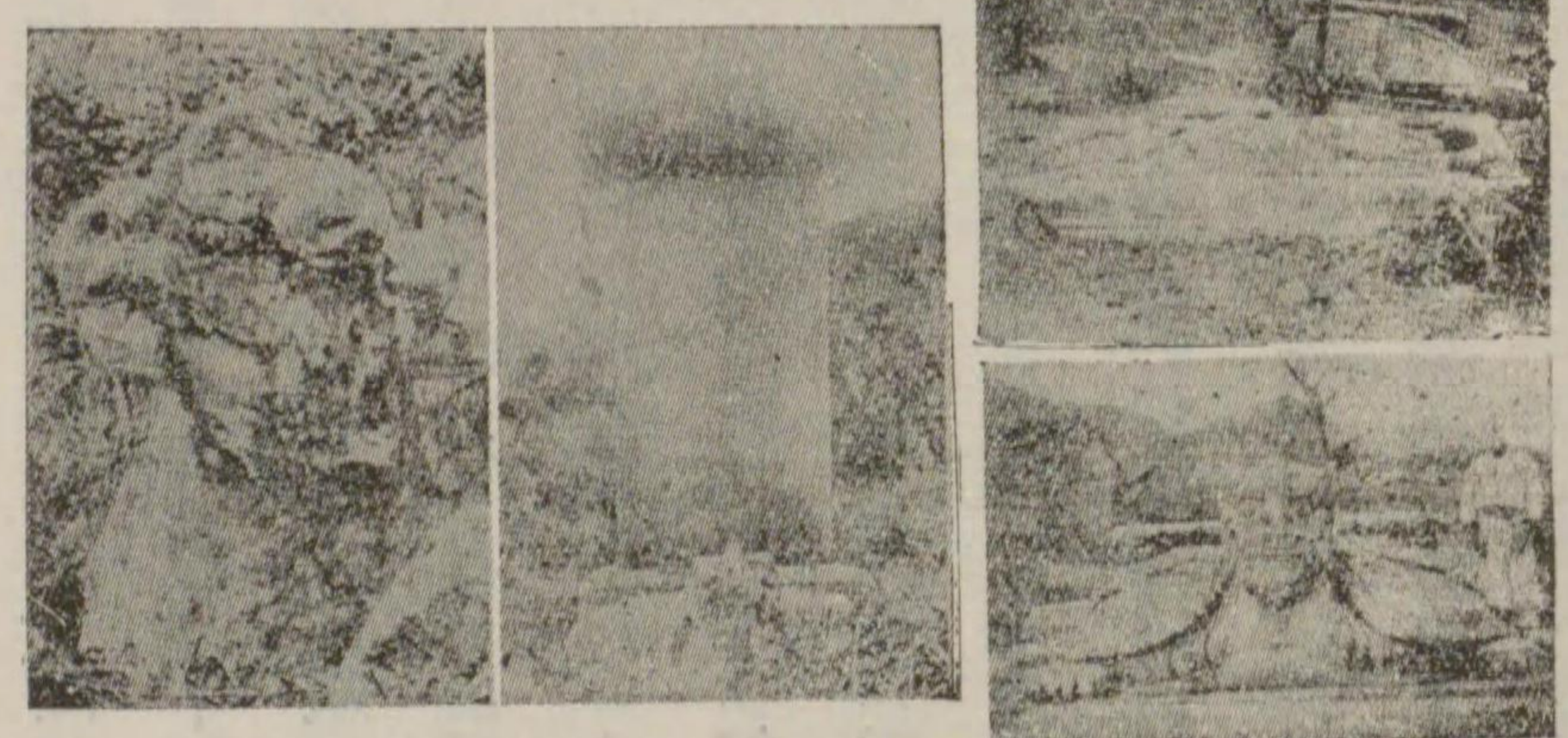
廢興法寺眞空大師碑 高麗太祖の撰文にして崔光胤が教を奉じて唐の太宗の御書を集めし者書體行

圖七十三百第 圖六十三百第 圖五十三百第



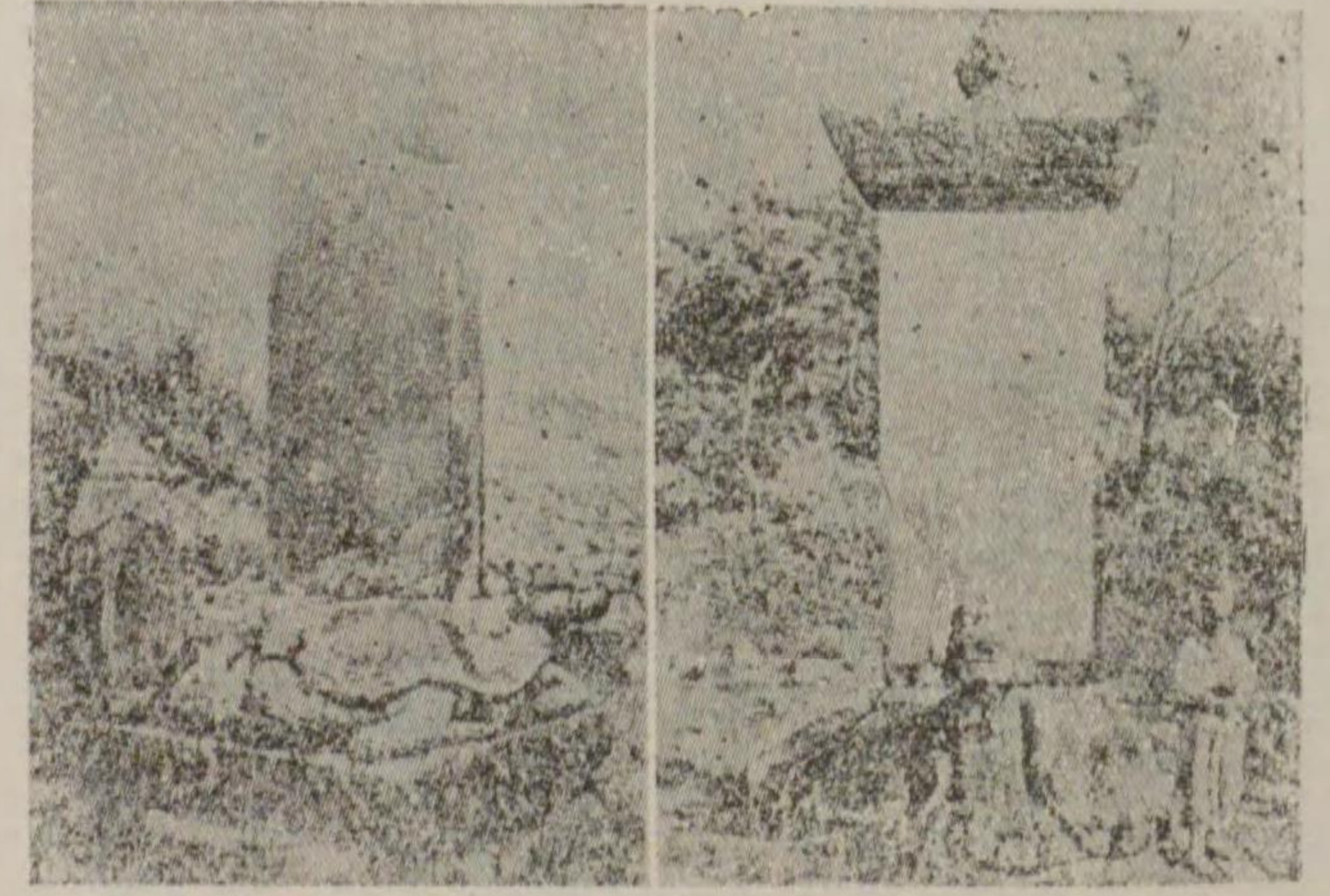
碑師大鏡法寺土淨 碑師大空眞寺法興 碑師大徹眞寺照廣

圖九十三百第 圖八十三百第



碑師化玄 碑師大宗元院達高

圖一十四百第 圖十四百第

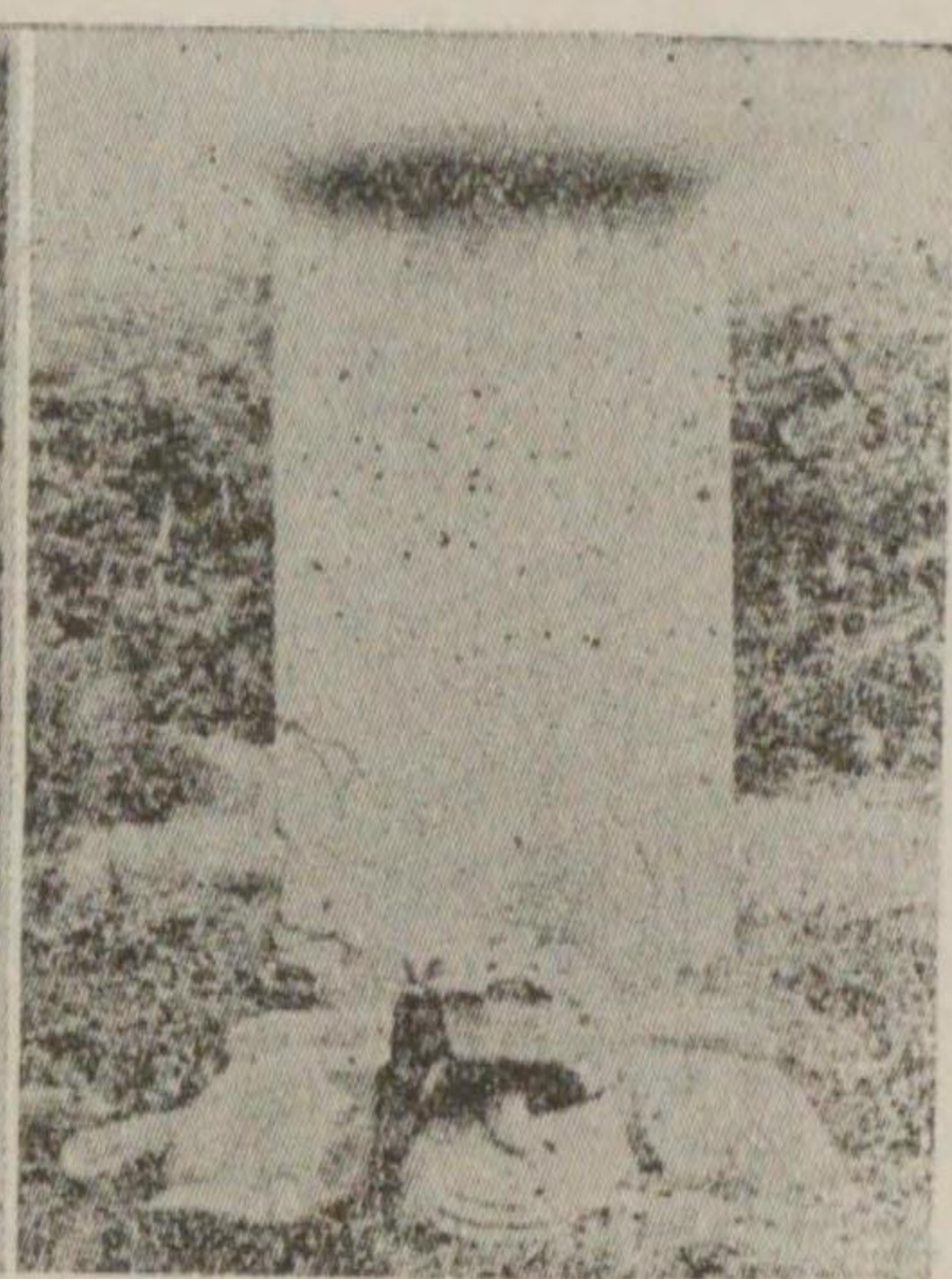


碑應眞寺山金 碑師國光智寺泉法



草を兼ね豪宕俊逸の氣象を示してゐる太宗御書の碑は支那にては山西省太原縣の晋祠にもあつて亦行草より成れども惜むらくは後世の拓本者妄りに文字を彫り直せし爲め著しく當初の筆意を傷けてゐる而るに此碑折損三石となり且猶不足せる處あれども書體大半鮮明眞趣を味ふに足れるは貴ふべきである近世原州に移し其一片は路傍の橋となり更に舊客舎の前庭に埋没されしを先年余の原州に往きし時

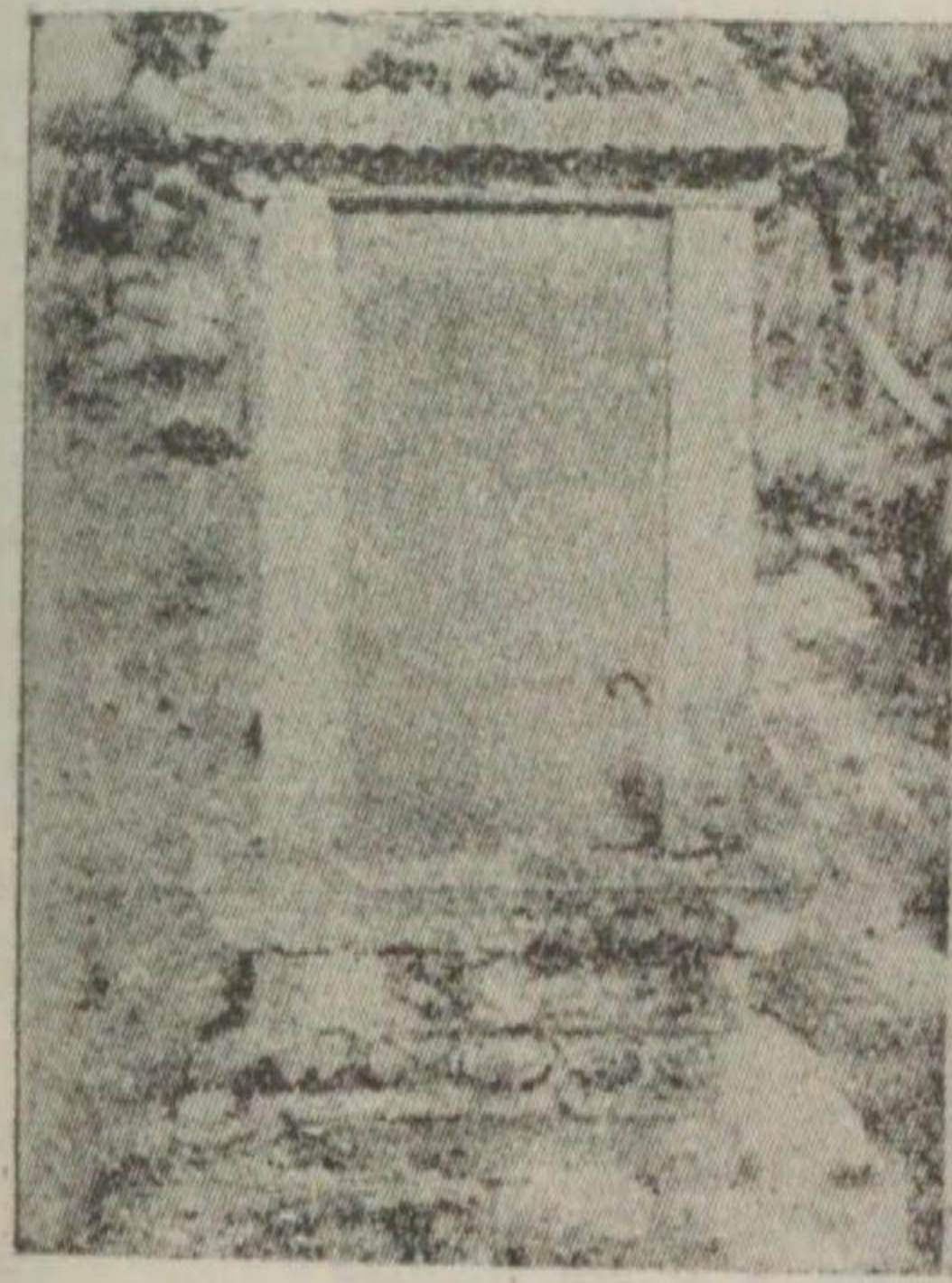
圖二十四百第



碑師國覺大寺通靈

故老に訪ふて之を發掘し又苦心搜索の結果他の一片が守備隊の墻壁に積み込みあるを發見し始めて再び世に現はるゝに至つた今は總督府博物館内に移し置かれてゐる其龜趺及び螭首は依然舊寺の廢址に遺つてゐるが其様式は前者に似て一層豪麗の風を發揮してゐる。

圖三十四百第



碑鐘石濟普寺勒神

普賢寺朗圓大師悟眞塔碑 太祖二十三年立つる所螭首低くして蟠結せる盤龍の上に寶珠の挺出せるは斬新の手法である龜趺亦雄渾の氣象を示してゐる。

廢淨土寺法鏡大師慈燈塔碑 太祖二十六年の者螭首龜趺豪健にして様式眞徹大師碑に似て技工伯仲の間にあれども規模

の大なるを以て一層雄渾の風をあらはしてゐる。

廢高達院元宗大師慧眞塔碑

慧眞塔が高麗第一流の傑作たることは既に前に説いた碑も亦其形態の

偉大なると螭首龜趺の手法の豪宕雄渾なることは遙かに群を抜き麗碑中之に比肩すべき者は殆ど稀れである余の往きし時は仆れて螭首碑身草莽中に横はつてゐた其後再興せしが再び倒れ碑身は此時數片に折損したのは惜むべきである。

廢淨土寺弘法大師實相塔碑

顯宗八年の作今塔と共に移されて總督府博物館の後庭に立つてゐる様

式普通なれども稍纖麗の手法を用ひてゐる。

玄化寺碑

前者に後るゝこと僅かに四年顯宗十二年に立てられし者なれども彼の新羅式を祖述する

に反し此は頗る固有の特質を發揮してゐる龜趺は當時普通の手法より成れども碑身は上部に穹形を畫し其内に篆額を容れ其左右に日月象を刻し更に穹形外に双鳳を作り又左右の碑側に昇降の龍を高肉彫となし以て精麗にして而も雄豪なる精神を發揮してゐる更に碑首は寶蓋狀をなし其軒蛇腹に纖巧なる雲龍を刻し頂に寶珠を上げてゐる玄化寺の七重石塔が羅末の形式を踏襲せず新生面を開きしことは既に前に説いたが此碑亦從來の傳統的の手法を脱却して新機軸を出だせるは頗る多とすべきである且現存麗碑の多くが悉く墓碑なるに反し獨り紀念の性質を帯びたる者なるは一層此碑の光彩を増す者であ



る。

廢巨頓寺圓空國師勝妙塔碑 顯宗十六年の作從來の範疇を出でざれども螭首の下部に垂帳様の刻まれてあるのは新らしき手法である。

廢法泉寺智光國師玄秘塔碑 宣宗二年立つる所玄化寺碑に次ぎて更に斬新富麗の手法を弄せし者龜趺背甲の文様纖麗にして下に雲文を刻せるは從來見ざる所碑身の周縁に寶華を刻み上部篆額の左右及び其上には鳳凰寶華をあらはし碑側に兩龍珠を争ふの狀を高肉彫に作つてゐる碑首は寶蓋様をなし四面の蛇腹には纖巧なる雲龍を陽刻し下に蓮花を刻み上に處々花様を綴り更に頂に寶珠蓮華座を飾つてゐる其浮圖と共に麗時に於ける此種の最も精緻富麗なる者而も氣力之に伴はず爛熟の極反て纖弱の弊に陥らんとしてゐる。

金山寺眞應碑 睿宗六年に成りし者にして螭首若くは寶蓋を失ひ碑身の頭部の兩端は少しく圓くなつてゐる龜趺頗る巧麗多少の新意を出してゐる。

廢靈通寺大覺國師碑 仁宗四年の作龜趺普通なれども碑身の周縁に寶華をあらはし上部篆額の左右に優麗纖美なる鳳凰及び寶相花を刻み碑身の上に屋蓋様を冠せるは斬新の意匠に出て軒薄く垂木密にして頗る輕快の風を帯びてゐる亦麗碑の一新例である。

神光寺無字碑 螭首特異の意匠に成り碑身の兩側に最も雄麗なる雲龍を高肉彫にしてゐる亦麗時の佳作なれども何故か碑面一字を刻まず隨て正確の年代を知ることができぬ。

清平寺文珠院碑 碑は頭を穹狀に作る妙香山普賢寺碑は袴腰狀に作りしのみにして共に方趺の上に立つてゐる手法極めて簡素麗碑の意匠が中期頃より急に簡單化せるを見ることが出来る。

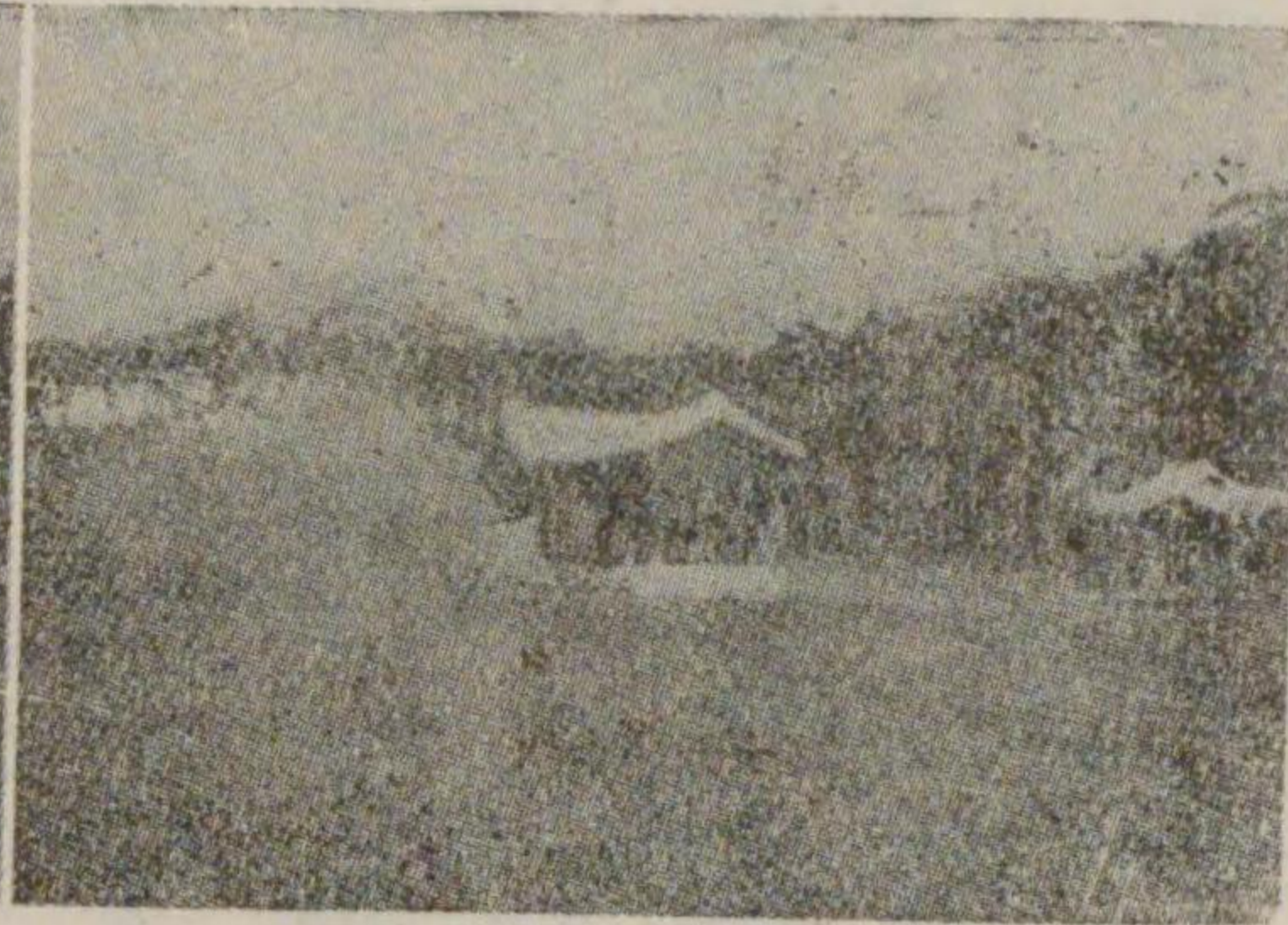
廣通普濟禪寺碑 今恭愍王陵下の廢寺址に立つてゐる辛禡三年立てられし者にして普通碑と全く形式を異にし横に廣く屏障狀をなし上に蓋石を載せてゐる灰色の大理石を水磨きにし周縁に寶相花を刻み下に牡丹花枝を羽目内に寫し碑側に雲龍を刻し蓮花を刻める趺石の上に載つてゐる從來の典型外に出て別に新形式を創めし者である。

神勒寺普濟石鐘碑 辛禡五年即ち麗末の作にして基壇上に大理石の碑身を立て左右兩柱を以て之を支持し上に簡單なる斗拱を刻し瓦葺を摸せる低き屋蓋石を冠せる者にして是れ亦從來無き所の新意を出だせし者である同寺大藏閣記碑（辛禡九年）及び妙香山安心寺石鍾碑（辛禡十年）亦是れと殆ど同様式より成つてゐるが技工は稍劣つてゐる。

經幢 支那に於ては唐末五代の頃盛んに經幢を立て陀羅尼を刻したが此風亦高麗に入り今現に黃海

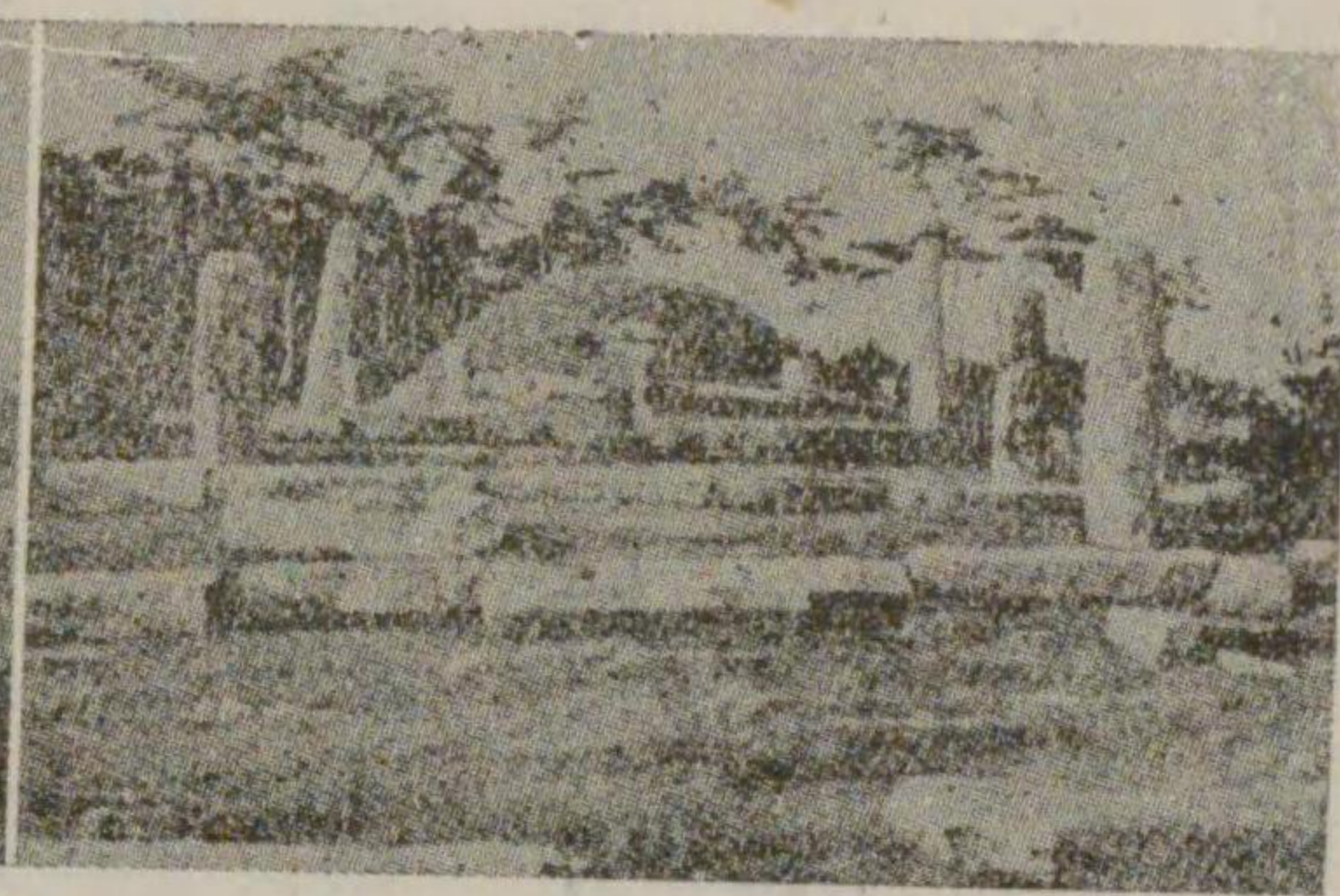


圖四十四百第



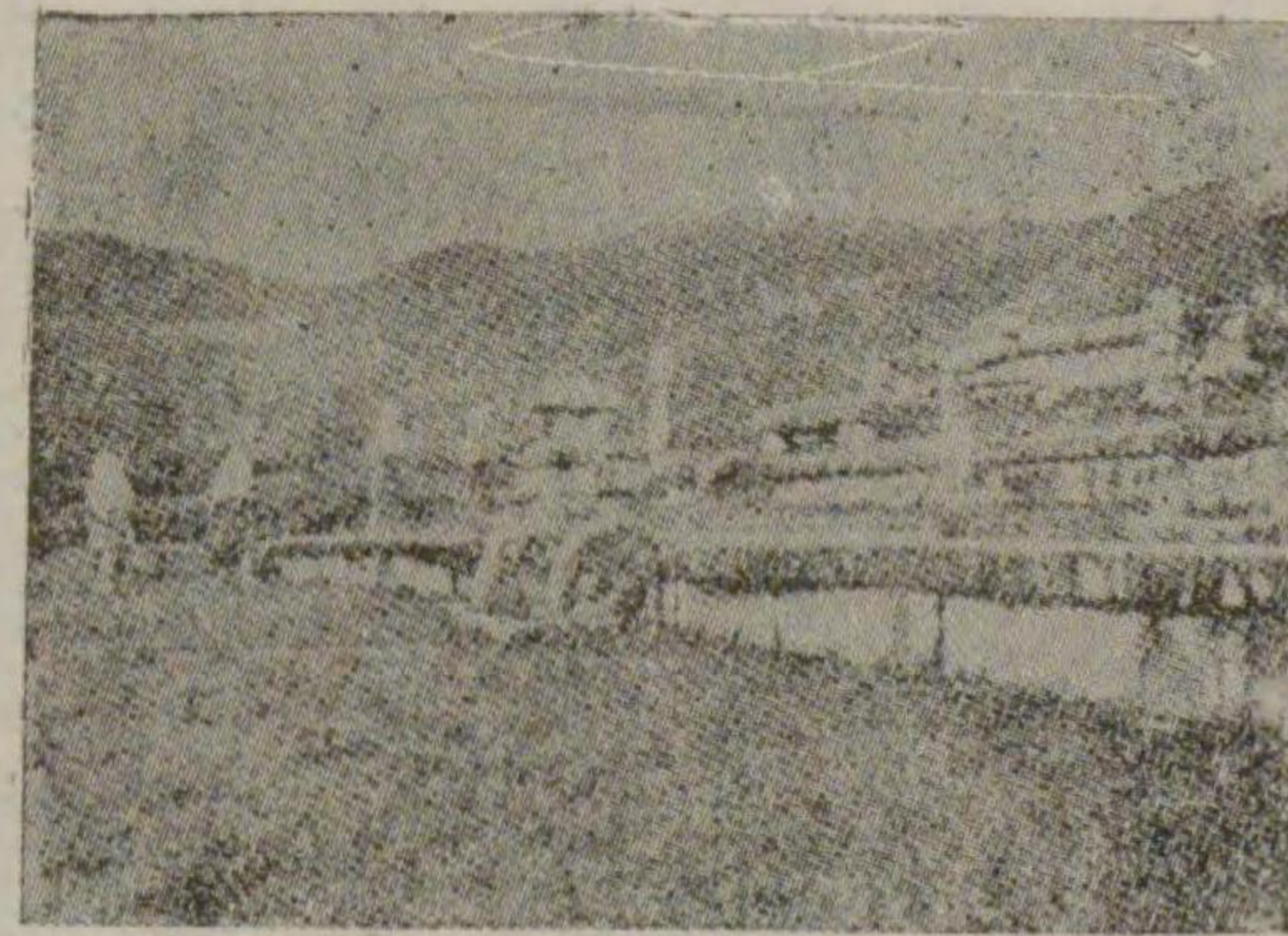
景全陵顯祖太麗高

圖六十四百第



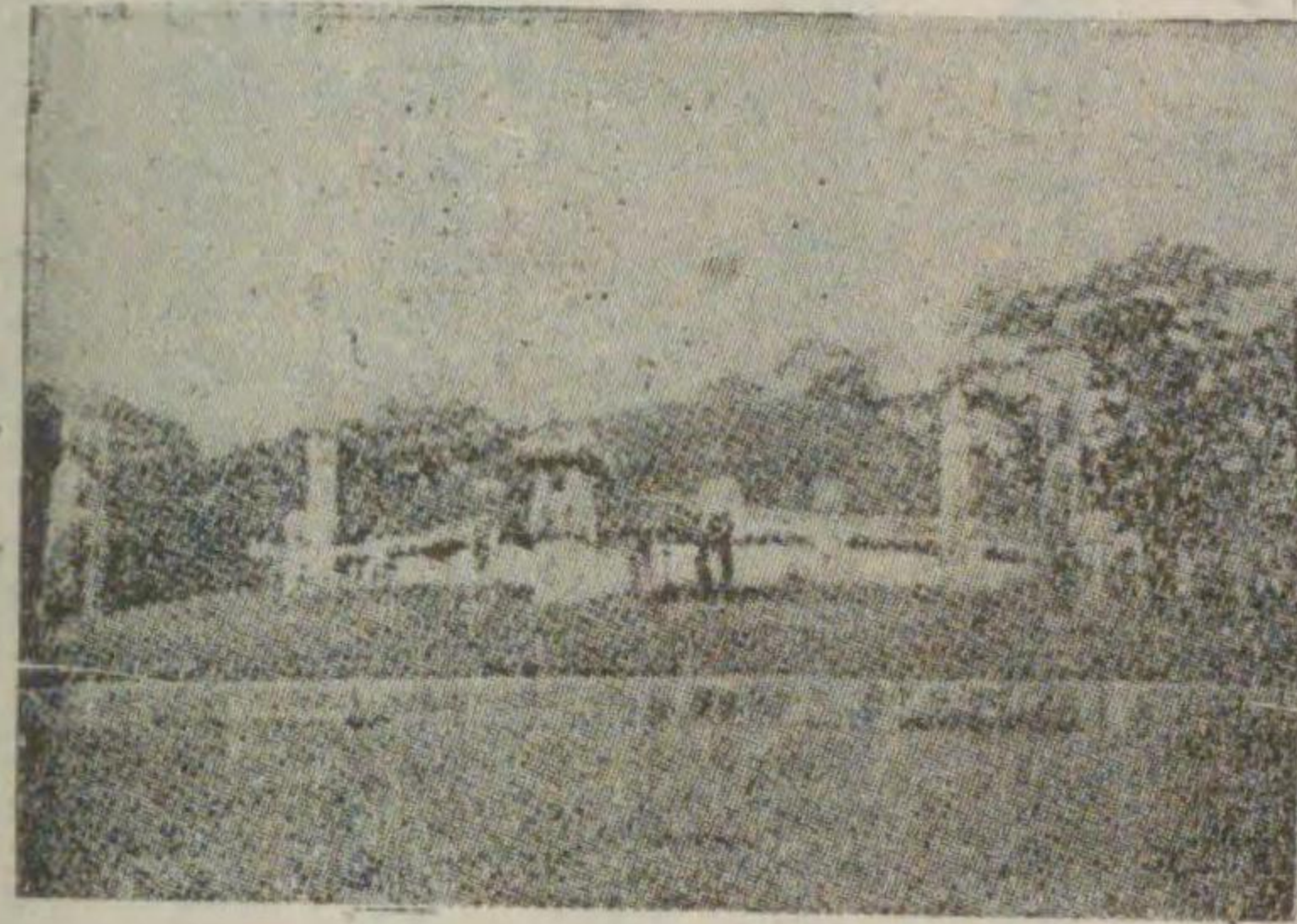
陵七第洞陵七

圖八十四百第



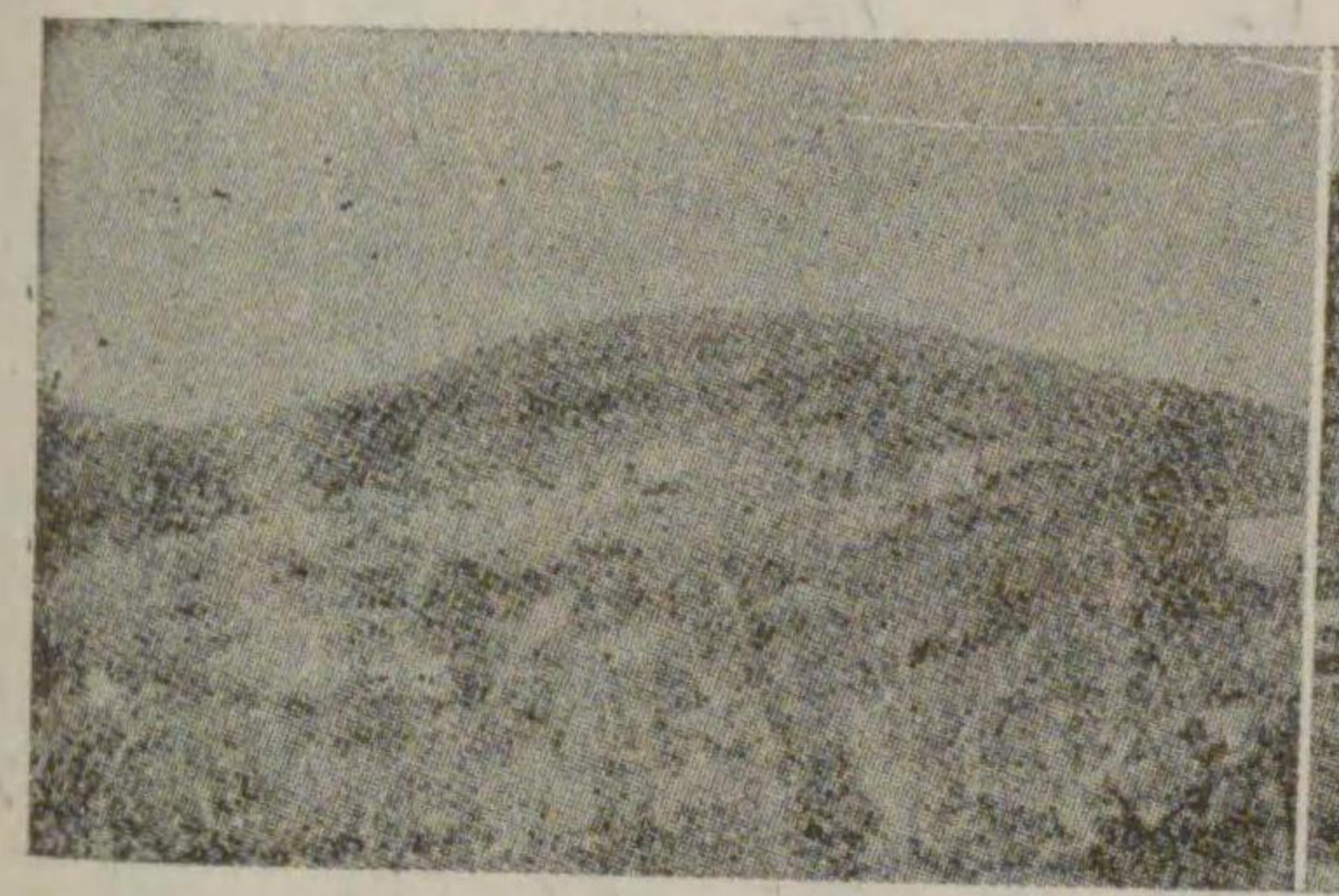
陵正妃及陵支王愍恭

圖五十四百第



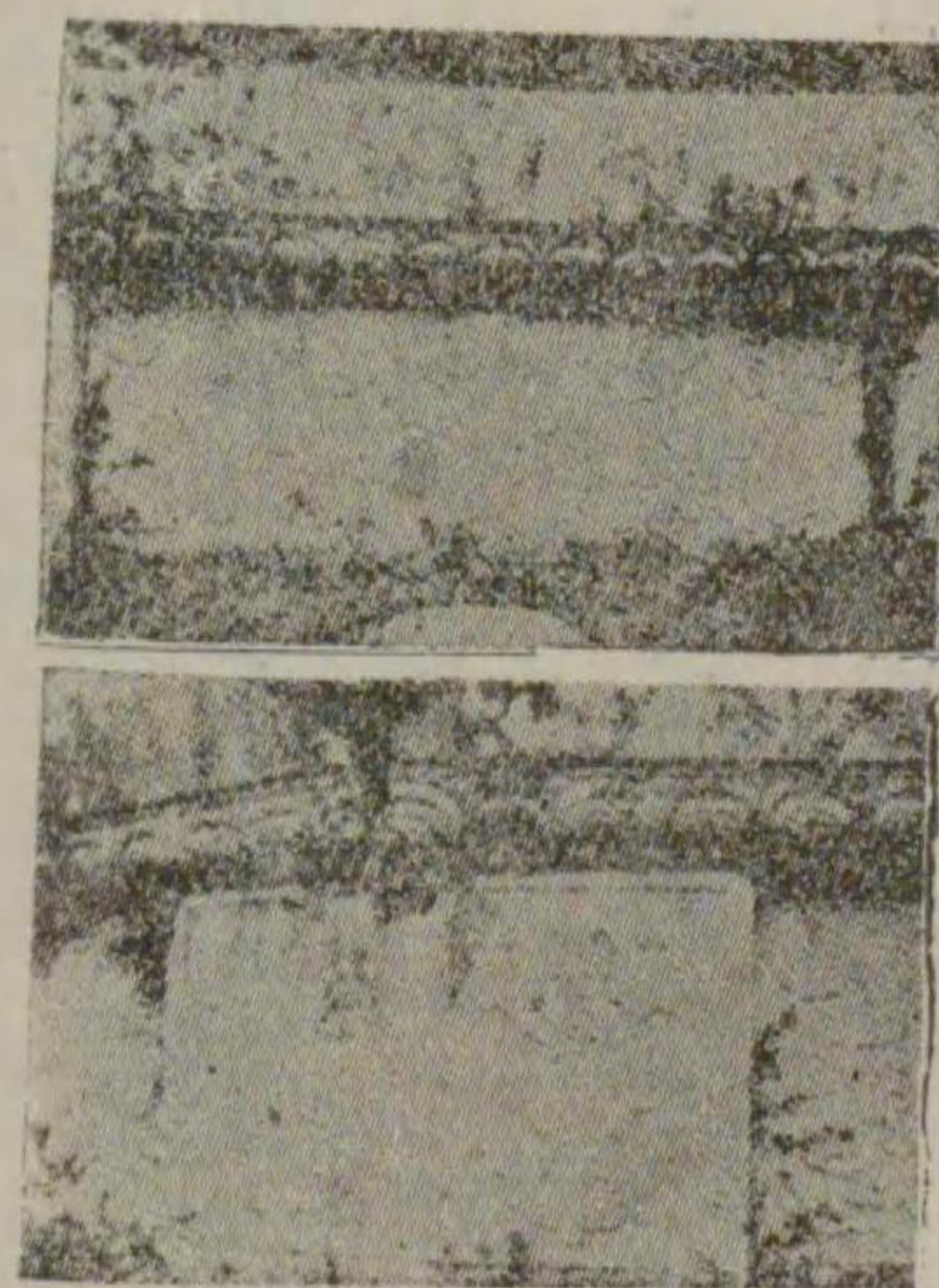
陵顯祖太

圖七十四百第



景全陵正妃及陵支王愍恭

圖九十四百第



石護陵支王愍恭

道海州と平北龍川とに各一基の經幢が遺つてゐる共に八角の基壇の上に長さ八角柱を立て各面に陀羅尼を刻し柱上に三層の寶蓋を冠せる者にして技巧も亦頗る優れてゐる蓋し高麗時代初期に屬する者であらう。

●陵墓 高麗時代の王陵は主として其都城たりし開城の附近に築かれ一部は長湍江華嶋等に散在してゐる即ち開城郡に屬する者は

- 太祖顯陵 惠宗順陵 定宗安陵 光宗憲陵 景宗榮陵 戴宗泰陵 成宗康陵 顯宗宣陵
- 順宗成陵 睿宗裕陵 神宗陽陵 元宗韶陵 忠穆王明陵 忠定王聰陵 恭愍王立陵

にして長湍郡に在る者は

- 文宗景陵 肅宗英陵 明宗智陵
- 江華嶋に在る者は
- 熙宗碩陵 高宗洪陵

である此他王妃の陵もあれば開城七陵洞の七陵の如く何王に屬せし者なるや不明の者もある。

新羅興德王陵の地相及び象設が後世の標準となりしことは既に前に説いた高麗時代の王陵は之を繼承して多少の新意を出だし一の典型と稱すべき者を生じた今此等を概言すれば



(一) 墳は常に後に主山を負ひて南面し主山の支脈墳の左右を擁して龍虎の勢をなし主水客水往々其前に合流し平野を距て、遙かに特起せる所謂安山を望むやうになつてゐる。

(二) 墳は主山の麓稍高き所にありて其前面數層の段狀をなし高さ約十尺乃至十五尺周圍に護石を繞らしてゐる此護石は十二角形にして初期の者は其面が十二支の方位に一致すれども後期の者は之に反して其隅角がそれ／＼の方位を指すやうになつてゐる此護石の羽目石には往々十二方位神の像を淺く薄肉彫にしてゐるか稀れには陰刻の者もある此等の方位神は新羅の墓制に倣ひしものなれども彼は東石に彫刻を施したれども此は羽目石に彫刻をあらはしてゐる彼は立像にして手法雄渾の者多きも此れは立像と坐像とありて技工は頗る稚拙である。

(三) 墳の周圍には約二尺を距て、石欄を繞らしてゐる新羅の玉垣風なるに反し此れは高欄様となつてゐる墳の前面に石床のあるは彼れと同様なれども左右に望柱と稱する八角柱を一對立てゝゐるのには彼に無き所にして彼の參道の前面に立てられし石柱が墳の前面に移されて此望柱となつたのであらう次に下の第二層墳には中央に長明燈を立てゝゐるが是れ亦高麗の創始であるとして其左右と下の第三層墳の左右に石人が各一對立てられてゐる次の第四層墳は割合に廣くして此處に丁字閣(寢殿)が立つてゐたのである今悉く破壊し去られしも猶往々當初の平面を見るべき礎石が遺つてゐる又墳の

周圍には新羅王陵の如く石獅を配せし者もあれば當代の工夫にて石虎石羊を交互に配置した者もある。

要するに高麗時代の陵墓は其地相象設等大體に於て新羅の制度に倣ひしも新に望石石燈丁字閣を設け石羊石虎を墳の周圍に配するなど多少固有の特質をあらはし次ぎの朝鮮時代陵制の基を開いたのである。

墳の内部には長方形の玄室があつて四方の壁は石を以て築き正面に入口を開き別に羨道を設けず直ちに大石を立てゝ此入口を外より塞いでゐる内部の壁天井は皆石灰を塗り天井には星辰を畫き四方の壁には四神圖十二支神像等の圖を作つてゐる。

玄室内には木棺を安置して盛んに飾金具を打ち又多數の明器を藏めてゐた是れは王陵のみならず富者高官競ふて豪華なる副葬品を納めたのである爲めに近年此等幾萬の古墳は盜掘の厄にかゝり當時の文化を徵すべき各種貴重品の工藝品は再び世に出づることゝなつた王陵以外の古墳内には石棺を藏する者多く此等石棺には普通四神圖や星辰圖天人などを陰刻してゐる。

當代の王陵には當初の象設を其まゝ猶保存してゐる者が多い而も一々之を説くの遑がないから今代表として高祖の顯陵・七陵洞の高麗王第七陵・恭愍王の玄陵及妃の正陵を説き別に余の調査せし開城水



落岩洞第一墳の玄室の構造裝飾に及びたいと思ふ。

**太祖顯陵** 開城の西約一里萬壽山の南麓小高さ處に築かれ龍虎の兩山左右を擁して最も形勝の地位を占めてゐる墳の周圍は十二角形の護石を以て圍まれ各面の腰石に十二支神像を陽刻してゐる各神像笏を捧げて正立せるは新羅時代の束石に彫刻せる者より一轉化を示せるものである又墳の周圍に繞らされたる石欄は彼の木柵より脱化し來れる者なるに反して高欄の形式を具へてゐる墳の前面には供物を具ふる石床及び長明燈(石燈籠) 相次第して立ち左右に望柱と稱する八角柱にして頭部に寶珠形を冠せる者が對立してゐる此長明燈及び望柱を立つることは高麗に始まりし者にして石床の下なる臺石の格狭間内に双禽寶花を陽刻せるも斬新の手法である又墳の四隅に石獅を立て前面に石人一對を置いてゐるのは新羅の遺制である此陵は外敵の侵入毎に梓宮を他に奉して難を避け事収まりて復葬せしこと數々あれば大體の制度は當初のまゝならんも其象設は多少後世の手法を混じてゐるかも知れぬ山下には今丁字閣碑閣の設けがあるが是等は何れも李朝後期の者である丁字閣は他の例によれば當初山下に在らずして墳の前面に近く石人の列の下にあつた者と思はる。

太祖以下歴代の王陵は其制度大同小異なれども今象設の完備せる者は光宗の憲陵と元宗の韶陵及び七陵洞の第三陵であるが先年七陵洞の第七陵が賊の爲めに發かれ總督府に於て玄室の構造を調査した

ことがあるから茲には主として此第七陵を説くこととする。

**七陵洞高麗王第七陵** 七陵洞と稱する處には山谷の間に七基の陵が點在してゐるが何王に屬すべき者なりや何れも不明である其中第七陵は地相普通の制度に同じく墳は十二角形の護石を繞らし其隅角は十二方位を指してゐる周圍に石欄あり前面に石床長明燈左右望柱を置くこと型の如く一段低く前面に石燈左右に石人一對あり更に其下に一段低く再一對の石人を置てゐる又其前面に一段低く丁字閣の礎石が猶遺存してゐる此陵の制度象設は普通見る所の如くにして望柱石人石燈皆頗る簡樸の手法より成つてゐる。

墳の内部に廣さ九尺一寸長さ十尺二寸の平面を有せる長方形の玄室がある其左右後の三面の壁は野石を以て築き正面は入口を開きて其左右に切石を重ね立て入口の外面に接して大なる石を二枚並べ立て以て入口を閉塞してゐる天井は五箇の大石を東西に架して造り四壁天井は石灰を塗り天井には星辰圖を描いてゐる壁には當初繪畫を施せしならんも今剝落不明である兎に角此玄室の調査により吾人は當代玄室構造の一斑を知ることができたのである。

**恭愍王玄陵及び妃正陵** 此陵は高麗時代の陵制に一轉機を畫して以て次の朝鮮時代陵制の標準となりし者にして其壯麗殆んど空前を以て目すべきものである恭愍王の十四年二月最愛の王妃の薨するや



王大に之を哀み親ら其眞を寫し日夜對食悲泣三年に至つたと稱せらるゝ程で愛妃の爲め空前の土木を起し且巳が壽陵をも其傍に並べ築いたのである元來高麗時代には王陵と王妃陵とは常に其處を異にし別々に地形を相して經營したのであるが是に於て始めて一兆域内に二陵を並べ全體の象設を共通とし意匠も技巧も當時の精華を盡し以て壯麗輪奐たる新制度を作り出したのである。

陵は鳳鳴山麓の丘上にありて正陵は東に玄陵は西に兩墳相並び石欄各其周圍を繞り中間に於て相連接し石羊石虎更に其外を周りて配置せられてゐる墳の前面に各石床があり其下の中壇には各一石燈が立てられ更に此兩墳に對し共通に上壇前面左右に望柱一對中壇に文石二對下壇に武石二對が次第に立てられ各壇にそれ／＼美なる石階段が一處若くは三四處設けられてゐる從來の石人石獸は新羅時代の者に比すれば簡樸に失せしも此陵に至り始めて雄麗精緻の技巧を示すことゝなつた。

兩墳共に護石の地覆石葛石には蓮花を刻み隅束石には三鈿若くは三鈿鈴をあらはし更に羽目石には雲中神人像を浮彫にしてゐる是れは恐くは十二方位神をあらはした者であらう其他石欄望柱石床石燈の屬皆彫琢の美を極め石人石獸亦雄偉精麗の風貌を示してゐる要するに此兩陵は恭愍王が全力を傾け盡して經營せし者從來の典型を破り規模壯大象設奢麗實に麗末掉尾の傑作を以て目すべき者である。

**開城水落岩洞第一墳** 開城の南山の背面にある小墳にして先年盜掘の厄に罹つたが余は其後京城に往きし時之を實査することが出來た麗時完全なる玄室内部の構造裝飾を見るべきものである。

玄室の構造は前記七陵洞第七陵に似て其廣さ約十尺長さ約十三尺中央に一段高く石床を設けて棺座となし大石を數層に重ねて壁を築き正面に入口を開き大石を立て、其外を閉塞し大なる三本の石を横に並べて天井を作り壁より天井にかけて石灰を塗り（但し天井は悉く剝落してゐた）右壁の下に白虎左壁の下に蒼龍後壁の下に玄武を描き其上部に各面三軀づゝ十二支神像を描いてゐた入口には木製の扉を設けし痕迹があつたから此の扉の面に恐らくは朱雀及び他の三神像を描いてあつたのであらう。

余等内部を搜索せしに鮮麗なる青磁破片（恐らくは七八百年前）灰黒色素燒壺・刀斷片・漆地に金箔を押しした木棺破片及び鐵具鐵釘鐵鉸具等を獲た

## 彫刻

高麗時代には佛教の隆盛に伴ひ大伽藍の營建と共に佛菩薩天部等の像が多く作られたが朝鮮時代の排佛と幾多の災禍に殃せられ其遺物は甚だ稀にして我藤原鎌倉時代の豊富に現存せるに比すべくもあらず其遺存せる者は主として石彫に屬し塑像は太白山浮石寺に唯一軀を存するのみ木彫は絶無といつ



てもよい銅像には大なる者なく且實例も甚乏しい鐵像には一二觀るべき者は無いでもない高麗圖經によれば開城興王寺には元豐年間宋帝より賜はつた夾紵佛像があり高麗史には睿宗の時安和寺に十八羅漢像を賜はつたことが載せてあるから是等宋より輸入せられたる佛像が當時の彫刻界に多少の影響を與へたに相違ない而も大體に於て新羅傳來の様式を本として次第に時代の好尚の加はりし者と見るべきであらう特に長く元の勢力の下に屈服して居たから喇嘛の様式は當時の彫刻界に多少の影響を及ぼしたであらう當代に屬する彫刻物の主なる者を擧ぐれば

慶北榮州	浮石寺無量壽殿塑造彌陀像	光宗一九一	宋開寶元一	安和元一	九六八一
忠南論山	灌燭寺彌勒大石像	景德三	寬弘三	一〇〇六	
同扶餘	大鳥寺彌勒大石像				
江原淮陽	摩訶衍妙吉祥摩崖大石像				
京畿京陽	僧伽寺摩崖釋迦像				
忠南論山	廢開泰寺三尊佛石像				
京畿開城	觀音寺觀世音菩薩石像				
江原原州	彌勒彌陀等石像				
全南順州	多塔峰石佛二十餘軀				
全南平壤	永明寺八角石佛龕				
平南開城	廢寂照寺鐵造如來像				

江原原州	鐵造彌陀像(本楮田洞)				
同	鐵造藥師像(邑玉坪)				
同	高城	楡岾寺能仁殿小銅佛五軀			

**浮石寺無量壽殿木造彌陀坐像** 是れ實に高麗時代唯一の塑像である當代には塑像は勿論木像も多數造

られしならんも是等は悉く烏有に歸した幸に浮石寺の無量壽殿は既記の如く當代中期再建のまゝ存在せるを以て其内部に安置された本尊彌陀の塑像も無事なるを得たのである其年代は様式上本殿と同時にあらう丈六の坐像にして背光亦當初のまゝ現存してゐる姿勢堂々として面相溫和の裡雄偉の精神を藏し衣文の線條亦頗る自由之を宋代若くは我鎌倉時代の者と比するも敢て遜色を見ぬ背光は木製にして其表面に流麗なる寶相花を塑土を以て浮彫にし其周圍の火炎狀は木彫にして炎々燃え揚る様な手法を示してゐる像は内部木彫の上に塑土を施し其表面を布張にし金箔を押しした者のやうである要するに此像は高麗時代此種最古最優の傑作にして當時藝術の進歩悔るべからざる者ありしを語るものである。

**灌燭寺彌勒大石像** 立像高さ約六十五尺半島第一の大石佛である此像は傳へて光宗十九年に工を創

め三十八年の歲月を経て穆宗の九年に成つた者と曰はれてゐる全部花崗石より成り腰以下一石、腰以



圖十五百第



像坐陀彌造聖寺石浮

圖一十五百第



佛石大寺燭灌

圖二十五百第



佛石大寺鳥大

圖三十五百第



佛石大崖摩祥吉妙

圖四十五百第



像迦釋崖摩寺伽僧

圖五十五百第



像音觀寺音觀

圖六十五百第



龕佛石寺明永

圖七十五百第



佛鐵寺照寂

圖八十五百第



畫壁殿師祖寺石浮

朝鮮の美術工藝

上頭胸部亦一石より成り更に胸部の左右に各堅てに細長き一石を緊結して兩臂を作り頭上更に石造の二重寶蓋を載せてゐる此像の偉大なる半島中能く之に及ぶ者なきも頭部大に過ぎ全體の權衡美ならず面相平凡衣文の手法亦た簡單である而も自然の巖山より伐り出せし者にあらずして此の如き偉大なる石材を他より運び來りて之を組立てし技倆に至りては頗る驚くべき者がある。

**大鳥寺彌勒大石像** は全高約三十三尺天然の巖より佛體を鑿り出だし別石の寶冠を載せたものである多分前者を摸して造つた者であらう前者に亞ぎ半島第二の大石像にして彼に比すれば規模の稍小あるだけ形は整ふてゐる。

**摩訶衍妙吉祥石造大佛像** 金剛山摩訶衍の近くにある高さ約百尺の巖山の面から半肉彫に作り出された坐像にして高さ約四十五尺頭部稍大に過ぎたれども面相衣文稍觀るべく麗時



の優作である。

僧伽寺摩崖釋迦像

京城北漢山上僧伽寺にありて高さ約二十一尺巖面に薄肉彫に作れる者にして手法頗る精麗殆ど新羅作に迫つてゐる亦麗時の優作たることを失はぬ。

廢開泰寺三尊佛石像

開泰寺は高麗太祖の創立する所今其廢址に石造彌陀三尊の立像が立つてゐる面相温麗衣文の彫法亦優れ權衡稍低きも兎に角麗時の佳作である。

觀音寺觀世音菩薩石像

開城天磨山中觀音寺の石窟中に安置せられてゐる姿勢優雅にして寶冠佩飾衣文等の手法頗る纖麗亦麗時の傑作である。

原州彌勒彌陀等石像

原州の郊外に石造彌勒彌陀等の像が田畑の間に往々露佛となりて散點してゐる何れも彫飾を施せる臺座の上に安置せられ姿勢技巧共に佳當代初期の傑作をあらはしゐる。

多塔峰石佛

多塔峰の石塔婆の事は既に説いた此等塔婆の外玢岩より彫み出されたる二十餘軀の石佛が處々に散在してゐる塔婆と共に麗時に作られし者なれども姿勢も古拙に手法も粗豪殆ど觀るに足るべき者はない。

永明寺八角石佛龕

平壤永明寺の境内にありて其平面は八角形をなし四隅に各一石を立て、壁とし四面を解放し上に屋蓋を作り頂に寶珠露盤を載せてあつたのであるが今寶珠の部を失つてゐる四隅

の立石には三尊佛、四天王等の像を表裏に薄肉彫にあらはし内部に八角形の座を作り又各面に天人を陽刻し上に今頭部を失ひたる佛像を安置してゐる此佛龕摩損破壊少なからざれども秀麗なる様式温雅の手法高麗初期の傑作たることを示してゐる。

石像は猶此他にも多數遺存すれども材料は皆花崗石を用ひ技工困難にして粗拙に失し易く爲めに出來榮も亦よろしからず觀るに足るべき者は稀である。

廢寂照寺鐵造如來坐像

當時代の銅鐵像の遺存せる者は割合に少く且傑作もない唯寂照寺址に在りし(今總督府博物館藏)鐵造如來坐像は最も優秀なる者にして新羅の優作に比するも遜色はない姿勢もよく齊ひ面相雄偉衣文の技巧勁健を極めてゐる此他原州郊外邑玉坪にある鐵造藥師像亦麗初の優作にして前者に比すれば頗る優雅の氣象を示してゐる又原州郊外本楮出洞にある鐵造彌陀像は年代稍後れたるも佳作たることを失はぬ。

金剛山楡帖寺能仁殿

には既記多數の新羅佛に混じて當代の者と思はるゝ小銅佛五軀を安置してゐるが何れも凡作である尤も個人の蒐集品の中には多少觀るべき者が無いでもない。

繪 畫



高麗時代の繪畫は宋元の影響を受け相應の進歩をなせしならんも遺物は極めて稀である朝鮮に遺つてゐるよりも却て日本に將來され無事に保存されてゐる者の方が多い吾人は僅かに是れによりて當代繪畫の一斑を窺ふことができるのである今余の知れる範圍内に於て遺存せる者を擧ぐれば

慶北州	浮石寺祖師殿壁畫	辛禍三	明洪武一〇	天授三	一三七七
京畿城	水落洞古墳玄室壁畫				
京畿城	朝鮮總督府博物館藏				
京畿城	恭愍王筆陰山大獵圖				
京畿城	李王家博物館藏				
京畿城	李王家博物館藏元陳鑑如筆				
慶北東城	李齊賢像				
慶北東城	紹修書院安裕像	忠肅五	元延祐五	文保二	一一三八
慶北東城	大恩寺王宮曼陀羅圖	忠宣四	元皇慶元	正和元	一一二二
日北愛知	法恩寺釋迦三尊阿難迦葉畫像	忠肅一七	元天曆三	元德二	一一三〇
日本和歌山	高野山親王院釋迦說法圖	忠定二	元至正一〇	正平五	一一三〇
日本長崎	最勝寺涅槃圖				一一三五〇

浮石寺祖師殿壁畫 太白山浮石寺の祖師殿は辛禍三年の再建であることは既に前に説いた此祖師殿

の内部前面の中ノ間入口の左右壁及び脇の間窓の内方の壁面に四天王像をそれ／＼描き又此窓の外方の壁面に梵天帝釋の像を描いてゐる何れも緑青地に彩色を以て作れる者にして用筆簡樸傳影淡雅其様式は宋初若くは我藤原時代の倣を有してゐる是により高麗時代には傳統的様式の永く繼續せることを知ることができざる兎に角當代の繪畫にして朝鮮の地上に現存せる殆ど唯一の實例にして亦最古の標本なれば頗る貴重の者といはねばならぬ。

水落洞古墳玄室壁畫 開城南山麓水落洞古墳の事は既に前に説いた其玄室の壁は漆喰を塗りし上に左右壁及び後壁の下部には白虎蒼龍玄武を彩色を以て描き其上部に各面三軀づゝの方位神立像を寫してゐる此等の神像は何れも衣冠を着け冠の上に其方位に相當する動物の像をあらはしてゐる正面入口には木製の扉を設けし形迹あり扉面に方位神及び朱雀を描いてゐたものと思はる筆意温雅にして面貌姿勢亦よく齊ふてゐる恐らくは高麗時代の中頃に屬する者であらう。

高麗時代の陵墓の玄室には多く壁畫を作りしが如くなれども余の實査せしものは前記の古墳一あるのみである。

恭愍王筆大獵圖 高麗時代の繪畫は大抵湮滅に歸せしのみならず畫家の名すら殆ど傳つてゐぬ唯麗末の恭愍王は繪畫を善くせるが如く其筆と稱する斷片は往々傳はつてゐる總督府博物館には其陰山大獵圖李王家博物館には天山大獵圖と稱する者がある此兩者は元同一の繪卷物より切り取られし者の如く筆意は互に一致してゐる共に絹本着彩にして人物馬群の姿勢風骨枯樹黃草の蒼茫たる光景なご用筆



周密にして而も雄勁氣品亦高逸元人の墨を摩するに足つてゐる慵齋叢話に「恭愍王、畫格甚高、今圖書署所藏、魯國大長公主眞、及興德寺所在、釋迦出山象、皆王手跡、往々甲第、有畫山水、甚奇絶也」と載せ龍泉談寂記に「恭愍王、善大字、工冊書、畫阿房宮、人物小如蠅頭、冠衫帶寫、纖悉備具、精彩無與爲儔、所謂治國一事不能者耶」と評せるを見ても其凡筆にあらざることを知ることができると同記又「恭愍王妃が元より什物器用、簡冊、書畫等の物を多く舶載せられた今時傳ふる所の妙繪寶軸多くは其時齋し來られし者である」と載せてゐる是れは恭愍王妃に限らず高麗か元に屈服以後歴代の王妃は皆元の出なりし故元の名畫寶器の高麗に舶載せられし者此時以前にも無論少ならずさりしなるべく是等が高麗の繪畫に影響を與へしことも大なる者ありしこと、思はる唯恭愍王畫蹟の外當時の繪畫が殆ど散佚せしは惜むべきである。

次に元人の繪畫にして今朝鮮に遺存せる者が二點ある其一は元人陳鑑如筆李齊賢像（今李王家博物館藏）にして他は紹修書院安裕像である前者は肖像に於て元朝第一人と稱せられし陳鑑如の筆として風丰堂々として眞に迫つてゐる後者は近年の發見にかゝれる者であるが余はまだ一見したことも無いから説明を省くこととする。

次に早くよく我國に傳へられし高麗佛畫は余の實見せし者前表の如く四點を數へる。

大恩寺王宮曼陀羅は觀無量壽經の一節阿闍世太子と其父母に關する因縁を畫しし者にして頗る纖細巧麗の筆より成つてゐる忠宣王四年に描かれし者にて今日までに知られし高麗畫最古最優の實例である今既に國寶に指定せられてゐる。

法恩寺釋迦三尊阿難迦葉像及び高野山親王院釋迦說相圖は共に所謂張思恭風の筆意着彩に成つてゐる余は是れにより所謂張思恭筆と傳へられた多くの佛畫は高麗人の筆に成つたと思ふのである最教寺涅槃圖は我國普通見る所の者と稍構圖を異にし筆意は我藤原式と鎌倉式とを折衷せるが如き趣を有してゐる多分麗末に屬する者であらう。

## 工 藝

石工 石工に屬する者にして觀るに足るべき者は石燈と石棺墓誌石あるのみである。

石燈 當代の石燈は或は佛殿の前に立てられ或は陵墓の前に置かれた新羅時代の者に比すれば一般に形も劣り意匠も貧弱で唯其中一二優秀なる者を存するのみである今其主もなる者を擧ぐれば

忠 南 恩 津 灌燭寺石燈



全羅州	羅州西門内石燈	光宗二四	遼大安九	天延元	九七三
江原州	正陽寺石燈				
同	摩訶衍妙吉祥石燈				
同	神勒寺普濟石鐘前石燈	辛禰二	明洪武一二	康曆元	一三七九
同	七陵洞第三陵石燈				
同	恭愍王支陵及妃正陵石燈				

灌燭寺石燈

灌燭寺の彌勒大石像は既説の如く光宗穆宗間の作と傳へられてゐる其前面に一基の大石燈が立つてゐる様式上大石像と同時の者と認めらるゝ地臺石、中臺石共に方形にして豊美なる蓮花を刻み竿石圓くして中央に節狀を繞らし火袋石は大にして亦平面方形其上に二重の寶蓋及び寶珠を載せてゐる形體莊重手法雄健高麗時代第一の大作にして亦此種第一の傑作である。

羅州西門内石燈

羅州西門内道路の傍に在る石燈は既に火袋石を失ひ形態完からざれども竿石に刻まれたる銘字により遼太安九年即ち高麗光宗二十四年の作たること明かにして手法稍巧麗である。

正陽寺石燈

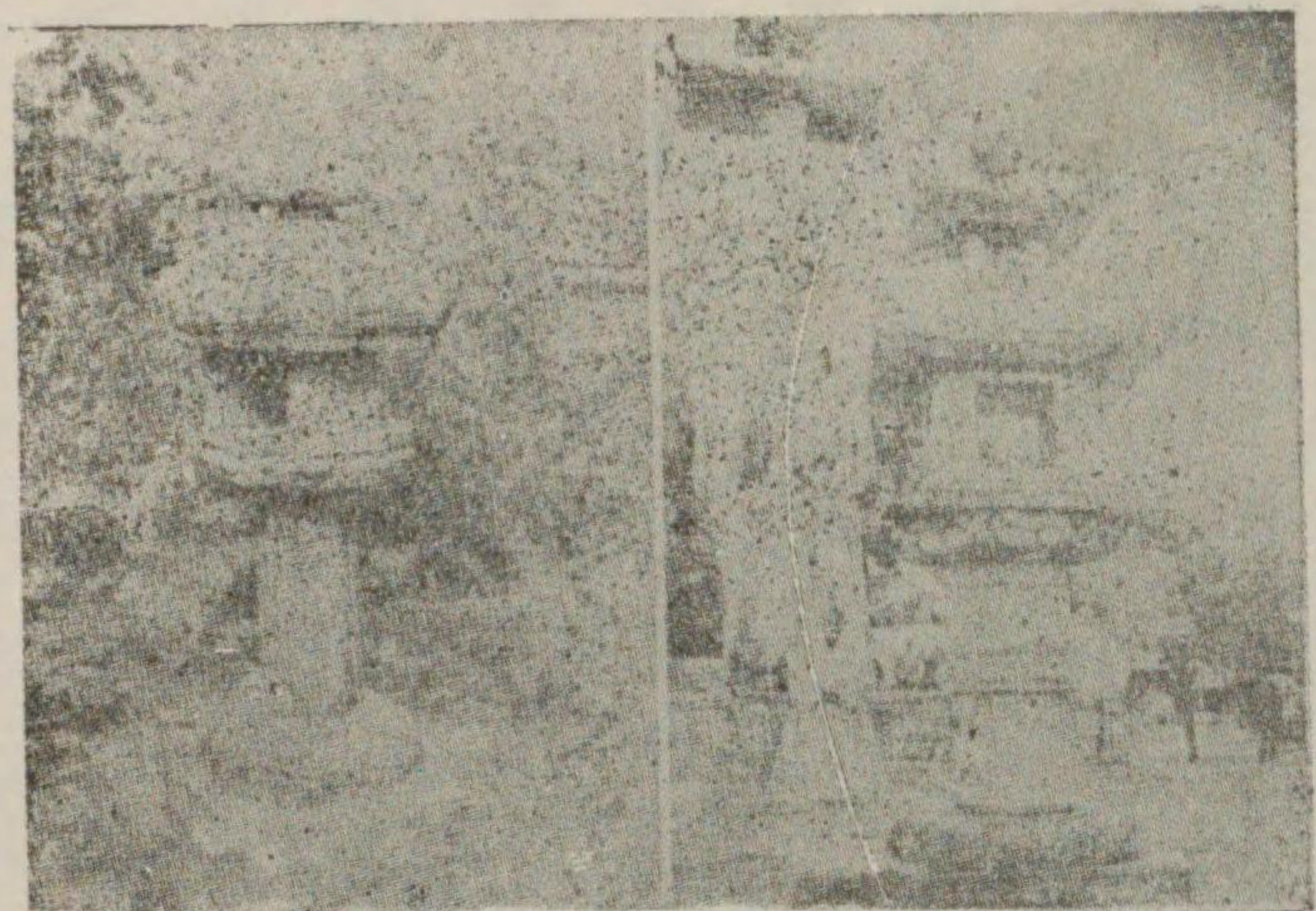
金剛山正陽寺佛殿前なる石燈は圓き竿石の外地の部分は皆六角形をなし特に火袋石の大なるは特色である當代中期以後の者なるべく形態手法共に粗豪に失してゐる又金剛山妙吉祥石燈は既記大石佛の前に在りて全部方形の平面より成る火袋特に大様式簡勁佳作たることを失はぬ。

神勒寺普濟石鐘前石燈

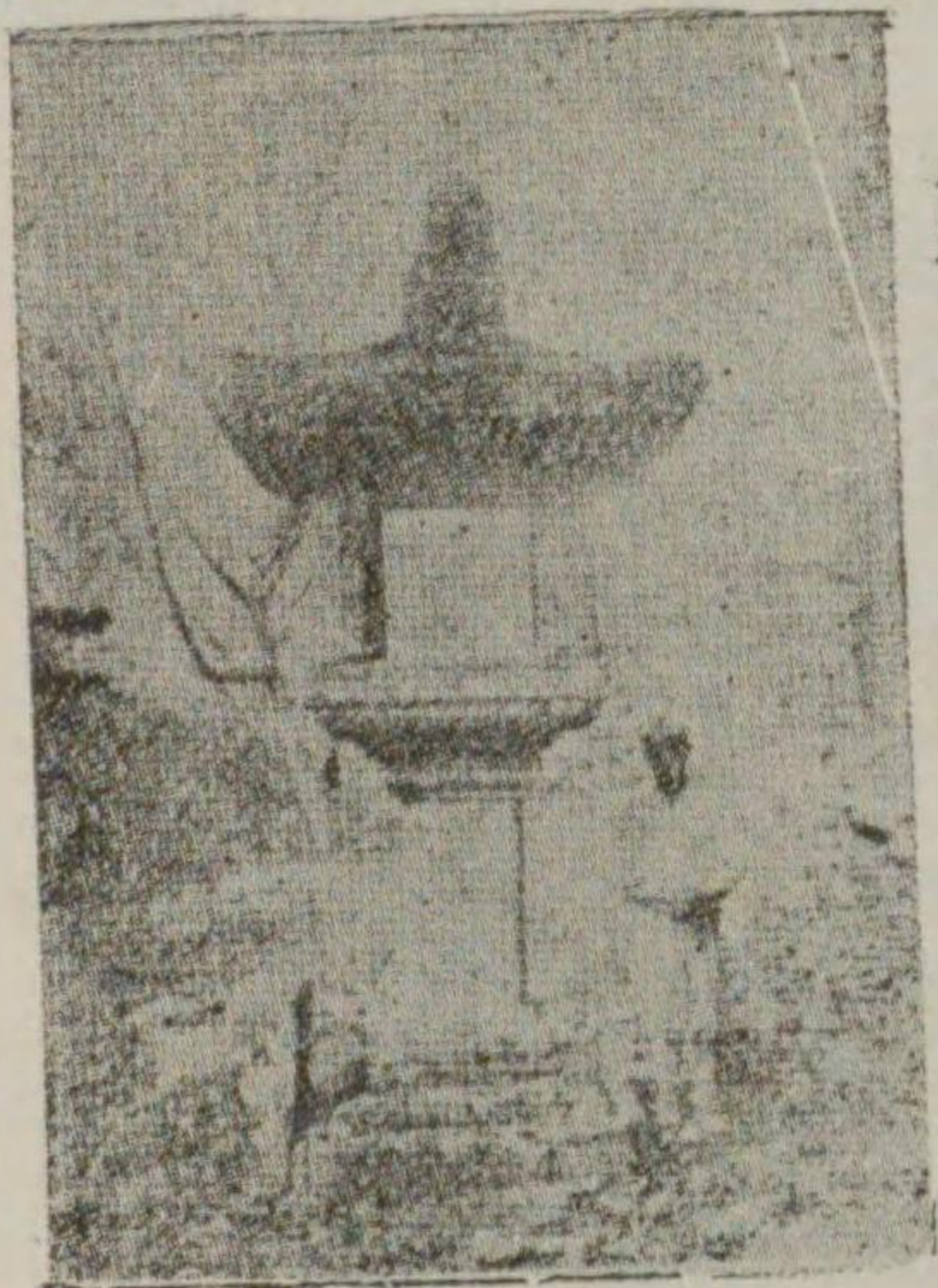
灰色の大理石を用ひ中臺以下は普通浮屠の八角臺座の如く蓮花格狹間を刻し火袋は異常に高く八角形にして蟠龍を浮彫にせる隅柱を作り出し各面下に華頭窓を開き上に天人を陽刻してゐる蓋は重厚にして上に寶珠を冠してゐる此石燈舊型を脱却し新機軸を出たせるは敬天寺大理石多層塔の手法よりヒントを得し者にして多少の感興を惹けども形態技巧共に觀るに足らず麗末藝術の衰頹を語つてゐる。

第一百五十九圖

灌燭寺石燈 羅州石燈



第一百六十一圖



妙吉祥石燈

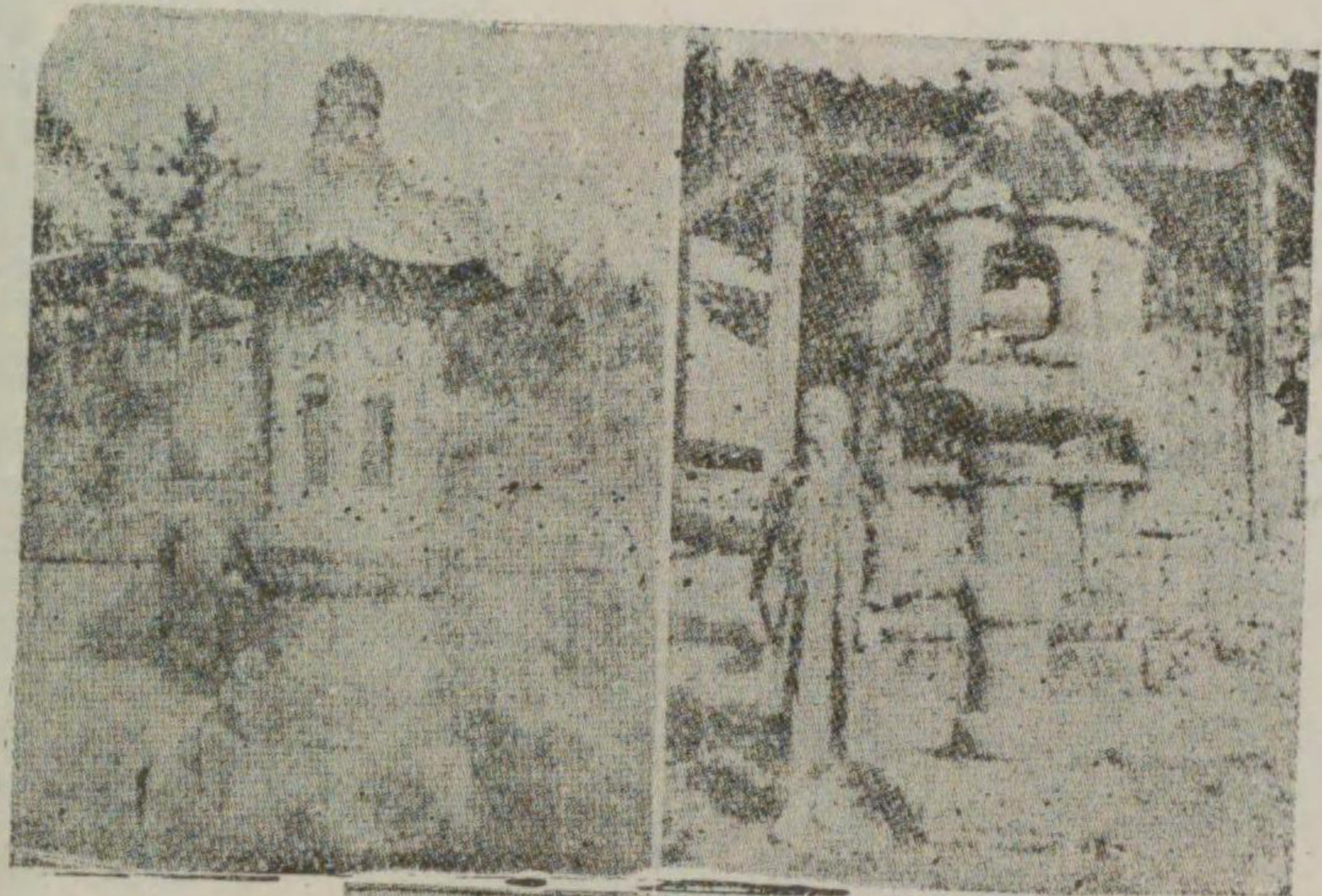
第一百六十圖

七陵洞の第三陵及び恭愍王陵前にある者に過ぎぬ第三陵の石燈は方形にして中臺地臺に蓮花を刻み竿



石に羽目状を作り火袋石に火口を開き方形の蓋石を載せてゐる手法簡なれども頗る穩健の風を示してゐる。

正陽寺石燈



第百六十四圖

燈石陵支王愍恭



恭愍王玄陵及妃正陵前石燈 玄陵及び正陵の墳の前面に各一基の石燈が立つてゐる形式前者に似たれども地臺中臺に刻せる蓮花は豊麗にして竿石割合に低く且廣く四角格狭間内に三顆の寶珠をあらはし火袋石には大なる火口を洞開し上に方形の蓋石を冠してゐる權衡割合に低く隨て安定の觀を呈し莊重雄麗の氣象實に麗末掉尾の佳作を以て目すべき者である。

石棺及墓誌石 高麗時代の墳墓

圖三十六百第

圖二十六百第

より近年多數の石棺が発見せられた石棺には必ず墓誌石が伴ふてゐるのであるが多くの散逸して離れくゞになりどの石棺にどの墓誌石が附屬してゐたのか分からぬのが多い是等の石棺は石板石より成り上下四方の六枚石を組み合はせて造られてゐる其多くは内外面に四神圖十二支神像飛天寶花等の圖様を陽刻又は陰刻してゐる而も此等の圖像は手工多くは古拙觀るに足るべき者は少ない今代表として二の例を示さうと思ふ。

李王家博物館許載石棺 (仁宗二二年、金皇統四年、日本天養元年、西紀二四四年)は其四方側板の

外面には下に四神圖上に十二支神の立像を分ち刻し蓋石の上面に兩飛天圖をあらはし側板の内面には墓誌を陰刻してゐる蓋此種の比較的優秀なる者に屬する東京帝室博物館藏傅崔呪 (高宗一六年、南宋紹定二年、日本寛喜元年、西紀一二二九年)の石棺は側板の外面には唐草文様にて華頭状を作り内には四神圖を浮彫し蓋石の上面に兩飛天及び寶花の折枝をあらはし棺の内面には花樹禽鳥等の圖を陰刻してゐる亦此種の佳作である東京帝國大學工學部藏李公壽 (仁宗一六年、金天眷元年、日本保延四年西紀一一三八年)の石棺亦四面に四神圖其他を作れる佳作である此石棺と共に出土した墓誌は薄き石板石にて造られ石碑の形に似て頭部は兩旁に茨を有せる扁圓狀をなし其内に牡丹唐草の文様を容れ其下に當れる墓誌の周縁にも優麗なる寶草文を配してゐる此墓誌石は此種の中最も優れた者で他は多く







日	日	日	日
本	本	本	本
愛	同	福	周
媛		岡	防
田石寺鐘	圓清寺鐘	安養寺鐘	賀茂神社鐘

天興寺鐘

余の明治四十三年江華島へ往きし時府治の鐘閣内に此鐘を發見した今移されて李王家博物館に在る顯宗の元年に成り現存高麗鐘中最大最優の者である其龍頭に旗挿あること肩帶口帶及び乳郭に美なる寶相花文を陽刻せること乳郭内に九乳を容れたること胴部に撞座と飛天を浮彫にせる事等は全然新羅鐘様式の蹈襲である唯位牌形を胴部に作り内に「聖居山天興寺鐘銘統和二十八年庚戌二月日」の銘を容れたるは新羅に無き所である形態莊重手法精鍊現存高麗鐘中之に比肩すべきものはない。

大興寺鐘

忠穆王二年の作前者に比すれば年代も技工も共に下つてゐる新羅系の様式より成れども肩帶の上鐘頭の周圍に蓮花形を繞らせるは亦當代に始めて見はれたる手法である。

龍珠寺鐘

年代銘なきも麗初の者であらう形式天興寺鐘に似て肩帶口帶乳郭の唐草文様及び撞座飛天の手法一層優美に而も勳勁の風をあらはしてゐる。

演福寺鐘

今開城南大門上に保存されてゐる銘文によれば忠穆王二年元帝鐘を金剛山に寄附せん

が爲め鑄工を派遣せしが事終へて開城に來りしを幸忠穆王は王妃と共に彼等に囑して鑄成せし者にして口徑六尺二寸全高十尺七寸普通新羅系の鐘と異り龍頭には旗挿なく兩龍相背いて蟠結せる者より

第百六十八圖



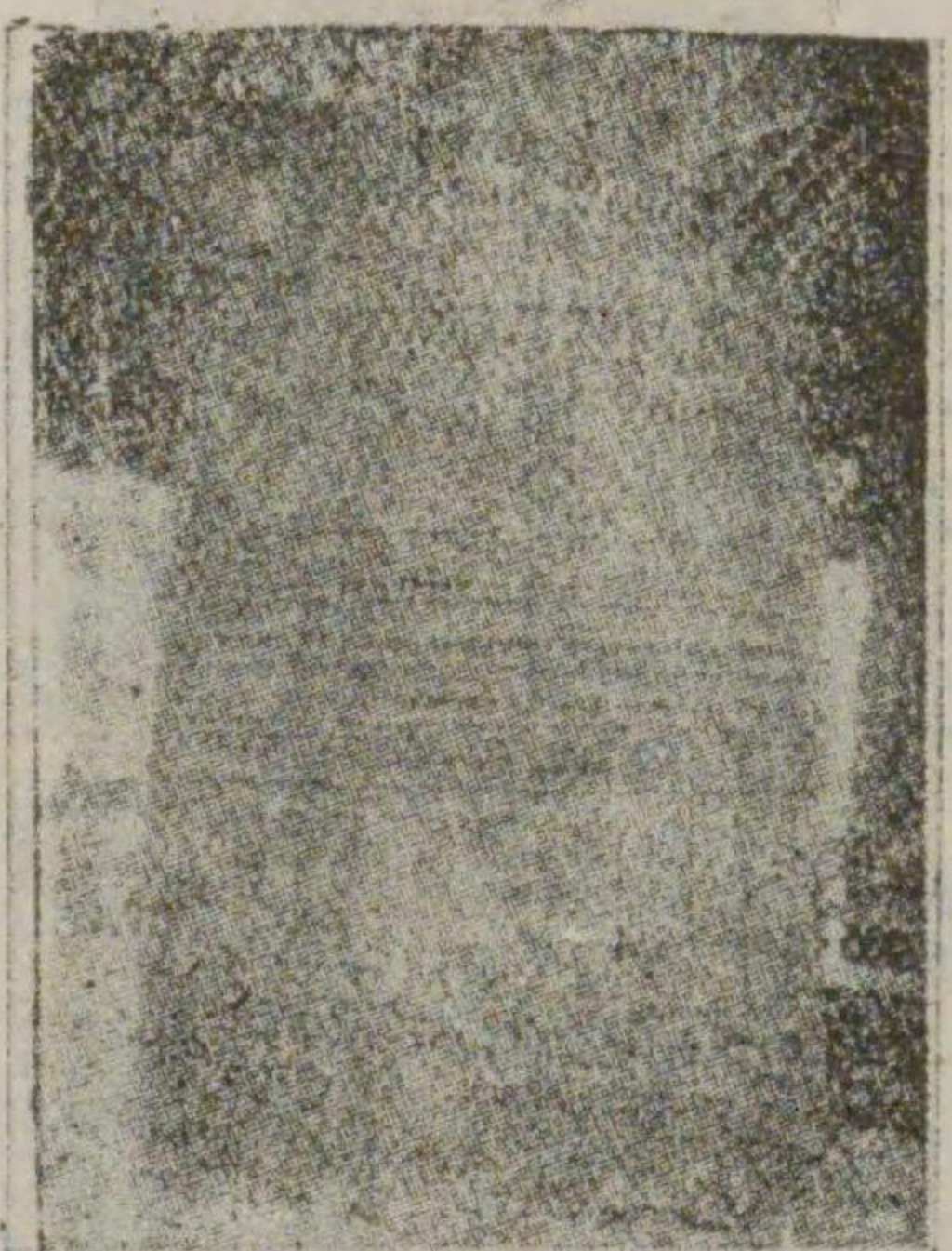
天興寺鐘

第百六十九圖



大興寺鐘

第百七十圖



演福寺鐘

成る鐘頭は蓮花を刻み胴部には廣き數條の腰帶を繞らし其上下に袈裟襴をあらはし上部四面の郭内に各三尊佛を浮彫にし腰帶

の上下の狭き帯には梵字を作つてゐる鐘口は八個の波状をなし廣き素文帶を繞らし其上に波文を刻せる狭き帯ありて鐘口帯との間地にそれ〴〵八卦の象をあらはしてゐる元の工匠の手に成つたのであるから純然たる元式より成り從來長く行はれたりし新羅系の者と大に性質を異にしてゐる當に形體の大なるのみならず技工も亦頗る觀るべき者がある此鐘の形式は當代の梵鐘に格別の影響を與へざりしが如くなれども却て次の朝鮮朝の者に大なる感化を及ぼすことゝなつたのである。